

TSしたけど抜刀齋には
勝てなかったよ……

ベリーナイスメル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

うわ剣心つよい

るろうに剣心の世界にやってきました女体へ飢えた現代人。

違うこうじゃないといった男は求めてやまないおっぱいを持っていました。

どうしてこうなったから始まる明治剣客浪漫譚。

目次

その男、女体へ飢えすぎにつき	1
その男、美少女につき	16
その男、剣客もどきにつき	31
その男、姉弟子につき	45
その男、命知らずにつき	60
その男、命がけにつき	74
その男、ご主人さまにつき	90
その男、雑魚につき	105
その男、前向きにつき	119
その男、口先上手につき	134
その男、初めての死戦につき	149
その男、剣客につき	171

その男、先輩につき	185
その男、出稽古につき	200
その男、開き直りにつき	215
その男、生き慣れにつき	231
その男、知り過ぎにより	246
その男、荒行につき	264
その男、再出奔につき	280
その男、旅路につき	295
その男、帰郷につき	310
その男、勝利につき	326
その男、やり手につき	342
その男、迂闊につき	356
その男、再会につき	373

その男、喧嘩の終わりにつき	387
その男、交渉につき	403
その男、京都守護者につき	419
その男、危うくにつき	431
その男、決戦前夜につき	447
その男、布石につき	459
その男、瀕死につき	475
その男、東京帰還につき	489
その男、日常復帰につき	500
その男、剣心とのお話につき	512
その男、心境整理につき	523
その男、大失敗につき	535
その男、強者につき	550

その男、夜間待機につき	566
その男、夢につき	578
その男、帰り道につき	590
その男、人誅戦につき	601
その男、虚ろな勝利につき	617
その男、絶望への入り口につき	626
その男、前進につき	639
その男、外法の戦いにつき	652
その男、葛藤につき	667
その男、最終確認開始につき	677
その男、最終試験につき	692
その男、決意につき	706
その男、決戦につき	717

その男、生きる意味につき

728

TSしたけど抜刀齋には勝てなかったよ

744

その男、女体へ飢えすぎにつき

鳩が平和の象徴？

いや、断固として俺は否と言うね。

おっぱい。

そう、おっぱいこそが平和の象徴なのだよ。

鳩が揺れて幸せな気持ちになるか？ ならないだろう？

鳩がチラリズムに身を任せたってドキツとしないだろう？

考えてみて想像してみてくれよ。

おっぱいが揺れ描く歪な曲線。

まさにそれは幸せの軌跡。

チラリと服の合間から見える谷間なんぞ鼻血を止められない。

熱く流れる血潮が一部に集まっていく事を実感してしまう。

男なら。

男なら、その様に遭遇し、実感してこそ世界の平和に思いを馳せてしまうってもんだ。

実際あったらどう？ 知ってるんだ俺は。

おっぱい募金とかいう幸せ企画。

ありや天才だよ。

募金をして救われる命。

募金をして得られる謎の満足感と陶酔感の嵩増し。

そういう形ないもんをちゃんと手にできるんだ。

真面目にその言葉、概要を聞いたときには目から鱗が落ちたよ。

……残念ながら生まれも育ちもど田舎の俺は出来なかつたけどさ。

いやさ愚痴じゃねえけどさ!!

そんな幸せイベントってやつは何で都会でやるんだよ!!

こちらとら! 駅まで三時間に一本しか出てないバスに乗り込みっ! 無人駅の改札くぐって二時間に一本しか停まらない電車に乗りっ! 何回乗り換えたらようやくマシヨンらしきものが見えると思っただっ!!

電車が通つてることが奇跡だよ! むしろバスもだよ!!

うん、落ち着こう。

いや、いいんだ。

実際にその機会を得ることが出来て失われる夢つてもんがあるはずだから。

こうして想いを馳せているくらいが丁度いいんだろうさ。

だけどさ、やっぱさ。

住んでる所、ど田舎。

一番近い年齢の異性なんて言えば二周りくらい離れていて、畑仕事に綺麗な汗かいてる肝つ玉系かーちゃんなお隣さん。

……性の目覚めではお世話になりました。

それはさておき、同年代の女の子がいねえんすよ。

限界集落って知ってるか？

もう見渡す限り人の良い爺ちゃん婆ちゃんばかりなんよ。

すんげーお世話になって感謝の気持ちに絶えないけどさ。

今も謎の行事と言わんばかりによくわからん注連縄巻かれた岩を磨いてるけどさ。

でもさ！

お祭りで！ 浴衣着た可愛い女の子のうなじを辿って見える二つのお山。

ちよつと何処見てるのよ！ なんて顔を赤くされながら言われたりさ。

もう、えつちなんだから、あとでゆつくり、ね？ なんて色っぽく言われたりさ。

見たいの？ もーしょうがないなあ！ はいっ！ なんて無邪気にご開帳されたり

さっ！！

ご都合主義？ 知らんがな！

エロゲ脳？ 二次元に求めるくらい許せ！

そういう青春が！ 送ってたかったんだよ！！

え？ おっぱいおっぱい嫌い？

ああいや、わかってる。

よしよしわかってるさ。

お尻もいいよな？ うんうん、俺だって大好きさ。

例えば食い込み。

ありやロマンだよ、そうだよそうに決まってる。

ましてやその食い込みを直すシーンなんぞたまねえよな。

太ももだって実が良い。

ムチムチが重なってむっちり。

最高じゃねえか挟まれたい。

わかる、理解している。

要するに、だ。

女体は素晴らしい。

変態と言われようがキモイと言われようがこれだけは譲れねえ真実。

何度も言うが、俺のようにしわくちやに囲まれて育った人間は余計に憧れるんだよ。

ぼっち飯なんていいじゃん、周りには関わりなくてもいるんだろ？ 男も女も。だけどさ、俺、学校とか行ってもさ。

教師すらいねえんだぞ？ 教壇に立ってくれてたの爺ちゃん婆ちゃんだぞ？

限界集落で限界だったんだよ、青年の迸るリビドーを胸に秘め続けるのはっ！

つまるところ俺は。

「女の身体が見たいっ!!」

とは言った。

間違いなく言った。

だけどさ。

「弥生ちゃん！ 大丈夫っ!!」

「は、はえ？」

目を覚ましてみればすごく心配そうな顔を俺に向けてくる女の人。

女の人？

「良かった……身体におかしいところはないでござるか？」

いぎるっ！

え？ てか髪長っ!? 赤っ!? 女の、人……？

いや、違う。

「けん、しん……?」

「おろ? 拙者、名乗った覚えはないでござるが……」

左頬に十字傷。

忘れようにも忘れられんでしょ、るろうに剣心の主人公。

え? いや、はい?

「良いじゃない剣心、もしかしたら眠っている間に聞こえてたのかも知れないじゃない」
「そう、でござるな。なんとなくは感じていたでござるが、薫殿はやはりおおらかな御仁のようだ」

「何よ、別に良いじゃない」

「悪いとは言つてござらんよ」

てことはこの人神谷薫……さん?

目の前で夫婦漫才を繰り広げてるこの二人。

あ、いや、確かにこの二人は結ばれるけど――

「づっ!!」

「! 大丈夫!」

いつてえ……頭、めっちゃズキズキする……なんだ、これ?

風邪、でも引いてたっけか？ 俺……。

「私、先生引き止めてくるっ!!」

「薫殿っ!?! ……これは」

バタバタと薫……さんらしき人が部屋から出ていった。

いてえ……いてえよ、クツソ、まじ……。

「弥生、殿でござったか？ お主は、何を探しているでござる?」

「探し、て……?」

んだよ、別に何も探してなんか……。

「ここには……拙者の逆刃刀以外、刀はござらんよ」

「っ!?!」

思わず、顔が上がった。

俺の意思じゃない、上げようとなんて思っていない。

「ただど確かに俺は目の前で目を真っ直ぐに見てくる剣心らしき……いや、剣心の顔を見て。」

「なるほど。先の件、やはりあれは拙者を狙ったものでござったか」

「先の、件?」

「覚えて、ござらんか？ あの抜刀齋を騙る大男とその手下。拙者が叩き伏せていく中

感じた剣気……お主のものでござろう？」

気づけば、頭痛は気にならなくなっていて。

目が覚めていきなりわけわかんないことになって、混乱しているはずなのに。

何故か思考は冷えていて。

「……どうやら拙者は、ここに居てはいけないのかも知れないでござるな」

そう言つて立ち上がろうとする剣心。

その目は近い内に話を必ず聞く。

だから今はゆっくり休めと言っていて。

「駄目……です」

「……」

「出てっっちゃ、駄目、です」

剣心の着物の裾を無意識に握っていた。

それは、何でだろう。

なんとなく、この手を離したら剣心は薰さんの下からも離れると理解できた。

それはいけない。

この人は薰さんと幸せになる人で。

ここから離れると、漫画で語られたように孤独と罪の意識で押しつぶされるように生

涯を終える。

そう思ったから。

「……ふう、やはり同じ場所で過ごす人とは似るものでござるな」

「……」

「薫殿と、よく似た目でござる」

そう言つて、漫画で見慣れた困つた笑い顔で座り直してくれた。

「落ち着いたら、教えてほしいでござる。もしも拙者に……いや、拙者の過去に起因するものがあるのなら、尚更」

「あり、がとう……」

再び頭痛が苛む。

だけど妙な安心感があつた。

この人を、この場に留めることが出来た。

何故かそんな確信。

それに、酷く安堵した。

横になつてみれば硬い枕。

いや、そもそも俺が枕と思つているもんじやない。

妙に高いし、頭を包む感触すらない。

ああ、そうか、明治時代にポリエステルなんぞありはしないか。
明治時代。

そうだ、るろうに剣心って言えば確か明治十一年。

ざんぎり頭を叩いて見れば文明開化の音がする。

そんな歌が歌われてから十一年。

ああ、変な実感の仕方をしてしまったな。

ここは、間違いなく。

俺の知ってる世界じゃねえや。

「大丈夫？ 弥生ちゃん」

「え、ええつと、はい。もう大丈夫です」

心配ですつて顔に書いてる薫さんの膝の上。

くつそ柔らかいんですけど……これが、女の人……。

とりあえず頭痛は収まった。

と言うかあの後どうやら氣を失つてたみたいで、その間に先生……つてーと小国玄齋って爺さんだっけか？ 神谷活心流道場のかかりつけ医。

多分その人が診察してくれたんだろう。

聞く所によると特に外傷はでかいたんこぶ以外見られずとのことで。頭を打った衝撃がまだ残ってるんじゃないかとか。

まあ明治時代の医学がどれだけ進んでいるかなんて詳しくないけど、流石にMRI検査だCT検査だなんだがあるわけもないし、そう言った診断結果になるのかも知れない。

んで、だ。

どうしてこうなった？

「えっと……薫、さん……ですよね？」

「え？ うん、そうだけど……どうしたの？」

心配顔から不思議そうな顔へ、そして。

「も、もしかして忘れちゃった!? 打ちどころが悪かった!？」

「あばっ!? あばばばばば!？」

「か、薫殿っ!? 頭を打った人の頭を揺るのはやめるでござるっ!？」

あー……世界ががっくんがっくんするう……。

間違いねえ、神谷薫だ。

だから何でさつきから変な実感の仕方してんすか……おろろろー……。

「あ、あ、あめんなさい!？」

「だ、だいじょーぶ……れすう……」

あつかんて。

めっちゃ目回ってるって。

ていうかさー……。

「ごめんね、ごめんね弥生ちゃん」

「は、はい、大丈夫、大丈夫ですから」

うん、謝り続けられるのもあれなんだけどさ。

それよりも。

これ、誰の声だよ。弥生って誰だよ。

俺はど田舎育ちの限界青年だぞ。

こんな可愛い声何処から聞こえてんだよ。

「ふう……とりあえず大丈夫そうでござるな？ 流石に婦女子の部屋に居続けるのも気

が引けるでござる。薫殿、後はよろしく頼むでござるよ」

「うん……あ、改めてありがとうね剣心」

そう言った薫さんに向けて柔らかく笑う剣心。

そのまま部屋から出ていった。

あーそっか、婦女子の部屋ってことはここ、薫さんの部屋か。

申し訳ないことしたな、俺みたいなムサイ男に寝具まで貸して。

「あ、じゃあ自分も……」

「え？ 弥生ちゃん何処に行くの？」

立ち上がってそう言えばそんな言葉。

いや、何処に行くも何も……何処に行けば良いんだろ……。

まあ、雰囲気からして何かしら繋がりがあつぽいし、一晩だけ泊めてもらえるよう
にお願ひしようか。

明日のことは明日考えよう、なんだか身体も変に……変に、軽すぎる？

「い、いや、流石に薫さんの部屋ですよね？ ここも、申し訳ないんですけど何処か部屋貸してもらつても良いですか？ 一晩だけ泊めてもらいたいのですけど」

「え？ いや、ねえ？ 何、言つてるの？ ここ、弥生ちゃんの部屋、よ？」

「はい？」

弥生ちゃんの部屋？ ヤヨイチャンノヘヤ？

弥生ちゃんつて誰？ ヤヨイチャンツテダレ？

「ちよつと……本当に大丈夫？ もしかして、本当に忘れちゃつた……!？」

「え？ あ、あの？ いや、その？」

「た、大変っ！ けんしーん!! いや違うわね、せんせーい!!」

「あっ!? 薫さんっ!？」

い、いつちまった。

ええ……? いや、ここが弥生ちゃんやらの部屋って言われても……ん?

「……うそん」

ふと視界に入った鏡。

明治時代にこんだけ綺麗な鏡ってあるもんなんだなーなんて現実逃避もしたくなる。

「()いつ、誰だよ……」

映った自分らしき存在に目を疑う。

右手を挙げれば目の前の女の子が右手を挙げて。

頬をつねってみれば同じく綺麗な顔を歪ませて。

「……はあ?」

何よりも。

おっぱいがあつた。

浴衣っぱい服を押し上げる胸の膨らみ。

恐る恐る触ってみれば柔らかい二つのお山はぽよぽよ形を変えて。

「うーん……」

何度気を取れば良いんだ俺は。

ああでもこれだけは言える。

「女体にリビドー、こうじゃない」

その男、美少女につき

正直なところ。

よくあるじゃん？ 漫画でも、アニメでも異世界に転移しましたっ！ なぁんて展開。

んでそんなお話の中に出てくるやつは最初からして違うんだよ。

とりあえずここが何処か把握しないと。

まずは人のいるところに行かないと。

とかなんだ言っつてすぐ動けるやつ。

そりやあ後で英雄だ勇者だなんて言われるよ、なんなら世界に注目されるよ。

ちよつとどころか違うのかも知れねえけど、事實は小説より奇なりな体験をした俺はただひたすらに動けないまま戸惑っていた。

そう思えばそんな主人公たちが主人公足る理由の第一歩には到底及ばない。

確かに知ってる世界だ、ここは。

漫画で知ってるってだけだし、何なら舞台が明治時代つてことで日本が歩んだ歴史の軌跡つてやつの中。

だったらそんな突拍子もない創作物の主人公を見習って何らかの行動を起こすべきなんだろう。

だけと言わせて欲しい。

「……やわらけえ」

胸を触ればそれなりの膨らみ。

限界集落生活で培った筋肉なんて何処へやら、ぶにぶにと柔らかい腕や太もも。

現実逃避をするならば挟まれてえなんて思っていたこと請け合いだろう。

どうやっても自分の太ももに挟まれるなんてことはできないわけだが。

要するに俺にとつて自分の身体が女になったつて事実は何の何を差し置いても重要過ぎる変化だった。

「何やってるの？ 弥生ちゃん？」

「え？ あ、その、ボディチェックを……」

「ぼでいちえつく？」

自分のおっぱいから視線を上げてみれば見たことのない自分とその後ろで髪を結つてくれている薫さん。

鏡にいる薫さんは不思議そうな顔をしながらも手を止めないまま、俺の長い髪を弄つてくれている。

もう何度もやって来てくれているんだろう、熟練といふかなれた手付きで。

みるみるうちに和服黒髪サイドテール美少女が目の前で出来上がっていった。

「ありがとうございます」

「良いのよ、いつもやってることだし私も楽しいから……って、うーんやつぱりなんだか落ち着かないね」

そう言われても苦笑いしか浮かべることができない。

神谷活心流道場、その奉公人。

それが俺こと、ふじようやよい巫丞弥生。

事前に、というか小国先生から色々聞いていてよかったと改めて思う。

頭を打ったことによる記憶の混乱。

そんな診断で落ち着いたからこそ訝しまれることなく自然に色々聞くことが出来た。

聞けば薫さんのお父さんが存命だった頃から神谷活心流道場でお世話になっていたらしく、俺と薫さんは姉妹同然に育ったとかなんとか。

きっとそう言われるくらいには仲睦まじい二人だったんだろう、だから俺の変化に薫さんは戸惑ってる。

そりやそうだ、ガワは巫丞弥生でも中身は全然違う、それも男なんだから。

こんなに近くで年頃の女の人と接したことは無いし、会話することだつてそうだ。

ぶつちやけ、きよどるのを必死で堪えてるってわかつて欲しい。
「うん、出来たっ！」

「あ、はい」

我ながら完璧つてな具合でウンウン頷く薫さん。

やつぱり苦笑いを浮かべながら鏡を見直すと。

「こ、これが……俺……」

やだ、何この美少女。嫁にしたい。

……いやいやいや。まあ落ち着こうか。

思わず自分の姿に惚れそうになってる場合じゃないというか落ち着け。

「もう、弥生ちゃん？ そんな風に自分を呼んじやダメよ？ 女の子なんだから」

「あ、う……はい」

女の子、女の子、女の子……うごごご。

そうやって誰かに言われるととても辛い。

急に身体がそうなったとしてもやつぱり俺は男なのだ、いや男の身体を持っていたのだ、それを急に変えられるわけもない。

とは言え流石に自分の呼び方くらいは意識して変えるべきだろう。

「私、私……私……」

「うんうん！ さ、それじゃ朝ごはん食べに行きましょう！」

そうだよな。

まあここで俺は男なんだなんて喚いてもきつと何にもならないわけで。

とりあえず元の身体なんし場所に戻るのは後で考えよう、まずは腹ごしらえだ。

……ん？

「あ、あの、薫さん？ 朝ごはんの準備は……」

「私がやったわよ？ いつも弥生ちゃんに任せっぱなしだったからね！ ちよつと張り

切っちゃった!!」

……あー。

メシマズシヨックで元の世界に帰れたりしないかな？ ワンチャンねーですか？

ねーつすか、そうですね……。

——ここ、今度からは拙者も手伝うでござるよ。

剣心と二人で味噌汁プシャーするのを堪えながらの朝食が終われば冷や汗をかきながら剣心はそんなことを言った。

悔しげといふかなんととうかかな薫さんだったけどまあ仕方ない、早く自分で身支度を整えられるようになって食事作りに励もう。

料理？ 出来るよ？ 限界集落人舐めんな、おふくろの味はまかせろー。

ともあれ俺に加えてもう一人緋村剣心という居候が住むことになった神谷活心流道場。

何故か剣心が洗濯物を干しながら、門下生が入ってこないと苛立つ薫さんを宥めていく。

比留間伍兵衛と喜兵衛。

あの二人によって嵌められたうちではあるが、剣心が言うようにこの明治という時代では一度離れば中々新しく門下生が入らない。

刀の時代は終わり、近代国家を目指し国は火器、兵器を求めた。

黒船来航によって齎されたものの一つにそれがある。

結局剣心のように超人的な剣術を修めている人間はまだしも、銃に刀は勝てないのだ。

ガトリングガンに刀を持ってどう挑めば良いのかという話。

故に兵器の扱いだったり、軍艦の操舵技術であったり。

戦い、戦争という面から見ればそういうものが時代に求められた結果でもあるんだろ
う。

男の子の浪漫から思えば少し切ないとも思うけど、やっぱり現代人な俺は何処か冷め

てるというか。

仕方ないよな、なんて思う部分もあった。

——と、に、か、く！ 買い物に行くわよっ！

——おろ？

曰く、居候が一人増えた分の食材を用意しなければならぬとのこと。

俺としてはようやくというべきか、外がどうなっているのかなんてことを考えていたところでもあったので一緒について来たわけだ。

「馬上から失礼。警察署に行くにはこの道でよろしいのかね？」

「うわっ!? あ、えと……」

うわー馬車なんて始めて見たよ……って、誰だっけかこの人……。

ていうか警察署の場所なんてわかんねーです、助けて薰さん。

「あ、すいません。ええと、警察署でしたら——」

やっぱ明治なんだなって。

道に車といえば馬車なんだなって。

人力車とかはもうあるんだろうか、それともまだ籠をえっほえっほと担いでいるんだらうか。

じゃなくて、思い出した。

山県有朋。

国軍の父なんて呼ばれたりしてたって歴史好き爺ちゃんが言ってたつけ。

「ありがとう」

「いえ、お気をつけて」

馬車が去っていくのを見送って。

思わぬビッグネームに出会ったななんてぼーっと思ったりして。

「——なんだか騒がしいわね」

「え？」

薫さんの怪訝な声色によって意識が戻って騒ぎに気づいてみれば。

「捕物だつてよ。廃刀令違反者を警官が追ってるんだとよ」

「へ？」

あ、大根が落ちた。

じゃなく。

それってもしかしなくても。

「薫さん！」

「うんっ！ 行くわよっ！ 弥生ちゃん！」

「はいっ！」

剣心のことだよなあ。

つてか待つて。

山県有朋と出会って、捕物騒ぎって……もしかして。

「剣心っ!!」

「——!?! 薫殿来るなっ!」

剣客警官隊。

その言葉を思い出したのと薫さんのリボンが斬られて地面へと舞ったのは同時。

「次は着物を斬り刻んで辱める……もう一度言う、抜刀したらどうだ?」

「お前は、本当に警官でござるか?」

ああ、そうだしっかり思い出した。

剣心の言葉を受けてにやにや語っているヤツの言う通り、合法的に帯剣を許可された

警官隊。

……いや、アイツの言葉を借りれば、合法的に人を斬れる、か。

「ふざけんなっ! 横暴だっ!」

取り巻いていた人たちが言うけど……つて、待て待て、これって漫画そのまんまなん

じゃ……?」

「フン、この俺に罵声を浴びせるとはいい度胸だ……かんりこうきよざい官吏抗拒罪適用——一人残らず

しよっぴけ、抜劍許可っ!!」

あーうん。

だよな、こうなるよな、そうなってたし。

てことはこのあとあれか、劍心が抜刀して……。

「きええええ!!」

「——弥生ちゃん!!」

「——は?」

何で俺は今、斬りかかられている?

違うだろ? ここは劍心が抜刀して、それで騒ぎが収まって。

誰一人として斬られないはずだ、怪我人は出ないはずだ。

知ってる、知ってるんだ。

だって、そうだっていうのに。

「弥生殿っ!!」

「いやああああ!!?」

目の前に、白刃が迫る。

酷く、ゆっくり近づいてくる。

このままだと、死ぬ。

間違いなく、あっけなく、その刃が俺を切り裂く。

だって言うのに剣心はまだ抜刀していなくて。

到底間に合わないだろう位置に居て。

だから。

「!？」

「……」

避けた。

容易く、呆気なく、完璧に。

命を裂くはずの凶刃は空を裂いた。

よほど手応えがあつたんだろう、驚いた目を空振った刀の先から俺へとゆっくり移そうとして。

その様をどうしようとしたのか俺の右手が腰の辺りで何かを掴もうとして空振った。

「……え？」

「相手なら拙者がいたす。地べたを舐めたいものはかかってこい」

空振った感覚で我に返り、剣心の声が耳に届いてきた。

——俺は、今……？

自分の感覚に何故か恐怖を覚え、剣心が警官隊を斬り伏せていく光景。それを薫さん

に抱きしめられながら見ていた。

「弥生ちゃん、大丈夫？」

「え、ええ……はい。大丈夫、です」

「怪我が無くて本当に良かったでござる」

未だに心配そうな顔を向けてくる薫さんと剣心。

まだ少しぼーつとするけど、特に何処を怪我したか何だは無くてすこぶる快調。

そんな俺を見て一区切り安心できたのかほっと一息しながら家路ののんびりと歩く。

薫さんはきつと剣心が流浪人になった理由をほんの少し理解できて、剣心はリボンの代償に家事へと勤しむことを促されて。

傍から見れば、この二人は早くもきつといわゆるいい雰囲気を纏い始めてるんだろうやがて結ばれるに向けて。

手を、見る。

あの剣を避けた後、俺は何をつかもうとしていたんだろう。

もし、空振らず何かを掴んでいたのなら。

俺は何をしようとしていたんだろう。

避けたって実感はない。

あの時覚えていることは、驚きの目を向けようとしてくる警官の首。それを凝視していたって実感。

容易く、呆気なく、完璧に避けた先で俺は何をしていたのだろうか。少し、怖い。

改めて俺は何でも無い一般人で。

限界集落で女の人って存在に飢えてリビドーを持って余しまくってた男、そのはずだ。

それが今、何をどうしてか明治時代。それもろろくに剣心って漫画で描かれた明治時代代に居る。

特別な何かを持つているなんて思ったことは無い。

特別な力が眠っているなんて中学生の頃にあつた黒歴史。

言つて良いのか悪いのか。

何処にでも居る男。

そんな俺は誰もが経験できないようなことを経験している真つ最中。

「わけ、わかんね……」

思わず呟く。

——この世に意味のないことは無い。

酔つ払つた近所の爺ちゃんが事ある度に言つてた言葉。

それがまさしくそうだってんなら、俺がここにいることにも意味があるはずだ。だけど、それは一体何なのか。

女の身体を持って、架空の世界、架空だと思っていた世界にやってきて。

俺は今、生きている。

意味。

それを探すべきなのか、それともモブとしてこの世界に骨を埋めるのか、はたまた次に目覚めた時はまだ見慣れているだろう天井が見られるのか。

わからない。

わからないけど、まあ。

「なるようになれ、か」

同じ爺ちゃんが言った言葉。

意味があつて世界は動く、ならまずはその意味に身を委ねよう。

「弥生ちゃん？」

「弥生殿？」

優しい目が向けられる。

そう、そうだ。

なら、まずは生きよう。

少なくとも、俺にとって辛い世界じゃないのだから。

その男、剣客もどきにつき

さて、いい加減自分で身支度が出来たようになった俺。

髪を結ってくれていた薫さんは何やら寂しそうではあったものの喜んでくれたり。

ていうか、だ。

いちいち距離が近くて女の人の香りがヤバイ。

そうなのだ。

剣術小町だなんだ言われてる薫さんは美人なのだ。

性格はまあ男勝りであつてちよつとアレかも知れないけどそうなのだ。

そして女耐性ゼロの俺はとつてもドギマギしてしまうのだ。

……いやさ、当たり前かも知れど初めて知ったよ女の人の匂いつてやばいのよ。

漫画とかでさーそういう描写あるじゃん？ 想像力貧困もええところの俺は香水か

何かなのかな？

なんて思ってたけどさ、そうじゃないんだよ。

女の人はいい匂いがする。

これは心のノートにしつかりと記載しておかねばなるまい。

正直初めて女の身体で良かったなんて思う、ありえないけど男だったらもう大変なことになってる、下半身的な意味で。

とはいえ。

「よし」

鏡に映る自分の姿は道着。

サラシもしつかり巻いたしクーパー筋もきつと負担は無い。

それにこうしてみれば道着姿もクるものがあるわけで。

……ん？

「じゃねえええええええ！ よし！ じゃねええええええええええ!!」

男!! 俺は男なんすよ!!

なんで着付けというかこんな到手際良くなつたの!?

道着だけじゃないよ! 日中着の着物もそうだよ!

このままじゃ着付け屋できちやうよ!!

ゴロゴロと畳の上で悶てしまう。

何処に着付けが上手い男がいるんだよ、いやいるのかも知んないけどさ!

少なくとも俺の頭には居ないよ!

いやだ……このまま女装趣味が目覚めたらどうしよう。

なまじつか弥生は可愛いから困るんだ、そうだこいつが悪い。

改めて鏡を見てみれば若干憔悴しているけど、可愛い顔。

一五歳らしいこの少女は年齢に見合わずちよつと色っぽい。

ぷつくらとしてる唇にしても、右の目尻にある泣きぼくろにしても。

ちよつと肩をはだけてみれば耐性ゼロの俺には素晴らしいおかずになること間違いない。

おっぱい信者を自称してやまない俺であつても百点満点を出したいこのサラシの下にある物体。

そうだよ、一五歳にしてはおつきいんすよこのお胸様。

明治時代において女性は一五歳から結婚できるが適齢期は一八歳、ようするに薫さんは適齢期真つ只中。

これが自分じゃなければきつと結婚を前提にお付き合いを申し込んでいただろう弥生ちゃん。

ふと気づいた。

「これ俺だああ!!」　なんで自分に結婚申し込むとか考えてんのおおおお!!」

ゴロゴロリターンズ。

「……………何やってるの?　弥生ちゃん……………」

「ほうあ!? か、薫さん?」

ジト目で見られてドキドキしちゃう。

えへへとごまかすように笑ってみれば額に手をあてて呆れてる薫さんだけど。

「もう、もうすぐ始めるから早くおいでね?」

「は、はい」

切り替えよう。

ため息とともに道場だろう向かった薫さんの後を深呼吸してから追いかける。

そう、道場。

道着を来ていたのは別にコスプレショーをしたかったわけではない。

今から受ける神谷活心流の稽古、そのためだ。

なんでも比留間兄弟の件、つまり偽抜刀齋騒動が始まる頃に弥生から打診していたらしい。

この騒動が終わったら稽古をつけて欲しい、と。

で、まあ俺がこんなだから今日まで延びていたわけだ。

当然だけど寝耳に水ではあった。

——稽古の件、どうする?

なんて、さつき朝食の場で言われた時はびっくりしたもんだ。

それでも薫さんはウキウキしてるのは頑張って抑えようとしているのがわかるくらいには俺と稽古をしたかったらしく。

そんな薫さんの希望を叶えたいって思いもあつてお願いしますと口にしたんだ。

「神谷活心流、か」

そんな建前はあるけど、俺自身も楽しみだった。

竹刀なんて握ったことないけど、限界集落故に誰かと一緒に部活動に励むなんてことも無かったし。

何よりここはるろうに剣心の世界。

「やっぱ、刀を持ってこそ、だよな」

剣客として名を馳せたいなんて大それた考えはないけど、そんな世界にあった自分ではいたいもんだから。

「ど、どうですか!?!」

竹刀の持ち方、足の運び方。

なんやかんやと手取り足取りにいちいち反応する男心へ安心しながら教えてもらった後。

めーんめーんと叫びながら竹刀を何回振っただろうかい加減疲れてきたつてのも

あり、薫さんを見てみれば。

「……私、弥生ちゃんに初めて教えるわよね？」

「え？ そ、それはもちろんそうですけど……」

なんてすごく難しそう？ 複雑な顔をしながら言われてしまった。

さつきまで道場の外で洗濯しながらチラチラと様子を窺ってたらしい剣心もいつの間にか道場の中にいて。

「まあ、いいわ。そうね、少し休憩したら一度私と打ち合ってみましょ」

「ええっ!!」

打ち合いつて……!

いやいや、絶対ムリっすよ!! 俺、初心者。ユー師範代。

「安心するでござるよ、薫殿も師範代。それをする必要があると判断したのでござろう」
「で、でも……」

必要って言われても。

「拙者の目から見ても……そうでござるな、わからない。というのが正しいでござろうか……弥生殿の剣には、そういった不思議を感じるでござる」

「不思議、ですか？」

何が不思議なんだろうか。

も、もしかしてものっすごい才能が眠ってるとか!?

「左様。確かに初めて竹刀を握った者らしい動きでござるが……それに違和感を覚えるの(で)ござるよ」

「違和感……」

どういふことだろう？

紛れもなく俺はドが付くほどの初心者なのは間違いない。

それでもその様に違和感を覚えるってのはちと意味がわからない。

要するに、周りから見れば初心者の振りをしているように見える、ってことだよな？

……いや、マジで初心者なんですけど。

「まあとにかくやってみるでござる。それで薫殿もわかることがあるであろう……拙者としても」

「はいっ？」

「なんでもないのでござるよ。さ、薫殿」

「うん。……さ、それじゃあやりましたよう！ 剣心、合図お願いできるっ？」

心得たと笑って俺と薫さんの間に立つ剣心。

未だに困惑してる俺を他所にすつと右手をあげて――

「――はじめっ！」

「めえええええん!!」

「いいっ!」

手が下ろされたと同時に薫さんが突っ込んできた!?

いやいや手加減とかねえっすよこの人! 大人げない師範代っすよ!?

——それに、しても。

綺麗な劍閃。

純粹に、劍へと打ち込んできたなんて、素人でもわかるくらいに。

床を蹴ってまっすぐ。

動いているのに重心はブレず、きつと正しく竹刀を振るために。

そんな、薫さんの竹刀が、ゆっくりと俺の眼前に。

危ない。

素人の俺は、この劍に対して為す術がない。

それがわかる。

もしも。

もしもこれが、真劍だったのなら。

「——っ!」

「な!?!」

簡単に刈り取られるだろう命。

神谷活心流は人を活かす剣、故に命を奪うことはない。

だけどそれでも。

脅威。

それに変わりはない。

だから避けた。

見切ったわけではない、避けようと思って避けたわけじゃない。

いわば反射。思考が避けろと言う前に行動を実行した。

そして。

あの時空振った手には既に得物が握られていて。

「くっ!! つてええええ!!」

「!？」

動こうとした瞬間、薫さんの竹刀が俺の手首を捉えた。

……痛い。

「一本、でござるな」

「……え、あ？」

「……ありがとうございます」

……えつと？

「あ、ありがとうございます」

礼に始まって礼に終わる。

それくらい知ってるよ、うん。

で？

「お……わ、私は、一体何を？」

「……なるほど」

「うん、そうね。私にもわかったわ」

わかった？

ええつと？ 一体何がわかったんでしようか？

あのあの、二人でウンウン頷いてないで？

「弥生ちゃん」

「は、はい！」

なんかよくわかんないけどすごく真剣な顔をした薫さんは。

「明日から、がんばりましょう」

「……？ は、はい」

そんなことを言ってきた。

さて、そんな稽古が終わってみれば騒がしい表。

なんとなく思ったのは町で剣心に起こった騒動から入門希望者がぞろぞろイベントかなって予想は的中して。

——悪いけどお引取り願うでござるよ

って剣心の一言で散り散りになっていった。

薫さん涙目。そして怒りの剣心虐待。

そんな光景を尻目に思ったことはいくつかあつて。

やっぱり強さに憧れる日本男児はまだまだいるんだって実感と、どうやら正しく漫画通りにコトが進んでるってことだ。

もしもまさしくそうならば。

出かけていった二人はこれからスリに逢うだろう。

明神弥彦という名前のスリに。

そしてまあなんやかんやあつてボコボコにされた弥彦がここに来るわけだ。

留守番して、帰ってくる二人のためにわざと一人分多くの料理を仕込む。

無駄になったのならまあ俺が食べばいいだろう、この細い身体に入り切るかは不安だ
けど。

つまるところ。

きつとこの世界は剣心が過去を乗り越えて薫さんと結ばれるエンディングに向かっているんだろう。

弥彦がここに来ればきつとその証明になる。

だからこそ意味がわからない。

意味。

ここに存在する、意味。

俺が居なきや剣心が過去を乗り越えられないわけじゃないだろう、それこそ俺が神谷薫としてこの世界にいるとかなら別だけど。

正直なところ、それを邪魔したいとかそんな気持ちは欠片もない。

「なら、このままなんちゃって明治をエンジョイ——つつう！」

なんて考えたのと同時に頭痛がやってきた。

いてえ……なんなんだ、この頭痛は。

もう剣心を見て心が粟立つことはない、けども何かに嘸し立てられる。

剣心の逆刃刀を見る度に、剣心がその刀を振る度に。

——、——と囁かれる。

それは一体誰にだろうか。

頭痛に耐えながら想うのは自分となった巫丞弥生。

未だ慣れない自分自身。

きつと、こいつは何かを求めている。

それだけが何故か分かる。

「分かつてる……分かつたから、いてえんだって……！」

自分に言い聞かせるように言ってみれば引いていく頭痛。

大きく、深呼吸をする。

巫丞弥生は、一体何を俺に求めているのだろうか。

もしかしたら、その求めこそがここにいる意味なのだろうか。

わからない。

わからない、けど。

「ただいま、弥生ちゃん」

「おかえりなさい、薫さん」

「ちよつと俾くまを呼ぶから、ご飯待ってもらっていい？」

「はい、わかりました」

ああ、とすればやっぱりか。

明神弥彦はここにやってくる。

そして剣心の勧めで神谷活心流の門下生となるだろう。

「早くも姉弟子になる、か」

出来ることなんてわからない。

だったらわかるまではエンジヨイしよう。

折角可愛い……いや、生意気な弟弟子が出来るんだ、それくらいはいいだろう？

……ん？

「なんですんなり姉弟子とか思ってたんだ俺は……」

無性に肩が重くなっただけ、まあとりあえず。

「メシ、作ろ……」

——このブスからっ!?

——この子を門弟にっ!?

そんな声を聞きながら、慣れてしまった割烹着を着込んだ。

その男、姉弟子につき

明神弥彦。

一口で言ってしまうのであればプライドが服を着て歩いているような少年。

いやまあ、漫画で初登場の時に思った感想そのまんまだけど。

そんな少年との邂逅はなんと言うかなものだった。

——お、おう……ええっと、東京府士族、明神弥彦だ。よ、よろしく。

はじめましてと言った俺に弥彦はちよつと言葉を詰まらせながら返事をした。

そしてそんな様子を見てピーンと男の直感がささやく。

あ、こいつ俺のこと絶対可愛い、あるいは美人と思っただろう。なんて。

いや、自惚れじゃないけど弥生は可愛い。

正直なところ俺が俺であれば絶対に見惚れてた。

見惚れるより先に動揺したり混乱したのは間違いないが弥生が俺だからだろう。

……勘違いだったら相当恥ずかしくないけど……認めたくない……。

ともあれ、だ。

流石にるろうに剣心の未来を知ってる俺は慌てたわけだ。

弥彦の嫁は燕ちゃんなんです、異論は認めません。だから俺に惚れられたら困るわけで。

よくわからないままに未来を俺なんかが変えてしまつてはいけないのだ。るろうに剣心のエンディングは決まつていて、それは変えてはいけないもの。

そんな認識があつたから。

どうしたものかと考えそうになつたとき。

——あなたの兄弟子……いえ、姉弟子なんだからしやつきりしなさい。

なんて薫さんの援護射撃？　があつた。

すると効果覲面と言うべきか。

——んなつ!?　こ、こいつがあ!?

と、見る目を変えてきた。

弥彦の目は言つていた。

こんな女が自分より先に剣術を？　姉弟子？　ありえねえ。

なんて。

思えば薫さんに対してキツくというか生意氣にあたつてしまうのも同じ理由だろう。

女に教わるなんて。

そんな考え方。

同様に自分の歩むだろう道の先に俺がいるということを手く処理できなかつたんだ。

それだけではないかも知れないが、一つの要因であることに間違いはないと思う。それを弥生ならどう思っただろう？

確かめるすべはないけど、俺は理解を示した。男だからな。

俺がいた現代日本では女性の社会進出だ活躍の場だと常に話題が昇っていたが、ここは明治時代。

るろうに剣心の明治時代はどうかわからないけど、少なくとも学んだ歴史上の明治時代において女性が社会的にであったり強いわけがないという認識が一般的なはずだ。

言い方を変えるなら男は女を守るもの、平たく言えば男は女の庇護者とも言えるべきか。

故に生意気な態度をとってしまふ弥彦の気持ちは、男としても知識としても理解できる。

明らかに変わった弥生への視線。

好都合だと思つた。

実際俺に対しての好感度は低いほうが良い。

燕ちゃんと結ばれろって思いももちろん、弥彦が嫌とかそんなことじゃなくて俺が男

と結ばれるなんて想像もしたくないのですよ。

だから言ったんだ。

「よろしくおねがいますね？ 弥彦……ちゃん？」

「めんっ！ めんっ！」

さて、女性らしい話し方とはなんだろうか。

腕を振り続けながら考えたのはそんな事で答えは敬語。

とりあえず、ですます口調でいけばいいんじゃない？ って答え。

いやまあまで安直かも知れないけどさ、俺ってば同年代の女の人とロクにしゃべったことねえじゃん？ だからわかんないのさ、女性らしいってやつが。

男女共通した喋り方で差がそこまでないものって言ったら敬語なわけよ敬語。

これならボロが出にくいし、何より偶然ではあるが元々こういう喋り方だったらしい弥生ちゃんてば。

だから意識して敬語、ですます口調を شدした時薫さんは喜んだ。

ちよつと回復してきたのね、なんて。

自分のことかのように喜ぶ薫さんに少し胸を痛める気持ちはあるけど、路線はこれでもいいんだって思うことにした。

「……集中、できてないでござるな」

「……あ、あはは。わかっちゃいますか？」

素振りしている近くに座っていた剣心が苦笑いを浮かべながらそんなことを言ってきた。

まあそれも仕方ないですよ。

「るっせえ！　こうかよブス!!」

「ブスって言うな!!　シメるわよっ!!」

背後でのやり取りがもう苛烈過ぎて仕方ない。

要するにそんな喧騒からの逃避なのだ、自分の口調を考えだしたのは。

集中力が切れていることを自他共に認めた俺は一度竹刀を下ろす。

なんとなくというかなし崩的に竹刀を振るう事になった俺だけでも、元々身体を動

かすのは嫌いじゃないしむしろ好きなもんで。

道場で汗を流しながら、この家の家事に勤しむ。

そんな生活も悪くないかななんて思う。

ただ、気になることがあるとすれば。

「剣心さん」

「何でござるのか？」

「あの時……薫さんと打ち合った時、私の何が分かったのでしょうか？」

ジクジクとうづく弥生の心。

剣心が近くにいればいるほど、何かの衝動が生まれそうになる。

流石にそんなことを聞いても困らせるのは分かっているから、口からは違うことを。

「そうでござるな……薫殿が言っていない事を拙者が言うのも気が引けるでござるよ」

「そう、ですか」

多分、剣心も気づいている。

自覚している、この人の前では視線が泳ぐ、未だに手は何かを探そうとする。

だからこんなことが聞きたいわけじゃないなんてきつと分かっている。

それは優しきなんだろうか？

多分、違う。

この時の剣心はまだここを帰るべき場所と定めていない。

仮宿。

いずれ去る場所だと思っっているはずだ。自分にはその資格が無いと思っっているから。

深入りしてはならない、そう心に決めているはずだ。

情を移さないようにラインを定めている状態だろう。

「なら、えと……まだ始めて少しですけど、どうですか？ 私の剣」

「おろろ？ ……そう、でござるな」

少し意地悪したくなったのは多分この焦れる心のせい。

聞いてもきつと深入りを避けようとする剣心に言えとまっすぐ見つめて訴える。

適当ではないだろうけど、流そうとした剣心は困ったように視線を返して口を開いてくれた。

「……まるで、男児のように剣を振るのでござるな」

「んえっ!？」

意地悪をやり返されたわけじゃないのに驚いた。

「伏せた事にも繋がる故あまり言えないでござるが……弥生殿は力で剣を振っているでござる。あまり例がないから確かではござらんが……薫殿然り、女人は力を遠心力や自身の力以外で補う剣を振るっているでござる。それが、弥生殿にはござらん」

思わず真顔で聞き入ってしまった。

そう言われて思い返してみれば、神谷活心流奥義の刃止め、刃渡り。

これも言ってしまうえばカウンターで、相手の力を利用する。つまり自分以外の力を自分のものにするものだ。

薫さんが戦った……十本刀のあのオカマ。

あいつに繰り出した膝挫あしひきもそうだ、相手の突進力と自分の突進力を重さの掛かった膝

にぶつけることで破壊力を増した技。

だから女性である薫さんも、子供で筋力が未成熟の弥彦だって戦えた。

「それが悪いこととは言わないでござる。ただ、神谷活心流を女性として修めるのであれば……そういったものは意識すべきでござろうな」

「なる、ほど……」

やつべ、流石超一流の劍客さん？ 頷く以外のことが出来ねえ。

多分、これは神谷活心流に限ったことじゃないだろう。

言われた視点で考えてみれば、飛天御劍流だってそうだ、動の中に刀を振るって動がある。

確かに劍心の師匠、比古清十郎のような体躯に恵まれているなら静から動に移るだけでも十分な力を発揮するだろう。

そこに飛天御劍流を重ねれば……うん、ばねえ。

女性としての動き、か。

……無理だろ常識的に考えて。

「不思議なのは——」

「はい？ 不思議、ですか？」

「いや……何でも無いでござるよ」

そう言つて、にっと笑つた。

そんなわけで稽古終了。

剣心が相変わらずそんなにいるの？　つていう量の買い物を押し付けられて、俺は廊下を雑巾もつて走つて。

そんな中、表が騒がしい。

ドツタンバツタン大騒ぎと共に道場の扉だろうバタンと勢いよく閉まる音が聞こえて。

「あー……菱川愚連隊、だつたっけ？」

そうそう、元門下生のヤツが酒飲んで酔つ払つて喧嘩売つちやいけねえ相手に喧嘩売つてうちに逃げ込んできたやつな。

まあそんなお馬鹿さんはどうでもいいけど、弥彦が門下生になるつて言うことになつた出来事だ。

確か薫さんの強さが垣間見れたんだっけ？

弥彦にとつたらちよつとだけ素直になれるようになったきつかけというか、薫さんが少なくとも教えを請う相手だと認めるに足る剣客だと認識できたつて事。

結局といえればアレだけど、剣心が木砲の砲弾逆刃刀で真つ二つにして脅して終了だし

……掃除の続きするか。

と、思ってたんだけど。

「ボロ道場ごとぶっ飛ばすぞお!!」

でつかい何かが壊れる音が響いた瞬間。

頭の中にあつた何かがキレた。

「だ、誰が掃除してんだと……!」

違うそうじゃない。

なんて空耳が聞こえた気がするけどキレたつてところは一緒だから無問題。

俺も弥生もキレてた。

走って道場に家側から駆け込んで見れば集まる視線も気にならず、竹刀に一直線。

「こんのドグサレさん!!」

「ひいつ!」

とりあえず誰だっけこのモブ。

佐藤くんだっけ? 忘れたけど竹刀で叩いとく。

「てめえもですこの野郎! 誰がいつも掃除して誰がこのあと掃除すると思ってるんですかっ!!」

もう一人にもビシビシ。

シリアス？

知りません。薫さんのいいところ奪っちゃうとか全然知りません。

「んでてめえらですよっ！ わざわざ木砲とはいいい度胸です！ やってみやがれこのやろうです!!」

「んなつ?!? なんだてめえつ?!?」

「ここはっ！ 私の大事な場所ですっ!! それを無粋なもんでぶち壊し!! てめえらも同じにしてやりますっ!!」

もう何言ってるか自分でもわかんねえ。

ただ竹刀をぐつと握った感触だけがはつきりしていて。

同じように床をぐつと踏み切ろうとしたとき。

——ありがとう。

そう言われて、後ろから薫さんに抱きしめられて。

ようやく頭が冷えた。

「弥生ちゃんも含めて……あなた達に剣を教えたのは私と父さん。愚剣の責任は私にあるわ」

「でも、でもっ!!」

「くすっ……。良かった、変わっちゃったななんて思ったけど……弥生ちゃんは弥生

ちゃんのままでった——活人剣を教えたつもりって思ったけど、少し、救われたわ」

——弥彦、あんた口は悪いけど剣の筋はいい線いつてるから。頑張りなさいよ。

薫さんの背が遠ざかる。

知ってる、漫画で見た、その背中。

だって言うのに、知ってるのに。

このあと剣心がやってきて、無事解決するのに。

「薫さんっ!!」

心が、痛い。

それでも、動けない。

愚連隊の男が、スケベ顔して薫さんに手を伸ばして——

「ふざけんじゃねえっ!!」

「や、弥彦ちゃん……?」

男の顔に足の裏を叩き込んだ。

「この明神弥彦をその下衆二人と一緒にするんじゃねえっ!! てめえ一人を痛てえ目に遭わせてっ! 女一人泣かせてっ! ハイお終いつてワケに行くかよっ!!」

泣かせて……?」

あ、そうか。

俺、泣いてるんだ。

その涙の理由もわからないまま。

剣心が姿を現したことに気づかないまま。

「……ありがとう」

誰に向けてか、誰が言ったのか。

口から自然にそんな言葉が出ていた。

「くそっ！ てめえっ!!」

「はいはい、ちよつとは姉弟子の強さがわかりましたか？」

弥彦の門下生宣言が飛び出てから。

いつもの鍛錬が終わった後二人で打ち合うようになるという日課が増えた。

自分でもよく言うなんて思う。

姉弟子とか言えるほど強さに変わりはないんだろう。

口調ほど余裕は無く、今だって恥ずかしい姿を晒さないかと心配で仕方がない。

弥彦に感化された、なんて言ってしまうばそのとおりで。

強くなるのも悪くないかななんて思ってしまった俺だから。

「るっせえ！ 猫かぶりっ！ その口調怖いんだよっ!!」

「あら……なんのこと、でしようかねっ!!」

「うおっ!」

猫かぶり。

そのとおりだろう、俺は弥生って皮をかぶった俺だから。

その言葉は俺によく似合う。

弥彦相手にあの感覚は覚えない。

それでも何故か、本当に何故か身体が少し動かしやすくなった。

だからこうして姉弟子としての面目を保っていられるのだろう。

「はい、じゃあ今日の風呂焚きは弥彦ちゃんでお願ひしますね」

「うぐっ……」

「男に二言は?」

「……あーもうっ! ねえよっ! ちくしょうっ! あといい加減ちゃん付けはヤメ

口ッ!」

「私に勝てたら考えてあげます。では、よろしくおねがいますね」

細かいこと、詳しいことはわからない。

ただ、ようやくというべきか、俺は強さを求め始めた。

身体が、心が望んでいたように、ようやく。

だけでもうそれで良かった。

わからないから。

わからないから、わかることだけ、わかりたいと思ったことだけはやろうと思う。

強くなる。

そうすればきつと、見えるものがあるのだらうから。

その男、命知らずにつき

切実な事情があつた。

門下生二人とは言えいわゆる月謝、金を払っているわけでもなく居候といえばアレだがプー太郎二人とプー姫が一人。

人間が生きていく上で当然必要な食事だなんだとあるわけで。

「いらつしやいませー!」

「ほら、弥生ちゃん! もつと愛想よく!」

「は、はい! いらつしやいませえ〜!」

導き出される答えは……金、金がねえんすよつ!!

だから働いてんすよ! 赤べこでつ!!

おかしい、これはおかしい。

俺こと弥生の働き口は神谷活心流道場であるわけで、いわば雇い主は薰さんの父、ひいては薰さんなのだ。

言うところのお仕事ご奉公で貰える給金が稽古代として、生活費として相殺するならわかる。

「どうしてこうなつたのです……!」

「はい! ぼやかない!」

何で俺が生活費を稼ぐことになるんじやい……!

いや! 薫さんだつて出稽古だなんだとやってくれてる。

わかる、わかつてるんだ!

ただ納得がいつていないのさ。

なんで俺が給^{ウエイトレス}仕をしてるのだと。

「おーおー新人ちゃん! 今日も可愛いねえ!」

「あ、あはは……ありがとう、ございますう」

嬉しくねえ! 嬉しくねえよ畜生っ!!

喜んでたらダメだよこんなのっ!

ああ弥生ちゃん、あなたはどうして女なの……どうして可愛いの……。

この時期には燕ちゃんもまだ奉^{しゅうじやく}公してないらしく、妙さんには悪いけど見目麗し

い俺は看板娘扱いで。

一日目で新人が入つたと噂になり。

二日目でその新人が可愛いと評判になり。

三日目でファンがついた。

くたばれ明治。

容姿だけならず女の身で竹刀を持ち歩きながら町中を闊歩してる俺だから余計に印象に残りやすいみたいで。

剣術小町って薫さんの通り名を奪ってしまいそうな勢いで認知されそうになってる助けて。

……もう竹刀持ち歩くのやめようかな……。

そんなことを思いながらも、板についてきた営業スマイルを振りまく。

いちいち口笛を吹いてくるファンの存在は知らないふり。

こっそりケツに手を伸ばそうとしてくる飲んだくれの脅威手を何食わぬ顔で躲して叩き落としてみれば。

「もう……だめですよ?」

「は……はいっ!」

酒の影響だけと信じたいたい頬の染め具合で叩いた手を擦りながら良い返事。

男のケツ触って嬉しいのか? さてはてめえホモだな?

あー俺今女だった。

何回ループした思考だろうか、もう最近は忙しさもあつて思考の片隅に追いやられたそれ。

目まぐるしくグルグルと動いて。

やっと落ち着いて来たかなと思つたその時。

「そんなやり方では自由民権等——!!」

「それでは板垣先生を死地に——!!」

自由民権運動の壮士が煩い。

ぶつちやけセクハラ紛いのことをしようとしてくるヤツよりよっぽど厄介。

本人たちは至つて真面目なんだろうが、酒を入れてガミガミ言い合つてる光景は迷惑の一言。

「ああ………またです」

「そうやねえ………せやけど大事なお客様にかわりないさかい。なんともいえまへんわあ………」

たまーに現れてはあんな感じ。

まったくいつの世の中も酔つ払いは面倒くさい。

と、同時にだ。

あいつらが赤べこに来る、いや居るつてことはここに剣心たちが来れば……。

「あ、いらつしやいませえ!」

「おう、空いてるか?」

相楽、左之助。

悪一文字を背負うその人がやってきた。

うん、まあそうだよな。

あの時、この人も居たんだ、だったらいつのタイミングかでやってくるのは当然だ。

「ん？ 嬢ちゃん、何か俺の顔についてるか？」

「い、いえ申し訳ありません。……お席、ご案内します」

いっけねえ、マジマジと見ちまった。

やっぱ弥彦曰くの剣心組ってやつのメンツを見れば一瞬固まっちゃうや。

赤報隊。

左之助がその隊に居たことは漫画オリジナルの設定だつてわかっているけど、やっぱり思うところはあるもんで。

ニセ官軍とされたその生き残り。

維新志士への恨み、怒り。

それを糧に生きていた……いや、生きている左之助は喧嘩に明け暮れ毎日を塗りつぶしている。

全てを忘れる事のできる喧嘩に依存して。

「それでは、少々お待ち下さい」

「あ、よ」

こうして喧嘩以外の時は、普通だ。

営業スマイルに愛想笑いを返してくれる、そう。仲間内から言われている物足りねえとギリギリした笑みを隠しながら。

剣心はこの時もち左之助の力をしみつたれた強さだと言った。

強さを求め始めた俺からすれば強さの種類なんてわからない。

漫画、小説、アニメ……そんなもんで語られる色々な強さはわかるけど、求め始めたことでわかるものがある。

今の左之助が持つ強さってやつは、俺から言えば生きる強さだろう。

恨みが怒りがあるとは言えど、正直自死を選ぶ事無くそれどころか八つ当たりとは言え喧嘩することによって生きている。

意味なく理由なく。

されども強さを求め始めた俺は、どんな強さでも眩く思えた。

「——あら、薫ちゃん」

「え……？」

そんなことを考えた時だった、剣心たちがやってきたのは。

——俺は町外れの破落戸長屋ごろうつきにいつからよ。

自由民権運動壮士と左之助、剣心たちの一幕が終わり、俺の仕事も終わり。道場へ帰る前に、何故だろう俺は左之助が言った場所へと向かっていた。

心が向かえと言ったわけじゃない。

ただ、この時の左之助……いや、斬左と話をしたいと思った。

剣心と戦うことよって斬左をやめた左之助。

もうすぐ起ころうそれがあるのなら、斬左と話すことが出来るのは今だけだから。

機会が貴重だから？

会って何を話す？

全然決めてない。

ただ……本当に、言葉を使うのなら衝動的だった。

だから忘れていた。

「ほう……？ ついている」

「ああ、そうだな兄貴」

「……比留間、兄弟……!!」

そうだった、そのあとすぐだった筈だこいつらが斬左に喧嘩依頼をするのは……っ！

日はもうすぐ沈む、逢魔が刻とはよく言ったもんだ。

内心迂闊な自分に舌打ちしたい気持ちも堪えて竹刀を握る。

「おいおい正気か小娘？ あの時のことを忘れたか？」

「……そのとおりに忘れしました。私ながらバカだと思つていますが……あなたたち程じゃありませんよ。どうやったって、何をしたって……斬左に喧嘩依頼をして利用しようとしたところで、剣心に一泡吹かすことすら叶わないと理解できないあなたたち程じゃ」

あー……なあんて挑発しちまうかね？

ただどうやら、弥生はこの二人が許せないらしい。

借り物の怒りがそう俺に実感させる。

——こいつらを——せ。

そう、囁いてくる。

「こ、の……死にたいようだな!？」

「待て。……確か巫丞弥生と言つたな？ 何故お前がそれを知っている」

「さて……何故でしょうか？ 小物の考え位わからない私ではないということかも知れませんよ？」

大男の方からの殺意がヤバイ。

ものつすごく逃げたいのに、意思が逃してくれない。

対峙しろ、戦えと訴えてくる。

そうは言うけどどうやって戦うんだよまじで。

小物の言葉が効いたのか兄貴の方まで顔を赤くしだした。

うん、絶体絶命。

「おい」

「分かってるぜ兄貴……殺すのは、後だよな？」

へえ？

ああ、確かについているとか言ってたか？ 残念今についてはません。

……うん、絶好調。

「おう小娘、まあ今は骨だけで勘弁してやる。大人しくしろ」

「……」

うん、逃げられないね。

だったら仕方ない……。

本気ですか。

「きゃーーーーー!! 痴漢ーーーー!! 暴漢ーーーー!! 狼藉者ですーーーー!!」

「んなっ!?!」

ふはははははは!!

バーカカーバ豚のケツう!!

びつくりしたまま固まりやがって!　ざまあ見晒せ!!

こんな長屋近くでなあにやる気になってんの?　バカなの?

現代でも使われるだろう必殺技を喰らうがいつ!!

「あ、兄貴っ!?!」

「ちいつ!!　一旦退くぞっ!!」

あ、なんか心がかっかりしてる。

いいじゃない、女の子だもの。

……あ、何か俺までがっかりしてる。

生きるって辛いね。

慌てて逃げていく二人をやるせない気持ちで見送る。

ガヤガヤと長屋から顔を出してくる住人の皆様に頭を下げて、そのまま地面に埋まりたい気持ちをぐつと堪えて。

「んお?　嬢ちゃんは……赤べこの看板娘じゃねえか、こんなところでどうした?」

「あ、はは……こんばんは相良左之助さん。少し、お話しませんか?」

結果オーライにしたくないけどオーライな機会を手に入れた。

「ガハハハハハッ！ 嬢ちゃん中々やるじゃねえかつ!!」

「わ、笑い話のつもりじゃないんですけど……」

長屋から出た顔の一つに左之助もあつて。

そうして部屋に招いてもらつて、事の顛末を話せば爆笑されて。

やつぱり地面に埋まりたい。

「んで？ そんな大変な目にあつて俺になんのような？」

「え、えつと、ですね」

ひとしきり笑われた後、左之助はようやく水を向けてくれた。

とは言えさつきも思ったとおり、話す内容なんて具体的に決まっていな

ただ、俺は。

「喧嘩屋斬左と……話をしたいと思つて来ました」

「……へえ？」

その一言で顔色が変わつた。

仕事用の顔、とでも言うべきだろうか。

今の彼が持つ本質、それがむき出しになつた顔。

物足りない、喧嘩に溺れたい。

そんな顔。

「すまねえな、驚いちまった。看板娘の嬢ちゃんが……そんな話を持つてくるなんて思わなかったもんでな」

「……」

ちらりと視線を動かせば無造作に置かれた斬馬刀。

斬馬刀の左之助、通称斬左。

彼の持つ怪力だからこそだろう馬ごと相手を両断するなんて物騒な相棒。

その存在が、彼の放つ何か……眼の前にいるのは左之助であつてそうじゃないことを教えてくる。

「で……？ 誰だい？ 俺の喧嘩相手は」

期待、だろう。

わくわくしている、新たな喧嘩相手に。

彼の頭の中にあるのは誰だろうか。

全く想像していない誰かだろうか、それとも――。

「私、です」

「……は？」

気づけばそんな答えが口から出ていた。

「おいおい、すまねえな耳がおかしかった。もう一度言つてくれや」

「だから、私、です」

本当に迂闊だったのは今こそこの時だった。

会話して何かを知ることなんて出来ない。

この人は、今の彼は拳を交えることこそが対話なんだ。

「私は、あなたと喧嘩をしに来ました。斬左さん、依頼、受けてくれますか？」

「――」

当然だろうその表情は。

目を丸くして、真意を探るように俺を見る。

「それとも、受けられませんか？ 赤報隊……その生き残りは相手が女だからと逃げる

のですか？」

「――てめえ」

向けられる視線が変わった。

何処でそのことをと疑問の色はすぐに怒りへと変わった。

「喧嘩相手の生死は俺の知ったことじゃねえ……言っている意味がわかるな？」

「……はい、もちろんです」

それでも。

そう、それでもだ。

俺はこの人と語り合いたかった。

生きる意味を喧嘩で塗りつぶした彼の思いを知りたかった。
強く、なるために。

その男、命がけにつき

正直なところ、今自分を突き動かすものが何なのかわからない。

強くなりたいと思ったのはここまで……斬左に喧嘩を売るほど強いものだったのだろうか。

分かってるはずだ、今の俺は弱いって。

剣の稽古を始めて日も浅い上に、遥か高みに居るだろう斬左……左之助や剣心たちから見てみればそれは豆粒ほどの力。

るろうに剣心の世界。

言つてしまえば異世界にやってきた俺は、まずスライムから倒して経験値を積んで強さを目指すことこそが普通。

そんな普通からみれば、レベル1の戦士がどつかのボスを相手にしようとしているよ
うなもんだ。

確かに戦えば、大きな経験となり自分の力になるんだろう、それはわかる。

ただどそれをする、したいと思うほど、生死を懸けるほどの意思を持つて強くなりた
いと願ったわけじゃないはずだ。ましてやそもそも経験とできるほどの戦いになるの

かすら危ういわけで。

だから、わからない。

強くなりたいたいと願った思いは、果たして自分のモノなのだろうか。

この身体に眠る願望。

これもやつぱりそんな借り物の気持ちなんじゃないのかと。

「……今ならさつきのこととは忘れてやつてもいいんだぜ？　もつとも二度とその面を見せねえって約束はしてもらうけどな」

日が落ちきった川辺。

少しの距離を開けて、斬馬刀を布に包んだまま担ぐ斬左はそんなことを言ってきた。

らしくない、のかもしれない言葉。

それほどまでに今の俺は滑稽なんだろうか。

足は、震えているし既に吐く息で肩が上下する。

逃げ出したい思いなんてとつくに天元突破してる。

だつて言うのに心が熱い。

逃げるな立ち向かえと、震えを、息を抑え込んで来るかのように燃えている。

「……そう言えば、喧嘩依頼料のお話をしていませんでしたね？」

「ああ？」

「そうですね……満足出来なければ私を自由にして頂いて構いません」

熱に浮かれて言っている言葉をイマイチ理解しないままに。

ただただ熱の存在を理解出来たそのまま口にする。

そしてそれは斬左の口角を持ち上げたように。

「はっ！ 上等だっ！！ 精々楽しんでませてくんなんっ！！」

ようやく見れた斬左としての笑みを浮かべたまま、斬馬刀を放り、徒手空拳で突撃してきた。

「うらあっ！！」

「——っ」

間合い。

俺の知識は漫画やアニメで語られるモノと、薫さんの教えだけ。

頼りないそれにしがみついて、必死に竹刀を構える。

一言、斬左の拳は脅威だった。

いや、それだけでは足りない。

天性の打たれ強さ。

それこそがやっぱり紛れもない斬左の異才だろう。

「はっ！ これじゃあ酔っぱらいの寸鉄のが痛かったぜっ!?」
「く……っ！」

要するに斬左そのものが脅威だった。

竹刀をまともにも受けても止められない突進。

意に介さず振りかぶられる拳。

斬左にとって俺なんて案山子と変わりないだろう。

勝ちの道筋なんて到底見えない、月明かりはあまりに乏しくて、そんな道を照らしてくれない。

それでも。

「つち……！ またかよー！」

「はあっ……はあっ……」

こうしてまだ戦ってるつもりでいられるのは、脅威を躲し続けていられているからだろう。

都合五回目。

全く同じではないけど同じ行動を重ねた。

斬左に比べれば小柄もいところな俺の身体。

それ故に避けやすいなんて理由はあるだろうけど、ここに来て一つの確信を得た。

俺——弥生は自分の身に降り注ぐ脅威を避けることが出来る。

どういった理由か、理屈かはわからない。

確信。

俺は体力が続く限りきつと斬左の攻撃を避け続けることが出来る。

頼りなさすぎる間合いの知識と頼りになりすぎるこの異能ともいうべき力。

足を止めて拳の乱打なんてされれば一溜まりもない俺がこうやってなんとか戦いになつているのはその二つのおかげ。

突進される、避けて体勢を整えられる前に間合いを取り直す。

それが、今俺に出来る唯一の戦い方。

「だが……そろそろつれえだろう？ いい加減寝ちまいなっ!!」

「っ!!」

再度の突進。

わかりやすく斬左の目が、振り上げられた腕が、何処をどうして狙うか伝えてくる。

それをこの身は逃さない。

「ふっ……!!」

「——」

六度目も結末は同じ。

そこでようやく斬左の目が変わった。

「なるほど、な」

「ふう……ふう……。なに、か？」

空振った拳をマジマジと見た後、大きく深呼吸をする斬左。

「俺の拳はお前にや届かねえ……いや、このままやり続けりゃいつかは捉えられるだろうがよ。ようやく分かったぜ」

ニヤリ。

と言う音が聞こえてきそうだ。

ただその笑みには喧嘩前に見られた物足りなさってヤツが消えていた。

「お前は強ええ、少なくともそこらのごろつきなんかよりやあよつぽど。痛くも痒くもねえが、避けるだけじゃねえ……ちゃんと折れずに戦つてらあ」

「……嫌味に、聞こえなくもないですが……ありがとうございませうと言っておきます」

斬左は笑った。

喧嘩と認めた最中で、笑った。

その意味はなんだろうか。

笑いながら斬左は。

「なら……強えやつにやコレを使わねえとな」

「——っ！」

斬馬刀を広い、巻布を取り払った。

「久しぶりだからよ、勘弁してくれや？ 斬馬刀の左之介……斬左。喧嘩第二幕、行く

ぜっ!!」

現れた手入れの行き届いていないボロボロの斬馬刀。

その刃に。

月明かりに照らされた煌きに。

俺は、ようやく勝ち筋の光を見た。

「うらあっ!!」

「つつっ!!」

斬馬刀の質量、それを操る斬左の膂力。

それによって生まれる風圧に足を取られながらもやっぱり俺は躲し続ける。

「ははっ!! 今のは危なかつたんじゃねえか!? おらっ! もっと俺を楽しませろっ

!!」

「無茶……言わないでくださいっ!!」

拳とは段違い。

目に見えて大きくなった脅威にゴリゴリと体力が削られていくのがわかる。だけど。

「つたく！ その身のこなしはずりいぜ!!」

剣心も言ったとおり、斬馬刀は攻撃手段が振り下ろすか薙ぎ払うかの二択と至極読みやすい。

避けるって異能が無くとも常に二分の一の確率で避けることが出来る。

そう、避けるという行為だけなら容易いのだ。

「はあっ！ はあっ!!」

「そろそろ、かい？ 念仏唱えるなら待ってやるぜ？」

それでももう限界。

集中力も、体力も悲鳴が上がらない位そう訴えてきていて。

そんな中であつても心は熱く燃えたぎったままで。

「バカにバカ言われるなんて……悔しいです」

「ああ？」

口端にかかった力を実感できる。

そう、今俺は笑ってる。

「途中で諦めるくらいなら……喧嘩なんて売りませんよ」

「——ツハ!!」

——ちげえねえ。

ぐつと斬馬刀を構え直す斬左。

そして俺も。

「……へえ?」

「……」

竹刀を地面と並行に構えて、竹刀の柄越しに斬左の興味深げな視線を受け止める。

これは木刀じゃない。

そして知識で知っているだけの技で、一度たりとも練習なんてしていない。

間合い。

斬左の間合いは広がって、俺は縮めた。

剣心の言った言葉。

相手の力を、自分の力以外を利用する力。

だったらもうこれしかない。

できるできないじゃない、できなけりや死ぬだけだ。

怖い。

普通に、怖い。

震えている足はずっとそのまま。

熱に浮かされ地面を舞う。

「行くぜ？」

「ええ、終幕、です」

二択。

ちゃんと自覚した異能じゃなく、決めつけで。

俺はその決定に命を託す。

——まったく、わけわかんねえや。

心でそう呟いて、一步。

地面をダンツと踏み切って。

「うらあああああああ!!」

「あああああああ!!」

恐怖を叫びで押しつぶして、見えた斬左の剣閃は。

横薙ぎ。

「っ!!」

「神谷活心流!! 柄の下段っ!!」

膝挫。

長い髪が斬馬刀に巻かれて千切れた感触。

それすなわち俺が横薙ぎされた斬馬刀の下を潜れた証明。

後は、この柄を、斬左の膝に――。

「お——おとおおとおお!?」

「!?」

ズンつと言う衝撃が重なった。

同時に目の前にあつたはずの膝が。

「ぞ、ふ……」

消えて変わりに斬左のもう片足が俺の腹に突き刺さっていた。

「なん……で……」

「はあっ……はあっ……」

暗くなつていく視界で見えたもの。

それは少し遠くで地面に突き刺さっている斬馬刀。

「そつか……流石、相良、さのす、け……」

重心がかかつてる方に狙いを付けておけばよかつたとか。

難いだ斬馬刀を勢いのまま放り投げて蹴りへとすぐさま切り替えるなんてヤバイだろとか。

そんなことよりも。

やっぱり左之助って強えわ。

そんなことを思つて、意識を手放した。

「——はっ!?!」

「よう、目え……覚めたかい?」

ぱつと身体を起こしてみれば煎餅布団の言葉を体現したかのような布団がはらりと。

「つぐ!?!」

「オイオイ、無茶しちやいけねえな? いや、だったら俺に喧嘩売つてんのも無茶か……」

じゃあなんつーんだろうな」

は、はらいてえ……いや、まじ、まじでいてえ……これ、絶対折れてるよね? あば

らとかなんか絶対。

「(ハ、ハ、ハ)、は……?」

「俺の部屋だ。まあ流石に女を一人あの場に置いとくのもな」

ようやく声の主、左之助を見ればシーシーと魚の骨らしきものを啜えてる。

その顔はどっか満足げで。

「……私を、殺さないのですか?」

「何か勘違いしてねえか？ 俺は別に殺しがしてえわけじゃねえ……喧嘩がしたいだけだ。相手の生死はそいつの運だ」

ああ、そう言えばそんな事言ってたっけ？

そのおかげで生きてるっつーことか……てか。

「あー……でえじようぶだつて、別にナニかしたわけじゃねえよ。そこまで飢えてねえもんでな」

「あ、はい……そうですか、そうですね」

ほっと一安心……。

いや、流石に男に掘られるのは勘弁……。

あーでも何だろ、意外と紳士？ それとも実は奥手さん？

俺ならまず間違いなくいただきます……ダメだ、度胸ねえわきつと。

「下心は別にあんだよ。……嬢ちゃん、何で俺が赤報隊の生き残りだつて知ってる？」

「……それは」

やつべ、言い訳考えてなかったてへぺろ。

な、なんて言おう……煽るのに都合が良かったから使っただけなんてとても言えないぞ？

「……」

あー……はらいてえ……二重の意味で。

左之助は話せて顔で……いや、言うまで逃さねえって顔してるしさ。

……言うべき、なんだろうか。

未だにわけわかんねえけどここは漫画の世界で、左之助たちはその登場人物。漫画を読んだ俺だから知ってるんですよ、なんて。

……ばかじゃねえの？ 言ったら今度こそぶちのめされるわ。

あ。

「に、錦絵です。ご存知ないですか？ 赤報隊一番隊、相良総三」

「っ……ああ、知ってるよ、知りすぎている程にな。それがどうしてえ？」

「その錦絵の後ろに、左之助さんに似た人が描かれていて……もしかしたらって思ったんですよ」

月岡津南もとい月岡克浩まじ感謝。思い出してよかった漫画知識、さすが俺。

「……そうかい。それがたまたまってわけかい」

「はい」

信じてお願いプリーズ。

しっかりと目を合わせてしれつと返事をしてみりや探るような目つきの左之介。

……だめ？

「んじやあわかった。今回の喧嘩料は……その絵を俺に持ってきな、それで勘弁してやるよ」

「は、はいっ！　ありがとうございますっ！」

つぶねー！　まじっべー！

あーほんと寿命が縮んだよ、ごまかせてよかった！

ま、まあそんなに高いもんじや無かったはずだ、売れ残りまくってるやつだし、いざとなったら店主に色仕掛けでもなんでも……。

しません。

ちやんとお給金で買います。

「わあった、じやあそれで手打ちだ。身体がマシになるまでここは好きに使っていい、その後は家にけえんな」

「はい、ありがとうございます。……？　あの、何処へ？」

「さて、な。どうやら今夜は千客万来の大繁盛らしい……嬢ちゃんがいる前で話すことでもなし、ちつといつてくらあ」

そう言つて長屋から出ようとする左之助。

……ああ、比留間兄弟が来たのかな？

そう思えば、変に未来が変わっていかないことにちよつと安心したり。

「ああ、それと」

「? はい?」

ふと思ひ出したように左之介は足を止めて、肩越しに。

「またやろうぜ? 喧嘩、よ」

「……あ、あはは……機会があれば、お願いします」

そう言つてにかつと、悪一文字越しに左之助の笑みを見せてくれた。

その男、ご主人さまにつき

「シメてやるっ!!」

「お、落ち着いて下さい薫さんっ！　だ、大丈夫ですから！　ね？　ね？」

さて、動けるようになるまで時間はそれなりにかかつて。

戻ってきたら門の前でうつらうつらとしながらも待つてくれた薫さんに迎えられて。

左之助との一件を正直に言ってしまうのに気が引けた俺は。

——暴漢に襲われて……。

的な説明をした、してしまった。

邪魔だと思った和服も動きやすいようにって破ってしまったから、いい感じにそれっぽく見えてしまつてあら大変。

まあ薫さんは心配一色だった表情を見るうちに怒りへ変えたわけだ。

どんだけ愛されてるんだつて思うよりも先に申し訳ない気持ちでいっぱいになりつつ暴れてる薫さんを宥める。

「まあまあ薫殿、弥生殿もこうして無事に帰つて来たわけだし、落ち着くでござるよ」

「で、でもっ!」

「弥生殿? 大丈夫なのでござるな?」

「は、はい」

頷きまくる。

確かにまだ少し腹は痛いけど……うん、大丈夫。嘘ついた心の痛みわ。

「む、むう……弥生ちゃん、ほんとに大丈夫?」

「……はい、大丈夫です。ごめんなさい、心配かけて」

頭を下げる。

心配をかけた事、嘘を吐いている事。

ただ、不思議と今回の件は必要だったんだろうと思ってしまうていて。

嘘でしたごめんなさいと謝るって気持ちには生まれなくて。

「そっか……ならもう心配かけないでね?」

「はい」

そう言つて門をくぐる薫さんに複雑な思いを抱えることになってしまった。

だけど薫さんの後を追おうとした時に。

「……何をしてきたのか、暴くつもりはござらんが、弥生殿」

「……」

やっぱり真面目な顔をするとかっけえな剣心。

男でもどきつとするもんださうだろう？ ……そうだと行ってくれ。

「あまり、身内に心配をかけない方がいいでござるよ」

「……あなたに言われたくありません」

まじめな顔から一転していつもの困ったような笑顔でそんなことを言われるけど。

どうやら珍しく俺と弥生の意見は一致したようで。

ブーメランなんだよなあ……その言葉は自分によく言い聞かせてどうぞ。

自分で招いたことなのに憎まれ口叩いちやうのはいかんのだけでも……ううん。

ともあれ、だ。

もう変に嘘でごまかすのはこれで最後にしようと思う。

借り物の気持ち、身体……：そうなのかも知れないけど、この世界にいる薫さんたちにとつては関係の無い事だから。

やるなら、できるなら正々堂々としようと思う。原作知識を利用しないとは言つてな

い。

い。

「くつ、このつ!!」

「あら弥彦ちゃん、そんなんじゃないですよ?」

数日後。

すっかり怪我也治つて動けるようになって。

弥生は脅威からその身を躲すことが出来る。

それはつまり脅威として感じなければその力は発揮出来ないということ。

こうして弥彦と稽古をしている中ではあの感覚がやって来ることは無かつた。

どうやら弥彦は薫さんいわくのいい筋しているもの、まだまだその才覚を現しているわけではなさそう。

つていうのもまあ当たり前だろう。

稽古し始めてまだ時間がそれほど経っていないっていうのはもちろん。

弥彦がその強さを伸ばしたのは剣心の戦いを間近で誰よりも多く見てきたからだ。

見取り稽古。

誰だつたか言つた言葉通り。

この時の弥彦はまだあの愚連隊が放つた木砲の弾を真つ二つにした位しか剣心の剣を見ていない。

これから。

弥彦はまだまだこれから死戦を見て、感じて。そして経験していつて強くなるんだらう。

そしてそれは俺も。

訳わからずではあったものの、左之助……斬左との戦いを経て俺もどうやら強くなつたらしい。

それは少なくともこうして弥彦に対して余裕を持つて相手できる位には。

強くなったというか……違和感すごいんだけど、言葉にすれば馴染んだって感覚がある。

「でえっ!!」

「——そこっ!」

「うおっ!」

焦つたらしい弥彦の面打ち、がら空きになつた胴を打つてみれば吸い込まれるような有効打。

がら空きだと思えたこともそうだし、気づいたこともそう。

たつた一度、死戦なんて言えないかもしれない戦いで、妙な余裕が生まれた。

身体やよいをしつかり使うことが出来るようになってきたとでも言うべきか、どうすればこの身体で戦うことが出来るかつてのを無意識に理解できる。

「大丈夫ですか? 弥彦ちゃん」

「くそっ!!」

悔しそうに床へと毒づく弥彦。

気持ちはわからないことは無い。やっぱり女に負けるってのは、認めている相手ならともかくもプライドをえらく傷つけることには変わりないのだし。

薫さんに対しての態度もそうだし、まだまだプライドという服は重く弥彦に纏わりついているんだろう。

なんて思ったんだけど。

「まだまだ稽古が足りてねえ……今に見てろ！　すぐに勝つてやるからなっ！」

「……」

どうやら見くびっていたらしい。

勝気な笑顔でそう宣言する弥彦にちよつと見惚れてしまった。

「……ふふつ、簡単には抜かされませんよ弥彦ちゃん」

「うるせえ！　すぐにちゃん呼びなんて出来ねえようにしてやるからなっ！　もう一本だっ！」

「はいっ！」

やっばすげえよ剣心組は……。

どいつもこいつも揃ってかけえわ。

安心したと言うべきか。

——よう、喧嘩しに来たぜ。

特にこの世界へと及ぼした影響つてのはちっさいもんで、ちゃんと左之助は剣心に喧嘩を売りに来た。

薫さんたちの中に俺の姿を見つけて一瞬驚いてたけど、軽く笑った後剣心の経歴を話しました。

比留間たちの姿を改めて見てざわつく心を感じたけど、なんとも言えない薫さんの表情もあり落ち着かせて。

緋村剣心の正体が緋村抜刀斎だと言うことを知っても態度を変えない弥彦に安心してたり。

そんなことを背後のやり取りで覚えながら、俺は左之助に話しかける。

「ありがとうございます」

「何のことだよ」

「黙っていてくれて、ですよ」

あの場で余計な事言つてれば色々まずかったわけで。

意図してかどうかはわからないけど、お礼は言っておくべきかなって。

「……俺にこうして話しかけてちゃ意味ねーんじゃないのか？」

「……あ」

「そうだよ！ 何やってんだよ俺！

ぬぐおう……ウカツツ！ 迂闊すぎますよ俺！

「まあいい。どのみち俺あそんなことに興味ねえ。……嬢ちゃんならわかってんじやねえのか？」

「……偽善やろうの維新志士をぶったおす、ですか」

「そう言ってみればわかってんじやねえかと言わんばかりに笑みの種類を変える左之助。」

「勝てると？」

「……わかんねえ。けどな嬢ちゃん、俺たち赤報隊は、負けられねえんだよ」

「わ。ぶ。つ……」

頭を撫でられた。

あー撫でポってこういう時になるもんかね？

こん時の左之助の笑顔は多分、今この時にしか見られないモンだろう。

剣心曰くのしみつたれた強さ、ひん曲がった何か。

そんな時だからこそ見られるもんなんだろうから。

……ポってませんか？

けどまあ。

斬左が倒れて、隙有りと拳銃をぶっ放したものの見事に刀の鏝で銃弾を受け止めた剣心。

ならばと拳銃を俺たちに向けてくる狸野郎。

剣心と左之助の戦いはすごかった。

こうして紙でもテレビでもなく間近でこんな戦いを見られるなんて、剣の道を志していない人であっても興奮もんだろう。

「だったら両足を折れっ！」

「流石兄貴、頭がよく回る！」

なんて俺たちを拘束すべく指をバキボキ鳴らしながら近づいてくる木偶の坊。

——ようやく、来た。

「ヤロウ!! 薫! 弥生! 何をぼーつとしてんだっ! さっさと逃げろっ!」

「だめ……さっきので腰が……!」

あん時は逃げたけど。必殺技使っちゃったけど。

やっぱり弥生は許してなかったようで。

「バカですね、逃げるのは弥彦ちゃん、あなたですよ」

「ああっ!？」

弥彦の持っていた竹刀をすつと奪う。

ちよつといつも使ってるものよりも短いけれど、こいつ相手なら誤差もいいところ。

「私、これでも怒ってるんですよね。薫さんにした仕打ち……到底許せるものじゃないですから」

「や、弥生ちゃん!？」

前に出る。

大丈夫だつてあつちの狸野郎は。

「土龍閃っ!!」

「あぐうあつ!？」

「兄貴っ!？」

ほら、ボコボコになった。

なら後は。

「てめえの番だな?」

「ぐっ!?! 何を……!?!」

ぐつと足に力を入れて……いくらでかくても鍛えられないところだつてあるわけで。

一歩踏み出そうとしたとき。

「あ……あああああ!？」

「言ったはずだぜ!? これは俺の喧嘩っ!! 邪魔するやつあ許さねえっ!!」

立ち上がった斬左が投げた斬馬刀で邪魔をされた。

言った斬左は俺にも言ってるかのように。

「……仕方ない、ですな」

見事に横槍を入れられた……いや、入れようとしたのは俺か。

とりあえずやり場のない実感してしまった怒りを。

「とーうっ!」

「ふぬぐっ!？」

デカブツの金的にぶちこんだ。

神谷活心流、禁じ手。まっだいたたり末代崇である。

あれはなんだ! 鳥か! 飛行機か!

龍槌閃だっ!!

てなもんで。

追撃の剣心ナツクルによって地面に沈んだ斬左は左之助に。

すっかり原作通りに終わって日常が再びやってきて、俺は赤べこ奉公中。

「怪我はもうええの？ あんまり無理したらあかんよつてに」

「はい、もうすつかり大丈夫です！ お任せください！」

心配げな妙さんに自分の胸を叩いてみればやわらけえ。

いや違うそうじゃない。

ともあれそんな俺を見てもう一度、痛くなつたらいつでも言つてねと言つてくれた妙さんはやつぱりいい人だなんて思つたり。

「おうおう寂しかったぜ！」

「あはは、ありがとうございます、ご心配おかけしました」

「そうだけぞ弥生ちゃん！ 俺、弥生ちゃんの顔見れなかつたら手が震えちまつてよ！」

「それは飲みすぎです。ちよつとお酒控えてください」

「ぼぼぼぼ、ぼくのやよいちゃ……」

「はい、お帰りはあちらです」

こうやって温かく迎えてくれるファンの存在にほっこりしないでもない。

というか大げさすぎである。

「おう、やつてるねえ……空いてるかい？」

「あ、左之助さんいらつしやいませ。空いてますよ」

入り口の戸が開いた音に振り向いてみれば包帯だらけのミイラ男、左之助のご登場

だ。

のしのしと歩いてくる姿には流石に頑丈だなあなんて思ったり。

「えいつ」

「ふぐつ!! て、てめえ……!」

「あら? 売りは打たれ強さで、こんなの屁でもないですよ? 安静にしろつて

言つたのにこんなとこまで来てるんですからね?」

「こ、この……ろくな死に方しねえぞ……? わざわざ、ぼでいがあど? しに来てやつ

てる俺になんて仕打ちをしやがる……つ」

そうなのだ。

もう大丈夫つて言つてるのに、稽古まで再開してるのに赤べこに出勤させなかった過保護真つ盛りの妙さんと薫さん。

その悩みを解決したのが左之助で。

妙さんは食い逃げしてたのを見逃す代わりに左之助へとそんな依頼をしたのだ。

流石にそれを盾にされちゃ首を横に振れないわけで、左之助は俺が赤べこで働いた後の護衛……もといボディガードという役割に収まった。

喧嘩屋廃業した後プー太郎とならずに済んでヨカッタネ。

「今の私にすら負けちゃいそうなポロポロさんに言われたくありませんよ」

「ぬぎつ!? ここのやろう」

怪我が治つてからで良いつつつたのになあ、やれやれだぜ。

まあ俺としてもありがたいのだ、ボディガードの件は。

実のところ俺は左之助に稽古をつけてもらう気マンマンである。なあに心配はいらない、また喧嘩しようぜとの言質はある。

剣心はいわずもがな無理なのはわかる。

薫さんに稽古をつけてもらうのは良いけど、やっぱり弥彦程ゴリゴリ教えてもらえるわけじゃなかったもんで。

色んな意味で気を遣われてるわけだ、色々の一部を俺はまだ理解できてないだろうけど。

そんなわけで左之助の言ったまたまた喧嘩をやろうという言葉を都合よく解釈する気なのだ。

ただ問題もあって。

「おいこらてめえ! 俺たちの弥生ちゃんと何楽しげに話してやがる!」

「……ああ?」

弥生ファンかつこ酔っぱらいの存在である。

いや、酔っ払ってなくても悔しげに左之助を見てる人がいるあたり嫉妬ばねえんだろ

うなあ……。

男は皆ホモ、はつきりわかんだね。

「別に楽しかねえよ、俺は仕事で……」

「楽しくない!?!」

「な、なんて事いいやがるっ! あったまきた表でろっ!」

あーもうむちゃくちゃだよ俺知らねえつと。

こうして喧嘩屋斬左改め、左之助は俺の用心棒となったのだった。

その男、雑魚につき

——おめえは性格が悪い。

左之助が望んだ喧嘩とは形を変えて。

俺にとっては稽古であり研究。

——私とまた喧嘩したいのなら私を強くしてください。

性格云々はこの言葉に対しての返答。

意外と面倒見が良い左之助だったのはこの時からか、それとも二言はないという男気からか。

どちらにしても男の俺としては、心地の良い挑発というものがわかるわけで。

「甘いねえ」

「くうっ！」

恒例となつた左之助相手の稽古。

赤べこから道場までの道途中にある川辺で左之助に竹刀を振るう。

ビシビシと力の限り振っているのにも関わらず左之助はやる気なさそうに避ける。

やる気ないのはあれだ、当たっても避けても同じだからだし左之助にとっては喧嘩と

いう名前のお遊びだからってのが一つ。

「てえいつー！」

「おっと」

要するに言ってしまったえば、当たっても痛くないのである。

いや、そりやもちろん左之助にとつての話で、一般人やら左之助が言うところのゴロツキ相手にや十分なのかも知れないけど。

圧倒的に力が足りない。

「ふぬ、ふぬぬぬぬ!!」

「あーもう、ムキになんなよ弥生。わかってんだろ？」

「……むー」

しつちやかめつちやかに振り回していた竹刀を深呼吸して下ろす。

そう、分かってる。

「いてえってわかった上でなら耐えられる程度なんだって。おめえの力は」

「はつきり言いますね……」

それがある意味心地よくもあるのだけど。いや、Mつ気の話はしていない。剣術を修める他ないのだ平たく言えば。

どうやったって今の俺は女、非力な女でしかない。

力任せに腕を、竹刀を振ったところで大したダメージを負わせることは出来ないんだ。

逆に言えば。

「だからこそあん時感じたのは間違いじゃねえんだろうがよ。ちゃんと剣術してくれや」

「……はい」

左之助と戦った時。

膝挫を狙ったのはまさしく正しい。

剣術として、女性の身軽さを利用して、相手の力を勢いを利用しての攻撃。

左之助の嗅覚というか、危機察知能力は正しかった。

だから慌てて俺を蹴り飛ばしたんだ。

そう、ゴロツキ程度ならきつともうなんとかなるだろう。

だけど、左之助……もつと言うなら剣心やこれから現れるだろう四乃森蒼紫、斎藤一になんか通用するはずもないんだ。

その確認が、一つ。

「じゃあ、仕切り直しで」

「おうっ、待ってましたー！」

もう一つが弥生としての稽古。

竹刀をちやんと構えてみればニコニコと急に楽しそうな左之助にいらつとするけど。

巫丞弥生が劍客として強さを目指すための稽古。こっちのほうは左之助に取っっちゃ楽しい喧嘩遊びなんだろう、はつきりしてるなあ。

強くなりたいたいから手伝つて欲しいと言つた時の左之介はまさに何いつてんだコイツつて顔をした。

教えるなんて似合わない、ガラじゃないと自覚してるのもあるだろうけど、まあ何で俺に言つてんだつて感じだろう。

利用するみたいな考えで申し訳ないが、それでも左之助は大きい差はあるけど一般人以上幕末で戦つた人たち以下の存在だ。

いや、もう少し言えば明治という時代で強い人以上、幕末の強い人以下というべきか。ろろ劍格付けチェックなんていい気持ちはしないけどな。やるなら人気投票やつてどうぞ。

ともあれまあ俺にとつちや有効的。

地雷の存在はあるけど、一番近い教科書で目指すべき壁なのだから。

「おらあつ!!」

「つ!!」

簡単に拳の間合いに詰めてこられてそれを振るわれる。

それも仕方ない、俺から能動的に仕掛けたところでダメージを与えられないのだから相手のアクションを待つ他ない。

後の先。

言つてしまえばカウンター。

それこそが俺の生きる道であり、唯一の活路。

それを自覚して、伸ばすための左之介先生なのである。

まあお代はメシと左之助を楽しませることつて話で納得してもらつた。

「お……つとお……！　そうそう、これだよなあ！　相変わらさうなるよこええこええ！」

「お褒めの言葉、どうもっ!!　えいっ!!」

この前自覚したとおり弥生は脅威を避ける。

それは半分自動的と言つてもいい、身体がまじで勝手に動く。

だからこそ俺は後の先をどうやって得るかを考えず、得た先のみを考えることが出来る。

……よくよく考えるとチートだよチート、まじで。

神谷活心流。

奥義が柄の間合いを会得することが重要なように、膝挫なんて技があるように。

通常剣の間合いよりさらに一步踏み込んだ位置は神谷活心流がより活きる間合いでもあった。

そしてその間合いは拳のそれに近い。

解釈違いも甚だしいだろうが、俺の印象と記憶……そして弥生の身体。

それがそうだと訴えている以上、その感覚に身を任せるしかない。

「しっ!!」

「うおっ!」

振るわれた右拳の外側に躍り出て、脇腹へと柄を突き立てようとしてみれば慌てて飛び退く左之助。

「いや、ほんつとえぐいよな? 見た目の割に」

「み、見た目は関係ないですっ!」

そう言われても仕方ない。可愛いから仕方ない、じゃなくて。

真面目な顔をしているつもりだけど、何故か笑顔が浮かんでるってわかる。

そのくせ人体急所を柄で突こうとしてるんだ、えぐい。

ランランと笑いながら死ぬって言われたら誰だって怖いだろう。そういうことだ。

警戒しすぎだと思わんでも無いけど、左之助自身、俺のカウンターに対してはめっちゃ

めちや気を配つてる。

それだけあん時狙った膝挫が相当印象に残ってるってことなんだろうけど……ここ
まで警戒されるとなあ。

ともあれ。

「次、行きますよっ!!」

「おうっ! かかつてこいやあ!」

左之助から学べることはとても多い。

愛想つかされないように頑張らねえとな。

左之助騒動が終われば黒笠騒動。

政府要人を狙った暗殺事件の始まり始まりなわけで。

確かうとうしんえ鶴堂刃衛、だったかな? 心の一方なんていう金縛り術、二階堂兵法を修めた凶
賊。

新選組に所属して、危険人物だからと肅清されかけて逃げて、人斬りの道を選んだそ
の
人。

なんて情報はここで言うべきじゃないだろう。

道場の庭で警察の人と剣心たちが話しているのを尻目に廊下の掃除へと勤しむ。

実際、この話で俺が出来ることは何も無いと思う。

これから起こることに對してアプローチ出来ることが無いというべきか。

辛いとは思うけど、薫さんはこの件で剣心に潜む人斬り抜刀齋を目の当たりにするんだし、上手くこうしてああしてと動かしてしまえばそれが崩れてしまう危険がある。

原作ブレイクはしたくないすよまじで。

嘘をつかないって誓いももちろんだけど、やっぱり型にハマってほしいのだ俺としては。

たとえば何がきっかけで剣心が人斬り抜刀齋になったまま戻れなくなってしまうかわからないし、何なら薫さんが剣心を嫌いになる可能性だってある。

出来ることならば、介入で変わるものがあるとしても手のひらの上であってほしい。

もちろん左之助との喧嘩^{けんか}然り、そういう自分のためになることは狙っていく所存だけでも。

見えてる、知ってる地雷を踏み抜く、後に響きそうなポイントを変えようとする。

そういうことは意識的にはやらないように気をつけたいと思う。

やらなくちゃならない状況だけだ、やるのは。できれば一生来てほしくないけど。

なんてことを考えていたら剣心と左之助は早速準備をして、豚……もとい、護衛対象がいる谷邸へと足を向けていった。

「弥生ちゃん」

「あ、はい。どうしましたか薫さん」

頭三角巾をとって薫さんへとお返事。

いや、これしてないと髪が汚れるからな。

……いやまで違う、俺が気にしてるわけじゃない。薫さんが気にするからしてるだけだ。

「明日早く起きてお風呂焚いて待つておこうと思うの。だから、稽古の時間早めてもいいかな？」

「えつと……」

おうおうもう剣心のことが気になって仕方ないってか？ 恋する乙女ってか？

……いやまで違う、俺はそこまでおっさんでは無かったはずだ、うごご。

ともあれもう特に掃除だなんだの予定は無い。

大丈夫ですよ、お願いしますと返事してみれば用意してくるねとその場を後にした薫さん。

「なあ、弥生。剣心に限つて大丈夫だとは思うけどさ……」

「うん？ ああ……弥彦ちゃんも心配なんですか？ 大丈夫ですよ、きつと。そんなこ

とより今日はせめて私に一太刀頑張ってくださいね？」

「んなっ!! こ、コノヤロー! 今に見てやがれっ!!」

おーおーかわゆいかわゆい。

プンプンと怒り肩で去っていく弥彦だけどもあやっぱり年齢相応だわな。

弟がいたらあんな感じだろうか? なんて。

「だけど……」

緋村抜刀齋、か。

その単語を思い浮かべると一際心が跳ねる。

俺はもちろんその存在を知っている、そしてどうなっていくかも知っている。

それでも、弥生はどうなんだ。

この身体の持ち主は、何で緋村抜刀齋を知っているのか。

いや、言うまでもないがその単語に反応するってことは抜刀齋を知っている、もしか

したら何か関係を持っている可能性すらある。

こいつは、一五歳だ。

今は明治十年、幕末の時にと考えても五歳かそれより下の頃。

関わりがあるなんてとても思えない。

そうだというのに。

――。

「ああもう……分かったからそう訴えんな……いてえつて」

粟立つ心に合わせて頭痛がやってくる。

わかったと言つてもわかることなんて全然なくて。

唯一わかること、分かっていたことは。

「コイツは緋村剣心……いや、緋村抜刀斎を求めている、んだろうな」

少し慣れた頭痛と自分の膨らみを感じながら、頭痛が治まるのを待つことにする。

やわらかい。

明けない夜はない。

なんてよく聞く言葉。

眠れない夜を過ごしたのは薫さんで、怪我した左之助のために風呂を焚き直したのは俺。

そう言えばこの光景を鵜堂刃衛も見ていたはずだ、だからこそ薫さんをこのあと拉致るのだし。

「何処だったかな？」

確かそこらの雑木林——。

「っ!!」

ああ、居る。

あそこに居る。

分かってしまえば足が震えた。意識してしまえば放たれる濃密な殺気に酔ってしま
いそうだと。

いや、本人は殺気なんて放っていないのかも知れない。それでも心底身体が縫い付け
られた。

なんてこつた甘すぎた。

そうだよそうだと、刃衛だつて幕末を生きた者だ。

剣心が勝てる相手だからといって、俺にとつて……今の俺にとつて脅威どころか、災
害みたいな存在だと言うことに違いはねえんだ。

心の一方をかけられたわけじゃないっていうのに、身体が重くて仕方ない。

「——つつあ」

不意に、それが解けた。

同時に床へと両手をついた。

「はあ、はあ……」

冷や汗が止まらない、床に広がる水玉の数がどんどん増えていく。

甘かった。

本当に、心の底から甘かった。

左之助に強いと言われて、慢心していた。満足してしまっていた。確かにゆつくり一歩ずつ得られる何かはあった。

足りない。

明らかに足りない。

この絶望的と言えるような差を実感してしまつてそう思う。対峙したわけでも、殺気を、剣気を向けられたわけじゃない。

多分、ただ視線を向けられただけ。

脅威を避けることが出来るはずなのに、そんな挙動を一切する事なく止められた。

「ちく、しょう……い！」

それが悔しかった、ものすごく悔しかった。

どうしてこんなに悔しいのかはわからない。それでも、それでも。

「情け、ねえ……っ！」

慢心していたことも、それで満足していたことも。

言われた気がした。

死戦の経験すら無いヤツが何言つてんだと。

俺にただ目を向けたただけであろう刃衛も。

何より……弥生も。

路端の石、豆粒に等しい俺を笑った気がした。
だから。

「鵜堂刃衛っ!! 俺と、俺と勝負しろっ!!」

木々に向かつて叫ぶ。

「俺を、殺してみろっ! やってみろっ!!」

だけど帰ってくるのは木々のざわめきだけで。

「ちくしょう……ちくしょう!!」

居たとしても、居なかったとしても。

相手にされることはない、それだけが分かって。

悔しい思いの中で、苛立つことしか出来なかった。

その男、前向きにつき

前向きに考えよう。

天狗鼻を叩き折られるのは世の常ではあるけど、伸びる前の鼻を潰されるのは貴重なことだ。

弥生というチート。

多分、あのままだったら確実に増長していただろうと思う。

仮に、だ。

世界を余裕で潰せるくらいの俺つええチートばりに。

たとえばるるうに剣心の世界でファイアーだとかサンダーだとか、そんな魔法が使え
る異能であるなら。

誰もそいつの鼻を叩き折れないだろう。それは悲しいことだ。

良き友人は作れるのかも知れない、可愛いヒロインに惚れられるのかも知れない。

それでも切磋琢磨し合う誰かを作るのは難しい。

誰かが言った、最強という名前の孤独。

想像するしか無いけど、俺は最強なんてものよりは誰かと一緒に頑張るほうがいい。

だから自惚れない。

「っ!!」

こうやって剣を振るって流れる汗でいい。

流した分だけ強くなれたらいい。

感謝するよ、刃衛。

お前は何もしなかった、それでも得るものがあつた。

俺は弱いと思ひ知ることが出来た。

「荒行かい？」

「っ!! ……左之助、さん」

声の方を振り向いてみれば三角巾で腕を固定したままの左之介。

なんとなく呆れたような雰囲気を感じながら笑つてる。

「そんな、ところです」

「へえ」

左之助越しに見える外は赤色。

一人で素振りしただしたのは確か昼だっただけ？

……どうりで胸の谷間に汗が……。

「弥生……お前、そういうところだぞ？」

「はい? ……ああ、すいません。すぐにご飯作ります」
そういうところって何処だよ。

まあいいや、腹減つて探しに来たんだろう? んじやちやつちやとメシを……あれ?

「——つとお」

「す、すいません」

歩こうとすれば膝から崩れ落ちそうに……やつべ、むつちや身体重い。

というか左之助ナイス、転けなくて済んだぜありがとさん。

「だから……そういうところだぞ?」

「はい?」

ごめんわかんない。

それよりすまんですぞ、片手怪我してるつてのに申し訳ない。

弥生は軽いだろうから大丈夫だと思っうけど……つて。

「近いですつ!」

「今更かよつ!」

ごめんごめん、こういうところね、おけまる把握した。

うん忘れてたよまじで、俺女だったよそうだよ。

谷間見た時に思い出しましょうね自分。

ふと左之助を見れば困ったように頭をガリガリと。

いやまあ困りますよねわかります。

俺ならきつとその仕草だけじゃ済まないですはい。

「はあ……つたく、メシはいいから少し休みな。お前の汗入り夕餉なんざ食べたかねえよ」

「え？ あ、はい……すいません」

美少女の汗とかご褒美なんじゃ？

なるほど明治、慎み深い。そして現代人はじまつたな。

ともあれ床に腰を落ち着けてみれば何故か左之助も目の前にどっかりと。

「んで、だ。何があつた」

「……え」

……びびつた。

何が驚いたって、確信を持って言ってきたことに、だ。

「呆けてんじやねえって、俺は弥生のぼでいがーどだ。雇い主サンのことは聞いたかねえとな」

「……」

やだなにこの人かっこいい。

……いかん、俺は男、俺は男……。

「……強く、なりたいんです」

「十分強えじゃねえか。いつも喧嘩ん時言ってるだろう？」

「女にしては……いえ、女としてなら、ですよね」

わかつてる。

いや、わかつたんだ。

「私は……剣客として、強くなりたいです。遊びで、喧嘩でじゃないです。一人の剣客として、強くなりたいんです」

左之助は俺をそう見ていた。

なるほど、たしかに今の時点でも薫さんほどなんて言えないくらいには差があるだろうけど強いんだろう。

明治という時代に生きる女の中では強い。

それはきつとすごいこと。

だから左之助は俺に強いと言った。

同じ戦いに身を置いた人間としてではなく、そこらの女の人を見れば強いと言ってくれたんだ。

「先に言っておくけどよ……俺は弥生との喧嘩で確かに満足した。いい喧嘩だったと

思ってる」

「……前置きはいいいんです。あなたらしくもない、はつきり言って下さい」

じつと左之助を見る。

一瞬たじろいだように見えたけど、それもすぐに仕切り直して。

「無理だろうよ」

「……」

すっぱり言い切ってくれた。

「嬢ちゃん……神谷薫ってヤツが強いのは多分ちつせえ頃からずっと竹刀を握ってたからだ。それでも言っちゃわりいが俺とやり合えば俺が勝つだろうよ」

「私じゃ……遅すぎる、と?」

「折れねえ強さはある、肝っ玉も据わってらあ。だがよ……お前が言うところの強くなるには、十年おせえ」

……反論できない。

左之助だつてそうだ。

ずつとずつと喧嘩に明け暮れた、その時間を重ねた。だから強くなった。

剣心だつてそうだ。

師匠の下修行を続けて、身につけた力を幕末の京都で振るい……強さを増した。

時間。

それは今超人かと思えるような人間であっても必ず強さのために費やしたものが、俺には無い。

「……」

悔しい。

あの時感じた刃衛のプレッシャーを撥ね退けるには、その力を持つには。

あまりにも遅すぎる。

「だがよ、それでも……それでも強くなりてえんなら」

「……？」

「覚悟が必要だ」

覚悟。

それは、何のだろうか。

「さつきも言ったがおめえには折れねえ強さがある。それを持って、持ち続けてよ……死ぬほどつれえ戦いを経験できれば」

——もしかしたら俺のぼでいがーどはいらねえようになるかもな。

そんな左之助とのやり取りがあつた後。

でろでろに剣心の血でダメになった薫さんのリボンを洗い終わって、以前より距離が近くなった剣心と薫さんにほっこりして。

やっぱり無事に二人は帰ってきたのだ。

つまり鵜堂刃衛は散ったのだ。剣心の手で……ではなく、時代によって。

明治の世になっても人斬りは必要とされる。

そして人斬りとしての価値を失えばやっぱり行き着く先はそこになるだろう。

人を斬りたいがためにその畜生道とも言える道に身を置き続けた狂人であり強人、刃衛。

それほどまでの道を歩んで尚、散る。

それほどまでの道を歩んで得た力を、散らす。

諸行無常なんて言えばカッコつけ過ぎだろうか。

歩んだことも、歩むつもりも無いけどそんな道を歩んで行き着いた先になんとも言えない感情を覚える。

——もし俺も、そんな強道を歩めて力を得たのなら。

その先は何処に向かっているのだろう。

俺の、弥生の歩む道は何処に繋がっているんだろう。

るろうに剣心の世界で。

わけもわからないままやってきたこの世界で生きた先に。
俺たちは何を求めているんだらう。

「……なんて、らしくないですね」

「弥生ちゃん？ どうしたの？」

「おう弥生っ！ さっさと一本いくぜっ！」

今日こそはと息を巻く弥彦に苦笑いしつつ竹刀を構える。

「はじめっ！」

「うおおおおっ!!」

「——っ」

向かってくる弥彦。

巻き上げる気炎とは裏腹に工夫を凝らしているのがわかる。

がら空きの胴。

誘っているとわかる位には俺だって成長してる。

だから問題は。

「ちいっ!!」

「……まだまだっ！」

俺が分かっていると分かっている上で誘っているかどうかだ。

相変わらず弥生の異能は発動しない。

弥彦との打ち合いはまるつきりそれを感じない。

要するにこれは俺の素の実力一本なのだ。

「でえええええ!!」

再度同じ行動。

それしか出来ないのか、それともよつほどその行動の先に置いてある布石へ自信があるのか。

……面白い。

「そこおっ!!」

「かかったなっ!! くらえっ!!」

そう、これは素の実力試し。

そのはずなのに。

「——っ!!」

自動的。

自動的に、身体が打った胴の勢いそのままに流れた竹刀、その先へと。

「な、にい……!!?」

「っ!! これで終わりですっ!!」

会心の出来だったのだろう弥彦の胴返し面。

その面を俺は躲して、膝を突きながら再び胴を返した。

「一本っ！ そこまでっ!!」

「ちつくしよおおお!! ありがとうごさいましたっ!」

「……ありがとうごさいました」

礼に終わる。

……正直、泣きそう。

泣いてもいいよね、女の子だもん。

いや、いかん。

プライドまで投げ捨ててどうするよ。俺は強い子男の子。

今、間違いなく弥生の力が発動した。

それはつまり、弥彦の攻撃を脅威と感じたということ。

俺と弥彦の差が縮まりつつあるということ。

いや、もしかしたら既に抜かされているのかも知れない。

あかん辛いだれかぼすけて。

「遅くなつてすまないでござるよ」

「あ、おかえりな——」

「随分しなびた家ね。剣術道場？」

高荷恵、きたあああああ!!

来ましたついに来ましたよどうか俺を治療して下さい出来るなら男に戻してください。

実のところ俺は恵さんが好きなのです。

いやさ、すんげえいじらしいじゃん？ いい女じゃん？

性格黒いのかも知んねえけどさ、俺、イケルよ、大好物だよ？

やっぱり時代は明治だけどいつでも変わらぬ美人っているもんなんすよ！

待てよ？

俺今女じゃん？

ってことはさ！

一緒にお風呂イベントとか頑張ったらできんじゃないの!?

うっそまじで？

燃えてきたっ!!

シリアス？ 知らんがなっ！

俺は今、最高にキてるっ!!

「見損なっちゃわっ!!」

「ほげっ!!」

あ、薫さんナツクル。追撃の面打ち乱打。あれは痛い。

「まさかそんな人買いみたいいな事するなんて！ 左之助ならわかるけど剣心まで!!」

「なんでえそりやあ」

日頃の行いつすよ左之助さん。

いや、根は良いやつ……うんにやこれは褒め言葉じゃねえや。

俺は好きつすよ左之助の兄貴。

「ええつと、高荷さんでしたよね？ こいつにはよく言っておきますからどうぞお帰りになって……」

「あら、私は帰る気ないわよ?」

——私ねえ、この人のコト気に入っちゃったの。片時も離れたくないくらいよ。

キマシタワァ!! じゃねえけど来ましたわ!!

こんなコト言ってる裏ではこいつ使える的なのを今は考えてるんだらうけど良いんです!!

おい剣心俺と代われっ!! 弄ばれたいっ!

「あんまりからかうんじゃねえよ。この嬢ちゃん、すげー単純なんだからよ」

ぶちいっ!!

あ、うん。

そんな音が聞こえたね、冷静になったよわあい。

「出てけ—— みんな出てけ——!!」

皆に俺は換算されてないの？ なぜなのほわい。

俺以外を放り出した薫さんの背中へと苦笑いを送ってみる。

「何っ!?! 弥生ちゃんっ!」

「あ、あはは——……私、汗流してご飯の準備してきますね——」

偉い人と言いました。

三十六計逃げるに如かず。

さくつとその場から逃げようとするんだけど……ぬぐ。

「ねえ、弥生ちゃん」

「は、ははは、はい?」

首根っこをむんずつと掴まれて逃げられない。

ああ、やつぱり薫さんはラスボスなんやなって。

そんなアホなことを考えてみれば。

「わ、私って……単純、かな?」

「……あ——」

何この可愛い生物。

少し俯きながら上目遣いしてこないでよ、それは剣心にやってよ、禁じ手だよ、末代は祟れないよ。

はーやつぱはこの人がヒロインなんやなって。

いや、俺は恵さん推しですけど。

「そこが可愛いと思いますよ、多分剣心さんもそう思ってるんじゃないですかね」
「か、かわっ!? 可愛いって! 剣心もっ!?!」

何この可愛い生物ばーとっ。

急にいやんいやん、ぐりんぐりんと怒ってた薫さんは何処行つた?

……やつぱ単純なんだなって。

はあ。

まあいいや、ともあれ、だ。

「武田観柳……いや、四乃森蒼紫現る、か」

漂い始めた戦いの気配に、心がうずいた気がした。

その男、口先上手につき

隠密御庭番衆。

強さの証明……いや、最強という華を今も尚追い求める幕末の残り火。

それが四乃森蒼紫であり、江戸御庭番衆。

帰ってくるなり部屋に引っ込んだ剣心と恵さん。

今頃剣心が武田観柳の私兵団規模を聞いたりと情報収集に励んでいるところだろう。

それを怪しんで薫さんが出歯亀しようとしているのはさつき聞こえた声でわかっている、

薫さん可愛い。

味噌汁を温めていた釜戸の火を落として、これから起こるだろう戦いについて考え

る。

まずは今から御庭番衆の癒見^{べしみ}、ひよつとこ、般若がここに来るだろう。

最初から姿をあらわすのはひよつとこだけで、まあ剣心、左之助によつて問題なく撃

退されるはずだ。

その中で、俺は何が出来る？

弥彦の代わりに恵さんを毒殺螺旋鏢から守る？

いや、弥生の異能は自分に対してのみ有効だ、そういうた誰かを庇うために発動するかどうかはわからない。

わからないものをいきなり実戦投入するなんてことは出来ないし、ミスって恵さんに螺旋鏢が刺さるなんてことになったら目も当てられない。

「だと、するなら……」

直接癒見と対峙する。

そうして戦闘不能に陥れることができれば恵さん、ひいては毒殺螺旋鏢の毒にやられそうになる弥彦を守ることは出来る、けど。

それをしてしまったら高荷恵の正体というべきか、高等な医術を修めている人間だということが発覚しなくなるわけで。

かと言って可愛い弟子に辛い思いをさせたくもない複雑な乙女心。

なんてこった、これが恋か。

んなわけねえ。

っていうか何で俺は戦うこと前提で考えてるんだまじで。

色々思考回路がおかしくなってきたらこの頃いかがお過ごしですか。

別に漫画通りに物語が進むのならばそれを害さない程度に見守ればいい話だというのに。

「……っ」

どうもそれは弥生が許してくれないらしい。

弥生の訴えは頭痛となつて、確かな熱となつて俺を動かそうとする。

それに。

「わかつてるよ……」

俺も、そうだ。

そうやって借り物の熱に浮かされていく。

強くなりたいという思いは日毎に増していく。

命をかけた戦いは、もうすぐそこまで迫っているんだ。

それに対して臨もうとする心があることを否定できない。

本来のこの身体の持ち主は、一体何を望んでいるのか。

強くなった先に何を求めているのか。

心なんていう不確かな存在となつてなお、俺をどうしたいのか。

「——来た」

門が大きな音を立てて壊される音。

いつぞやも言ったがそれ誰が掃除したり何なりすると思つてんだこのやろう。

まあ良くないけどいいや……行こう、死戦が、そこにある。

そんな俺の決断は。

「雑魚が高みの見物なんてカッコつきませんよ」

「——てめえ」

癒見と戦うことだった。

木に登って見物決め込んでる癒見に大きめの石を投げて挑発してみれば引つかつてくれた。

後ろではちょうど剣心が逆刃刀グルグルしてひよつとこの火吹き対処し終わったところ。

「弥生殿っ!?!」

「弥生ちゃん!?!」

そんな中こんなことしてる俺へと驚く薫さんと剣心だけど……申し訳ねえ。

心配かけるなって言われたけど、約束したけど。

「心配しないで下さい。心配するほど危険な相手ではありませんから」

挑発ばーとつーを敢行する。

弥彦も驚いていたけど、そんな中で左之助だけが俺にじつと視線を向けていた。

——でえじようぶか？

——もちろんです。

目線でもやり取りをした後、癒見へと視線を向けてみれば顔を赤くして地面に降りてきたところらしい。

「ぶっ殺すっ!!」

「そういうのは殺した後はどうぞ?」

慌てて薫さんがこつちに来ようとしたのか、そんな気配がちらり。

流石にもう相手から目を離せないから何も言えないけど、左之助の声が聞こえた後気配が消えた。

ありがとさん。

さて、癒見。

漫画では螺旋鏢を放つているところしか見なかったわけだが。

多分、俺と癒見の相性は悪くない。

「くらえっ! 螺旋鏢!!」

というのも。

「っ!」

「やれやれ、それしか出来ないんですか?」

基本的には螺旋鏢による中距離から遠距離攻撃、それに対する弥生の異能。

螺旋鏢が弥生にとつての脅威である限り、極論目を瞑つていても避けられるだろう、今そうしたように。

「てめ——っ！ まぐれでいい気になるなよっ!!」

「まぐれ？ ふふっ、可愛いですね？ほんとにそう思うのですか？」

立て続けに放たれる螺旋鏢をすいすいと躲す。

そう、螺旋鏢は確かに俺の命を脅かす脅威ではあるが、戦闘において脅威ではない。だから問題は。

「ちいっ!!」

「——っ」

どうやって距離を詰めるか。それに尽きる。

今避けながらも間合いを詰めようと進んだ分離れられた。

良くも悪くも、だけど、癒見は俺のことをそれなりにやるやつだと認識したのだろう。

故に自分の得意技……いや、信のおける技に固執した。

それなりにやる相手、その実力がわからない。

なら近づいて相手の間合いに入るのは得策ではないと判断したんだ。

「傷つきますね……こんなに可愛い女の子を避けるなんて」

「るせえ！ 不気味なんだよっ！ いいからさっさと死ねやっ!!」

あくまでも予想だけだ。

あの四乃森蒼紫の部下って言うんだから近距離で戦う術だつてあるはずだ。

御庭番衆である以上いわゆる基本的な忍者？　としての術は修めているはずなんだ。

だから、もしその術をもって戦われたらどうなるかはわからない。

故に今の状況でどうにか勝つしか無い。

相手が俺のことを警戒して螺旋鏢で戦おうとしているうちに。

「まったく……いい加減埒があきませぬね。男らしくこつちに来てもらえませんか？」

「抜かせっ！　これが俺の御庭番衆としての力だっ！　俺の螺旋鏢でてめえを仕留めて

やるっ！」

とはいえ癒見。

頭に血が上りやすいというか、挑発へと簡単に乗っかってくれる一面があるわけで。

そして原作知識持ちの俺は一番激昂させられるであろう言葉を知っているわけで。

——出来れば、言いたくない気持ちがある。

正直、俺は御庭番衆が好きだ。

癒見もひよつとも式尉も般若も。

この後向かうだろう武田観柳邸で繰り広げられる光景を慮れば貶す言葉なんて使

たくはない。

だけど。

「そんなだから……一芸だけのキワモノ野郎なんてバカにされるんですよ？ 役立たず、さん？」

「——殺すっ!!」

向けられた殺気に背中 of 産毛が逆立った。

怒りの表情を貼り付けて呐喊してくる癡見に心で謝る。

それでも勝つ。

強くなるって決めたから。

「ああああああああっ!!」

「死ねええええええええ!!」

バカにされて尚、癡見が選んだ攻撃は螺旋鏢。

それこそ自分が御庭番衆である証と言わんばかりに、飛びかかってきながらもその構え。

勝負に勝って試合に負ける。

そんな言葉を思い浮かべながら。

「そっっ!!」

「ふぐっ!?!」

カウンターで胴へと竹刀を叩き込んだ。

「弥生ちゃん……」

「あはは……心配、かけちゃいましたか？」

振り向いてみれば安心したかのような薫さん。

見ればひよつとこと左之助の戦いも丁度終わったところのようで。

「楽勝っ！」

「の割には満身創痍でござるな」

なんてやり取りをしてる剣心と左之助。

「あの二人みたいに心配されないようにするには……どれくらい強くなればいいんでしょうね」

「……そっか、弥生ちゃん強くなりたいたんだ」

そう言つて見れば薫さんの目が少しだけ変わった。

強いて言うなら、妹分を見る目から……一人の剣客を見るかのような。

「強いなんてもんじゃないわよ……あなたも、あの二人も一体何者？」

おつと恵さん強いの中に俺も入れてくれるんすかぐへへありがてえ。

「ふふ、弥生ちゃんもあの二人も……頼りになる自慢の、仲間よ」

ああーうれしみて成仏しそうなんじゃあー……。

いやまだだ、お風呂イベントを迎えるまでは死ねない。

とは言え。

「……」

地面に伏せている癒見。

心の底から申し訳ないと思う。

もつと俺が強ければ、あんな挑発なんて必要なかった。

純粹に、力の差で打ちのめすことが出来なかったことが悔やみとしてある。

この、小さな弥生の掌。

こいつがこんな異能を持つ理由はわからない。

けど、それに甘えてばかりもいられないわけで。

覚悟。

あの時左之助が言ってくれた言葉。

その覚悟の一つに、きつと今の気持ちを呑み込むつてのがあるんだろう。

「強く、ならなきや……」

そう思う。

左之助にきつぱり無理だつて言われたけど、それでも。

戦おう。

強くなりたいって気持ちには、もう弥生だけのものじゃないのだから。

「あぶねえっ!!」

「っ!？」

弥彦の声に驚いた。

その声の先を見てみれば。

「いくら小さな鏢だつて心臓にでも当たつたらただじゃすまないのよっ! 危険だから

あなたは下がってなさい!!」

「冗談じゃねえ、剣心たちも……それにこの馬鹿姉弟子もこの女守つてんだろ? 俺

だつて剣心組の一人だけ、攻め手は無理でも守り手ぐれーはきちつとやるぜ」

……迂闊。

迂闊すぎだ。

何やってんだ俺は、浸ってる場合じゃねえって!!

自分でも分かってたじゃねえか! 危惧してただろう俺!!

「で、でしゃばった報いだぜ……! 毒殺螺旋鏢、こ、これが御庭番衆、癒見の真の技

……」

半身を起こしていた癒見は再び倒れる。

ああもう！ こんな形で原作進行すんなしっ！！ 俺のアホ！ 一回死んどけっ！！
「解毒剤を持っていないはずでござる！！ それを——っ！」

「止そう」

あああああもう！ 般若さんこんな形で登場すんなしっ！

いいから解毒剤下さいませ！！ 謝るからっ！ 顔怖いつすから！！

あたふたしてたら剣心と般若の一合、やつちまえ剣心！

あ、やつぱだめつすよね、逃げられますよね、はい。

「解毒治療は時間との勝負よっ！ 急ぎなさいっ！」

……落ち着こう。

そうだ、迂闊と猛省するけどやっぱりこうなるさ。

恵さんが指示を飛ばして、それに従って。

あれよあれよと動く中。

「……完璧だと、思ったんだけどな」

最後の力を振り絞らせられる程度には浅かった。

そんな実感、力不足に思いを馳せた。

「左之助さん」

「おお？ 弥生、どうした？」

高荷恵の真実。

剣心と恵さんの会話をこっそり出歯亀して知った薫さんと左之助。

薫さんは納得したけど、やっぱり左之助は納得できていないようだ。

いまいち踏ん切りがつけられないと顔に書いてある。

「ありがとうございます」

「なんで急に」

あの時俺が戦うことを認めてくれた。

それがやっぱり嬉しいのですよ。

「それですね。そんな私が嬉しくなるくらい人の気持ちを汲めるあなたが、何浮かな

い顔してるんです？」

「……ちっ」

そう、聞いてしまった。

後で剣心も言ってるけど、振り上げた拳の下ろし先を見失ってしまったんだ。

優しい……というか、人の気持ちを汲める左之助だから。

恵さんの素性、過去を知って責められなくなった。

「ふふつ、私、やっぱり左之助さんのそういうところ好きですよ」

「はあっ!？」

「おおつと勘違いすんなよ? 兄貴的存在としてって意味でだぞ?」

俺はノーマル、至って女の子が好きな一般男子です。

「誰を責めればいいかわからないんですよね? 恵さんにイラつく想いはある、けど納得しなきゃならない、けど抑えられない」

「……」

「いいじゃないですか、それで。納得できないことを無理やり納得するなんてあなたらしくないですよ。そうしようと努力する左之助さんはかっこいいですけどね」

まあ結局観柳邸に乗り込んで大暴れしないと気持ちの整理出来ないだろうしな。

納得じゃなくて発散。

そうして左之助は生きてきたんだし、何より悪一文字はそういうものじゃない。

「いい子になるため悪一文字を背負ってるわけじゃないでしょう? だったら、いいじゃないですかそれで」

「……はあ、つたく……弥生、ほんとにためえはそういうところだぞ?」

「わぶっ! もう、頭撫でないで下さいっ!」

こんな風に言ったところで左之助のもやもやとした想いは晴れないだろう。

けど、自分はこう思っていると相手に伝えるってのは大事なことだ。

強くなりたいとこの人に伝えたからこそ、癒見との戦いが実現したように。どっちにしろそれを晴らすのはやっぱり剣心の役目だし。

「……ありがとよ」

「はい、お礼は稽古で結構です」

ともあれ、だ。

次の戦いは観柳邸。

……俺も、もう一つの覚悟を決めなきやな。

その男、初めての死戦につき

「おはようございますっ！ 恵さん！」

「おはよう、弥生さん」

「やですよもうー、弥生って呼び捨てにして下さい」

あーにつこり笑顔の恵さんは……最高やなっ!!

そうです、弥彦も回復して少し。

本日はお日柄もよく、恵さんとおはぎを一緒に作ろうイベント開催予定です。

そうして少しずつ好感度を稼いでお風呂イベントに繋げるんや……やったるで……。

「ええっと、それで？ 私に何か用？」

「はいっ！ 良ければ一緒におはぎ作りませんか？ 薫さん、材料いっぱい買っちゃっ

て一人じゃ大変なんですよ」

少しずつうちに慣れてきてくれた恵さん。

その要因の一つに俺がいるというのは疑いようもない事実だろう。

薫さんにはなんか恨めしそうに嫉妬されたり、弥彦にはなんだかわからねえけどいい

んじゃないねえ？ って顔されたり。

剣心には仲良きことは―なんてにつこりされて、左之助には複雑な顔を浮かべさせた。

まあそれくらい俺はグイグイ恵さんに絡んでいつてるわけだ。

今ほど自分が女であるということに感謝したことはない、きつとガワが男ならこうはいかないだろうさ。

「そうなのね。随分と久しぶりだけど……一緒なら大丈夫かしら」

「恵さんなら大丈夫ですつ！」

いえーい！ 前向きな返事いただきましたつ！

やったるでえ！ そして貪り食うぜえ！ 恵さんのお手製おはぎとか家宝にするく

らいの気持ちで！

永遠に胃の中で留まれ、留まって欲しい。

そんなこんなで一緒におはぎを握る。

横目で見える恵さんの顔は何処と無く楽しげで。

激動を乗り越えてきた……のはまあこの人だけじゃないけど。

やっぱりこうやって戦いとは無縁の世界で、穏やかにおはぎを握ったり、医者として患者を診たりしてる姿が一番似合うと思う。

守りたい、この笑顔。

日々ここでの生活に慣れて、少しずつ笑顔を多く見せてくれる恵さん。

それを嬉しいと思う嵩を増す度に武田観柳許すまじの気持ちも増してくる。

こんな人を自分の欲を満たすためだけに使っている人間は許せない。

なんちやつての正義感だらうけど、やつぱりむかつ腹を抑えることは難しいもんで。

「ん？　どうかした？　弥生」

「あ、いえ……その、なんでも無いです」

おっと見つめすぎた。

不思議そうな目で見返されてしまったぞ？

って、ひえっ？

「うふふ、私じゃ何も出来ないかも知れないけど……言つてご覧なさいな？　言うだけ

でも楽になることつてあるものよ？」

「あわ、あわわわわ……」

あご、あごを指でくいつて……くいつて！

ああ……おねーたま……ぼく、もうらくになつてもいいよね……。

「あー」

「ぶしゅるー……」

あかんこの人やつぱしゆき。

目の前が暗くなつたけど幸せいっぱい胸いっぱいです。

とは言え。

「しくつたっ！」

恵さんが書かされた置き手紙をくしやりと丸めた剣心。

やつぱりこうなる。なんて達観してる自分が嫌になる。

かと言つてこうなつた原因の場に俺が居合わせたところで今度は俺を材料にされるだけの話で。

小賢しく思考を回す自分へと余計に腹が立つて。

「左之っ！ 観柳邸の場所はわかるなっ！ 行くぞ！」

慌ただしく出発しようとする剣心に心の中で同意して。

「行けよ」

左之助の冷たい言葉を耳にする。

「あの阿片女のためになんで俺が動かなきゃなんねーんだよ」

「てめー！ いつからそんなダセエこと言う様に——」

「いい加減にしろ左之。お前らしくもない」

ああ、そうだな剣心。

俺もそう思うよ。

俺だってこんなかつこ悪い左之助は見たくない。

けども気持ちはわかるんだ。

だからさ。

「人が動くにいちいち理由が必要ならば、拙者の理由はそれで十分でござる」

発破かけてやってくれよ、いつもの左之助に戻れるように。

それが出来るのは剣心だけだからさ。

捨てられた子犬のような目、心許せる家族に等しい存在を求める恵さん。

それが剣心の動く理由だってんなら。

恵さんに幸せになって欲しい。

そんな想いでも十分だろう。

命をかける、理由には。

「私も行きます。恵さんのこと、好きですから……これでも十分ですよね？ 剣心さん」

「——そう、でござるな」

そう言ってみればやっぱり困ったような笑顔。

共に戦う者として認められたわけじゃないってのは分かっている。

だけど、いずれ。

「ここは命懸けでも助けに行く!! それが出来ねーで何が活人剣の神谷活心流だ!!」
「こいつあ、多分徹夜仕事になる。六人分の朝食と風呂の準備を忘れんなよ」

——四の五の考えんのはもうやめだっ! ここは俺らしくひと暴れしてやるぜ!
うんうん、それでこそ左之助っすよほんとに。

さあ、それじゃあ。

「行くぞっ!!」

応っ!

はえーでつかい。

そんな感想を覚えたのも束の間。

レッツ突入である。

「は、はええ……なんだ、あれは?」

「オラオラっ! よそ見してっ! 怪我するぞっ!!」

まあ正直俺と弥彦の出番なんかないわけだな。

ただのランニングになってるこの状況は少し恥ずかしい。

「左之助っ! 遅れを取るんじゃねえぞっ!!」

「……弥彦ちゃん」

流石です弥彦さん。その心意気、見習いたい。けどまあ安心しなつて。

「左之っ！ 弥彦っ！」

「おうっ！ ほらよっ！ お前の出番だ活躍してこいや!!」

あーいつてらつしやいませー。

左之助に放り投げられた弥彦は銃士隊に突つ込んで、お見事な活躍。

「……んだよ」

「いーえ、何でもありませんよ。私も投げます？」

「……そういうところだぞ」

もうどういふところなのかわかりませんよつと。

「さつさとかっこいいところ見せてくださいね？」

「ちっ……わあつたよっ!!」

汚名返上期待してます。

ま、多分俺はその光景を見れないかも知れないんだけどね。

むしろ生きてここから帰られるかなとすら思つてる。

私兵団を薙ぎ払つて、進んでいく度に心臓が早鐘を打つ。

突入する時も大概緊張してたけど、遠くの門が大きく見えるようになってくる度に、

その緊張で心臓が押しつぶされそうになつてゐる。

覚悟。

命をかける、覚悟。

「年貢の納め時だ、観柳」

「——っ」

口上が始まつた。

あれだけ小さかつた玄関はすぐそこ。

そしてその玄関を越えれば待ち受けるのは般若。

俺の、命を燃やす相手。

「私兵団五十人分の給与をお支払いしましょうっ！」

是非とも私の用心棒にっ!!」

「降りてくるのか来ないのか、どっちなんだ」

全く馬鹿げてゐる、相当頭おかしい。

なんでよりにもよつて般若なんだろうか。

左之助と剣心が出来る、強いと認めた相手だぞ？

何でそんなヤツ相手にしようとか

に決めているのか。

生き様だつてそうだ。

何故か共感できるその軌跡。

十中八九負けるどころか殺される。

分かつてる、分かつてるっていうのに。

「一時間以内にそこにへ行くっ!! 心して待ってる観柳!!」

死ぬほど辛い戦い。

その最初を般若に求めた。

そして馬鹿げてると分かっているのに。

「……行きましょう」

「おう」

どうにも止められない。

「江戸城御庭番衆密偵型——般若。お頭の命につきこの場を死守する」

「不要の戦いは避けたいでござ——弥生、殿？」

「不要なんかじゃありませんよ、必要です。彼にとつても……私にとつても。ねえ、般若さん?」

「……お頭の命は絶対だ。それは女子供とて変わらない」

構えようとした剣心の前に立つ。

「ここに來て心臓は嘘のように静まり返っていた。」

覚悟が出来た、ってことなんだろうか。それとも現実感がなさすぎて心が理解できていないんだろうか。

「無茶だ弥生殿っ!! 般若の相手は拙者が——!!」

「剣心、ここは弥生にまかせてやっちゃくれねえか? もちろん、最悪の場合は責任もつて俺がなんとかする、剣心の不殺を破らせることは絶対にしねえ……だからよ」

「左之っ!?!」

ありがてえなほんと。

けど最悪の場合……つまり死にかけるつてのがあつたら。

それはまああれだ。

剣客としての自分は死ぬってことだろう。

「剣心、あんな馬鹿姉弟子だからさ……」

「弥彦……」

おうおう、流石かわゆい弟弟子。ありがとよ。

「弥生殿」

「はい」

「無理だと判断したら……止めるでござるよ」

「ええ、ありがとうございます」

そう、それでいい。

いや、死なないことに安堵したわけじゃない。

ここで負けたら俺はもう強さを目指せない。

仮に死にそうになって、剣心たちによって九死に一生を得るようなことがあれば、俺はもうすっぱり剣の道を諦める。

違うな、活人剣を振るうものは如何なる敗北も許されない。

敗北してしまえば神谷活心流巫丞弥生の死、そのもの。

だから、ここはデッドライン。

越えられれば、劍客としての道が拓き、退けばもう二度と拓かれない分岐点。

「神谷活心流、巫丞弥生……参ります」

その戦いの幕は。

「キエエエエエエ!!」

「っ!!」

般若の鉄甲が打ち鳴らされた音で切られた。

「破ッ!!」

「っ!!」

顔を前言通り遠慮なく狙ってきた般若の拳を避ける。

当たり前だが般若の攻撃は脅威判定。

身体は自動的に回避してくれる、つまり俺は後の先に集中するべき。

なんだけど。

「疾ッ！」

「く……うっ!!」

俺のカウンターより早い攻撃の繋ぎ。

避けたと思えば竹刀を振るうより先に般若の身体が動く。

続けざまに襲ってきた肘打ちを大げさに飛び退いて間合いを離そうとしてみれば。

「逃さんっ!!」

「くそっ!!」

一足飛びで再び拳の間合いに引き戻される。

左之助と稽古を積んでいて良かったと思う反面、違いが大きすぎて面食らったのでも

う半分。

確かに拳の間合いは理解できている、だが身体のこなしが全く違う。

平たく言えば隙がない、割り込む呼吸を生むことが出来ない。

まさしく般若は卓越した拳法家だった。

途切れなく、間断なく。

放たれ続ける般若の攻撃へと、ただ避けるだけで精一杯。ただそんな攻撃が。

「……なるほど、癒見が負けたのも領ける」

「はは……あなたに褒めてもらえるなんて光栄ですよ」

不意に止んで言われる。

「お前にはどうやら私の術は効かないようだ……それに、その身のこなし。侮れる相手ではないらしい」

「……買いかぶり、ですよ」

般若の術——伸腕の術。

腕に横縞の入れ墨を入れることで目の錯覚を誘い、太く、短く感じさせるもの。

「なるほど、合点がいったでござる」

「剣心？ 何がわかつたんでえ？」

流石剣心、相對せずともそれを理解するなんてばねえです。

後ろの解説を耳に流しながら呼吸を整える。

そう、俺は般若の攻撃を認識していない。

認識しているのは弥生の異能。

その異能へと身を任せて避けているに過ぎない。

ただこの場では……いや、癒見と戦っていた時でもそれはうまく作用した。

勘違い、とも言えるかも知れないけど、この力は相手の気を引き締めるには十分なものらしい。

「それにあの仮面で目線を察知し難くなる……拙者でも、一工夫凝らさなければあの術を見極めることは出来なかつたでござろう……弥生殿、お主は一体……」

「どうやら勘違いは味方にまで……。」

いや、この戦いを預けてくれる理由になるなら何でも良いか。

どちらにせよ。

「だが——」

「っ!!」

再びの接近戦。

そう、般若も分かつてる。

「私に攻撃出来ないのであれば同じことだっ!!」

「まったく、その通りですっ!!」

俺はまだ一度も攻撃しようとしていない、っていうか攻撃できない。

攻撃しようとするればきつとその瞬間般若の拳が俺の身体を捉えるだろう、それくらい

はわかる。

ジリ貧。

これはそういう状況だ。

確かに体力の続く限り回避は出来る、左之助の時と同じように。

だけどそれは体力がなくなるまでこの状況が続いてしまえば負けるということで。

ならその隙を作るためにどうすればいい？

挑発？ 効果は薄いだろう。

あえて先制する？ 現実的じゃないし、防がれるかカウンターでワンパンされて終わりだろう。

分かってる、分かってた。

俺じゃあ到底般若に勝つなんて無理だ。

力が足りない、戦闘経験も足りない。

時間も足りない。

「破っ!!」

「っっっ!!」

「っっっ!!」

思っているより体力、集中力の消耗が激しい。

今頬を掠めた般若の拳然り、体力の限界より先に攻撃を躲す限界が来そうな気もす

る。

当たり前だ。これは死戦、死闘なんだから。

「そろそろ、限界のようだな」

「はあ……はあ……」

分かってただろう？ 決めただろう？

命を懸けるって。そうして強くなるって。

なからはそれを実行するだけじゃねえか、出し渋って何も出来ずに負けちゃいましたなんてバカにも程があるだろう？

「弥生殿」

「だめ……ですよ……まだ、終わってません、限界じゃないです」

下がれって言いたいんだろう？ それも分かっている。

今なら無傷で退ける。

この戦いからも、この先の戦いからも。

そしてなんでも無い平和な毎日がやってくる。

「それは、だめ……です。わたし、し、決めたんです……強くなるって、あなたと並び立てるほど、強くなる、って」

「……」

高望みにも程があるけど。到底簡単な道じゃないって分かってるけど。

弥生はそれを求めている。

そして俺も。

「じゃないと、意味、ないですから、私が、生きる、意味が……」

「生きる、意味……」

それはもう弥生と俺の願いだ。二つで一人分の意志だ。

俺が弥生の想いに引きずられてるからじゃないのかとか、そんなことはもうどうでもいい。

意味のない命なんて無い。

でもそれは自分で動いて得るものだ。

それは、近所の爺ちゃんがいとも酔っ払って言った言葉。

俺の、生きる意味。

かつての俺じゃないかも知れない。

弥生という借り物に収まった命なのかも知れない。

それでも。

「手を、伸ばす……そして、掴み取る。そうじゃなきゃ、意味、ないですっ!!」

「弥生、殿……」

そんな願いが生まれたことだけは確かだから。

真つ直ぐに般若をにらみつける。

何の攻撃を受けたわけでもない、それなのにすっかかり満身創痍。

これが、闘い。

自分の命を天秤に載せて、行われる死戦。

「覚悟は出来たようだな」

「ふふっ……！ わざわざ待つてくれるなんて……！ やっぱり般若さんは紳士ですね

……っ！ おまたせしました！ さあ！ これで終わりにしましょうっ！！」

ああ、感謝するよ般若。

そりや操ちゃんも慕うわ。俺も慕っちゃまいそうだ。

覚悟を決める。

「鉤爪っ!？」

「弥生殿っ!!」

俺の覚悟に呼応してくれたかのように、般若の手から鉤爪が現れる。

ありがてえ、ちゃんと、俺を殺してくれる気マンマンだ。

「……」

「……」

一瞬の余白。

だけど永遠にも等しいくらいに感じられる時間。

ああ、そうだった。

弥生は回避してくれる。

俺は攻撃することだけを考えればいい。

だったら。

「おおおおおおおおおつ!!」

「あああああああああつ!!」

同時に、しちまえばいいんだ。

出来る。

今の俺……俺と弥生ならきつと出来る。

「っ!?!」

「くらい……やがれえええええええつ!!」

飛天御剣流——龍巻閃もどき。

般若の鉤爪が半身を捻った俺の頬を浅く切り裂く。

髪を留めていたリボンが裂ける。

それでもそれは回避が成功した証明。

だからそのまま。

「——っ!!」

流れた相手の身体、立ち直せていない身体を地面にそのまま叩きつけるように。遠心力をたつぷりのせた一撃を。

般若の後頭部に叩き込んだ。

「や、やりやがった……!」

「す、げえ……」

「今のは……」

「はあっ!! はあっ!!」

地面に顔から突っ込んだ般若さんが立ち上がる気配は無い。

弥彦が化け物と称した素顔が割れた仮面から覗ける。

そしてその目から完全に気を失っていることがわかった。

確認できて、ようやく。

「はあっ……はあああああ——……」

「弥生っ!!」

クソデカため息と一緒に地面へ座り込めた。

床、つめてえなあ……あー俺、生きてるわ……ちくしようにやってやったぜ。

弥生も、ありがとうな……残念かもしれねえけど、俺、生きてるよ。

「立てつか？ ……つたく、俺より先にかっけえところ見せてんじやねえよ」

「あはは、たまには私のかっこいいところも見せておかないといけませんし」

手を差し出してくれたのは左之助。

握つて立ち上がろうとするけど。

「あ、あららっ？」

「つとお……いい加減それやめろや」

「わざとじゃないですって！」

もう生まれたての子鹿もびっくりな足元で、左之助の胸の中に収まってしまふ。

……あーいや、男の胸に収まるなんて生理的嫌悪感に疲労により無効です。

「弥生殿」

「……言いたいことはわかります。ですが、今は恵さんが先です……急ぎましょう」

どうしてと顔に書いている剣心には悪いけどどうまく説明できる気もしないし、今はそんな事追求してる場合でもない。

般若の四乃森蒼紫への心酔っぷりが語られなかったことや、恵さんの居場所を聞けなかったのは残念だけどとりあえず。

「……やった」

剣客としてのスタートラインに立てたことを喜んでおこう。

その男、劍客につき

「お、重くないですか?！」

「ああ? 全然軽い軽い、ちゃんとメシ食ってるか?」

左之助の背中におぶられて進むは観柳邸。

とりあえず女として言っておかないといけない台詞を言ってみればカカカと笑う左之助。

外とは違つて中は私兵と思わしき奴らは居ない。

なんでだろうね、御庭番衆が自分たち以外がいることを嫌つたとも取れるけど、鉄砲なんしの火器は狭い室内でも有効だと思ふけど。

まあ都合がいいのには変わりない。

外から見た景観から予測して、何ていう誤魔化しを交えつつ道をこつちじゃないかと誘導しつゝ。

触れられなかった般若の過去を、ここまでして四乃森蒼紫に仕えようとするなんてとか、なんちやつてなフォローをしつつ進んでいけば。

「つとおー」

でっかい鉄球が飛んでくる。

「ぱんぎゃ」

「あ……………」

そして鉄球を避けた左之助の背中から落ちる俺。

……………か、顔打った……………。

お、お嫁にいけ……………行く気はないっ!!

「……………まで来るってこたあ般若が倒されたってわけかい……………なかなかやるねえ」

あ、あざーっす！ 式尉さんあざーっす！

微妙な雰囲気の流れされず原作展開まじ感謝っす!!

「江戸城御庭番衆、本丸警護方式尉——アイサツ代わりだっ！ もう一丁！」

「オラアツ！」

ナイスキャッチ左之助。

良いですよ、俺を落つことしたのは不問にしますよ？ うん。

「さっさとあのヒネクレ女引っ張ってこい！」

「左之……………弥彦、行くぞっ!!」

「応っ!!」

は——いいってらっしやいませ……………あーどっこいしょ。

やっぱすげえな剣心、弥彦担いであの身のこなしか真似できる気がしないよ、なんだよ階段の手摺を飛び跳ねるって。

まじ超人……。

「弥生、わりいな」

「いーえ結構です。それに……」

——かっこいいところ、見せてくれるんですよね？

そんな挑発を試してみれば。

「ハッ！　しゃあねえ、おめーのほでいがあどが如何に強いか……見せてやんぜ！」

にっこり笑って言ってもらえた、流石です。

「三下とは言え喧嘩屋斬左なんて言われたあヤツが、いまや女の前で粹がる男になっちゃったとはねえ」

「あ？」

おつと式尉さん、なかなか挑発の腕前がよろしいですね。

とうかやめろ、色々俺に効く。こんなナリですけど男です……心は。

「斬馬刀も無くなっちゃってなあ。まあ一番いいところはお頭に譲って、俺様はお前で我慢してやるぜ」

「勘違いしてんなよツギハギダルマがっ!!」

はい、じゃあ俺はもうちょっと休むので後よろしくおねがいます。

「三下で我慢してやるのは！ 俺の方だぜ!!」

安心して腰を落ち着けて見てられるってのはもちろん原作知識って存在もあるけど。

「どいつもこいつも強えだけなんだよ。強者どうしが集まりやそりや強え……だが、それだけだ」

——緋村剣心は、違うぜ。

「強さに溺れて武田観柳の走狗に成り下がったてめえらなんざと！ 緋村剣心は器が違え!!」

「くお………のっ!!」

強さに溺れているのが今の江戸御庭番衆なら、暴力に溺れていたのは左之助。

そこからすくい上げたのは剣心だけど、先を歩み始めたのは間違いなく左之助だ。

その一步は重いもんだっただろう。

負けました、間違ってたと言われてすんなり納得できるヤツなんていない。

だから恵さんのことだって最初は渋った。背負う悪一文字が左之助を囓し立てた。

それでも、今。

左之助は戦っている。

「大口を叩くのはこの式尉様を倒してからにしま!!」

「そういうところが……強さに溺れてるってんだボケエツ!!」

式尉の両手から嫌な音が響いた。

勝負あり、だ。

「いくら頭が固くても……中身はそうじゃねえ、だったよな」

左之助の拳打を額に受けて、ずるりと床に沈む式尉。

「てめえも機会があつたら剣心と戦ってみな……なくしちまった大事なもんをもしかしたら取り戻せるかもしれないねえぜ」

不意にふらつく左之助の身体。

その身体を。

「……そういうところ、ですよ? 左之助さん」

「……けっ」

しつかりと受け止めた。

どことなく満足げな表情で気を失った左之助。

「剣心さんの器が違うって言えるあなたも……負けなくらいでつかい器なんですよ」
面と向かってなんて恥ずかしくて言えたもんじゃないから今のうちに。

ほんとに、この世界にはかっこいい奴らが多すぎる。

これじゃあ俺、女になっちまうよ……いやいや勘弁してくれ。とりあえず。

左之助を床に寝かせるのはちよつとあれかなと思つて膝枕。

むしろ俺が弥生に膝枕されたいのでちよつと嫉妬する気持ちが無いことは無い。

まあこつからは左之助含めて式尉、般若の覚醒待ちだしもつと言うなら劍心と蒼紫の戦いに決着がつくのを待つ他ない。

それが終われば……。

「……江戸、御庭番衆の終焉、か」

四乃森蒼紫というお頭が存命で終わる以上消滅というわけではない、形だけ、ではあるけど。

それでも蒼紫は修羅道を往くことになる。

どうか、それを回避する手段はないかとも考えるけど。

「……辛い、な」

それはきつとやつてはいけないこと。

江戸城御庭番衆の終焉は、京都御庭番衆との絡みへと繋がる。

そして修羅の道に堕ちた蒼紫と劍心は志々雄真実のアジトで対峙しなければならぬ。

もしかしたら、それをなさずに全員が救われるルートなんてのもあるのかも知れないけど。

残念な俺の頭はそれを思いついてくれない。

それが、悔しい。とても悔しい。

「……巫丞弥生と言ったか」

「っ!？」

声に視線を上げてみればそこには。

「……いやー、ほんと般若さんの顔はびっくりホラーですよ」

「ほらあ?」

般若さんが立っていた。

いやほんとこの人の顔は夢に出てくるわ、今日寝られるかな。

「……式尉も、負けたか」

「ええ、左之助さんの勝ちです」

「お前は……いや、肝が座っているのは先でわかっているが……それにしても」

「寝首をかいてまで得る勝利に価値なんてないでしょう?」

まああなたの台詞なんですけどね。

そういつて見れば表情がわかりにくいはずの般若さんは穏やかに笑った気がした。

「行かない、のですか？」

「お頭の邪魔をする気はない」

そういう般若さんは心の底から蒼紫の勝利を信じていて。

左之助は狂信と評したけど、俺にはどうもそんな風には思えなくて。

「それにお前へ負けた私だ、どの面を下げて会えと言うんだ」

「……お得意の変装でそこは一つどうでしょう？ そのためのお顔でしょう？」

一本取られたと小さく笑う般若さん。

こうして敵対が終われば、なんてことはない平和を感じてしまいそうで。

もし。

もしも、ここで武田観柳がガトリングガンを準備していると云えたのなら。

そんな考えが過って、口にするのを堪える作業に苦労する。

「もし、もしも……」

「言うな巫丞弥生。我らは御庭番衆、もしもの話に興味はない。それがたとえどのような空想であつてもだ」

溢れ出そうになった想いを止められる。

そうじゃない、そうじゃないんだと言いたいけれど。

それすらも止めるかのように、現実をいつでも、どこまでも現実として受け止める覚悟を示された。

「お前は強かった。私が負けたということがその証明になるかはわからないが……その強いお前が空想に逃げるんじゃない」

「……はい」

それどころか諭されてしまう。

この訳のわからないまま生きることになったるろうに剣心の世界。

これは紛れもない現実で、簡単に……簡単に人は死ぬ。

そう、言われてしまったようにも感じてしまう。

俺が思う、最後の覚悟。

「私は……剣客として、生きていけるでしょうか？」

「剣客として、か」

やっぱりこの人は面倒見が良いのだろう。

さつきまでまじもんの殺し合いをしていたのにも関わらず、至極真面目な顔をしているであろう様子で考えてくれる。

俺を、操と重ねているんだろうか。

もう、二度と会えないまま終わる、かつての教え子を。

「生きていけるかどうかはわからん。だが、生きていこうとする。その強い意思こそがその成否を決めるのではないか？」

「強い、意思」

生きてみせるという、覚悟。

弥生のせいでこうなった、なんて言い訳しない。

自分で自分のケツを持つ。

そんな至極真つ当な覚悟。

「お前を詳しくは知らない。ただあの道場の奉公人としか調べがつかなかったからな。だが、紛れもなく私を倒したことはその道を征く歩みだろう」

「……」

そうだ、今更だ。

勝利したということにビビってる場合じゃない。

ビビるなんて情けないんだ。

それじゃ負けたヤツに顔向け出来ない。

それに俺は神谷活心流。

負けを許されない。

勝って笑って守ったものを安心させる存在。

「ありがとうございます」

「ふん……嫌味にしか聞こえんな」

舌打ちした般若さんだけど、やっぱり何処か笑ってるような気がした。
そして。

「っ!!」

「……上で何か異変が起きたようだな」

ついにその時がやってきた。

「——般若さんっ!!」

「む?」

言葉にできない。

かける言葉も思い浮かばない。

これから死地へと赴く勇士に、俺は何も出来ない。
だから。

「……敵に頭を下げるバカが何処にいる」

「……」

呆れたような声を頭の上から聞いて。

それでも俺は涙を堪えて頭を下げ続けた。

俺は、忘れない。

幕末、その力を振るえずに終わり。最後の最後まで戦う事を選び続けた御庭番衆を。二つの結末。

その戦いから逃れられず命を散らしたものに華を添えるため修羅へ赴くものの姿を。これが、戦い。

守られたもの、得たものはある。

「弥生？」

「恵さん」

小国先生と共に道場を去ろうとする恵さん。

やけに心配そうな顔をされてしまう。

「……あなたも、本当にありがとうね」

「へっ？ あ、あう？」

ぎゅつと抱きしめられてしまえばいい香り。

き、き……。

キマシタワー!!

「これでも私は名医のつもりだから……いつでもいらっしやい？ おはぎでも用意して

待つてるからね」

「ひや、ひやいいい……ありがとうございませしゆ……」

薫さんとは違うにおひ……あー……たまんねえぜ……。

最後に間近でにつこり笑った恵さんは、いつもの調子で……いや。

ようやくらしい彼女で門をくぐっていった。

「剣心、おめえ……」

「わかつてるでござる。きつと蒼紫は傷を癒やして、確実に拙者へと勝てるという自信と実力を身に着けてから再び姿を現すでござろう」

こうして原作通りになった。

それは安心するべきことのはずだけど。

やっぱり何処か少し、しこりのようなものが心に残り続けていて。

「そっういえば弥生殿？」

「え、あ、はい？」

にかつと笑いながら剣心はおもむろに言った。

「般若を倒した時の技でござるが——」

「し、し……知りませええええん！ ひ、ひしよが……ちがう！ 身体が勝手に動いただ

けですう!!」

さ、言い訳考えないと。
それが、問題だ。

その男、先輩につき

夢を見た。

どんな夢か思い出せないとか言う言葉はない。

だってそうだろう？

ただ目の前に弥生が立っているだけの夢なんて忘れられるはずもない。

その弥生はじつと俺を見ているだけで、ただただ本当にじつと見ていただけで。

不意に笑顔を覗かせたと思つた時に目が覚めた。

何だつて言うんだらうね、ほんとに。

鏡越しじやなくて見る弥生は俺がやる弥生よりも弥生らしく笑つたから、多分言うところの本物つてやつなんだらう。

枕元に立つとか怖すぎるからあんまり考えたくないけど、怖いもんだつていうふうには捉えられないから不思議なもんだ。

まあそんな事はいいい、些細なことだ。

「さ、三条燕です……よろしくおねがいます」

そうだよ今日は燕ちゃんが赤べこにやってきた日なんですよ！ テンションあがる

ね!

やっぱりおどおどしてる様だけど可愛いからオツケーです、これから一緒に頑張りますよ、うんどうぞ。

ほらほら妙さんもニコニコ頷いている。

——東京府士族! 明神弥彦だつ! よろしくおねがいますつ!

先に働き出した弥彦ちゃんの挨拶を思えばなあ。

礼儀正しいのかどうなのか。その挨拶はどうなの弥彦ちゃん。妙さんも苦笑いしてたし。

もちつと言葉使いをですな? いやまあ頼もしい雰囲気ではあつたけど。

まあ可愛いってレベルで考えてくれるかな?

「燕ちゃんは……そうやね、弥生はん?」

「あ、はい?」

「最初のうち、燕ちゃんの面倒見てもらってかまへんやろか?」

おつとお……こいつあときめきイベントが来やがりましたね?

アルバイト先に新人がやってきた、そして先輩として教える日々。

最初はミスしまくるドジっ娘を優しく手ほどきしていくうちに信頼されて……ぐふふ。

はっ！

いかん、燕ちゃんだぞ俺。

燕ちゃんも弥彦の嫁、異論は認めない。それはもちろん俺に対してもだ。

「はいっ！ お任せ下さいっ！ よろしくおねがいますね？ 燕ちゃん！」

「は、はい！ よ、よろしくおねがいます！ えと、弥生さん」

おおっとそいつはちよつと待つてくれ。

弥彦との仲を邪魔する気は欠片もないが、邪魔にならない程度にならわがママを言わせておくんなまし。

「違いますよ燕ちゃん」

「え？ ち、違うつて……な、何がですか？」

「先輩」

「はい？」

「私のことを呼ぶときは、先輩と呼んで下さい。あ、弥生先輩でも構いませんからね？」
これだけは譲れない。

可愛いおどおど系後輩がちよつと顔を赤らめながらも一生懸命に先輩にちよこちよこついでいこうとする様子。

たまんねえな？

「わ、わかりました！ 先輩ー」

「うん、大変良く出来ました。それじゃあ説明するから来てくださいね」

あ、なんですか妙さんその顔は。

大丈夫安心して下さい、すうぐ一人前にして差し上げますから手取り足取りうへへ。

「……馬鹿姉弟子」

「なんですか？ 弥彦ちゃん」

「なんでもねえよっ！」

大丈夫だつて、綺麗な身体で返してやつからよう……ぐへへのへ。

さてまあそんな感じで燕ちゃんと弥彦が赤べこで働くようになって数日。

弥彦は逆刃刀を買うために、燕ちゃんは……まあ、お家事情というか、没落した士族とは言えかつての主君である長岡幹雄に赤べこで強盗するための協力を強いられて。

弥彦も言っていたがこの明治つて時代になつても旧柄に囚われてしまうのは馬鹿らしいのかも知れないけど。

やつぱりそれも一つ燕ちゃんの魅力なんだろう。

實際るろうに剣心の明治時代はもちろん、俺が知っている明治時代だつてそう詳しくはない。

何が普通で普通じゃないかなんていまいち判断が付きかねる。
素直で実直。

気弱なところも守ってあげたい系女の子ってなもんで。

それに加えて美少女、俺にとつちやもうそれだけで百点満点文句なし。

守らないと……使命感ってなもんだ。

とまあ小難しく原作知識から考えてみるけど。

「せ、先輩。も、戻りました」

「うん、おかえりなさい。炭、重くなかったですか？」

「あ、あの。弥彦ちゃ……弥彦くんが手伝ってくれて」

あーそかそか。弥生フアンの相手だなんだで忙しかつたけど。

なんか見覚えある顔が座敷に座ってるなどは思ってたんだ、もうそんな時期か。

やだなあ、こんな俺を先輩として頼りにしてくれる幼気な美少女に行かせたくねえ

なあ。

「コリアア！ 注文遅いぞお！」

「江戸っ子は気が短いですねえ……ちよつと待ってて下さいね、行ってきますから」

「あ、あの！ わ、私が行ってもいいですか？」

よくないです。

あーとつてもよくないです。

けどなあ……これってあれだよなあ……弥彦の所謂初お披露目に繋がるイベントだよなあ……。

「……大丈夫ですか？」

「はい、いつまでも先輩に迷惑かけてられませんから」

やだなにこの子尊い。

つく！ てやんでえこのやろうめえ！ 泣かせるじゃねえか！ くうー！

「わかりました……じゃあ、お願いできますか？」

「はいっ！」

はー健気。

このイベント終わったら輪をかけて可愛がる。

「あ、妙さん。出した分の炭補充行ってきますね」

「え？ ええの？ 汚れてまうよ？」

「構いませんよ。燕ちゃんもそろそろ接客中心で頑張ってもらわないと」

「そうやね……うん、燕ちゃんも独り立ちせなあかね。じゃあお願いしてもええ？」

うんうん任せてくださいやし。

まあ、この後の顛末を見に行くためなんですけどね。

ろ。あ、ちゃんと戻ってきます。我慢できなくなつて返り血で汚れてたら許してねてへべ

赤べこ裏で弥彦が頑張つたのを見て。

燕ちゃんが殴られた瞬間飛び出そうになつたのをなんとか堪えて。

弥彦が頑張つてお手製の対複数相手への訓練道具を作つたけど一蹴されて。

「じゃあ他に何か良い手があるのかよ!!」

「そ、それは……」

さて、それじゃあ剣心のありがたーいお言葉を……つてあれ？ 薫さん？ 何で俺を

チラ見してるんですか？

あ、なんでするか弥彦ちゃん、何で続いて俺を見るんすか？

「なあ馬鹿姉弟子」

「……なんとなーく嫌な予感がするんですけど、なんでしよう弥彦ちゃん」

「俺に……避け方教えてくんねえか？ 複数相手はやっぱり、その、なんだ。一度態勢を

崩されたらなし崩しにやられちまうだろ？ 頼む」

はいきましたー。そうですよね、そういう可能性もありましたね。

「いやいや、私なんて教えられるほど——っ」と

「へえ？ 後ろから投げた石をまるで見えてるかの如く避けられるってえのになあ？」

左之助え!! おまえ、おまえなあ!?! ニヤニヤしてんなし!?

しかも割と思いつきり投げただろ！ 脅威判定バツチなくらい！ 何すんだよこのボディガードは！

「頼む」

「あ、あは……あはははは……はあ」

ちらつと洗濯してくれてる剣心の方を見るけど……あーダメだよあの人ニコニコしてるだけだよ。

ありがたあい教えを弥彦に言い渡してやってくれよ、俺じやあ説得力ないってば。

あれですか、俺が過去のことをほじくり返すなんていやらしいですよなんて龍巻閃のこと煙に巻いた仕返しですかそうなんですか。

「……弥彦ちゃん」

「おう」

言つてもなあ……。

ほんとに俺は弥生の異能を深く考えずそういうモノとして納得しただけなんだ。

細かい理屈だとか、どうやって察知してるのとかそういうのはさっぱりなんだ。

だからまあ、そうだな。

「私だって、一度にそんな多くの相手から攻撃されたらひとたまりもありませんよ。飛天御剣流を修めているとかなら兎も角ですけど?」

「おろ?」

あー白々しいなあ剣心は! ほら、笑ってんじやねえかちくしようめ!

「そつか……」

「私と弥彦ちゃんに大きな差なんてありません。私が見切れる攻撃なら弥彦ちゃんにも見切れます。それでも言えることがあるとすれば、そうですね。複数を相手にしなければ良いんじゃないですか?」

「相手に、しない?」

はいはい、じやあ剣心の台詞を容赦なく奪うことにしますね? 弥彦ちゃんのリスペ

クト成分奪つちやいますからね!

「例えば、逃げる」

「逃げるう!?!」

「そうです、逃げていけば当然脚力の差で相手はバラけます。そこを一人ずつ一刀のものと斬り伏せる……まあ自身に優れた脚力があることが前提ですが。要は一对一で戦える状況を作ることですよ」

そう言ってみれば弥彦は考え込みだして、剣心や左之介、薫さんはなんかわかんない

けど感心したような目を俺に向けてきて。

やめてくれえ……恥ずかしいとかかなんとかかなんだよってば……。

けど般若に勝ってからってからというものの見方をちよつと変えられた感否めな
いんだよなあ……。

まあいいや。

とりあえず最後までちゃんとやおう。

「弥彦ちゃん」

「……なんだ？」

「私が言うにはいささか足りない面が大きいですが……神谷活心流は活人剣。その剣を振るう時、必ず自分の後ろには誰かが居ます。自分と、その誰か。二つの命が剣にかかっているんです……敗北は許されぬ。それだけは、覚えていて下さいね」

「……！」

命は投げ捨てるものムーブかまして俺が言うのはすんげーお門違いなんだけども
ね。

ほら、薫さんも困った顔してる、そうだけど弥生ちゃんが言うなって顔してるきつと。

それでもまあ。

「応っ！」

神谷活心流で強くなってくれな？ 弥彦。

「こんな夜更けにお散歩ですか？」

「っ!？」

あーごめんて。びつくりさせたよね、ほらほら怪しいもんじゃない。あなたの先輩です。

「弥生、先輩と……？」

「神谷薫、弥彦の師匠よ」

さて……おうおう、やってるね。

しっかり主犯さんとの一騎打ちに持ち込めてるじゃないか、流石です。

「主家に尽くすのが武家士族のしきたりと幼い頃から教わってきました……ですが、他人様にかかる災難は見過ごせません。そう思つて是が非でも止めようと思つて来たら弥彦ちゃんが」

うん、やつぱり燕ちゃんはいいい子だ。

確かに形だけ見れば悪事の片棒を担ぐ真似をしたわけだけど……なあに、未遂になつちまえばそりゃ無かつたで済む話だ。

ささ、薫さん、言つてやつててくださいよ。

「……弥生ちゃん」

「……え」

ガツデム！ こんなところで原作改変やめてくれっ！

ここで薫さんと燕ちゃんのキマシタワーフラグを建てないでどうするんだっ！！

あーやめて下さい燕ちゃん！ そんな目で俺を見ないで！

「……ここは弥彦ちゃんに任せて下さい。もう、あの男は燕ちゃんじゃ止められないです。でも、その代わり」

「その、代わり……？」

あーもう……どう修正していくかなこのあと……ええいままよっ！

「弥彦が勝てば、燕ちゃんは強い心を持って下さい。後になってこうしてくるくらいなら最初からきつぱり断る。難しいかも知れませんが、けど私のせいで戦わせるなんて思うほうが、遥かに辛いでしょう？」

「せん、ばい……」

「そうよ燕ちゃん。四民平等の世になったと言っても、人の心が変わらないと何の意味もないんだから」

「薫、さん……」

うんうん、いい塩梅、かな？

二人の戦いに目を向けてみれば。

「甲元一刀流!! 必殺! 浮足落としっ!!」

「勝つて!! 勝つてお願いっ!! 弥彦君!!」

勝ちフラグ来ましたーっ!! ついでに弥彦と燕ちゃんフラグも建ちましたね間違いない。

「俺は、勝あつ!!」

見事に弥彦ちゃんは勝利を修めてくれましたよつと。

「いらっしやいませえ!」

「なんや燕ちゃん元気になったねえ」

「ええ、良い事です」

ちよつとだけ前向きに、というか素を出し始めたんだろう燕ちゃんは忙しそうに店を

駆け回ってる。

「はいはい、そういうお店へどうぞ!」

「あいてっ! ち、違うんだ弥生ちゃん! こ、これは魔が差した……俺は弥生ちゃんひ

とすじだああああ!!」

「……あ、あはは。ありがとうございます、先輩」

気弱そうなところを助平オヤジに狙われそうになってるのは不安だけでも。

まあこの俺が目を光らせてるから大丈夫だ問題ない。

だから安心しろよ弥彦。

「な、なんだよ」

「いや別に何もありませんよ弥彦ちゃん。ああ間違えました、弥彦、君？」

「——ブツ殺す!!」

「あわ、あわわわ!?!」

「はいはい、お仕事中ですよお仕事中！ 倉庫整理お願いしますね」

「ちっ！ 帰ったらシメテヤル……!」

肩を怒らせて倉庫に向かう弥彦にニヤニヤしてしまうのも仕方ないでしょう？ 許せ。

当面からかう所存で予定だから。

「あ、あの」

「うん？ どうしましたか？」

「わ、私も手伝いに行つて、いい、ですか？」

……。

「もちろん構いませんよ。接客は私に任せて行つてきて下さい」

「あ、あう……その目はやめてほしいです」

そう言いながらも。パタ。パタと後を追っていく燕ちゃんを見送って。
うん。

「……来たな」

場所が場所ならガッツポーズを決めていたに違いない。

これで燕ちゃんと弥彦は安泰だろう、安直か？

さて、後は。

「ああ……俺たちのやよつばが……」

「言うな……弥生ちゃんだけでも最の高だろ……」

俺と燕ちゃんの百合光景かっこ妄想を愛でる会の連中を叩き出すだけだな。

その男、出稽古につき

やっぱり百の稽古より一度の実戦とは言ったもので、俺も弥彦も死線をくぐって強くなった、最近本当にそう思う。

いや、もちろん剣心レベルなんて恐れ多くて言えないけどさ。

こうやって見れば弥彦は目が良い。

視力の話じゃなくて、見取り稽古で普段の稽古で得られる経験を増していたなんて評されていたこともそうだし。

「めえんっ!!」

今、弥彦は相手の竹刀を見切つてから打ち込んだ。

相手のレベル云々の前に、そりや一流……かどうかはいまいちわかないけど、真剣の太刀筋を見切れるんだからお遊び剣術相手なんか余裕もいところ。

あえて見切つたのはまあ……うん、自惚れでもなく俺相手を想定しているからだろう。

面を綺麗にもらった相手は目を白黒させているけど、まあちと舐めすぎたじゃなくて実力に差がありすぎたな。

そんな相手が理解できないくらいには強くなった。
さつきも言った目の良さ。

つまるところ見切りが抜群なんだ。

最終的に指二本で白刃取りするくらいになるんだしと思えば当然かも知れないけど、その才覚はこうして今から芽を伸ばしている。

そしてもう一つ。

「どうだよ馬鹿姉っ！」

「あははーすごいですねえ弥彦ちゃん」

「ふぬぬ……くそっ！ 次い!!」

身近な目標の存在。

剣心を遙か先の目標としながらも、弥彦は俺を乗り越える、乗り越えたい相手と見定めよう。

俺が左之助を壁として設定したように、弥彦もまた俺をそう捉えたことで日々の成長っぷりを増しているように思う。

呼び方にしてもそうだ。

馬鹿姉弟子と呼ばなくなつて、弥生姉と呼ぶようになった。

馬鹿姉か弥生姉かは状況によってついたりつかなくなつたりだけど、なんともこそばゆ

いもんだ。

でもお願い、兄だと叫ばせて。

「やよ、やよいた……弥生さんっ！ 僕もお願いしますっ！」

「あ、はいっ！ よろしくおねがいますね！」

おつと弥彦ばかり見てても仕方ないね。

さて、ちゃんと相対してみればどうも挑むってよりかは……うん。

憧れのあの人と相手になれるんだーぽよよ。

ってな感じで浮ついている男の子……いやまあ多分弥生と同一年位だろうけど。

一つ浅く深呼吸を入れて竹刀を構えてみれば察知できる相手の強さ。

それは一言寝ていても勝てる。

そう、俺もやっぱり強くなった。

一つ実感としてある今の力。

相手の攻撃が自分にとって脅威であろうがあるまいが、避けられる。

もちろん従来通り、予期せぬ驚異から自動的に身を躲しもしてくれる。

「と、とおおー!!」

「……はいっ！ へっぴり腰にならないでちゃんと思いつきり打ってきて下さい！」
へろへろな打ち込みを竹刀で払って肩へと強めに打つ。

「いつつ！ で、でも……」

「でも、なんですか？」

「ぼ、防具をつけてない相手に打ち込むのは気が引けると言いますか、可愛い顔に傷をつけたくないといえますか……」

あーはん？

いや、つけててもつけなくても一緒だよ。言つちや悪いけどもね。

「ふふっお気遣いありがとうございます。ですけど……一緒ですよ」

「え？」

「あなたの振る竹刀なんて当たりませんから」

「っ!？」

あ、ちよつと顔赤くなった。

プライド傷つけちゃったかな？ ごめんね。

でもまあ許してほしい。

正直こうやってちよつとした縛りプレイでもしないと俺ってばすぐ怠けちゃうもんでな。

これも一つの追い込み方なんだって、自分のさ。

「男でしょう？ バシッと一本決めて次からは防具をつけろ、なんて格好いいこと言っ

て下さいよ」

「は、はいっ！」

え？　なんで嬉しそうなもの？　やる気満々になったのは良いけどなんで？

まあええわ……。

「めえんっ!!」

「そうそう、その調子ですっ！」

避ける。

それはやっぱり自動的に。

そうして俺は観察して思考する。

どのタイミングで、どう身体を使えばいいか。

「つてえええ!!」

「っ！」

なるほど、確かに遠慮はしていたらしい。

それなりに太刀筋は良いし、空振って流れる身体を利用して次の一刀にしつかり繋げようとしている。

手合わせ前に言っていたここ、前川道場の有望株つてのは間違いじゃないらしい。

そしてだからこそ都合がいい。考え事をしながら戦うには。

失礼ではあるけど、自分の動きや身体を確認しながらじゃないといまいち整理できないんだよごめんな。

あの時出来た龍巻閃。

やろうと思つて出来るモンじゃない、それでも出来た。

それには理由があるはずだ。

多分、弥生は龍巻閃を知っていた。

だからすんなり身体が動いた、俺の思っていた通り以上の挙動をこなした。

ほんとに——あ、そう言えばこんなんでしたね。

つてな感じで動いたんだ。

ありえんでは常識的に考えて。

何？ 何なのこの体の持ち主こと弥生ちゃん。あなたは何者なの？

この今も尚相手の攻撃を避ける異能。

順当に考えれば弥生の持ち物つてか何ていうのかな、スキルだろう。

それを俺が間借りしてるようなもんのはずだ。

飛天御剣流を知つていて、あまつさえこんな異能を身体に染み込ませる。

ただもんじゃない。そう思う。

「はあっ!! はあっ!! くそっ! どうしてっ!! てえええ!!」

「……そろそろ、ですわね」

うんごめん没頭してた。

相手や攻撃問わず発動するようになったからってほんとごめん。便利なんだわ……。

てかなんでそうなった……言うなら進化したのかね。

もしかしたら……俺と弥生の存在がちやんと重なりつつある、とか？

……まあ、良いか。

「そっつ!!」

「いっつ!?!」

だいぶ前から雑になっていた動きの隙を打ってあげる。

流石にどの隙かは自覚できる程度のモノを選んだ、これならプライドは傷つきまいて。

慢心も良いところかもしれないけど、俺に時間は足りない、いや遅すぎると言われたもんで。

ちゃんと具体的なビジョンを持って稽古しないとだめだと思うんだ。弥彦の様にすることなす事全てを吸収できたら良かったんだけどな。

「ありがとうごさいましたっ!」

「あ、ありがとう……ごさい、ました……」

おう、息も絶え絶えねー名前も知らない前川道場門下生君。

もちつと剣術へと真面目に打ち込んでねー。有望なんだからさ。

「流石剣術小町の妹分……剣術乙女と言うべきか、見事なものだ」

「いつ!? あ、その、えつと……ありがとう、ございます?」

なんすかその二つ名……乙女? やめて下さい死んでしまいます。

「これに懲りてお前も、勝ったら逢い引きしてくれなど吐かすでない」

「はい……申し訳なかつたです」

「あはは、いえいえ気にしてませんよ」

そうなのだ。

この門下生一号君、勝ったらデートしてくれなんて言ってきたな。男らしいったらありやしない、正直そこは尊敬してる。

「しかし、緋村君や薫君が太鼓判を押すわけだ……わしでも一刀浴びせられるか……」

「はえつ!? や、やめて下さい前川さん!? 私、そんな大層なもんじゃありませんから!?」

むつちや好戦的な目で見られてるどうしよう死んでしまいます勘弁して下さい。

ていうか太鼓判って何さ! あ、剣心につこりしてる! 今日のご飯は薫さんに頼む

ぞ畜生つ!

「最近血が滾ることも無くなって久しい……緋村君には断られてしまったからな、どれ

一つ儂直々に——」

「草鞋わらじを脱がなかった!!」

おっと……騒がしいね、予想通り。

こそ、今回剣心がついてくる状態での前川道場出稽古。

つまるところ。

「吾輩は石動雷十太!! 日本剣術の行く末を真に憂うものであるっ!!」

雷十太の登場つてなわけです。

由太郎君どこー？

強さつてやつがわかるようになったからこそ、やっぱわかるもんはある。

前川さんは……多分、若い頃はほんとに強かったんだろう。

それでも、そう。

自身の憂う剣術の弱体と並んで自身も弱くなってしまった。

年齢のことだつてもちろんただ何よりも雷十太の言うように時代の流れによつて
だろう。

竹刀で三本勝負。

命を賭けたからこそわかるその温さ。

雷十太は確かに愚物と称された通りの人物かも知れないが、中々に的を射たことを言っていた。

命は一つしかない。

だからこそ一度の戦いに死力を尽くすのだ。

若かりし頃の前川さんなら、きつとそうは言っていなかったんだろうと思う。

江戸十傑に数えられる程の人だ、そう、思いたい。

後に続いた剣心と雷十太の戦いも俺にとっては興味深いものだった。

見切り方。

俺ははつきり言ってみ切りに関しては相当低レベルだ。

見切る前に勝手に身体が動いている、それはつまり見切るという行為を奪うことでもあったからだ。

こうして自在に異能を発動出来るようになった今、そうとう意識しないと見切りの技術は身につかないだろう。

だから興味深かったのは剣心の足運び、避け方。

重心の残し方、どうすれば次に対応できるか、どうすれば攻撃できるか。

意識してみればそれはものすごくためになるものだった。

剣心本来の動きではないからこそ、あの人の素の身体能力や剣術の基礎というものに触れられた気がする。

何よりも、読み。

最後雷十太が飯綱を放った時に避けられたのは上段からの打ち下ろしを読んでいたからこそ、見切れたものだ。

読んでいたからあの一刀へと違和感を覚えられた、危機を感じられたんだ。

つまり見切りを伸ばすことが難しい俺だからこそ、読みの力を伸ばさなければならぬと思えた。

先を読み、もつとも効果的なカウンターを正確に放つ。

それが俺をもう一段階上のステージへと連れて行ってくれるファクターだろう。

「それで、ですね。竹刀の持ち方は……」

「……」

「おいエロガキ。馬鹿姉の胸に鼻伸ばしてんじゃねえよ」

「んなつ!!」 だ、だだだだ誰がつ!!」

え? おっぱい?

……あーそうだ、朝早すぎて身支度整える暇なくてサラシ巻くの適当だった……。

「だめですよ? 由太郎さん?」

「いいいいっ！　ち、違う！　て、適当な事言うなっ!!」

そう？　まあ良いけどさ、すまんねそういう視線にはまだ敏感じゃねえんです。ていうかそこでポワポワしてる師範代さん、いい加減目を覚ましてどうぞ。

なあんて俺が教えてるんスカね……間違つても知らないよ？　最初が大事だよ？　どつたんばつたん弥彦と大騒ぎしてる由太郎を見ながらため息を一つ。

前川道場が当面閉まることになって。

塚山家からの招待状が届いて剣心たちは応じた。

俺はまあ内容も知ってるし、掃除やらなんやらしないといけないしで残ったのさ。てことはこうして由太郎が来るわけで。

早寝して待ち受けてたつもりだけど予想以上に早かった、恐るべし。

「あ、おふあよ……弥生ちゃん……」

「あ、起きました？　それじゃあ後はよろしくおねがいます」

「ん、んうー……っはあ！　うん、ごめんね、ありがとう」
「いえいえどういたしまして。」

ともあれ塚山由太郎。

剣の才能も豊かで、強くなりたいと思つて、性格は弥彦に似てるせいと同じ燕ちゃんを好きになる……ん？

まで、そうだよ。

確かなんだっけ柱に書いてたんだっけ、後書きだっけ。

そうだよそうだよ、燕ちゃんを二人共好きになるんだよ。

いいか？ 俺は弥彦と燕ちゃんカプすこすこマンだ。

由太郎君には非常に申し訳ないが、そうなのだ。

「待てよ……？」

俺に惚れさせたら良いんじゃないね？

……え？ まじで？

無理無理無理、無理の助。

惚れさせてご結婚までするの？ ねえよ。

いやしかしやひつば……ぐぬぬ。

「ど、どうしよう……」

くそっ！ こっちの気も知らないでのんきに喧嘩してやがるっ！

あ、ついに弥彦へ薫さんのげんこつが飛んだ、痛そう。

ま、ま、ま、ええわ？

と言うか独逸^{ドイツ}へと由太郎は飛ぶことになるんだ、帰ってきてから考えよう。

「……剣が持てなくなる」

最終的に門下生一覽、師範代のところへ名札がかけられることから治療が成功するつてのはわかる。

だけど。

「いいのか？ 本当に」

弥彦つてライバルを得て立ち直りはする。確かにする。

けど、もしも無傷で今から劍を握ることが出来ていれば。

「——っ」

ドクンと心臓が大きく跳ねた。

いかん危ない、何考えてんだ俺は。

原作改変はしたくないって思ってただろう？

自分で考えたじゃねえか、出来れば原作通りに進んでほしいって。

その中で俺が生きる意味を見つけたって。

なのに、なのに。

「……」

吐いた息が震えてる。

強くなりたい、劍の才能もある。

だけど、腕が動かない。

それは……何の才能もない俺でも想像を絶する苦しみだつてわかる。

「くそ……楽しんでそうに竹刀を振って……！」

俺は、どうするべきなんだろうか。

俺は、どうしたいんだろうか。

思わぬ悩みに頭を抱えながら、きつと恨めしそうな顔をしてるだろうそのままに素振りする少年の姿を眺めた。

その男、開き直りにつき

由太郎を助けよう。

いや、簡単に決めた訳じゃない。

正直原作改変なんて大それたことをしたくない気持ちは未だにあるし、その結果バタフライエフェクトよろしく変わった未来に対して責任を取れるのかなんて不安だつてある。

それでも、だ。

「しっ—」

「……良い太刀筋です」

振るわれる剣閃。

俺みたいな素人だつて剣才に溢れたものだど理解できるほど。

それだけじゃない。

由太郎の剣は既に弥生センサーにバッチシ引つかかっている。

これはもう控えめに言つてヤバイ。

弥彦が真面目に稽古しだしてからそれなりに時間は経った。

そう、経つてようやくセンサーに引つかかる様になつた弥彦に対して、由太郎がこの域に辿り着いたのは道場に来てまだ一月どころか一週間でこれだ。

剣心が唸るわけだと納得が行き過ぎるし、ブランクがあつても神谷活心流の師範代ま
でなるわけだ。

「ど、どうですか!?! 弥生さんっ!」

「あはは、さつきも思わず言つてしまいましたが大したものですよ、ほんとに」

ああ〜純真な笑顔が眩しいんじやあ〜。

いやまて俺はシヨタにときめく心は持ち合わせていない、いいね?

言葉通りどうですかと笑顔を向けてくる由太郎の後ろから恨めしそうな視線を送つてくる弥彦はまあ置いておいて。

あの件、雷十太の手駒というか真古流の門下生と言うべきか。

奴らがうちに話し合いという名の襲撃事件があつてから。

剣心の強さを実感したのだろうことも踏まえて、強さへの憧れをより輝かせた由太郎の力量はメキメキと向上している。

元々弥彦と同じように漠然とした強さへの憧憬、飢えともいうかね、そんなもんがあつて。

それを半ば雷十太の邪魔をしてはいけないと、稽古をつけて欲しいと訴えられない、

無理やり押さえつけていたつてのが大きな一因なんだろうな。

言つてしまえば振りまくつたペットボトルの炭酸飲料みたいなものだ。

溢れ出ないように無理やりキャップを閉めていたけど、何かの拍子で開けられてしまえば勢いよく出てきてしまう。

剣を振るたびに何かの手応えを得て。

凄いや言われるたびに手応えを確信して。

由太郎は今まさに進化の時真つ只中なんだろう。

わけも分からず弥生という異能を持つていたハリボテの強さで強者を演出している俺には少し眩しいと感じてしまう姿。

もしも自分がそういった才能を持ち合わせていて、それが伸ばされる最中に居たのならきつとこの子と同じ様な顔をしていたと確信できる。

正直に言つてしまえば嫉妬すらしてしまう才能。

それは誰もが欲しいと願いながらも誰もが持ち合わせているわけではないだけに。

「弥生さんっ！ それじゃあおねがいますっ！」

「……ええっ！ 今日も手加減はしませんよっ！」

だから、だからこそ。

雷十太についての如くその道に土をつけられてはいけない。

そんな風に思ってしまった。

高みを目指して欲しい。

後ろで不貞腐れている弥彦と肩を並べて、お互いを刺激し合つて。

原作の未来と同じ結末を迎えて欲しい。

それと同じかそれ以上に、その気持ちは強いと認めてしまったから。

「や、やっぱり敵わないか……」

「あら、勝てると思つていましたか？」

とは言えまだまだ簡単に踏み台とされるわけにはいかないわけで。

自分のポジションはよく理解してるんだ俺は。

弥彦が打倒弥生と燃えているのにも関わらず、如何に才能豊かな由太郎とは言えぼつと出に負けるなんて駄目でしょう？ 駄目駄目。

仮に由太郎が無事に雷十太イベントを超えることが出来てこの道場へと通う身となれば。

「つ、次は絶対勝ちますからっ！」

「ふふふ、はい！ 楽しみにしていますね」

弥生を目標とする人間が一人増えるわけで。

……いやね？ 別になんかしたわけじゃないんですよ？ でもね？ こう、由太郎君の目つきがまるつきり憧れのお姉さんを見るような目ですわね？

どうしてこうなった……これじゃそのうち赤^あべ^そこで非公式ファンクラブに加入しかねないぞ？

由太郎は本来誰にでもタメ口というか……内心とは別に少年っぽいというか、そういう言葉使いをするわけですよ。弥彦と同じように。

現に薫さんや剣心に対してはわりとそんな口調をする中、弥生に対してはこうなんですよ。

やばいね。間違いない。

ていうかまじでなんかしたつけ？ほんとに心当たりがない。

ここに由太郎が通う事になってから、薫さんが由太郎に教えてその成果を俺にぶつけるって形。

ぶつけてる間に薫さんが弥彦の面倒見るって感じでだな。

うーん。

「あ、あの……その、だ……ですわね？」

「うん？ どうしましたか？ 由太郎君」

声のする方向を見れば顔を赤らめながら俯いてる由太郎。

何だこいつどうしたの？

「弥生ちゃん……またやつてるわよ？」

「え……？ あ、ああ！ ごめんね由太君！ つい無意識に」

「い、いえ！」

あー……そうかこれか。

うん、心当たり有ったわ、これだわ間違いない。

いやいや、ほんとう弥彦にしてもそうなんだけどいい位置に頭があつてつい……。

「……裏切り者お……」

「うん？ 弥彦ちゃんもされたいんですか？ どうぞどうぞ？ いつでもどうぞ？」

「ち、ちげっ!」

ほらほら遠慮せずにウエルカムですぞ？

頭撫でるなんていつでもやりますよほら。

いやさ、俺つてば限界集落人じゃん？

だからこう自分より小さな子つていないわけよ。居てもすぐ都会に出ちまうからな

あいつら。

わりとずっと兄貴分というか、そんな風を吹かしたかつたわけですよ。

兄貴分？

ええそうです、兄貴分です。姉貴分じや断じて無いです。

「弥生ちゃん……もしかして恵さんの悪い影響受けた？」

「悪い影響、ですか？」

いやん、何だか険しい目ですよ薫さん。

わたくしが影響を受けるには少しどころじゃなくて色気が足りませんことですわおほほ。

……はい、反省します。

これが無自覚系か、許せねえ。

大いに反省する所存だ。いたいけな純真弄ぶやつは俺がぶっ飛ばしてやる。

ともあれ。

「つと、そろそろ赤べこに行かないといけませんね。ほら、弥彦ちゃん。いじけてないで準備して行きますよ」

「い、いじけてなんかねえぞっ！ この馬鹿姉っ!!」

はいはい、ごめんなすってねー。

そんなこんなで赤べこでのお仕事を終えて。

由太郎の気持ち、雷十太の下で強くなりたいたいという決意表明を聞いて。夜も遅くなったからと、皆で由太郎を家まで送ることに。

多分……いや、間違いなくここで雷十太は剣心に戦いを仕掛けてくるだろう。

由太郎の回想。強さへの憧憬、その源泉。

正直、ネタを知っている俺としては心が痛い。

作り上げられた舞台の上で、そうなるように仕向けて。

ただただ自身のバックボーンを作りたいがために都合よく扱われた塚山家。

なんちゃつての正義感は許せないと叫んでいる。

そんな声は由太郎を助けるって行動の正しさを証明しているようにも聞こえて。

土壇場。

こんな土壇場でだからこそ、本当に良いのか？　なんて思いが湧き上がる。

わかってるさ、優柔不断だって。

一度心に決めたのなら、それを貫き通せばいいって。

それでもこれはるろうに剣心という漫画の作者によって作り上げられた世界だ。

一つ一つの行為には意味があって、結末につながっていく繊細な物語だ。

既に般若さんと戦ったりしておいてなんだけど。

もう既に言っただけの良い位置には居ないのかもしれないけれど。

それでも――

「ぬううんっ!!」

「っ!」

それでもこうして時間切れはやってくる。

完全な不意打ち、誰一人怪我はしていないが、塚山由太郎という剣客を目指した心を打ち砕くには完全な一撃。

「違っ! 今のはただのアイサツ代わりだっ! 全然本気なんかじゃなかった! そうでしょ!? 先生えっ!!」

「――」

目も向けない。

心も動かさない。

由太郎以上に俺が一番動揺しているのかもしれない。

必死に違っ!と叫ぶ由太郎を見て、実際にまるつきり反応を示さない雷十太を見て。「俺の斬馬刀ん時と同じだな。いくら威力があろうと、当たらなきゃ意味がねえ」

「ぬうっ!」

そんな愚物の剣なんて当たる剣心じゃあない。

軽々と躲し、見切る剣心は続いた目潰しさえも意に介さず。

龍槌閃。

綺麗に雷十太の肩口へと決まったけど……そうだな、やっぱりこうなる。

「どうやら貴様は纏飯綱まといづなの方では倒せんか」

——来る。

飛飯綱とびいづな、由太郎の剣生命を一時的に奪う凶剣が。

良いんだな？ 本当に。

これは強さの熱に浮かされたわけでもなく、弥生の心に引つ張られたわけでもなく。

俺の意思。

それでいいんだな？

由太郎を助けていいんだな!?

「——構わないっ!!」

「!?! 弥生ちゃんっ!?!」

構わねえ! やらないで後悔するよりやって後悔しようぜ俺っ!

確かにこれはるろうに剣心の物語だ! だけどそれはそこに生きる俺の物語でもあ

るんだからっ!

「や、やよいさっ——!?!」

「づうっ!?!」

少し距離のあった由太郎へ走って突き飛ばしてみれば避けそこねた飛飯綱が身を裂く感触。

あんまりにもすっぱり切れてたから衝撃はねえなんて思ってたけどそんなことは無かった。

「だ、だいじょうぶ、ですか？」

「弥生さんっ!? 弥生さんっ!」

痛くはない、けど熱い。

ものすごい熱を左肩に感じる。

「弥生ちゃんっ!? 大丈夫っ!? 弥生ちゃん!!」

「あ、はは……ちよつとは……神谷活心流らしく……出来まし、た……か?」

あー駄目だ。

なんかすんごく暗い。

「弥生殿……っ!」

「剣、心さん……後は、おねがいます」

あれなんかなー、これって脳が処理しきれないから意識落とそうとしてんだろ
うなー。

なんて。

やだなー、弥生さん。

ちゃんと異能、發揮して、くださいよー……。

そうして、こうして。

「シメテヤルツ!!」

「はっ! やつてみろっ!!」

元気に竹刀をぶつけ合う弥彦と由太郎。

それをお茶しばきながら眺める俺。

世は泰平事もなし。

由太郎は筋を斬られるなんてことなく五体満足。

俺といえば三角巾をぶら下げてはいるものの傷口がしっかりくつつくための処置っただけでまあ剣の道を諦めるなんてことにはならず。

目を覚ました時には全部終わっていて、まあ原作通りブチキレた剣心によって雷十太は心を粉碎されたみたい。

そう言ってみれば簡単な話なんだけど、薫さん曰く大変だったそうさ。

俺が怪我した瞬間左之助はブチキレて雷十太に殴りかかろうとしたって話だし、弥彦も似たようなもんだったそうさ。

やっぱり剣心の生き地獄を味わわせてやるという言葉でなんとか収まったそうだけど……。

それもまあ意外と言えば意外な話。

今までを顧みて、弥生と剣心はそう良好な関係を築いていたわけでもないはずだから。

原作通り、師匠雷十太に裏切られた弟子由太郎という構図ではあったが、その怒りの中に俺の負傷という要素も加わっているとすると少し驚いたもんだ。

現に。

「傷の調子は大丈夫でござるか？ 弥生殿」

「剣心さん」

いつものちよつと困ったような笑顔と少し申し訳無さそうな雰囲気隣に座つてきた剣心。

その目はやっぱり左肩と三角巾に注がれていて。

自分でやったことだし決めたことだから気にしないでほしいんだけど、どうやらまあ剣心の庇護対象としてカウントはされているらしいのかな？

いい機会だし聞いてみるか。

「ええ、大丈夫ですよお陰様です。それに、ありがとうございます」

「おろ？ 拙者、何かお礼を言われるようなことをした覚えはないでござるが」

「由太君はもちろん、私のためにも怒ってくれて、ですよ」

そう言ってみればちよつと驚いた後、やっぱりいつもの笑顔を受けべて。

「なに、むしろ拙者は謝らなければならぬでござる。纏飯綱……見破る種はあつた、だが不覚を取つた。その責任を取つたつもり、というだけでござる」

なるほど、やっぱり剣心は距離の取り方が下手だ。

謙遜、遠慮。

これはそういつたものではなくやんわりと釘を刺しているんだ。

勘違いするな、と。

それこそが勘違いなのかも知れないけど、やっぱり原作の知識つてのは額面通りを素直に受け取らせてはくれない。

「ええ、そうなのかもしれない。だから感謝の気持ちを伝えたのは私の自惚れで……ちよつとした期待つていうだけですよ」

「自惚れと……期待、でござるか」

これから先、俺の行動で何かが変わる。

今こうして目の前で元気に竹刀を振つてる由太郎。

まさしくこれは俺が変えた未来の姿。

だったら。

「決めたんですよ、私。もう開き直っちゃおうって」

「開き直り？」

そうさ。

原作至上主義。

それはもちろんそのままに。

俺は確かにるろうに剣心の世界では異物に過ぎないのかもしれない。

だけど、この世界で脇役ではいられない。

「やりたいことをやって、言いたいことを言う。そうやって……この世界を生きようと

思います」

「そう、でござるか……」

言っていることを理解したわけじゃないだろう。

あんまりにも不明瞭で、ここから何かを察しろなんて方が無理難題だ。

でもそのおかげで。

「俺はっ！ 神谷活心流で！ 弥生さんを守るんだっ！」

「はっ！ 生意気言ってんじゃねえよっ！ 弥生姉より弱いくせにっ！ まずはこの明

神弥彦を倒してから言っしてみやがれっ！」

可愛い弟子が一人増えたんだ。

ああ、そうさ。

そのほうがずっと良い。

ここそこそとこの世界の隅っこで生きて、知った未来へ歩むよりも。未知へと進んで、苦勞するほうが、よっぽど生きてるって思うから。

その男、生き慣れにつき

「おいこらあ！ 表出ろお！」

「あー？ いや、俺あ弥生を迎えに来たつてだけで……」

今日も今日とて赤べこは平和です。

必死に弥生ファンが左之助に絡んでいる光景から目を逸して平和を想う。

最近、非公式ファンクラブの拡大ぶりが酷い。

いや、理由は言わずともがな燕ちゃんだったたりするわけで。

守つてあげたい系女子の燕ちゃんと面倒見の良い快活系女子弥生。

そんな二人が揃えば無敵も無敵すぎるわけだ。

……あくまでも客観視した感想です。

異論は大いに認める、いや異論ください。

ともあれ時代の最先端を行き過ぎてる赤べこのお客様達はほんとにどうかしている。

妙さんは繁盛して嬉しいわあなんとか言ってるけど結構困つてたりもするんだ真面目に。

というのもファンクラブ内で派閥のようなものが出来てしまったんだよな。新参と

古参の間で。

元々はマナーが良い……ってか、お仕事の邪魔にならない程度だったり、今みたいに俺や燕ちゃんをだしにして喧嘩を売ったりはしなかった。

古参と言うにはあまり時間が経っていないはずだけど、大人しい人達は既に古参扱いで、現状に対して思うことがあるのかよく俺に謝ってくれる。

——少し悪調子が過ぎたね、ごめん。

そんな風に。

ただそれでも若い男ってのは流行には敏感というか、ミーハーというか。

認めたくないけど剣術乙女なんて名前が広まったと同時に、凛々しい名前と割烹着姿な俺とのギャップが相まって爆発的な人気を生み出してしまった。

いや、ほんとに認めたくないけどそういうことなんだ。

人が集まれば当然マナーってラインはあやふやになるし、その線を軽々と超えることに躊躇しない人間だって出てくる。

実際燕ちゃんの押しに弱そうな雰囲気を見てグイグイと来すぎる人だって居たりもしたし、酒を理由にがつつりセクハラを狙ってくる奴も居たわけ。

おまけで言うならそんな馬鹿の中に、弥生に怒られたいがために燕ちゃんへとちよつかいをかけようとする、なんて馬鹿……もとい変態すら居たりしたのも困ったもんだ。

ただまあ。

「おい弥生、おめえからもバシツとなんか言つてやれよ」

「あーははは……ほら、それもボディガードのお役目ですよ、ね？」

あ、おかえりなさい。

ちやんと手加減は……うん、大丈夫なはず。今回は断末魔みたいな悲鳴は聞こえなかつたから。

そう、左之助の存在である。

妙さんのほほんど繁盛を喜んでいられるのも、左之助のおかげで。

赤べこの用心棒として雇われたわけだ。

と言つてもマジの用心棒というわけじゃなく、来た時に面倒事へ対して睨みを利かせてくれたらそれでいい感じの軽いもの。お給金はお店に来た時タダ飯が食える。

大体俺が赤べこに仕事へ来ている時は必ず迎えに来てくれるから、マナーの悪いフアクラブの奴らに対して抑止力となつてでかい行動に踏み切れないわけだな。

「あ、ありがとうございます」

「んあ？ いや、良いつてことよタダ飯食わしてもらつてんだ。これくらい構わねえよ」
うんうん燕ちゃんもお礼言つといて？ あ、でも後ろですんごい目をしてる弥彦もか

まつてあげてどうぞ。

まー流石に弥彦を用心棒と言うには少年がすぎるからね、仕方ないね。

「あ、弥生ちゃん。堪忍やけどあれお願いできる?」

「ええ、大丈夫ですよ。次の時に持つてきますね」

しれつと返したけど危ない忘れかけてた。

月岡津南、隻腕の伊庭八郎の錦絵頼まれてたんだよな……ん? ってかこれって

……。

「なんでえ? 何処か寄るのか?」

「あー……えつと、はい。少し買物に付き合ってもらいたいですよ」

「うふふ、伏せやんでもええよ。月岡津南の剣客、伊庭八郎! その錦絵を頼んでるんです」

あ、大丈夫なのね伏せなくても。

ここらへんは明治ならではの価値観なんだろうか? いやほら、推しの絵を集めるとかって所謂オタク趣味じゃないか。そういうのオープンにしてもええもんなんかね。

いやまあ現代でもオープンオタクってのはいたらしいから、おかしいわけじゃないんだらうけど。生憎同年代やらそういう趣味を持つてる人が周りに居ないもんでいまいちわかんねえんだよな。

だから単純にエロ本を通販で買って、親にばれないようにあの手この手を駆使してた

俺の感覚での配慮だったんだけど……。

「言いたいことはハッキリ言ったほうが良いぜ？　なあ？　小さい嬢ちゃん」

「いえ……」

ああうん、そんな性少年時代の話はいいな、うん。

そうだよ、これってアレだよ。

左之助と月岡津南……もとい、元赤報隊、月岡克浩の再会イベントだよな。

「そんじゃ月岡津南、伊庭八の錦絵……二枚で良いんだな」

「っー」

あーはいはい左之助かっこいー。

だけど駄目です、燕ちゃんは弥彦の嫁です。男気見せるのは俺だけにしてください。

……ん？

いや違う、相手を選んでくださいということの一つ。

「仕事さえなけりや俺だつて……」

弥彦はもつと頑張れ。

「弥生」

「あ、はい。表で待っててくださいー！」

そんなこんなで。

すっかりゴタゴタ続きで忘れてたけど、左之助に相楽総三の錦絵を買うつてのと忘れてごめんなさいで伊庭八の代金も払って。

「細けえことは気にすんねえ！ ブツ潰れるまで飲んで騒げっ!!」

左之助の奢りというかたかり。

旧知……赤報隊で培った間柄、月岡克浩の金で宴会が始まったわけだ。

妙さんや燕ちゃんも居るけど、残念ながら由太郎はいない。

流石のお金持ちとでもいうか、雷十太の件があつてから夜間の外出は控えていると残念そうに……ものつすぐく残念そうに言つてた。

だから今度ウチで宴会しましょう！ 二人で！

二人で宴会とはこれ如何に。

そんなお誘いを帰り道に俺を守る位強くなつたらぜひと断つておいた。由太郎はやる気になつた、ふふん。

お酒は二十歳になつてからが基本の俺としては弥彦がグビグビ飲んでる姿にはちよつと違和感を覚えるつてもんだけど……まあ俺は良いけどさ。

「弥彦ちゃん？ あんまりグイグイ飲みすぎると後がしんどいですよ？」

「るっせえ馬鹿姉！ こんな時は飲まねえとやってらんねえんだ！」

あ、ふーん？

良いんですか俺にそんな口を聞いて。ふーん？

「……その姿、燕ちゃんが見たらどう思いますかねえ」

「ぶっ!？」

うわきつたねえもつたいねえ!

あーていうか明治の酒って強いね、アルコールの匂い凄い。鼻から酔っ払いそうだ。

「なななな、なんで燕の話が……ってかあいつは関係ねえだろっ!」

「べっつにいい? 私はどう思うか聞いただけですよ? ええ、弥彦ちゃんがそう言うな

ら関係ないんでしょうね? まあ私としても楽しむことこそ宴会の作法だと思つてま

すし? 止めませんよ? ええ」

さあて弥彦はどう出る? 出ちやいます? あ、嘔吐は勘弁なっ!

ほらほら、言葉に詰まつてる場合じゃないっすよ? もつと追求しちやいますよう?

「う………」

「ぶっ!」

「うるせえ馬鹿姉え!!」

あーあー……かっくらつちやつてもう。俺、しーらねつと。

「あはははは! けんしーん!」

「わ、笑い上戸……」

出来上がるのはつや!?

薫さん酒に弱かったんだなあ……さすがの飛天御剣流も酔っ払いに為す術もなしか。

え? なんですか剣心さん。助けて?

「無理です」

「おろろー……」

俺に何期待してんすかねえ? こういうのは生温かく見守ることこそ作法だよなあ

?

大人しくそのまま相手しておいてどうぞ。その姿を俺は心から応援するものです

……こんぐらあ……。

妙さんたちの方を見れば今が好機と言わんばかりに津南さんから自画像描いてもらってるし、良かったですね、お礼はお賃金に。

ていうか燕ちゃんも大概好きなのね、錦絵。嬉しそうな顔しちゃってまあ。

ん? ああ、俺は良いんですよ、正直自分が女なんだって証拠を増やすのは辛いんです。先輩を差し置いてとか気にしなくていいんだよー。

「おう弥生。楽しんでつか?」

「ええ、お陰様で。料理も美味しいですし、言うことなしですよ」

あーどっこしよってな感じに左之助が隣に座ってきた、けど近いっすね距離。パーソナルスペースって知ってますか？ 知らんがなっつてなもんだ。

まあそんなところが気楽で良いんだけど……いやはや、俺が男だつたらなあ……。

ホモの話はしてない、いいね？

「それで？　なんでまた急にこんなことを？」

「あん？　お礼返しだよ、日頃世話になっつてっからな」

ふうん……いやまあ左之助にとつちやその言葉に偽りはねえのかも知れないけどもな。

ネタ知ってる身からすりや結構寂しいね。

わかってくれとは言わねえ。

ここを離れる時に言う左之助のセリフ。

確かに男として、大人としてその言葉に内包されている意味は察するにあまりある。

一人の責任を取れる男として、ここから先は自分で選んだことだと踏ん切るための宴会。

そんな風に俺は思ってる。

「……私は、そういう事をされたいわけじゃないんですけどね」

「どういう意味でえ？」

もしも俺が今男なら。

左之助とは友情を結びたいと思う。実際俺はこの人に対してそういう気持ちを抑えられない。

だから女や原作知識を都合よく利用しているって感は否めない。

「赤報隊の左之介相手でも、喧嘩屋斬左相手でも、相良左之助相手でも……別にこういうことは貴方に対して願ってはいないんですよ」

「……弥生、おめえ……」

じつと左之助を見つめてみる。

珍しく揺れる左之助の瞳には微かな動揺が見て取れて。

もしかしてこれからすることをわかっているのか。

そんな風に思っているのかも知れない。

「止めはしません。その権利もないです。何より私は貴方が左之助らしく生きる様が一番好きですから。ただ……」

「言うな、弥生」

ああ、わかっているよこれは失言だ。

止める権利が無いといいながら止めようとするのはご法度だ。

わかってる。

「……俺にとっちゃやっぱり赤報隊は特別なんだ」

「……」

これは残滓だ。

過去も経緯も、全てを飲み込んだ相楽左之助をしてもなおその背を引張る過去。赤報隊としての残りカス。

未だそれに囚われて動けない月岡克浩を見て、飲み込む前の自身を重ねている。

「左之助さん」

「おう」

いつの間にか伏せていた顔を上げてみれば、複雑ながらも笑っている左之助の顔。

「また、明日、です」

だから俺はこういうしか無い。

わかってる、剣心が動いて何事も無かったかのような明日が来ることを知っている。だけどそれは俺だけしか知らないことで。

明日赤べこで働いて、左之助が迎えに来る。

やりたいことをやりたいように、言いたいことを言いたいように。

そんな明日を待っていると、左之助に伝えることがきつとそうなんだろう。

「おい、弥生ちゃん元気ねえぞ……」

「お前がこの間やりすぎたからっ！」

「ちちちち、違いますう！　ちよつと愛が止められなかっただけですう！　弥生ちゃん

も笑って駄目ですよって言ってくれましたあ！」

「いやお前、弥生ちゃん青筋立ってたからな……う？」

うるさいよファンクラブ。聞こえてるんだよまったくもう。

まあアンニユイにもなつちやうガールですよほんとに。

結末を知つてるとはいえど、やっぱり複雑なんですよ。

知っているからこそ変えられるつてのは由太郎で実感したところだったんです。

それでも変えられなかったもんがあつてへこんでるんです、わかりますか？　わからないですよねはい。

いや、そう気持ちを切り替えようと頑張つてるんだけどなあ……こんなに女々しかったか俺は。

「いい加減にしようぜ。いいか？　推しは愛でるもの、愛でるやり方は千差万別であろうとも、超えてはならない一線がある」

「そうだぜ？　今みたいな弥生ちゃんを見たかったわけじゃないだろ？　ちゃんと守るところは守ろうや……俺たちや弥生ちゃん的笑顔を見に来てんだから」

「……そうっすね、間違えてました、俺。ちよつと謝ってきます」

「いや、間違ってたのは俺たち全員だ……物々しいかもしれんが、全員でいこう、な？」
「……はいっ！」

あーなんすかなんすか？

何を全員一斉に立ち上がってんすか？ 周りのお客さんにそういうのこそが迷惑つてわかんねえっすか？ 出禁にしますよ？ 今なら躊躇なくやっちゃいますよ？

「うーっす……弥生、迎えに来たぞー」

「またてめえかあ!?!」

「な!?! なんでえなんでえ!?!」

あ、一斉に回れ右。ちよつとおもしろい。

はあ、やれやれ、いい加減マジで切り替えましょ、そうしましょ。

「はいはい、他のお客さんの迷惑ですからねー」

「そ、そんなあ弥生ちゃん……」

みつともない顔すんなし!? つてかちよつと気持ち悪いぞ!?!

「大の男が情けない声出さないでください！ ほらっ！ 皆さんのおかげで私も元気出ましたから！ ね？ ありがとうございます」

「よっしやああああ!! 弥生ちゃんがニコツと笑ったから！ 今日笑顔記念日じゃあ

あああ!!」

「間違つてなかった! 俺は間違つてなかったぞおおお!! ひゃっはあああああ!!」

……サービスすぎた。

あ、厨房さんすいません、酒追加だそうです。忙しくさせてすみませーん。

「……そういうところで、弥生」

「知りませんよ全く」

困つたような笑顔は剣心の専売特許です。

左之助はもつと豪快に笑つてどうぞ。

「ま、いいです。左之助さんも何か食べていくでしょう? 今何か持つてきますからど

うぞお席へ」

「おうっ! ありがとうよ!」

はいはい、いい笑顔つと。

ま、いいですよ。

今回はこれでいいんですよきつと。

剣心達の生き様を変えるなんてそれこそ神様の所業だ。

俺をこんなにした神そいつだけでも、まあ。

「よしとしますか」

その男、知り過ぎにより

運命の日……と言うには少しだけ早いか。

「巫丞弥生……か、置き土産は一つで良かったんだがな」

「……斎藤、一」

薫さんが剣心、弥彦、由太郎を連れて出稽古に行つて。俺は残念ながら買い物だなんだと家事の日につきお休み。

帰つてきてみれば道場は派手にぶち壊れてるし、左之助は血まみれだ。

「ほう……？ 何処でどうやってその名を知つた？」

「答える義務があるとでも？」

ふつつつと怒りが湧いてくる。

左之助に重症を与えたことも、道場をぶち壊したことも。

だから自然と、無意識に持っていた竹刀を構えた。

「確かにそうだ、そんな義務は無い。だが……今それを知っている人間が居ると少し困るんだよ」

「ええ、理解していますよ。今貴方の正体を知っている人間がいるのもそうでしょうし、

わざわざ緋村抜刀齋を焚きつけるために悪役を買って出た意味もなくなってしまいますもんね？」

言ってみれば齋藤の眉が僅かに動いた。

そうだな、今俺は冷静じゃない。

この場でベストな展開は怯えて尻もちでもついていることだったんだろう、それもわかる。

だけど、それを実行する気は欠片もねえや。

「貴様……何処まで知っている？」

「さあ？ 掌の上で転がしてみればどうですか？ ……そうしたようにっ!!」

竹刀を振るう。

簡単に避けられてしまうけど。

「舐めないでっ!!」

「……ほう」

転がそうとしてきたんだろう、足を躲すと同時に再び竹刀を振ってみればそれを齋藤は右腕で防御する。

ああ、弥生センサーは今日も絶好調だ。

わかってる、わかってるさ。

今の俺じゃどうやっても斎藤一に勝てるわけがないってのも。

こんなことする意味が欠片もないことも。

さつさと左之助の傷を手当する方が百倍大事だってことも。

「どうしました？ 新撰組三番隊組長の名前が泣いてますよ？」

「ち……」

少しの苛立ちを見せる斎藤。

誇りを挑発に使われたことに対してか、思った以上に俺が面倒くさい相手だと感じたのか。

そんなのはわからない。

こんなあいつから見ればへなちよこ剣術だろうこの腕。

何度ぶつけたって、何度躲したって、斎藤にとっては何のダメージにもならない。

それでも、だ。

「——っ！」

「ふん、どうやら牙突についても知っているらしい。安心しろ、今日はさつき折れた仕込み杖以外持ち合わせていない」

刀こそ持っていないけど、牙突の構え。

まだ繰り出されていないのにも関わらず弥生センサーがピンピンに警鐘を鳴らして

いるのがわかる。

そう、それでも。

「友人をあんな目に遭わされて、道場をこんなにされて……黙っているわけにはいかな
いんですよ」

「……いい覚悟だ」

別に斎藤一を嫌っている訳じゃない、いけ好かないやつだとは思うけど。

ただ悪即斬の意志へと一念に従い戦い続ける姿には憧れる。

そんな気持ちももちろんある、あるだけにここは折れてはいけない場所で退けない場
所。

集中しろ、集中。

剣心もやってたじゃないか、あの返し技。

出来る。

俺なら出来る。

壬生の狼が持つ牙を躲して刃を突き立てられる。

床が軋む音がした——来るっ!!

「——なっ!?!」

「知ってると! 自分で言っていましたよねっ!?!」

ここだっ！ 右側面にある死角っ！

後は思いつきり——！！

「んなっ!？」

「……寝ろ」

当たった。

振った竹刀は当たったはずなのに……意にも介されない。

センサーは反応したけど、流石に振ってる最中に別の動きなんて出来ねえ。

一瞬感じる浮遊感と、強く後頭部に走る衝撃。

ああ、ほんつといけ好かない。

相手が女でも遠慮なしっすよ、ほんと……。

これは夢だと一瞬で理解した。

「はじめましてっ！ ……というのもおかしい話ですか、ではこんにちは……いえ、貴方はまだ起きていないのですからどう言えば良いのでしょうか？ 何回やつても未だにわかりません」

「あ、はあ」

ああ、そうだ。

起きていない、つまり眠っている時に見るものつてのは夢なわけで。

ただけそうだから夢を夢と判断できたわけじゃない。

「ん？ どうしました？ 見慣れた姿でしょう？ 驚くほどのことでは無いはずですが」

「いやいや、ようやくちよつと慣れてきたつて姿が目の前にありや誰でも驚くつて」

目の前に弥生がいる。

非現実的だから非現実、夢だと理解できたんだ。

俺の知らない弥生はこれこそが弥生だと示す……いや、きっと本物だからそう思うんだらう。

浮かべる表情も、仕草も……雰囲気さえ。

全て俺とは全く違うと言つていい。

「そうですね、そうですね。はい、わかります。そういう反応を見たことも少なくともありませんから」

「ちよつと言つてる意味がわからないです、はい」

んーと唇に指を添えて可愛らしく悩む弥生だけど、どことなく艶を感じるのは何故だろうか。

ある意味俺が思う理想の女の子を体現してるつて感想だけど、不思議とそう思つては

いけないと壁があるように感じる。

「貴方で弥生は……何人目でしたか。もう数えるのにも飽きてしまったので覚えていません。そんな中で今の反応もきつとたくさんありました」

「何人目って……待ってくれ、一体なんの話をしているんだ？」

いつもの弥生口調で話されているせいかね、自然と元の口調が口からでる。

ただそれ以上にこいつが言っている意味が欠片もわからなくて混乱した。

何人目？ 数えるのに飽きた？

「巫丞弥生という存在は異物である」

「——っ！」

混乱はすぐに収まった。

弥生は俺の知らない、浮かべたことのない表情で簡単に混乱を鎮めて来た。

暗い……いや、昏い瞳と薄ら笑い。

「酷い話ですよ？ そんな存在だと知らない私は、新月村から東京に出て来て出会った緋村剣心という存在に恋をしたというだけで何度もこの時を繰り返している」

「時を、繰り返し返している？」

昏い瞳は少し危ない光を放っている気がする。

狂気。

一言で言ってしまうえばそんな色。

想像上の弥生がまず間違いなく持ち合わせていないだろうそんなもの。

「私だけならまあ……いや、もちろん嫌ですが。それは私の後世の存在すらも奪つてこの時を巻き戻しています。……そう、貴方は私という異物をこの世界に閉じ込めるがために弥生としてここへ連れてこられた」

「連れてこられた……って、ちよつと待つてくれ。お前の後世？　つてことは俺は——」
「察しが良いですね？　そう、貴方は遙か未来の血縁者。……男性が私になるというのは初めてですが、間違いありません」

……いや。

それが、もしも本当の話ならば。

俺が生きていた現代、あの限界集落で女体へ憧れ悶々としていた世界は。

「……るろうに剣心の未来？」

「……一人、また一人と時を巻き戻すために弥生としてこの世界を生きる。ある人は諦めて子を為し生を終え、ある人は絶望の中自死を選び……ある人は戦い、その半ばで生命を散らしました。得た経験を、知識を弥生に宿して」

それは、どんな人生だったのだろうか。

俺のようにわけがわからないままこの世界に連れてこられて、弥生という役割、ポジ

シヨンを与えられて。

「誰一人としてこの繰り返しを終わらせることが出来ませんでした。ええ、正直今の私でも思います。不殺を心に宿している人に殺されることなんて……ましてや緋村剣心。不可能が過ぎます」

「剣心に殺される？　よくわかんねえけど、それがお前の言うこの異常な状態を解決する方法なのか？」

言ってみれば頷く弥生。

弥生の言う巻き戻し、あるいは繰り返しがどれほどの異常なのかはわからない。けど、確かにるろうに剣心の世界にやってくるなんて異常なことだとはわかる。

そしてその解決方法が剣心に殺されること。

……うん、無理ゲー。

どうやったら緋村剣心に人を殺させられるというのか。

抜刀齋として覚醒させてしまつて後の人生を孤独に生きろと言うのか。

ああ、無理だ。

原作至上主義の俺には到底出来ない。

「これが最初で最後の機会ですし一応言っておきます。私のために死んでもらえませんか？」

「……」

無理だ。

何度も言うけど無理無理の助だ。

けど……。

「考えておくよ」

「……あら？ ふふふ、やっぱり男の人はちよつと違うのでしょうか？ それは初めての答えです」

保留としたことをだろうか。今までの人達はイエスかノーかをすぐに答えていたのだろうか。

それを考えることに意味はない、か。

むしろそれ以上に気になることと言えば今更だけど、どうしていわばオリジナルの弥生とこうして話が出来ているのかって部分なんだけどな。

最初で最後と言われたんだ、ならこれから先を気にする必要はない。

まあそれを含めて、だ。

「もう答えは出ているんだ。俺は俺の望む通り、感じたままにこの世界を生きるって。その途中、もし剣心に殺されたいと思えばそうするよ」

「なるほど。なら、私はそれを期待することにしましよう。ずっと見てきた私じゃない

弥生の物語、飽ききって久しいですけど、今回は少し面白そうですから
ああ、そうだな。

もしもこのやり取りで心に決めることが出来たとすれば。

「ああ、まあ……期待しといてくれよ」

「はいっ！ 楽しめるものにしてくれること、期待しています！」

弥生（他）はこんなふうには絶対笑わない。

それだけだ。

「——っは!？」

目を開けてみれば知らない天井。

何処だここと思うよりも先に、頭の中がめちやくちやだ。

「いっつ……」

めちやくちや痛い後頭部を抱えてみれば、思い出した斎藤との闘い。

そして確かに覚えている弥生とのやり取り。

ああ、そうだ全部覚えてる。

「目が覚めたか」

「っ!?! 斎藤、——……さん?」

ドアノブが回る音に目を向けてみればやってきたのは斎藤。

「ほう？ てつきり襲いかかってくるとでも思っていたんだがな」

「……頭痛くてそんな事できませんよ。大丈夫でもする気はありませんが」

何が楽しいんすかねえ……？ やな感じに笑わないでくださいよ。

ほんつとこの人の嫁さんはどんな感じなんだ……マジで菩薩の可能性がりますね

これは。

「それで？ ここは何処です？」

「おいおい、随分と余裕だな巫丞弥生。意識が戻れば見知らぬ場所にいたとしては冷静が過ぎる」

いやだからその笑いやめてくださいよ。

こっちは真面目になんも楽しくないんですってば。

「ここは警察署の一室だ。しばらくここに居てもらおう」

「取り調べは結構ですよ？」

「……阿呆が。洗いざらい吐かせるに決まっているだろう？ 俺の目的……任務を知っ

ているという事は、何故の部分も知っているとということだ。そしてそれは国家機密に

抵触している」

ですよー。

全くさっきの俺をぶん殴ってやりたいっすよ、どうしてベストを尽くす……いや、選ばなかった俺。

いやわかつてますよ、そういう風に生きるって決めたばかりですもんね俺。

「諦めて吐いて潔く処分を受けることだな」

「ですよねー……っつて！ 処分!?!」

処分って何!?! 処分って、処分されるっつてことっすか!?!

待つて待つて俺つてば重犯罪人ですかつ!?!

「当たり前だろう。疑わしきは罰せよとは好みじゃないが、今の所貴様にかかっている嫌疑はそう言っつていられる程ぬるい案件じゃない」

もしかして俺……またやっちゃいました？

違うそうじゃない。

うそん、ここであるろ剣ライフのエンディングはじまつちやう？

……ん？

「え、今、今の所つて言つたよね？」

「……」

いかん素が出た。見ろ斎藤さんを、呆れていらつしや……らない!?!

「察しが良い奴は嫌いじゃない。そうだ、その通り今の所は、だ。だが、まずは洗いざ

らい吐かなければ避けられない道でもある」

「……」

わかるな？　と言った感じに目を向けられる。

なるほどなんとか首は繋がりそうだ。

要するにこれは協力要請になるか尋問になるかの瀬戸際なんだ。

齋藤……警察に対して情報提供を行えば命は繋がるだろう、どういう形になるかわからないが。

ここで変につっぱねて断れば、げに恐ろしやな尋問ルート突入だろう。

流石にDMでもないので協力する方向を考えたいけど問題は何処まで話すかという点。

実は未来の人間なんですよとか言い出したら別の意味で収監待ったなし。

齋藤というか警察側が欲しているのは志々雄真実についての情報なんだから、そこらへんのことを話す必要がある。

だけど、今この場で比叡山にアジトあるらしいっすよなんて言ったら駄目だろう駄目駄目。

それはまず間違いなく俺の手に負えないかつ未知の志々雄一派打倒ルートに突入してしまう。

それが原因で剣心があの道場に戻らなくなるような結末を迎えてしまえば目も当てられない。

「どうした、黙り込んでいるならそれ相応の手段を取るようになるが」

「……………」

やばい、尋問に切り替わりつつある。

そりやそうだが、時間をかけたらそれだけ怪しまれるのは当然だ。

ええい、ままよっ！

「志々雄真実の暗躍…………それを止めるために緋村抜刀齋に協力を要請。しかし、抜刀齋の力量がどれほどのものを確かめるそのために貴方は今動いている」

「……………続ける」

知っている理由。

原作知ってますから、じゃあない。

この世界に生きる人間が納得できる理由が必要だ。

弥生が志々雄真を知っていておかしくない理由、弥生のルーツ…………。

そうだ。

「私は、新月村の出身です」

「新月村…………？ 少し待…………場所は？」

「東海道……沼津から少し離れた半林、半農の小さな村です」

手帳を取り出して、何かを確認しながら問われた。

ヤバいくらいに心臓がドキドキしてる。

闘いの緊張とはまた別の、いやな緊張だ。

どちらにしても命がかかっているからそれもまあ仕方ないことなんだけど……。

「なるほどな。それで？ どうやってそれを知った？」

「三島栄一郎という名前に覚えがあるのでは？」

「ここが賭けどころ。」

もしも三島氏が署内勤務の密偵だったらアウト。

仮に弥生と面識があつたとしても、俺と面識がない。そこで必ずボロが出る。

「ち……密偵だというのに……同郷の間柄で何を話していやがる」

セーフ！ これはセーフの気配ですよ！

それと三島さんごめんなさい！

「既に奪還を諦められている新月村。そんなこと政府は表立って認めないでしょう。表では動けない、ならば残る手段は裏しかない」

「……わかつた。気になることはあるが、一先ずそれで納得しよう。だが、巫丞弥生。貴様は随分と他人事のように話すんだな？」

「っー」

心臓がめっちゃ跳ねた。

それがわかるくらいにビビった。

だって正直他人事だもんよ……知ってるだけですもの……。

「……そう見えたのなら、光栄ですよ」

「ふ……」

あーもう！ だからそういう笑い方すんなし！ あんたの内心なんてほんつとよく

わかんねえんだからさ！

「今はここまでにするか。しばらく貴様はここに居てもらうことに変わりはない、処分

は追って伝える」

「処分!?!」

え!?! もしかして俺都合よく扱われた!?! 都合のいい女!?! ぼいされちゃう!?!

「安心しろ。どのみち抜刀齋がどう動くかによつて先は変化する。それ次第で貴様をど

う利用するかも変化するが、悪いようにはしない」

「そう、ですか」

それだけ言つて齋藤は席を立つ。

ただ、なんだろう、その背中から……。

「剣心さん……いや、抜刀齋と戦いに行くのですか？」

「……ふん。前言撤回しよう、察しが良すぎるのも困りものだな」
迸る戦いへの覚悟とでもいうのか。そんなのを感じて。

それ以上に何も言わないで去っていた背中を見送って。

「……ふはあー……あー、まだ心臓うるせえ……」

とりあえず乗り切ったと思っていよいよね。

「だけど……」

ああ、そうだな。

これから先、どうするか考えとかないな。

その男、荒行につき

「巫丞弥生、どちらかを選べ」

「は、はあ」

唐突ですが姉さん事件です。

斎藤一が今日の前で日本刀か木刀か選べと言つてきます。

道場のような一室。

多分警官達の訓練的な場所だろう、連れてこられて直様こうです。

周りには警官だろう道着を着た人が何人かいて俺達の方へと視線を向けている。

ちらちらと……ではない、むしろガン見も良いところ。

その証拠に落ち着かない俺が周りへと視線を回して、誰かと目をぶつけても逸らされることはない。

「どうした？ 得物を選ぶだけだ、早くしろ」

「いや、えつと？ 何故と聞いても良いのでしょうか？」

言いながらもなんとなくわかっちゃうんですけどね！ これってあれですよね！

多分俺の実力を測るためになんかするんですよね！

まだ顔や身体、ところどころに包帯を巻いたちよつと痛々しい姿の齋藤。

昨日剣心と戦ってきたばかりだったのに元氣だねほんと、流石不死身と呼ばれた男。

「貴様の処遇を決めるためだ。いいから選べ」

「処遇って……もう」

そう言われちゃ選ばないといけない。ぐうの音も出ないってこのことよな……いや、出させないって方がそうか。

とは言え。

「……」

木刀と、刀。

単純に使いやすい方を選べと言われているわけじゃないってのは流石にわかるさ。

聞かれてるんだ、お前は人を殺せるかどうかと。

木刀でだって人は殺せる。

そりゃ剣術を学んでる身として十分に理解できる。

ただどうこうやって生身の刃を見て、どうしても命って言葉に直結するのは刀だと実感できた。

「……やはり貴様は察しが良い。良いだろう、しばらく悩め。待ってやる」

何か言われた気がするけど、頭に入っていない。

処遇を決めるため。

確かにそうなんだろう、だけどこれは前提として既に志々雄真実討伐、その作戦の中に組み込まれている。

どちらかを選び、選んだ先に戦いはもう決められているんだ。

神谷活心流巫丞弥生。

その存在として選ぶのならば間違はなく木刀。

活かすために適しているのは木刀。

ただ、そう。

巫丞弥生という俺が選ぶ道はどちらなのか。

緋村剣心が選んだ不殺という道。

そのため手にした刃は逆刃だけど、それは裏を、刃を返せばいつだって人を殺せるということ。

本人がどう考えてるかなんてわからない、けど俺はこの先そんな中途半端な道を選ぶわけにはいかない。

当然だ、それほど器用でもないし強くもない。

切り裂ける刃を持てば、峰打ちという選択肢を取る余裕なんざ簡単に消えてしまう。

だからどう言っても、どう言われても。

「人を殺せるか、否か……」

そういう選択。

この世界を生きたと決めた俺はどう道を歩んでいくのかその決定。急すぎるとも思う。

今ここで決めなければならぬのかと愚痴すら零したくなる。

「一つ、教えてやろう」

「……はい？」

不意に言葉調子が変わった斎藤の声に目が持ち上がる。

そこには多分原作では見られなかった表情。

何処か俺を労るかのような、心配するかのような。

「貴様とやりあった時、俺の牙突を返したあの一闪。あの時貴様が持っていたものが真剣だったのなら……今頃抜刀齋と戦えてはいなかっただろうな」

「っ！」

わかりやすく明示されてしまった。

それこそが差だと、竹刀では到達出来なかった域だと。

勝敗の域を左右できたものではないかも知れない。

だけど、少なくとも後に影響はあつただろうと。

そして。

「そうだ、巫丞弥生。貴様は戦力足り得るんだ。事情に精通したそれなりの腕を持つ剣客としてな」

光栄と思うべきだろう。

幕末を生き抜いた人間であり、戦い抜いた唯一の新撰組。

そんな人間にここまで言ってもらえたんだ。

「その葛藤を未熟だなんだと言うつもりはない。誰とて最初の一步は躊躇するものだ、よほどの狂人でもなければな。故に貴様の選択に対して何か言うつもりも感じるつもりもない。貴様は幕末ではなく、この明治を生きる人間だ」

随分と優しい事を言ってくれる。

いや、優しいのかはわからないけど……志々雄真実は幕末の残り火だ。そんな存在相手に明治に生きる人間を使うつてのに抵抗があるんだろう。

ああ、そうだとするのならやっぱり優しいんだろうな。

口調は厳しくても、目的遂行のため冷徹になれる人間でも。

だから多分こんな言葉をかけられるのはこれで最後だ。

瀬戸際に居るからこそその言葉なんだ。

どちらを選んでも、示してしまえば俺は……。

運命の五月十四日、その日を迎えるまで俺はひたすら稽古の日々だった。

外と連絡を取ることが許されたわけでもなかったから、やることが無かったという面はあるけど。

剣心達はどうしているのか……つてのは漫画の通りなんだろうけど、それでも心配だ。左之助とか弥彦とか由太郎とか。

けどまあどうすることも出来ないわけで。

志々雄真実編に絡まないという選択肢もあったんだらうけど、残念ながら重要参考人的なポジションに収まってしまったが故にもう無理。

上手く使い潰されないために、何より今から起こる話の中で俺が俺の意思に沿って動けるためにも強くなる事が必要で。

「つ、次っ！ おねがいしますっ!!」

「おうっ！ 剣術乙女の技、しかと確かめてやる!!」

最初こそ舐められてた……いや、ぶつちやけ警官にあるまじきというか、巷で噂の剣術乙女と手合わせかーぐふふ。

みたいな空気があったのは間違いないけど、それを払拭するのに時間はいらなかった。

「おおおおっ!!」

「っ—」

斎藤が集めた人達だ、流石と言うべきだろう。

それぞれが剣心や斎藤のような超一流とまでは言わずとも、一流を称して不足はない人間ばかり。

恐らく志々雄真実に対する主力とでも言うべき存在。

一人一人と相對する度背筋に流れる冷や汗を止められない。

目の前、鼻先を掠める剣閃に躊躇はない。

相手の目はまつすぐ俺を貫いてくるし、一刀一刀が確実に命を狩ろうと襲いかかってくる。

それでも。

「甘いですっ!!」

「っっお!」

払拭した。

何よりも自分の手で。

今ではもう良き稽古相手ですらない、超えるべき、打倒すべき相手として見られてい
るのは——

「はあ……はあ……次ですっ!!」

「おうっ!!」

俺がそんな人達の上に位置しているからだ。

選択の後続いた稽古。

舐めた剣閃を叩き折って。

生半可な気持ちでこの場に居るわけではないと示して。

俺は、選んだ。

ならそこにあるのは責任。

責任を取るに足る人間であらねばならないという義務。

権利があつた。

権利を得た。

ならば生じる義務からは逃げられない。

生きると決めたんだ、なら殉じよう。

「やっているな」

「……齋藤さん」

やっぱり鼻につくその笑い顔。

現れた齋藤に思うのはそんなこと。

「貴様が指定した日は今日だったな」

「ええ、五月一三日……今日で間違いありません」

立てかけられてる刃引きされた訓練刀を手にとった斎藤は鞘から刃を抜いて感触を確かめてる。

俺もその姿を見て上がった息を整えるため深呼吸。

「随分と体力がついたみたいじゃないか」

「……お陰様で」

そりゃ毎日毎日荒行という言葉が温く感じるほどでしたから。

ポロカスになりながらも続けられたこの稽古はマジで地獄でしたよほんと。

「ついたのは体力だけじゃないですよ？」

「ふん」

お互いわかってる。

たかが一週間程度で体力はつかない。

身についたのは戦い方。

余計な力の抜き方であつたり、より長期的に戦い続ける力。

「貴様は言つたな？ 殺さなくても殺す道を選ぶと」

「ええ、一言一句間違ひありません」

そうさ選んださ。

木刀で日本刀の道を征くと。

先を知っているからこそ、選ぶ前の俺ではいられないんだ。

「抜刀齋……いや、緋村剣心の影響でないことを願うばかりだ。……来い、甘ったるい貴様を否定してやる」

「認めさせてあげます……私の道を……！」

神谷活心流巫丞弥生。

それは知らないうちに、わけがわからないうちに与えられていた名前。

それでも俺はこの道でいい、この道が良いと決めた。

誰憚ることなく進んでやると。

「……やはり貴様は牙突を知っている」

「ええ、知っていますとも。それは得意技突を絶対の必殺技とまで昇華させたもの……です
すが」

知っているから何だというのか。

こうして避けられるとは言え、それは牙突を、齋藤を攻略したということにはならない。

「紛れもない事実を一つ言つてやろう。その躲す技術……それは貴様の言うところである必殺技足り得るものだ。だが——」

「わかつてます。コレがその域への道を阻害している、でしょう?」

木刀。

あの時竹刀での返し技を斎藤に防がれたように。

やっぱりどうあがいても女性の力のもと竹刀、木刀でその腕を叩き折るなんて難しい。

膝挫みたいに相手の力を完璧に利用するつて話ならともかく、だ。

日本刀。

正しくそれを扱う技術さえあればそれは叩き折るどころか、その腕を真つ二つにしていたことだろう。

少なくとも生身の腕で防ぐという選択肢は奪えたはずだ。

「わかつているなら良い」

「ええ……だからこそ」

ずっと考えてた、実践だつてしてきた。

巫丞弥生の力を活かす方法。

「行くぞ」

「……肯定する準備が出来たなら、どうぞ」

見せられた構えはやっぱり牙突。

不思議と周りに居る警官達の唾を飲み込む音がハッキリ聞こえた。

弥生は脅威から身を躲すことが出来る。

ずつとそうとだけ思ってたこの異能。

それは少し違っていた。

弥生は言っていた、繰り返される巫丞弥生の生と死がこの身体に蓄積されていると。

ある弥生は戦ったんだらう。

ある弥生は逃げたんだらう。

戦った弥生は死を刈り取る技術を理解して。

逃げた弥生は死を避ける技術を理解した。

そう、つまるところ。

「っ!!」

死、そのものを察知できる力。

殺すことも、殺されることも。

この世界において、命へと誰よりも早く触れる事が出来る力。

それこそが、弥生に培われた力。

斎藤が床を蹴った。

酷くゆっくりに感じる世界。

伸ばされる左腕、それが目指すは弥生の命。

脅威だ。

これは凶刃だ。

俺の目指す道を断つモノだ。

「——なっ!?!」

「——まだですっ!?!」

牙突の下へ潜り込む。

出来るさ。言ってたじゃないか、この避ける技術は必殺技だつて。

この先を間違えなきやそれに足り得るつて。

だから。

「ぐっ!?!」

「ああああああっ!?!」

斎藤の持ち手を木刀で思い切り叩く!

非力な女の力と言ってもその模造刀を零させる程度にはあるんだよ!

「ちいっ!?!」

「やらせないっ!!」

咄嗟に沈んだ俺の身体を蹴り上げようとする辺り流石過ぎるぜっ!

でもこの拳の距離ってのは——

「嫌ってほど慣れてるんですよねっ!」

ああ、左之助に感謝しとかないとね、お陰様ですよコレはほんと。

蹴りの風圧を感じながら、向かうように躲して軸足へと木刀を奔らせ——その足を掬った。

「……肯定、出来ますか?」

「……」

転がせた斎藤に跨って木刀を喉元に突きつける。

「わかってます。貴方が言うところの真正正銘な牙突を使わなかったことなんて……これが真に命のやりとりだったとするなら、私は手も足も出なかつたって」

こんな簡単に届く域にある人じゃない。

勝つたなんて欠片も思えない。

「阿呆が……それでも、今この凶に変わりはない」

「そうでしょうか? もしも私が貴方の思う悪であるなら……間違つてもこうはなりませんよ、きつと」

言いながらその場所から退く。

ふんつと一息吐いた後立ち上がり、俺の乗っていた場所を手で払いながら斎藤は笑った。

「良いだろう巫丞弥生、よく覚えておいてやる。この先、ある程度貴様の及ぼせるであろう範疇を改めておく」

「……ありがとうございます」

ふう……ともあれこれで少なくとも、るろうに剣心京都、志々雄真実編で変に邪魔されるつてことはなくなっただろう。

自由自在はあまりないのかも知れないけど、斎藤の理解は得られたと見ていいはずだ。

斎藤にとって……いや、日本、現政権に対して俺は敵ではなくまた志々雄側の人間じゃないという理解。

そして志々雄討伐に対して有益であるという証明。

なんて思ってもバカバカしくなるのは、明日大久保卿が殺されてしまうのにも関わらずそれを伝えていないことあたりだろう。

本当に俺は都合よく色んなものを利用しているなど自省するけど、いいんだ。

開き直ったのもう前の話。

行けるところまで生きたいように行くだけだから。

その男、再出発につき

「弥生、殿……？」

「お久しぶり、ですな剣心さん」

紀尾井坂の変。

大久保利通が暗殺された。

表立っての発表は石川県士族による犯行だとされているけど、やっぱり俺も斎藤も……剣心もそうだとは思っていない。

「まずは心配をかけてごめんさい。そして、混乱しているでしょうけど今はまず川路さんの所へ」

「……わかったでござる」

事の次第を聞きに来たんだらう剣心。

俺の姿を見て一瞬色々な思考が過ぎったんだらうけど、それもすぐ収めてくれた。

「よし、揃ったな。行くぞ」

落着と見たんだらう、斎藤が案内するかのよう先を進んで。

俺と剣心は黙ってその背を追う。

そうだ、まずは全員が現状を正しく認識しなければならぬんだ。

確かに全貌を知っている俺だけでも、剣心も斎藤も予測でしかない。

それをそうだと断言するのは簡単だけど、確証があるわけでもなし、説得力もないわけ。

すこしもどかしい気持ちはあるけれど、仕方ない。

「これが志々雄のやり方だっ!!」

ドアを開けて入った一室。

中に居た川路さんが俺たちの姿を認めれば、すぐ吐き捨てるようにそう言った後机を大きく叩いた。

ああ、本当に慕っていたんだな。

背を向けて肩を震わせているその姿は、そんなちっぽけな言葉では言い表しきれない程のものを孕んでいるように見えて。

本気で大久保利通と共に日本を善き道へと歩ませたい、歩ませられると信じていたんだろう。

その意気も、志も。

ここで潰えてしまったと、心の底から怒りと共に絶望を吐き出しているようだ。

「……ネーションズ・ステイト国民国家。御上が全てを決めるのではなく、国民一人一人が自分の道を選ぶ国家

か……壮大過ぎる理想だな」

斎藤が言う理想の時代で生きていた俺からすればあまりピンと来ないものはある。幕末、幕府の終焉を目の当たりにした志士達の気持ちを図るには到底。もしもここで大久保利通が生きていたのなら。

時代は圧縮、あるいは短縮されて、本当に国民国家……民主主義の時代がやってきていたのかな？

わからん。

それを覗こうとしても手に負えないし、何よりも野暮だ。

こうして歯車は大久保利通、あるいは川路さんの思い描いていたものとは違うものと噛み合った。

「時代が、流れ始めた」

「……そうだ巫丞弥生。今まさに明治という時代は再び動き直した」
これから。

やっぱ俺が知ってる日本史の道を歩んでいくのだろうか。
るろうに剣心の後世で生きていた俺が知っている日本史。

第一次世界大戦、第二次世界大戦。

そうやって、戦争の歴史へと向かっていくのだろうか。

それもわからないけど。

少なくとも、ここで国民国家という一つの理想への道は閉ざされ、別の道へと進んでいくんだろう。

それだけはわかった。

「そう、でござるか」

「……ええ、改めてご心配おかけしました」

恐らく左之助が重傷を負ったあの日以来俺の行方は知られてなかったんだろう。

薫さんや弥彦、多分由太郎だって見つけようと奔走してくれたはずだ。

自業自得とはいえちやんと説明しなきゃと警視庁を後にしようとした剣心と話す。

剣心自身も色々混乱しているんだろう。

何処かぼんやりと……いや、頭の中にある色々な考えを整理しようとしてるんだろうな。

これからまず間違いなく剣心は薫さんへと別れを告げる。

それは今の剣心であつても心を痛めることに違いはない。

「記憶喪失は、嘘だったのでござるか？」

「いえ。ですけど……そうですね、私は記憶喪失でしたし、記憶喪失を利用しました」

ああ確かにそういう意味では嘘をつき続けていたことになる。

それは否定しないしする気もない。

どう言い繕おうたって、自分が動きやすく、生きやすくするための術にそれがあつて。その手段を取ったのは俺だから。

「流石薫殿……といったところでござるな」

「え？」

「薫殿は気づいていたでござるよ。自分の知らない弥生殿であると」

うっそ、まじで？

……いや、まじでとか言えるくらい演技出来てねえよな普通に考えて。

元々の弥生像すら知らなかったんだし、当たり前といえばそうなのかも。だけど。

「それでも自分の妹分に変わりはないから。そう言っていたでござるよ」

「そう、ですか……」

……薫さんには弥生としても俺としても一生頭上がらねえんじゃないかって。

ああ、そうだな、だから剣心の大事な人になるんだ。

その一角をようやく実感できたよ。

「だからこそ、でござるが——」

「それは出来ません」

わかつてる。

だから薫さんの側に居てやってくれと言いたいんだらう？

気持ちも理解できるさ分かりたくないくらいに。

「私は、志々雄討伐作戦に組み込まれています」

――

驚く、よな、うん。

どういう風にかつて部分は政界のごたごたで斎藤に現場の指揮権が移らないと決められないだらうけど、とりあえず京都へ向かうことには決まっている。

流星にこの辺り、弥生の出生を利用したこともあつてごまかしきれないわけだ。

それはもちろん、剣心に対しても。

「だからこそ剣心さん、その言葉の先は自分にも問いかけてみて下さい。それに領けのないのなら、私もきつと領けません」

「弥生、殿……」

明治時代を生きる、じゃあないんだ。

るろうに剣心の世界を生きる、なんだ。

何度でも思うけど、このまま東京で留守番して、赤べこで働きながら客をあしらつて。

のんびり道場で稽古をしながら、一人のなんちやつて劍客として過ごすつて選択肢もある。

けど、そうはしない。

この状況で結局動かなかつた人は誰一人劍心組の中で居なかつたし、涙を堪えてここに残つた人もいる。

自分に来ることがあつて、出来ることから目を逸らして我関せずで生きること。

それこそ、弥生を想つてくれた薫さんの気持ちが無碍にすることだと思ふ。

俺が京都へ行つて戦うことを望んでいるんじゃない。

弥生俺が俺らしく生きることが望んでくれてるんだと思うから。

「劍心さん」

「なん、でござるか?」

じつと目を見据える。

人斬り抜刀齋という過去、狂気を己の内に宿していると実感し直した劍心、葛藤している劍心。

その姿はらしいんだらうけど、らしくない。

「私は、もう答えを見つけています。だからあなたも……いえ、緋村劍心としての答えを、どうかこの先で手にして下さい」

「……」

抽象的が過ぎるけど、言えることはこんなこと。

俺が言ったところで……誰が言ったところで、結局答えは自分で見つけなきゃいけないし、剣心はいずれそれを手にする。

ほんつと。

知っているって、嫌だなあ。

「弥生っ!!」

「あはは……お久しぶりです、によっ!」

「おわ痛え!! 肩!! 力入れすぎですってヴァ!」

「どこ行つてやがった!? 俺たちがどれだけ心配したか!!」

「わかつてます! いえ軽々しく言えないですけどわかつて、わかりましたからあ!?! ちよつと落ち着いて下さいい!?!」

心配が、心配の気持ち痛い!?

これじゃあ話にならないっすよー勘弁してくださいよー。わざわざこうして夜に来たつて言うのにご近所さんの注目ばつちりですよきつと。

「わかつてねえ! が、まあいい! おい! 道場には行ったのか! あいつらも面あ

見せてやんねえと——」

「いえ、左之助さん。その必要はあるけどないんです」

「……ああ？」

はいはい、いいから落ち着いて下さいね？ どうどう。

うん、睨んでくれてもいいから……あーこつちのがもつといてえや。

「必要はねえって……どういふことだ」

「……いつものとこ、行きましょつか」

ああ、始めから話を聞いてもらえろとは思ってないさ。

話になんないって、話にする気が無かったのは俺、か。

「いつものとこって……弥生、まさか」

「そ、いつも喧嘩してるとこですよ。私と……ね」

それで一旦終わりにしなくちやな。

このわけがわからないままに始まって培った関係。

剣心にとって薫さんとの別れがそれならば、俺は左之助との別れが必要だ。

東京編。

弥彦や由太郎とも培ったものはある。

けど、あいつらにとって俺は追う存在。

言い方は悪いけど、追う立場なら勝手に必死で追ってくるといい。

「いい風、ですね」

「……ああ、そうだな」

目的地はすぐだ。

そんな距離があるわけじゃないから、なんだか勿体ない気がする。

すぐに着いてしまうから、話す言葉はいっぱいあるのに。

ごめんなさいだつて、ありがとうだつて。

たくさん、たくさんあるはずなのに。

結局口から出るのは困った時に出てくる天気の話。

そんなもん。

でもまあそれでいい。

「左之助さん」

「おう」

俺にとつてまず追つた人間は左之助。

その差は縮まつただろうか、追いつけただろうか。

「今日、この時、今から……貴方は私のボディガードではありません」

「どういう、意味でえ？」

文字通りそのままだよ、左之助。

これは俺にとつてのリセットだ。

弱い自分をなんとかしてもらつたための関係じゃない。

一緒にしつかり前を見据えて歩くために必要なことなんだ。

「解雇ですよ、左之助。私より弱い人に守られるなんて……笑い草も過ぎます」

「弥生、てめえ……」

あ、お怒りですよねわかります。

こんなん言われたら普通キレル、俺もキレル。

許せ、なんて言わないよ左之助。

筋が通つてない上に心無い言葉と聞こえるのは当たり前前だけど、これでも心を持って

言つてるつもりなんだ。

いつまでもあんたを庇護者にしてはられない。

喧嘩で始まった関係なら、喧嘩で一回終わりにしよう。

「気に入りませんか？ 腹が立ちますか？ ……失望、しましたか？ ええ、構いませ

ん、その方がいい。だから精一杯の感謝を持つてこういいましょう——」

——かかつて、こい。

木刀を構えてみれば、戸惑いながらも怒りに任せて突っ込んでくる左之助。

ほんとうに、ごめん。

都合よく利用した、あんたの性格をも手玉に取った。
だからもし。

「おおおおおつ!!」

「あああああつ!!」

もしも、俺が無事に生き延びて。

再び笑い合うことが出来たのなら。

今度は胸を張って友人と貴方を呼びたいから。

「弥生殿……」

「あはは、また会いましたね」

あー……身体いてえ……自業自得だけでもちつと左之助さん手加減してくださいよ
ほんと……俺、女の子つすよ? まったく。

……いや、もう突っ込むのもしんどい。

「随分と、ボロボロでござるな」

「それは、剣心さんもでしょう?」

主に心が。

まあ俺の心もわりとピンチですけどそれはいいんです。

「斎藤さんに許可はもらっています。東海道で京都を目指すのですよね？ 私も一緒にします」

「それは……いや、弥生殿に隠すことでもござらんか。そういう弥生殿だ、拙者が一人を選んだ理由もわかつているはずでござろう？」

人と関わりたくない。

関わってしまったが故に今こうして心を痛めてるんだもんな。

俺もさつきそうやってきたからわかってるよ。

「ええ、だからこれは関わりとうとしていくつもりではありません。ただ、今回の作戦上私も東海道を行く必要があるだけです」

「……」

いや、そう訝しまないで下さいよ。

「そう思われるほど……私はあなたと関わってきたつもりは、無いのですが」

「……やれやれ、随分と人が変わった……いや、それが素の弥生殿なのでござるか？」

素というか前言ったでしょ？ 開き直っただけですよ。

それにまあ、東海道を行く必要があるってのも嘘じゃない。

新月村。

あそこに剣心達は寄ることになるんだけど、個人的……いや、弥生的にも気になるんだ。

実際齋藤も後で来ることになるんだけど、まあその先遣とでもいいですか。

三島兄をダシにしちゃったしな……出来れば、生かしてあげたい。

「それはご想像にお任せします。だからそう、これはたまたま向かう方向が一緒で、か弱い乙女の私は、安心を買うためにあなたへと声をかけているだけなんですよ」

「仕事上の関係、というやつでござるか」

ええ、その通り。ドライもドライな関係ですよ。

如何ですか？ 泊まる気ないだろうけど望むなら、お宿にも泊まれますよ？ 齋藤からそれなりのお金もらってきましたし。

……いや、連れ込み宿的な意味じゃない。そこは開き直ってない。

「もちろん京都に着くまでです。それ以降は別行動、お約束します」

「わかった。納得しなければならなのでござろうな……」

そう言つて、ほんと久しぶりの困った笑顔を見せてくれた。

うん、やっぱり剣心にはその顔が似合う。

そしてその隣に薫さんが居て欲しいと思う。

出来れば、多くの仲間達と共に。

その中に。

「はいっ！ それじゃあ出発しましょう！」

俺も胸を張って笑顔でいられたら、そう思うんだ。

その男、旅路につき

「こちらあつ！ その若いの！ わしの目の前で廃刀令違反とはいいい度胸があつ！」

おこななの？ 激おこななの？

いやまあびつくりしたよ、まったくあの笛うるさいわほんと。

「あーつと、申し訳ありません。一応許可を頂いていますので、こちらを」

「なんだあ……つ！ も、申し訳ありません！ 任務、お疲れさまですつ！」

斎藤から預かっていた帯刀許可書を見せてみれば効果覲面つてなもんだ。

まあこれで三回目だからね、慣れたもんですよ。

「いえいえ、こちらこそお疲れさまです。職務熱心大変結構なことだと思います、その調子で皆の安全をよろしくおねがいしますね」

「はっ!!」

おー……いい敬礼。

いや、許可書の中身は見るなって言われてるから見ないけどさ、一体なんて書いてあるんすかねえ……。

あ、見送りは良いですよほんと。すつごくなんか行きにくい。

「感謝すべきかそうじゃないか、いまいち判断がつかないでござるな」

「まあまあ。確かに余計悪目立ちしてしまつてる感は否めませんが……剣心さん、あるいは私が目立つただけなら構わないじゃないですか」

志々雄一派に自分たちの足取りを掴まれていないなんて思うほうが甘い。

現に斎藤もそう言っていたわけだし。

なら逆の発想。

目立てばそれだけ注目を惹きつけられるわけで。

俺と剣心へと目を割いたぶんだけ他が動きやすくなるはずだ。

浅はかなのかも知れないけど、剣心へそう説明してみれば納得してくれたし、あなたが間違つたことでもないだろう。

それより問題なのは。

「弥生殿、今日で小田原は抜ける予定でござるが……大丈夫でござるか?」

「あはは、気にしてもらつて嬉しいですけど。仕事のお付き合いですから、心配は無用ですよ」

わかつてたことだけど剣心は健脚だ。

いや、というよりはこの時代の人達自体がそうなんだ。

東海道を歩いて京都まで。

鉄道敷設で歩きの旅行客つてのは少なくなつたらしいけど、こうして歩いてみればその陰りつてやつをいまいち実感は出来ない。

鉄道が出来る前、江戸時代なんかの人達はこれが普通だつたつてんだらうから凄いな。

ともあれこの道程。

距離で言えば日本橋から三条大橋まで約四百九十二キロ。

剣心なら五日もあれば十分らしいけど、いやまじばねえつすよ。

車ですらちよつと気が引ける距離だよ、新幹線が恋しい。

「仕事仲間だからこそ、でござるよ。それに——」

「わかつてます。宿は取らないのですよね？　今のうちから無理するなという部分はよくわかります」

俺を許容してくれた剣心だから、人と可能な限り関わらないつてのは俺が許容するべき事柄だろう。

剣心の懸念もまあもつともな話だと理解できるし、あえてという程じゃないけど、原作よりも多少強く注目を引いているんだ、宿泊中に襲撃がある可能性は高まっているはず。

「やれやれ。素の弥生殿は少し頑固でござるな」

「そうでしょか?」

「そうでござるよ。拙者、単純に野宿を強いるのは忍びない気持ちからそういっただけでござる」

む……やっぱりその笑顔は反則です。

そうだよなあ……ちよつと決めつけが過ぎるのかも知れない。

知っているのはガワだけなんだ、裏、裏ばかりを測るんじやなくてももう少し額面通りを素直に受け止めるようにしないと。

「……そうですね、齋藤さんみたいになりたくないですし。気をつけます」
「おろろ」

今までは知っているをポジティブに捉えていたけど、やっぱり弊害つてのはあるね、うん。

あ、齋藤さん? くしやみしてます?

特に謝る気はないですよ? あしからず。

「野宿は久しぶりでござるな」

そういう割には手際がよろしいことで。

地図を出して現在地なんかを確認している間にぱぱと剣心が用意してくれた。

実のところ剣心との間にそこまで会話はなかった。

それこそ出発して最初だけで、ある程度大丈夫だと思われたのかそれ以降はめつきり口数が減った。

焚き火の炎が揺らめいて、その焰が剣心の瞳を映す。

何を思っているのだろうかっつのはやっぱり薫さん達のことだろう。

恨まれても仕方ない。

そんな風に今思ってる剣心なんだろうけど、俺にはどうしてもそうとは思えなくて。

「別に恨まれては無いと思いますよ」

「……拙者、口にしていたでござるか？」

少し驚いて口元に手を当てながら視線が向けられる。

さて、俺は原作シーンから思い浮かべた内容ではあるけど。

「いえ？ 多分、あなたと関わりを持った人間がみれば私でなくても思い至るんじゃないでしょうか」

「……」

弥彦なら、らしくねえぞ剣心。なんて言いそうだし。

左之助なら、とりあえず一発景気付けに殴ってそうだ。

薫さんでも……うん、黙って察して寄り添う、かな？

「恨まれてはないです、絶対。でも……絶対怒ってはいますよ。なんで黙って消えるような真似をしたんだ、そんなに自分たちは頼りないかって」

薫さんに黙って消えたわけじゃないはずだけど。

それでもシヨックを抜けた薫さんもまたブチキレてるだろうな、おんなじような言葉と一緒に。

「……関わったつもりがないと言う割には……よく知っているように話すのでござるな、弥生殿は」

「ええ、そうですね。あなた程皆と関わったつもりがなくても、この程度はわかります。わかるんですよ、剣心さん」

気づいてないかも知れないけど。

心の奥底ではわかってるんだろう？ あの場合に居たいと思ってしまう自分の心を。

戻るべき場所に成り得たと感じてる気持ちを。

何より俺の言葉に心を乱した。

それが何よりの証拠だろうよ。

「——っ！」

「……剣心さん」

「わかつてるでござる……だが女と複数だろう男の声。志々雄一派ではなさそうでござるが」

いやまあわかつてるよ俺は。

卷町操。

四乃森蒼紫大好きっ娘の登場だね。

「ああ、関わりたくないと言うなら私が行きますけど——」

——どうします？

そんな風に目で聞いてみれば。

「山賊か追い剥ぎの類か……どちらにしても放っておくわけには行かないでござるよ」
そう言つて、やつぱり困つたように笑いながら腰を上げてくれた。

「あーっ!? あたしの外套おっ!!」

「あ、すまぬ、つい……」

まあちょうど目にできたのは男達をのした操ちゃん。

お金の代わりに剣心の刀を剥ぐと豪語するんだけど、ごらんの有様だよっ!

あー、まあそろそろ私が出るか……。

「はいはい、落ち着いて下さい。外套のお金はお支払いしますから……とりあえずこの

お金は返しに行きましよう?」

「何よつ! 急に出てきて! そのお金はあたしが手に入れたんだからあたしのもんだつ!」

はいはい、うるさいですよつと。

あ、良いんだよ剣心。逆刃刀渡さなくていいんです。

なあに経費で落ちるさ。さて、財布は――

「――つと」

「へえ? やるじゃん」

手癖わりいなこの娘。

財布だそうとしたところに手を伸ばしてきおつたぞ。

うーん……正直さつさとこの金返しに行きたいんだけどなあ。

一応俺は警察へと協力している身だからさ、悪事を見過ごしてしまつたら齋藤に怒られるじゃ済まないわけで。

「弥生殿?」

「剣心さん、それ小田原宿の田村屋つてところのらしいですので先に返してきてくれませんか? ちよつと私、この子とお話してから追いかけますので」

「おはなしい?」

なんて言ってみればすんなり頷いてくれた。

理解が早いっすねうん、それだけある意味信頼されてるのかな？

「あ、ちよつとっ！」

「はいはい、あなたは私と楽しいお話タイムですよ」

「何さっ！ あれはわたしんだっ！ もうっ！ いいよ！ 外套代にあんたの金剥いで

すぐ追いかけてやるっ！」

がめついなあ……ちやつかりしてると言うべきか？

あ、でも苦無じゃなくて体術で向かってきてくれるのね、そこらへんは良識的かも？

いやいや、追い剥ぎする子に良識ってなにさ……大概俺も毒されてるなあ……。

「んえっ!？」

「……うん、いい体術です。よほど良い師に巡り会えたんでしようね。でもまあ……お

いたが過ぎますね」

流石の般若さん仕込みというべきかね。

掌打が外れるや否や当て身に切り替えて……さつき剣心にもやってたよねそれ。

ちよつと女だからって甘く見ないでくれますか？ 俺、男ですから。

「な、中々やるじゃない」

「へえ？ 中々、で終わらせられるのですか？」

攻撃の繋ぎ。

当身に切り替えようとした先に木刀を置く。

中途半端な体勢でその木刀に触れるか触れないかの位置で止まっていた操ちゃんは俺の言葉で慌てて距離を取り直す。

「……」

「ああ、苦無使います？ 先に言っておきますが無駄ですよ？」

剣心みたく抜刀の風圧で落とすなんて芸当は無理だけど。

少なくとも持つてるだろう苦無を避ける自信はある。

操ちゃんの貫殺飛苦無は点と面の攻撃、両方の特性を持つ。

まずは一本を集中して投げる、暗殺とかそういう点の攻撃。

だけど今はこうしてお互いの面が割れて、相対している状態。

一本一本を連投するなんてその繋ぎに合わせて攻撃して下さいと言っていているようなものだ。

撤退しながらの牽制として使うなら有用だけど、少なくとも今の操ちゃんに撤退の文字はないだろう。

なら一度に数を投げる。

それが面の攻撃だ、単純に避けづらい。

しかしながらそれをやってしまいもし外れたら後が無いことは理解してるだろう。残されている体術。それは俺に通用しないとさつき証明されてしまってるのだから。支援として遠距離から攻撃するならともかく、一対一で戦う巻町操の真髓は苦無と体術の組み合わせなのだろうから。

もつと言えばそもそも一対一を仕掛けるのが間違ってる。さつきの盗賊達とはそもそも力量差が大きいから対処出来ただけだ。

「先に言っておきます。今の私は逮捕権を所有しています」

「な……」

期間限定ではあるけど、志々雄に関わってるだろう人間を捕縛、逮捕出来る権利。

一応今の俺は密偵に限りなく近い存在に加えて、警官としての権利も有しているなんてチート状態。

……よくもまあここまでの権限を俺に与えたよ斎藤さん。ちよつと信頼しすぎじゃねえ？

「今ならあのお金を返して、無かったことにしてあげます。ですが、その手に持っているものを私に投げれば……保証はしません」

「ち……」

うわ、俺性格悪いな!? よくもまあそんな言葉が口からでたよ。

間違いなく斎藤の影響ですねこれは。

あつはつは、都合悪いのは全部斎藤のせいにしちやえ！ てへぺろつてなもんだ。「もう少し言いましょうか。今なら、引き分けという体で落着けますよ？」うん。

これがトドメの言葉だろう。

操ちゃんの戦意が萎えていくのがわかる。

流石にそこまで馬鹿じゃない、ここで本気を出してぶつかり合う意味なんて無いし必要もない。

「わかったわよ……」

「はい、ありがとうございます」

めっちゃ不服そうではあるけど、な。

そんでまあご丁寧に田村屋の前で待ってた剣心と合流して。

流石に壁をひとつ飛びなんて芸当は出来ない俺だから河原で待っていると行って。

あそこに見える橋がもう少しで剣心によって破壊されるやつだろう。

つてなるとこのあたり。

ここいらにいればまあまた合流できるだろうさ。

「もうすぐ、新月村、か」

座ってみれば石の感触が冷たくて。

今までの弥生は新月村へと足を運んだんだろうか。

オリジナルの弥生はその村でどういった生活をしていて、どういった理由で東京へ出てきたんだろうか。

そう、俺が知りたいのはそこ。

志々雄一派……てか尖角だっけ？ により占拠状態だろう村。

開放したいがために、ではなく。開放しなければ弥生の情報が聞けないから開放する。

もちろん三島兄のことも助けられるなら助けたいけど……無理だろうな。

あの人の死を剣心が看取るからこそ、そこへ足を運ぶ理由になるんだし。

京都に着くまでに。

俺は弥生の情報を集めたかった。

オリジナルの弥生。

そんな弥生の終わらないループ。

弥生は剣心に殺されたら終わるといつていた。

るろうに剣心の流れがわかっている俺にとっては正直無理も無理だと断言出来るん

だけど。

知っているからこそ弥生の死という道を模索出来るのかも知れない。

そう思つて、そう思つたからこそ弥生へと興味が湧いたんだ。

「わかつたからつて……実行するかはわかんねえけど」

自殺願望者じゃあるまいし。

なんで自分が殺されるために努力しなきゃならないんだつて話だ。

だから空想。

もしも緋村剣心が緋村抜刀齋になつてしまつたらつて可能性を妄想する理由でしかない。

ただそれでも。

後世の人間をこの世界へ産み落とす。

後の世代を使つてこの世界を繰り返しているのなら。

「……らしくねえ、な」

口から聞こえた音は女の声。

俺はもう俺じゃない。

元の俺を既に忘れそうになつていくくらいには馴染んだこの身体。

他の誰かも、こうやつて弥生になる。

それは、少しだけ、気持ちが悪いく気がした。

「つと、そろそろか」

橋を渡ろうとしてる二人がヤクザ達に挟まれた。
ならそろそろ橋も落ちる。

「……これって、この後誰が修理するんだろうな」

俺、しーらないつと。

その男、帰郷につき

「ねえっ！ ねえつてば！」

弥生ですが、後ろから聞こえる声がうるさいです。

いやまあ仕方がないよね、ついうっかり四乃森蒼紫つてワードを漏らした剣心が悪い。蒼紫の足取りを調べてる操ちゃんにとつては値千金というかようやく見つけた手がかりだ、食らいついて離さない意気は見上げたもんだよほんと。

針のむしろとまでじゃないだろうけど、剣心も居心地が悪そうだ。

別に責めてるつもりはないんだけど剣心にとつたら知らなかったとは言え自ら旅路を喧しくしてしまったことを反省してるんだろう。

その証拠になんとも申し訳無さそうな顔を時折俺に向けてくるし。

「仕方ないですつて」

「ああ、ありがとう弥生殿」

つてやり取りも何度目か。

「教えてよ！ 蒼紫様はどこー！」

しっかしもうちよつと聞きたいならそれ相応の態度つてのがあるんじゃないかね。

続く口汚い言葉チビやら男女やら……あ、おっぱいおぼけは褒め言葉ですども、羨ましいか？ ふふん。

操ちゃんは損してるよななんても思う、ある意味箱入り娘なんだろうとも。

御庭番衆先代の愛孫。

その立場というか出自から可愛がられてきたんだらうなど。

多分漫画やらで操ちゃんって人物を知っていなけりやあんまりいい気分ではいられなかつたのかもされない。

いや、想像してみてくださいよ。

なんかわからんけどストーリーカーばかりに付きまとわれて、挙げ句罵言を浴びせられ続けるわけで。

正直今の段階で剣心が御庭番衆の終焉を知っているから相手のことを察して腹を立てないって、どんだけ聖人だよって話。

良くも悪くも真つ直ぐで素直な操ちゃん。

だからこそ憎めないというか、可愛がってしまいうndらう。

とはいえ。

「……」

——どうするでござる？

そんな視線が向けられてきた。

どうするも何も、撤くしかないんじゃないかなって。

ほんで根性見せられて剣心が折れる形が一番いいんじゃないかなって部分。

ただまあそれに俺は間違いなくついていけないからどうしたもんかなって部分。

剣心はもちろんだけど、ぶつちやけ操ちゃんに追いかけられたらあつという間に俺は

捕まる自信がある。

ベースのスペックが違うすぎるからね、仕方ないね。

かと言って、別々に行動してつてなるとちよつと厳しいんだよな。

街道から外れて森の中を進んで行くからこそ新月村の事件へと介入できるんだし。

新月村を合流地点にして落ち合いますよなうなんて出来ないからなあ……ん？

——再合流地点は沼津宿でどうですか？

視線を送り返しながら口パク。

まあ伝わるでしょ多分。一瞬驚いてたみたいだし、疎通できてる出来てる。

どの道剣心が原作をなぞるなら新月村に行くことになるんだ。

だったらそれ前提で俺も新月村に行けばいいわけ。

俺と剣心だったら十中八九操ちゃんは剣心を追うだろう。

まだ操ちゃんに対して優しさと言うか、ある程度コミュニケーションを取ってる剣心

だし。

あ、俺？

一切合切無視してますよごめんさい。

いや、剣心程腹芸が出来る自信もないのでな……心がちよつと痛いけど思いつきり突き放してるほうがいい。

どの口が言うんだってツツコミは無しの方向で。

剣心の顎が少し沈む。

はい、それじゃ。

「撤くか」

「撤きますか」

案の定と言うべきか、操ちゃんは剣心を追った。

後から思えば捕まえるなら俺のほうがやりやすいんじゃないやなかろうかとも思ったりしたけど結果オーライ。

剣心は操ちゃんに折れて一緒に行くことになるだろう。

そして俺が言えたことじゃないが、街道じゃなく獣道を進むこと、そんな道を二人で行くことで歩みは多少遅くなるはずだ。

その間に俺は街道を急いで先に新月村へ行かねえとな。

「しっかし……」

弥生を掠める視線、視線、視線。

コレばかりは予想というか考えが及ばなかった。

可愛らしい女の子が一人旅。

あーこれだめですわ。襲って下さいって言ってるようなもんだわ。

そう、すれ違う若い男だったりなんなりが好色そうな視線で見てるわけですよ。

こいつらまとめて皆ホモ、間違いない。

「おいお嬢ちゃん、一人急いで何処へ行くんだい？ よかったら一緒に行つてやろうか

？ へへ……」

「結構です」

こんな声をかけられたのも何回目か。

ぶちのめしてしまおうかなんて考えたのも何回目か。

急いでるんですよ、ほんと。

剣心と操ちゃんだ、歩みが遅くなるつても知れてるし、常人より速いのは確かなわけ

で。

常人よりほんの少し上かもしれない俺程度じゃ必死こかなきや駄目なんすよね。

「おいおい、こっちは善意で言っただけ？ 顔くらい向け……ヒツ!?」
「私……自分より弱い人に興味ないんです。出直して下さいね」

流星に視線にムカついたからぶちのめすなんてしてしまおうと今の立場上まずい。

だから、こんな感じに無遠慮に肩を掴まれるって場面の時だけ相手をひっくり返す程度はする。

ただまあ……。

「ほ……惚れたっ!!」

「……変態」

なんか知らんけど。

睨んで邪魔するなど言っただつもりなのにこんな事を言ってくるやつが多いのはなんだろうか？

ちよつと明治進み過ぎてないか？ いかんでしょこれは。

仕方なく木刀で可能な限り優しく転がして差し上げる。

ほんつとき、勘弁してくれよまったく。

「——っ」

なんて馬鹿をしながらも時折感じる冷たい視線。

好色馬鹿の影に隠れて感じる命の脅威。

剣心と別れてから感じるこの視線は明らかに多くなった。

ある意味作戦は成功だったんだろうな。

志々雄の手先に間違いはない。

今の所襲ってくる気配は無いし、別れてから初めての一人野宿でも仕掛けて来られなかった。

おかげで若干寝不足だ、どうしてくれんだよ全く。

上手いなと思うのは、手下どもは交代制で見張りをつけているってところ。

何度か視線の持ち主を突き止めてはいるものの、様子を伺っている内に違う人物に変わっていたりと組織的に見張りをつけている。

様子を伺おうと待ちの姿勢を取ったのがまずかったんだろう、こちらから仕掛けるつてのは難しくなった。

それに加えてなんでも無い一般人かつこ変態ども。

ものすごくやりづらい。

そういう意味から考えれば、剣心が森の中を進んだのは結果的に良策だったんだな。追っ手にしても監視の目にしても、振り切りやすいし突き止めやすい。

もちろん隠密に優れた相手なら難しいのかも知れないけど、そこは剣心に操ちゃん。プロもプロつてもんだ。

「しくじったなあ……」

思わず愚痴ってしまうよ。

正直なところ剣心に監視をつける理由ならいくらでも思い浮かぶ。

だけど弥生にそれをつける理由がいまいちわからない。

もちろん警察側、国側の人間の一人として捉えられているだけなら構わないんだけど、剣心と一緒に行動していたからな、それがどう作用しているもんやら。

逮捕権を持っているんだ、片っ端から捕まえてしまうってのもアリなのかも知れないけど。

今に限って言うなら新月村へと剣心達と同時、あるいは先に着かなきゃならないわけだ。

うーん……。

「ま、いっか」

あんまり深くは考えないでおこう。

とりあえずこれで足を絡めている暇はないってのは確かだ。

急がねえとな。

「貴様、余所者だな」

「……いいえ？ 余所者ってわけじゃないですよ？」

急いだ結果がこれだよっ!!

ひのふの……八人位？ めっちゃ囲まれてる、囲まれています。

うわー……やっちゃったなあ、ほんと。

これあれだよ。

俺に監視をつけてた理由でしよきつと。

別に迂闊な真似をしたつもりは無かったんだけどな……この辺りなら剣心達と合流

しやすいかと落ち着こうとした場所に兵を置かれた。

「余所者は生かして帰さんっ!!」

「だから違うって……もう」

一応この村出身らしいんだがなあ。

ともあれ村には入っていない、まだ入り口が見える位置。

「死ねえっ!!」

「――」

後ろの人が槍で突き殺そうとしてきたみたいだけど……当たらないねえ、訓練してる？

あ、次は右ですか、はいはい。おー悪くない太刀筋つすねえ。

「い、い、いっつー！」

「……うるさいなあ」

考え事に集中できないじゃないかまったく。

確かに袋叩きさながらの光景で状況なんだろうけど、あんまりにもなっていない。

数の暴力を活かしきつてない。

逃げられないのは間違いないけど、だからといって俺を仕留めきれないのも間違いない。

自分の身体を弥生に任せて、状況を整理しよう。

さて、どうやら俺は剣心達より早く辿り着いたようだ。

剣心が先に着いたってんならもうちょっと村中が騒然としてるだろう。

そんな様子も見られないし、時期を間違ったわけでもなさそうだ。

「この、ちよこまかと……！」

ということとは、だ。

「チャンス、か？」

おっと、目の前を刀が通り過ぎましたね怖い怖い。

そうだ、これはチャンスだ。

三島兄、あの人は間違いなく剣心の目の前で息を引き取った。

それはつまり剣心が来るまでは生きていたって証明に他ならない。
元々の目的。

弥生を探るって事を考えたら――。

「いい加減に――へぶっ!？」

「はい、考え事終了っ! あ、邪魔なんで退いてくれますか?」

そうだね、俺を討ちたいならそれこそガトリングガンでも持ってきてどうぞ。

雨は避けられないけど、そんな余白のありすぎる攻撃じゃ甘い甘い。

……強くなったよなあ。

「まあ、律儀に相手する必要もないんですけど……ねっ!」

「ぐふっ……」

よーし、とっかーん!

相手の崩れた陣形を突破する。

勢いのまま村に突っ込んでみれば。

「あれはっ!!」

「ん?」

あの特徴的なトンガリハゲっ!

間違いないえっ!!

「尖角っ!!」

「なんだあ……? 小娘。邪魔をするな」

うわ、でつかい。比留間弟といい勝負かも。

明らかに異常成長、ハッキリわかりますねこれは。いや、破軍の不二ほどじゃねえか。そんなことより。

「その二人を離しなさい」

「あ、あなた……弥生ちゃんっ!?!」

「駄目だっ! 逃げなさいっ!!」

三島さんの両親、か。

いい人だな、今まさに殺されかけていたつてのに俺の心配か。

つてことは。

「三島さんは?」

「あの子ならっ……うぐっ」

「ほう、貴様この村の出か……貧相な村の女にしては中々良い身体をしてやがる。どうだ? この尖角様の女にならないか?」

うえ、きんもー。

冗談は頭の形だけにしてくださいよほんと。

「もう一度言います。その二人を離しなさい」

「聞く耳持たねえ……良いな、気に入った」

「いぶつ」

……ああ？ 気に入られてもなんも嬉しくねえけど？

ていうか乱暴に降ろしてんじゃねえよぶつ飛ばすぞ？

「おいっ！ 村のモンっ！ 出てこいっ!!」

「ひっ……!!」

ああ、ちっさい村と言えどそれなりに人はいるもんだよね。

何処と無く俺の育った限界集落を思い出さなくもないけど……あ、こんにはお久しぶりです？

俺の姿を見て弥生がどうのって言ってるあたり、ここが弥生の出身地で間違いは無いらしい。

ていうか人集めてどうすんのさ。ご丁寧に兵まで出てきたし袋叩きパートツはじまっちゃう？

「全員で、この女を捌れ」

「……は？」

「聞こえなかったのか？ 同郷の女だろう？ その女を全員で捌れ、殺すなよ？ 後で

俺が楽しむ」

……何いってんだこいつ。

「ひ、ひどいっ！ よくもそんなっ！」

「黙ってる。そうだな、女。お前が俺のモノになるってんなら……この二人は生かしてやるし、同郷のモンにボコボコにされずにも済むぞ？」

下衆、ここに極まれり、だな。

なるほど？ 擬似的な村八分かつこ物理って感じか。

確かに見知った人にそんなことされちや身も心も大ダメージだね間違いない。

しかも三島さんの両親以外仕方ないみたいな感じで石やらなんやら手にし始めたし？

同郷じゃなくてもキくな、これ。

「は、はやく尖角様に跪けっ！」

「お、お前が余計な事するからこうなったんだっ！」
投げられる石。

避けようとする弥生の身体をあえて押さえつける。

むっちや痛い。

石が、じゃない。

心が痛い。

原作改変しようとしてる罰がこれなのだろうか。

酷く醜いだろうこの光景、萎えてしまいそうだ。

いつそこいつらまとめて全員ぶっ飛ばしてやろうかとさえ思ってしまう。だけど。

「……その二人から、離れなさい」

「ク……ハーツハツハツハ!! 強い女もそこまで来るとはなっ! 何処まで俺好みにな

りや気が済むんだっ! ハーツハツハツハツハ!!」

開き直ってるんだって、俺はもう。

神谷活心流、巫丞弥生。

そう生きると、決めている。

「感謝しろよ? 俺は片腕くらいなくとも楽しめる! 楽しんでやれる男だからなっ!

ふんっ!!」

そうだな、感謝するよ尖角。

「——なっ!?!」

「ええ、感謝しますよ……あなたがグズの間抜けなおかげで、最高の結果を手に入れられそうです」

ああ、そうだ。

おかげで三島一家はなんとか命を繋げることができそうだ。

後は……。

「そのためにも尖角……覚悟してください？ 神谷活心流、巫丞弥生……参ります」

その男、勝利につき

「尖角に楯突くなんぞ……馬鹿なことを……！」

「そ、村長……巫丞家のモンが楯突いたせいで……お、俺たちも……」

「案ずるなっ！ もはやあやつは村の者ではない！ そ、それでどうにかなるっ！」

「はあん？ ほんつと弥生ちゃん何したんすかねえ……いや、家つつつてたから親がどうかしたのかね。」

「まあ、いい。」

「ブアウアアアツ!!」

「うるさいですな……！」

「今は出自よりこいつだ。」

尖角。

三下といえはそうなんだけど、それは剣心達にとつての話。

はつきり言つて俺にとつて相当な強敵に違ひはない。

だつてそうだろ？ 剣心の罠に引つかかつたとは言え、背後を取れる程の速さに加え

て――。

「ヴァアアア!!」

「……ちっ」

両手の握り懐剣。

力は見た目の通り強い。木刀で受け止めるなんて考えた瞬間死ぬだろうな。となるとやっぱりいつもどおり、避けるという手段に行き着くわけだ。

「フンツ！ ちょこまかと！ さっきの威勢はどうしたあ!？」

「その尖った頭に脳みそ詰まっています？ 詰まってるなら自分で考えたら如何ですか？」

原作では剣心のスピードと同じって思い込みによる自爆で勝負は終わった。

当然俺はあんなスピードを出せるわけないからその手段は取れない。

そう、そんな思考トラップに嵌めることはできない。

しかしながら。

「情けない姿だっ！ 一太刀すら抜かず、ただ避けるだけとはなっ！」

「ほんつと……うるさい」

まさに尖角の姿は暴れるって言葉がよく似合う。

懐剣を力任せ、速さ任せに振り回し、俺を追い立てる。

完全に主導権を握ったと思えるくらいに自分のペースで、すこぶる気持ちいいだろ

う。

至近距離で避け続けてるせいか、尖角の汗が時折跳ねてきて俺の嫌悪感も最高潮だ。間合い的には拳の距離に近い尖角。もつとも巨大な体躯もあつて小柄な俺からすれば木刀の間合いと噛み合ってもいる。

あえてその位置で避け続ける理由としては、尖角の攻撃がより激しくなるためつてだけ。

目論見通り、尖角は調子に乗つて勢いそのまま攻撃の回転を早めてる。

やかましい雄たけびとともに暑苦しいにも程があるつてもんだ。

対する俺。

冷静……つてわけでもない。

正直、気を抜いたら感情のままに木刀を振つてしまひそうになるのを必死で堪えてる。

落ち着いて、力を抜いて。

ただただこの異能に身を任せる。

集中。

視界がどんどん狭くなっていくのがわかる。

見るべきものはただ尖角の懐剣だけ。

アレほどやかましく聞こえた雄叫びも気づけば耳に入ってこない。

チラチラと俺を取り囲む兵や村人が見えるけど、尖角の勢いに巻き込まれてはいけな
いと遠巻き気味。

つまり。

俺と尖角の戦いに邪魔は入らないってこと。

「」

まだまだ調子に乗って何かを言ってる尖角。

内容はわからない、どうせヴァーとかなんとか言ってるんだろう。

俺だつて避けられないものはある。

たとえば雨を避けるなんて言われても無理だ。あたりまえだ。

剣心がいずれ会得する九頭龍閃だつて怪しいところだろう。

つまるところ俺は広範囲同時攻撃つてやつはどうあがいたつて避けられない。

尖角。

確かに速い。

持ち上げ過ぎかも知れないけど、剣心の龍巢閃を常に浴びてるようなもんだろう。そ
れくらい速いし力強さも感じる。

けど、避ける合間が無いわけじゃない。

その間へ身体を滑り込ませることに難を感じない。
いつだったか思ったな。

俺は体力の続く限り脅威を避け続けることが出来る。

それはそのままその意味だ。

そして警察署での荒行は戦闘体力を増加させるための稽古。
脱力する。

余計なものをこそぎ落としてただただ避けると言う一目に専念する。

邪魔な情報をシャットアウト。

音も、景色も……全て。

そうすれば完全な無の空間。

俺だけの世界ができあがる。

「はあっ！ はあっ！ 何故だっ!? 何故あたらないうっ!？」

世界から帰ってきたのは頬に水滴を感じたから。

目の前には汗だくの姿になった尖角が荒い息をつきながら両腕を信じられない思い
を振り払うように動かししている。

「ヴァ……ヴァアアア!!」

「……そこです」

気がつけば避けることしか入れ込めなかった合間は攻撃を入れ込む程の大きさに
なった。

膝を狙ってコツコツと木刀を振るう。

「ハ……ハーツハツハツハ！ 何だその攻撃は！ そんな太刀ではこの尖角様をいつまでも倒せはしないっ!!」

「——阿呆が」

おつといけねえ、斎藤さんの口癖がうつちやいましたねテヘペロ。

何処に元気を取り戻す要素があったのか。

確かに一刀のもとねじ伏せるなんて出来ませんよ。

俺の戦い方はいつだって、いつまでも相手の力を利用するだけ。

避ける、打つ。

避ける、打つ。

相手の攻撃と重なるように、カウンターを膝に集める。

そして。

「ウグツ!!」

「……いつまでも倒せない、でしたか?」

やったことは二番煎じ。

相手の自滅を誘っただけ。

ただ、俺でも出来る……いや、俺だから出来る方法で。

「気持ちよかったですか？ すつきり出来ました？ ……私で、満足は出来ましたか？」

「あ……あぐ、あ……」

興奮して、いい気になって、逃げまどう俺の姿に満足はできたかな？

興奮で消えていた痛みが限界を超えて。

気づけば尖角の両膝は青いを通り越してドス黒くなっている。

両膝を震わせながらなんとか立とうとする尖角だけ。

「えい」

「ウグアアアアアアア！」

あーうっさいの復活だな。大の男……いんや、でかすぎる男がみつともない。

「お、お前らっ！ こ、こいつを早くやってしまえっ！ おいつー！」

「みつともないですねえ……良いですけど。で？ やりますか？ 尖角を今にも殺せそうな私と」

一瞬武器を構えようとした兵たちは一睨みでその戦意を萎えさせ尻もちをついた。

ま、ここで逃げてもどうせ志々雄はこいつらを処分するだろうし？ いい言葉だよ

ね、弱肉強食。

俺に向かつてくるのが殺されない分正解だけど、それを理解されちゃいけないよな。
「あまり虐めてやるな、巫丞弥生」

「っ！ 斎藤さん……」

立ってる人間に目を向けてみれば一週間ちよつと付き合つた嫌味つたらしい笑顔。
なるほど、どうやらタイミングはわりと合つていたらしい。

斎藤の後ろには困つたように笑う剣心と驚きに目を丸くしてる操ちゃんに……。

「弥生……姉ちゃん……？」

「お久しぶりですね、栄次君」

三島弟が顔を覗かせていた。

「貴様の案じていた三島栄一郎も一命を取り留めた。安心しろ」

「そう、ですか……良かった」

ならこれで三島家は全員無事つてわけな。

だつたら後は。

「あなただけですな、尖角」

「ヒッ……!!？」

視線を戻してみれば芋虫……というにはでかすぎるな。

手だけでなんとか後退ろうとしてる尖角の姿。

「どうします？　このまま志々雄に殺されます？　それとも大人しく法に裁かれます？」

「あ、あ……」

「……いや、その必要はないかもですね」

「あの、巫丞のモンが……尖角を……」

「なんでも良い……今、尖角は……！」

ほんとと……この村の人って都合良いよな。

絶対強者で自らたちを圧する者が弱っていたら……。

「齋藤さん」

「なんだ」

「……私じゃ、ちょっと止められないです。お願いしていいですか？」

正直すごく気持ちが悪い。

悪意……なんだろうか、よくわからないけどそんな悪い空気に酔った。

「やれやれ……仕方ない。その代わり、三島一家は任せたぞ」

「はい、お任せ下さい。それに……この後、行くんでしよう？」

そう言ってみれば当然だと言わんばかりに鼻を鳴らしてくれる。

志々雄がいる屋敷に乗り込んで、そこで尖角の相手をするって算段は狂ったけど。

そのおかげで三島一家に対するフォローと自分のフォローができそうだし、仕方ないか。

「……あんた、ただもんじゃないとは思ってたけど」

「よして下さい、買いかぶりですよ。それよりお願いがあります。私が三島さん達を安全な場所へと移す間、周囲の警戒をお任せしたいのですけど」

「わかった。こんな状況だし、一肌脱いであげる」

うん、ありがとう。

やっぱりいい子なんだよな、操ちゃん。

「弥生殿」

「……志々雄の居場所は斎藤さんが掴んでいます。京都より早まりましたけど……行くのでしよう?」

覚悟決めてる剣心は頷いて。

まあその覚悟はから回って挙げ句逆刃刀折れちゃうんだけど……必須イベントだろうし仕方ない。

志々雄にしてもせっかく尋ねてきてくれた先輩を無碍にするなんてことはしないだろう、それ故のカリスマだろうし。

「ほんとに……弥生姉ちゃん、なのか?」

「……ええ、もしかしたらあなたの知っている私ではないかも知れませんが、ね」
とりあえず、場所変えますか。

あんまり、誰にとつてもここは良い光景ではなくなるのだから。

三島兄こと栄一郎さんは村からすこしだけ離れた荒屋に簡単な手当をされた状態で横になっていた。

この場所を懐かしく思うのはなんでだろう。

ボロボロの家だけど、確かに昔生活していた痕跡が残っている。

「……ただいま」

無意識に言葉が口からこぼれた。

そして理解した。

「こんな形の帰郷になっちゃって……なんて言ったら良いのかわからないけど……おかえりなさい、弥生ちゃん」

ここは、弥生の生家だ。

三島母さんが複雑な顔で言ってくれて。

それ以上に難しい顔をした三島父。

「兄貴っ!!」

「……栄次？ それに、親父……お袋……？」

ちようど英一郎さんも気がついたようだ。

身体を起こそうとしたけど、やっぱりそれなりに重傷なんだろう顔を顰めて結局身体を横にしたまま。

「良かった……良かったよ……」

出来れば抱きつきたかったんだろうけど、そんな兄の様子をみて傍らに座り込み泣く栄次。

親父さんとお袋さんも安心できたようだ。

「……まずは皆の手当をし直しましょう。準備しますから、とりあえず皆さん楽にして下さい」

そう言ってみれば緊張の糸が途切れたかのように座り込む。

当然だ、今の今まで殺されかけていたんだ、疲労の極地にいると言っている。

改めて見れば皆栄一郎さんほどじゃないけど怪我をしているし、命に別状はないとしてもほつといていいレベルでもない。

とりあえずお湯を沸かして皆の身体を一旦綺麗にしないと。

布は……うーん、箆筒に入ってる服、煮沸すれば使えるか？ 村に戻って必要なもの

を取ってくるわけにはいかないし……。

まあ一旦これで様子を見るしかないか、幸い沼津宿まで遠くはない。

ある程度疲労を抜いて、身体が動くようになって。宿まで行けたらなんとかなるだろう。

しかしどうするかな。

どういう風に説明して理解を得ればいいんだろ。

まずこの人達との関係性がわからない。

三島一家は弥生のことを知ってるみたいだけど、アレだけのやり取りじゃ流石に掴めないっすよ。

むう、原作外しの弊害は大きいなあ。

「ごめんなさい、やらせてしまつて……何か、何か手伝えることがあれば……」
「あ、いえいえ。大丈夫ですからゆっくりしてて下さい？」

うーんやつぱりいい人なんだろうな。

申し訳ないって文字を顔に貼り付けて言ってくれるのは悪い気しないんですけど無理しないでくださいいねお袋さん。

「で、でもっ！ 私達はあなたにあれだけの事をしていたのにつ！ こうして命まで助けてもらつてっ！ これじゃあ——」

「やめなさい」

おつとー……情報を零してくれるのはありがたいけど、何やら不穏だね？ 正直もつと言つて下さいどうぞつてなもんだけど……そう気楽なものでは無いのね。

「……改めて、ありがとう。こうして一家無事なのは弥生ちゃんはもちろんあの人達のおかげだ……だが、どうしてだい？ 僕達含めた村の皆が巫丞家にした仕打ちを忘れてしまったわけではないだろう？」

「……」

どうやら弥生は、いや巫丞家は何かされていたらしい。

沈黙は金。

こういう時は黙るに限る。

「助けてくれたことは感謝しているんだ……本当に、恩返しが出来たら何でもすると誓える位に。だけど……本当に手前勝手だけど、恨まれて当然の僕達を助ける。それをとて不気味に思つてもいるんだ」

意を決して……いや、多分これが大黒柱なんだろうな。

きつと不気味に思つてゐるのは三島一家全員の考えでもあるだろう。

恨まれて当然、か。

「罪を憎んで人を憎まず、ですよ。それに私はきつとあなた達の知っている弥生じゃあないです。今は神谷活心流巫丞弥生。活心流の理に従つて助けたんです」

嘘は言っていない。

弥生の問題はこの際置いておくにしても、俺の都合的にどの道少なくとも栄一郎さんに対して情報のすり合わせをしなきゃ駄目だっただけでもある。

無論、神谷活心流の担い手として当然の行為だとも思っているけどな。

「……大人に、なっただね」

「それほどの時間は、きつと経ったんですよ」

時系列もわかんない。

どのタイミングで弥生がこの村を出て神谷活心流道場の世話になりだしたのかとか。ろろうに剣心の世界は理解しているけど、巫丞弥生の世界は全く理解していないんだから。

それっぽく言っておくしか出来ない。

「それでも、言わせてくれ。僕達は君達を生贄にした。村の繁栄を願うがために君達を必要悪として扱った。それは紛れもない罪だ……憎まないと言ってくれても、それだけは一生を賭けて償わせて欲しい」

「あ、ちよ……あ、頭を上げて下さい!」

じゃばにーずどげぎ!?

うわっ! お袋さんまで!? ああ! 栄次君までしなくていいって!

慌ててそんな風に言ってる頭の傍らで。

妙な納得があった。

なるほど、詳細はわからないけど巫丞家は村八分にされていたんだろな。

そして、生家に来たと言うのに弥生の両親がいないということ。

それはつまり。

……。

いや、よそう。

単純に、シンプルに考えて捨て置こう。

要するにこの村人は尖角に占拠、統治される前から弱肉強食のもと生きる素養があった。

それだけの話だ。

「はあ、もういいですから、ね？ それより、傷の手当……やっちゃいますよ」

「……すまない」

いいんですよ。

腹黒い俺ですから、負い目を抱えてくれてるならありがたい限り。

この後するお願いを守ってくれる鎖になり得ますからね、えへへ。

その男、やり手につき

「弥生殿は齋藤と一緒に行くのでござるか」

「ええ、伏せていましたが京都まで一緒にするのが目的ではありませんでしたので」

三島一家にはこちらの都合についてよく話して理解してもらった。

流石に中身違うんすよーなんて言えなかつたので、若干強引に三島兄の名前を利用させてもらったこと。

悪用には違いないけど、俺自身志々雄一派と戦うためにそうしていると。

「なら次に会うのは」

「はい、京都で……また、お会いしましょう」

そう言つてまっすぐ剣心の目を見る。

やつぱり、人斬り抜刀齋とるろうにの自分で揺れている剣心。

言い換えれば、まだ俺はこの人に殺される事が出来る。

なんて。

思考の中にそれは存在しているけど、その道を辿ることは無いだろうな。

新月村でのこの一件。

おかげで俺はるろうに剣心の世界でやりたいことが見えた。

「ねえ、あんた」

「……やれやれ、私には一応巫丞弥生という名前があるのですが」

「……弥生」

「はい、なんででしょうか？」

操ちゃんから向けられる目には色々なものが宿っていた。

剣心のように……いや、剣心程とはまだまだ言えないだろうけど、やっぱり俺も常人の壁を超えつつある人間。

それが今回よくわかった。村人から向けられる視線はほぼ全てが苛立つものではあったけど、中でも尖角に対して向けるものと一部一緒であるということに気づいて若干泣きそうにもなった。

「ううん、やっぱ、いい」

「そうですか……いえ、それがいいと思いますよ」
だからだろう。

操ちゃんも、四乃森蒼紫の情報を持っているに然る人間として俺を認めただ。

今聞かなかったことはきつとその情報に関して。

あるいは、何処か俺のことを侮っていた点に対して何かいいたかったのかも知れな

い。

二人と一旦別れの挨拶を終えて。

振り返ってみれば三島一家と斎藤が話している光景。

「巫丞弥生。三島一家は警察で保護しながら東京へ向かわせるでいいんだな？」

「はい。三島さん達を襲撃する理由はもう無いでしょうけど念の為。向こうに着いたら一旦栄一郎さんの家で過ごしてもらって……私が帰れば、また追って連絡します」

「……ありがとう。この恩は、必ず」

やだなあもう、いいんですよーちゃんと口裏合わせてくれたらー。

そういつて親父さんが栄一郎さんへと肩をまわして馬車に乗り込んでいく。

お袋さんも俺と斎藤にふかーいお辞儀をした後背を向けて。

そんな中。

「なあ、弥生、姉ちゃん」

「どうしましたか？ 栄次君」

何かを考え込みながら、俺の目と別の場所を行ったり来たり。

複雑といえば複雑だな。

原作では孤独になったこの子、斎藤の家内である……確か、時尾さんだっけ？ その人のもとに身を寄せることになるけど。

それがこうして一家無事である。

自分以外全員の死を知った時の栄次は復讐に生きようとして、剣心に窘められて涙を流した。

今回、この子は何もしないでそのまま事態が過ぎていっただけだ。

自分の手を、動かすことのないまま。

それは間違いなく幸せなことなんだろうけど、復讐を誓うように過激な面を持ち合わせているこの子だ。

やっぱり整理しきれない思いがあるのだろう。

だったら。

「……え？」

「悔しいですか？　自分が何も出来なかったこと」

しやがんで、頭に手を乗せる。

そうしてしっかり目を合わせる。

「……」

「私も似たような気持ちを感じた覚えがあります。わかる、とは言いません。ですけど」

ずっとずっと守られる側の人間である。

それは、ある意味あの村の人間と同じとも言えるんだ。

誰かのせいすること、それは誰かを盾にすることもあるんだから。

「強くなりなさい、栄次君。キミが守りたいものを守ることが出来るくらいに」

「――！」

納得するには強くなるしかないんだ。

自分で自分を納得できる位に。

誰だつて誰かに守られて、そして誰かを守つて生きている。

悪くばかり言つてしまったけど、あの村の人間だつて確かに自分たちの生活を守ろうとしていたのだから。

「ああー！」

「ん、いい顔です！ さ、皆待つてますよ？ 道中気をつけてくださいね」

元気に走る背中を見送る。

出来れば神谷活心流で、なんて気持ちもあるけどそれはあの子が選ぶことだ。

ていうか類友とでも言うのかね、仮に栄次が神谷活心流の門を叩いたとしたら似たような子が三人に増えてすつごいことになりそう。

「やれやれ、随分と子供の扱いが上手い」

「そうでしょうか？ ……まあ、こうして年下の子を可愛がることなんて、東京へ行くま

ではありませんでしたから。その反動で甘々なのかも知れません」

あーだからそういう笑い方はやめてくださいってほんと。

色々こつちも裏考えちゃうんですからね、勘弁してほしいのです。

それに、だ。

「そんなことより。私の身の潔白は証明出来ました?」

「……つたく。ああ、安心しろ巫丞弥生。以降貴様は純粹な協力者だ」

重傷患者相手だけど、それはやっぱり取りたかつた裏だろう。

抜け目無い齋藤ではあるけど、俺に対する信頼を深めるためでもあるだろうし。

うん、三島兄、グツジョブ。

齋藤をだまくらかすじゃないけど信じさせるとか並大抵のことじゃねえつすよ、素晴

らしい。

……なんて思いたいけど。

齋藤を欺くなんて無理って考える方が自然だよな……大事の前の小事として捨ておいてくれるのか、それとも別の判断材料があったのか。

まあ少なくともこうして参加を許されてる以上、俺が裏切らなければいいだけか。やられそうになつたらなつたときだ。

「なら……次に進みましょうか」

「ああ。しかし、良いのか巫丞弥生。俺としてはありがたい反面、惜しくもあるのだが」
そう思ってくれるのはありがたいけどね。

一応顔見知りさんが無残に殺害されてしまっただけなのは結構心に来そうなんです。

俺の次の任務。

それが斎藤が集めた剣客隊の護衛。

この新月村で緋村剣心の内に潜む人斬りを頭にするという目的のもと十本刀へと集結令が下る。

その中で一つ見過ごせない事件があつて。

「ご自分で言っていたでしょう？ 私達の動きは掴まれている前提で動いたほうが良いと。なら、自由に動ける私が適任です」

「確かにそうだがな……いや、現地の警官がどれほどかわからんが主力に替えは利かないか」

そういうことですよ。

神戸に向かつて、そこから京都を目指す斎藤の選りすぐり。

言い換えれば東京の警察署で俺の稽古に付き合ってくれた人達。

彼らは神戸に着き、そこで十本刀の宇水の殺される。

宇水の情報、まあ力量だな。

それについてまだ把握していない斎藤は、恐らくこの時点である程度の被害は出るかも知れない位には考えていると思う。

「ただ結果的には全滅。」

俺自身宇水の相手を出来るとまでは言わないけど、一晚……同じく十本刀の張曰くの夜襲一、二時間なら耐えられると思う……いや信じたい。

流石に斎藤へ手傷を与えられる相手だ、そう安くは見積もらないし、見積もれない。

「しかし忘れるな」

「あ、はい？ 何をでしょう」

「珍しい顔してどうしたのさ。」

「奴らは確かに主力ではあるが、欠けてはならない力は貴様や抜刀斎である事を」

「……」

あれあれ？

あれれのれー？

「………何だ？ その腹立たしい顔は」

「いやーまさか斎藤さんに心配されるなんて思ってたんですけどすねー？ そうですよねー私も戦力の一人ですもんねえ？」

「いやー良いもん見れたし聞けたわー！」

これは家宝にしなくてはなりませんね間違いないっ！

「……猫娘が」

「ね、ねこむすめえ!？」

え、なにそれ可愛い。

いやいや、猫かぶりって意味なんでしょうけどね！

「……心配してくれて嬉しいにゃん」

「……いいだろう、精々主力を守る盾となり役目を果たしてこい」

あ、駄目ですか。

まだまだ明治は語尾萌え文化に届いてなかったですかそうですか。

そんなわけで、色々改めてお船の上。

一度東京へ戻って準備をし直して運びだったから忙しなかったけど。

幸い船酔いには強かったらしく、快適に過ごせている。

「」

だから考える。

宇水対策。

やつ曰くの心眼、その正体は視覚が奪われたことにより発達した異常とも言える聴覚

だ。

心音や筋肉の動きまで聞けるその耳は、確かに姿や光景を見なくともその場を把握出来るのかも知れない。

しかしながら、だ。

「おーい、弥生ちゃん。こんなもんでいいのか?」

「ん、はい、良いですね。ちよつと使つてみましょうか」

導火線に火を付ける。

ジジジと音を立ててそれが短くなつて――

「おわつ、結構いい音するな!」

「……はい、これなら十分でしょう」

大きな炸裂音を響かせた。

今炸裂したのは爆竹。

玉屋、鍵屋つてのは江戸時代からある。つまり花火の専門屋ね。

花火が世に出回り始めたと同時に爆竹も花火に比べたら下火だけど流通している。

そう、今回宇水対策に用いるのは爆竹と銃。

「しっかし銃はわかるが、なんでまた爆竹なんか?」

「子供騙しと思われるかもしれませんが……私達が気をつけないといけないのはやはり

夜襲です。暗闇の中、爆竹とは言え火薬。相手をひるませるには十分です、銃は爆竹をより効果的にするためのものですよ。主体は爆竹です」

宿みたいな小さなところで銃を扱うなんて難しいのはわかってるしな、しかも想定上では夜だし。

脅しというか、そんな要素でしか無い。

こちらの人数は五〇人と俺。

つまり五一人がいる、そんな相手に白昼襲撃を仕掛けるのは無謀ってもんだらう。

実際宇水も夜を選んでいる、夜襲、暗殺に近い形のほうがやりやすいと判断したんだらうさ。

時間や人目を気にしないでいいなら真つ向から相手しても勝てる実力が宇水にはあるんだらうけど。

仮に俺一人対宇水という状況で二時間耐えろってのは……十分じゃないけど可能だと思いたい。

ただ、今回はこの人達の生存ってのが条件にある。

形としては俺が宇水の注意をひきつけて、まわりから攻撃ではなく爆竹で宇水の注意を逸らすことが出来ればって感じ。

それにやつぱり爆竹は音もでかい。

宿場でこんなでかい音を立てたら当然騒ぎになるわけで。これなら一、二時間と言わずもつと早いうちから撤退という手段を取らせる事が出来るかも知れない。

何より。

「……憂さ晴らし如きであなた達の命を取られるなんて、許せませんから」

「ん？ 何か言ったかい？」

「いえ、何も」

志々雄への復讐を諦めたくせに、諦めてないふりして。その憂さを晴らすために人を殺す。

しみつたれすぎでしょ。かつこわるいにも程がある。

全員無事に京都へたどり着く。

恐らく宇水を撤退させることが出来れば、それは叶うだろう。

もしかしたら一度撃退しても何度か再襲撃してくる可能性はあるが。

どちらにしてもお互い時間は有限だ。

志々雄にびびってる宇水だ、そう到着を遅らせるわけにはいくまいて。

後は。

「そう言えば、弥生ちゃん。アレ、出来るようになったのかい？」

「ああ……そう、ですね。一応、実戦でも出来ましたけど……まだ想像してる完成には程

遠いですね」

「え、実戦したのかい!？」

ええまあ一応。

ただほんとに完成には遠い。

理想というか完成形はやっぱり攻守……いや攻避一体の動きだ。

尖角は確かに速かった、それ故にあいつが疲れる、動きが鈍くなるまで回避に徹する
ことしか出来なかった。

それはまだこれが完成していない証明。

「羽踏……完成したら、ぜひ手合わせお願いするよ?」
うとつ

「その呼び方やめて下さいってば……何だかむず痒いです」

この人達との稽古と……斎藤、新撰組の一つの技を必殺技にまで昇華させるというや
り方。

それで思いついた回避一点を突き詰めた動き。

誰が言い始めたかそれが羽踏。

尖角戦でやったように、脱力し完全に弥生の異能へと身を任せるもので、攻撃力も防
御力も投げ捨てて回避に特化した状態。

一番近いのは蒼紫の流水の動きだろうか。違うのは攻撃に移るといふ過程がなく、避

けることが攻撃になる……避けながら攻撃し続けるって部分だけど。

斎藤の牙突を避けつつ攻撃出来たのが一つの完成形ではある。

けどあれはまだ返し技って範疇を抜け出せていないようにも思える。

究極的には避けてる間に敵が倒れるって状態。

それが、俺の必殺技。

「だけど……一体弥生ちゃんは何処まで強くなる気だい？ 正直——」

「言わないで下さい……まだまだ、こんなんじゃ足りないですよ」

正直女の子にしては強すぎる、かな？

この人達もいい人だ、時代背景的に自分たちの上に女がいるってのは認めたくないことだろうに。

そんな雰囲気は欠片も見せず、憧れてくれている、倣いとしてくれている。

やっぱりそんな人をここで失うわけにはいかない。

「もし、完成できたら……」

剣心や斎藤……左之助の後ろに続くのではなく、並び立てるのだろうか。

そうなれば……いや、そうなりたくない。ならなくちゃ。

その男、迂闊につき

海上で宇水の対策というよりは襲撃者がいた場合について対策を検討し合ったり。

これから起こることを考えれば焼け石に水なんて言葉が似合うのかも知れないなんて思ったり。

ただ予想を裏切って、宇水の襲撃は神戸滞在中に訪れなかった。

嫌な変化だった。

皆には神戸から京都までの道中襲撃に気をつけましようと言っていたから肩透かしを食らったのは俺だけ。

それは不幸中の幸いと言うべきだろうけど、予想していたケースの中で最悪のモノでもあった。

何故襲撃されなかったのか。

警戒の仕方が露骨過ぎたのだろうか、事前に用意周到も良いところだったんだ、察知された可能性は高い。

だけど何度か味わった原作通りへの流れ。

その経験が宇水の襲撃はあつて然るべきだと俺に告げる。

だったら結局の所知っている俺がなんとかするしか無いんだ。

原作で詳しい日時が記されていない以上、この日この時に来るってのがわからない。ならば神戸から京都までの道中、俺が常に気を張らないとならないわけで。

「大丈夫かい？ まだ日程には余裕がある、少し休んだほうが……」

「いいえ、大丈夫です。余裕があるなら余裕がある分進みましょう。休むのはそれから
でいいです」

基本的に神戸からの道中は徒歩だ。

日中に動けるだけ動いて、夜間は俺を全面的に前へと出した安全確保。

そりゃ疲労も溜まるってもんで。

神戸を出発して道程はおよそ半分くらいだろうか。

今、俺の体力気力は限界に近い。

策士策に溺れるなんてまさにこのことだろう。

検討した内容はやりあっている最中を想定してばかりで、肝心の察知するって部分が薄いものだったと気づいた時には後の祭り。

「俺たちなら大丈夫だからさ、ほんとに少し休んだほうが良いよ」

「……お気持ちは、ありがたく」

我ながら頑なだなんて思いもするけどこればかりは仕方ない。

守ることの難しさ。

救えなかつた命を救う難しさ。

三島一家を救つたことでそれに気付かされた。

確かに俺は救つたさ、傷は多少つけてしまつたけれども命を守つた。

それでもそれが薄氷の上を歩いた結果には変わりない。

もしも、あの時尖角が俺の予想以上に強かつたら。

もしも、尖角が手段を選ばず途中であの両親を人質にとつたら。

……いかん、疲労でだいぶネガティブな思考になつてる。

頭は鉛でも入つてんじやねえかつて位どんよりしてる実感があるし、身体を動かしたくないなんて倦怠感に苛まれる。

一緒にいる人達から見れば何をそんなに必死となつていいのかと疑問が浮かぶ様だろ。

実際に何度か心配と呆れ混じりに言われたんだ。

そんなに俺たちは頼りないかと。

もちろんそんなつもりはない。

一緒に稽古したからこそわかるけど、剣心や斎藤が雲の上過ぎる存在なだけでこの人達も十分に強い。

仮に弥生の異能がなければ手も足も出ないレベルの人達だろう。

もつともそれは弥彦や、もしかしくなくても由太郎だつて素の俺からすれば雲の上の人種なんだが。

しかしながらにひしひしと感じる意識の差。

宇水の強さを知らないからこそそんな言葉が出るんだろう。

手も足も出ず……かどうかはわからないけど。

視覚に頼らない奇襲を得意とする宇水。そんな相手に夜間戦闘を強いられて無事である理由が見つからない。

加えてガチのタイマンでも斎藤に手傷を負わせた相手。

甘すぎるにも程があつた。

やっぱり、知っているっていうだけでこうも明確に差が生まれる。

この人達の力量も理解しているし、信頼もしている。

だけど、ここにはいざとなつたらの剣心も斎藤もない。

なら万が一にもを許せないし、全ては俺が解決しなければならぬこと。

「弥生ちゃん……」

「……行きましよう」

なら気張ろう。

気負いすぎると言われても、呆れられようとも。

俺の望む未来を掴むために。

果たして。

これは奇跡というべきだろう。

「ほう？　俺を察知できるとは中々……ただのネズミじゃないらしい」

「はは……そう言つて頂けるなら幸いですよ」

あれから更に進んで。それと共に疲労は積もつて。

限界つて言葉が頭に浮かんだその日の夜、宇水は襲撃を仕掛けてきた。

決まっていたかのように背後から俺の首筋を搔つ切ろうとしてきたらしい攻撃を躲して。

自分の身体とは思えない身体を動かして振り向いて、剣先越しに覗けばそこには薄ら笑いを浮かべた心眼さんがいる。

「しかし随分と……ククク、弱った様じゃないか？」

「つ……ええ、お陰様で」

ああ、そうだな今の言葉で確信した。

自滅を誘われたと。

「ああ、貴様の考えていることはわかるぞ？ どうしてと驚いているんだろう？」

「その下り、私としては飽きているんですよね。それに……驚くのはあなたの番ですつ
!!」

心底自分でも爆竹を持っていてよかつたなんておも——

「ああ、火薬の匂い……これは爆竹、か？ よく考えたものだと言っておくぞ」

「なっ——」

む、胸元に入れてたのに!? て、てめ、うら若き乙女の胸元弄りやがったな!?

い、いや構わねえ！ 皆が休んでるところとそんな距離は無い！ なら叫んでしまえ
ば——

「叫ぼうとした瞬間死にたいならそうすればいい。確かにこんなものを用意されてはか
なわん、手土産には物足りないが……無いよりはマシだろう」

「くっ!!」

や、やりづれえ！ ほんつとこのエセ心眼はたまらねえなあもう！

叫びながら戦闘なんざ無理だ、叫ぼうとした瞬間にさつくりやられて終いだ。

大きく叫ぶ、それは多量に呼吸を消費するつてこと。

筋肉は当然硬直するし、その隙を逃すこいつじやねえだろう。

……やばい。

なら戦う？ この疲労の極地と言える状態で？

逃げようとしたって簡単に追いつかれるだろう、戦っても……異能についていける身体ではない。

無理だ、策士策に溺れるどころじゃねえや、策士策に殺されるだなこれは。

詰み。

いや、まじでやばい。

「わかる、わかるぞお……手土産には確かに物足りないが、その気持ちで十分馳走にはなれた」

しくじった。

そうだ、そうだよ。

宇水の異常聴覚を封じれば戦えるなんて何故思えたのか。

こいつの真骨頂は襲撃……奇襲だ。

状況を読み取る力、察知する力だつてそれ相応に持ち合わせているはずなのに……！
「後悔は十分か？ 反省はしたか？ ならば……死ね」

「——っ!!」

くそ……やるしか、ねえ……！

どんだけ絶望的だろうが、俺は俺の名に賭けてここで負けるわけにはいかねえ！

「今が夜というのが残念だ。高笑いの一つでも贈ってやれたというのに……なっ!!」
「くうっ!!」

反応が遅い。

センサーが鳴ってからコンマ数秒。

その数秒が何度も知った命の分水嶺。

明らかに、死へと振り幅が寄っている。

「……疲労困憊なはずだが」

ああ、否定は出来ないさ。むしろ認める。

後何回避けられるかなんて考えるのが怖い。

もう次の一刀を避けられる自信なんて皆無。

ましてや宇水の必殺技なんて絶対に無理。

「ふんっ!」

「っ! はあっ!」

よ、避けられた……いや。

「なるほど」

避けてしまった。

それは、まさしくそうだ。

だつて。

「……あまり時間はかけたくないからな」

必殺技なんて思い浮かべなきやよかつた。

宇水は今、見切つたんだ。

普通には殺れないと。

流石、超一流。

濃密過ぎる殺意に身体が震えておしっこ漏れそう。

いや、そりゃご褒美か……ああ、駄目だ疲れすぎて思考回路がおかしい。

来るな、はつきりわかる。

宝剣宝玉、百花繚乱。

手槍……いや、ローチンだっけか？

あれと柄尻についてる鉄塊。そのコンビネーション。

尖角のとなんて比べるまでもないよなあ……あー無理だ。

詰みだ。

最後の最後に迂闊な手をうったもんだ。

素人が、中途半端に力を持つからこうなる。

いつだったか天狗になりそこねたから。天狗になつてる自分に気付けなかつた。

「死ね」

——宝劍宝玉、百花繚乱。

死。

「なん……!?!」

「は、はは……」

生きてる。

俺、生きてるよ。

「馬鹿なっ!!」

「あは……あはははははは!!」

あー身体めっちゃ重てえ。

いや、無理だつて無理。

ほら、今日の前を刃が……いやいや鉄塊が。

ああ、次は足？ 手広いねえ？ 腹？ はいはい。

なあんで生きてるのかな？ 俺。

もう完全に諦めてるつてのに。

もう完全に力を抜いてるってのに。

「あははははははははは!!」

笑うしかねえ、勝手に笑い声が出る。

頭はもう一步も動けないと言っている、身体が声なき悲鳴を上げている。

それでもこの身体は全力で死を回避する。

見えた。

掴んだ。

これが、死を乗り越えた先に見える世界。

生と死の狭間で得る力。

「何故……何故だっ!! 何故貴様はっ!!」

「知りませんよ……っとお!!」

「ちいっ!!」

おいそんなに距離を開けてどうするのさ? 俺、ただ一刀木刀を振っただけですよ

? お得意の心眼で俺の心境察知してどうぞ。

「貴様……何故」

「知りませんよ。でも感謝します宇水。おかげで、私のこれは完成に至れそうです」

羽踏。

意識して身を任せるんじゃない。

意識しないで身を任せる。

これだ、これなんだ。

俺の必殺技、その完成形は。

「さあっ！ もつと私に教えて下さいっ！ もつと……もつとだ!!」

「ぐ……」

とつかーん。

しようとしたところで。

「全員っ！ 投擲用意——てえっ!!」

「ちいっ!!」

あー……そうだよね。

こんだけ盛り上がれば……流石に気づくよね。

……残念。

「無事か！ 弥生ちゃん！」

「……はい、お陰様で」

あちら、潔い撤退だね宇水さん。流石超一流。

もつともつとあの世界を見ていたかったけど……いいや。

「……後、お任せします」

「弥生ちゃんっ!？」

我に返つたら……もうまじむり、ねよ。

結局。

「わあい京都らあ」

「おう、京都だぜ」

あの襲撃以降俺が歩くことはありませんでしたとき。

流石の宇水も二度目のリスクを回避したんだろうなんて思うけど、嫌な感じにしこりを残してしまった。

この影響が後に響かないといいけど……次に京都で宇水が現れるのは京都大火実行日、京都御庭番衆の面目躍如というかお手柄になる場面だ。

そこに当然この人達も参加することになるだろう、戦力確保に御庭番衆の力添え。滅多なことにはならないだろうけど……ふうむ。

ふうむじやねえよ。

歩くことがなかった。

それはもうその言葉通りです。

あれ以来俺に無茶させるなという暗黙どころか露骨な了解があったようで。

代わる代わる俺は背におぶわれてここまで辿り着いた。

……もうね、恥ずかしいのなんのつて。

マジで穴があつたら入りたいつてレベルじゃなかった。

通行人はなんだこいつぱりの視線を向けてくるわなんだともう大変に心苦しかったです。

ほんとどうしてこうなった。

「感謝してるんだ、俺達は。同時に何度も言ったがいくら頭を下げてても足りないとも思っている」

「いやもう聞き飽きましたからおろして下さい」

間違いなく俺は今死んだ目をしてる。

久しぶりに感じる地面の感触は酷く心を落ち着かせてくれた。

まああれだ。

やつぱりこの人達は何処か現状を侮っていたらしく。

どうしてここまで警戒するんだとも思っていた様子。

確かに神戸到着の時は警戒心もあつた。

だけど日が経つにつれてその心も落ち着いて、安全な道程に安心して。

警戒がどんどん緩くなってきたところだったんだあの襲撃は。

俺としてはもう疲労でそこまで考えが回ってなかったから反省もしてるんだけど、その気苦労を勝手に慮ってくれたみたい。

だから遠慮しないで八つ当たりにおっぱい押し付けといた。

「あ、あのさ……」

「ああ、はい。確かに予定よりずいぶん早く着きましたから……まあ宿場の警官さん達と合流した後はお好きにどうぞ。私は関与しません」

「おおおお!!」

そのせいかこいつらのムラムラは絶好調。

ククク、いいよなあこの感触はよう……! 申し訳ないって気持ちもあるから下心なんて見せられねえよなあ!

わかる、わかるぞおその気持ちっ!

だからこの後遊郭に行こうが何しようが構わねえよ? あ、でも襲撃には気をつけるんだぞ?

……俺も今男だったらなあ……くそう。

ともあれ京都入り。

今のシーンはどのあたりだろうかと、皆の背を見送りながら考える。

体感的になんてあやふやだけど、そろそろ剣心は逆刃刀真打を手に入れただろうか。それとももう既に比古清十郎の下で修行に励んでいるだろうか。

「……とりあえず」

警察署に行こう。

流石に斎藤は先に着いているだろう、情報収集に励んでいるはずだ。

そして。

「左之助との再会、かあ」

あんな別れ方をしたんだ、何されるかなあ……怖いです。

斎藤がこっちの警察署についたときには既に勾留されているはずだ、だとするなら再会は避けられないだろう。

ぶん殴られる覚悟はしておいたほうがいいかも知れない。いや、覚悟だけして避けるけど。

「避ける、か」

宇水との戦いで得た感覚、力。

あれから実践する機会は無かったけど、あの時の感覚はしっかりと残っている。

きつと、俺はそういう域に辿り着いた。

だったら少し左之助との喧嘩さいかいも楽しみだ。

多分……いいや、間違いなく。

あの人のやり直しはまたそれから始まるのだろうか。

その男、再会につき

さて、京都に無事で辿り着いたわけだけど今の状況はどうなってるんだろうか。

流石に薫さんと弥彦はもう京都にいるだろう、白べこへ足を運べばもしかしたら会えるかもしれない。

剣心は既に逆刃刀真打を手に入れてもう比古清十郎の下で奥義伝授のために修行を積んでいるだろうか。

独自路線というか、原作から外れた障害ってのはやっぱりこのあたりに響く。

時系列をそのままなぞっているだけだったのならこんなことで頭を悩まさないで済んだんだろうけど仕方ない。

とりあえず斎藤との合流場所である警察署に行くべきなんだろうけど、状況把握も優先したいなんでも思う。

「しっかし、京都か」

弥生になる前でも京都に足を運んだ経験はない。

けつたいな話でもあるな、まさかこんな身になってから初めて来ることになるなんて。

けども。

「お！ ねえちゃん！ ちよお一緒に茶でもしばかへんか！」

「ひゆうっ！ えらいべっぴんちゃん！ ちよおこっちいきいへんか！」

何処にでもこんなやつらは居るんだなあ……。

変なところで妙に安心してしまつたよほんと。

「あはは、申し訳ありませんが少し急いでいますので」

「ええやんええやん！ ほんまちよいだけやって！ さきつぽだけでかまへんのや！」

先つぽってなんだよ……お茶じゃ無かつたのかよ……。

アグレッシブが過ぎるぞ関西。怖いよ京都。

全く命の危険は感じていないはずなのに何故か弥生センサーがフルオープンだよど
うしてくれんのさまつたく。

ひよいひよいと……なんて言えたら良いんだけどまあやり過ぎしなから。

ナンパなんて進んでるんだな都会つてやつはとか色々おかしいことを考えながら。

とりあえず警察署に行く前に薫さんや弥彦に謝るほうが先かなと白ベコを探す。

その最中。

「――」

鐳鳴りと共に背筋へと氷柱を突つ込まれた。

四乃森蒼紫。

その男が目の前に立っていた。

「抜刀齋は何処だ」

「……私が、それに答えるとも？」

センサーがフルオープンだと思っていた。

でもそれは間違いだった。

静かに剣心の居場所を聞いてくる蒼紫の瞳は言わなければ殺すと言っていたし、それをそうだと感じる間もなく身体が避けたがっている。

一瞬にして弥生の異能がすべて蒼紫に向けられていることを実感した。

「言わなければ——」

「殺すと？ やれやれ、無理矢理にも程がありますね。自らが望む情報を持つであろう人間を殺すなんて愚の骨頂だとは思いませんか？」

なるほど、蒼紫にとってはまだまだ俺は一般人と変わらない一人のままだったんだろう。

確かにこの人相手に俺の実力を見せたことはない、だから仕方ない。

とは言えこの人に勝てるなんて到底思えない。

思えないけど簡単に殺されるような自分ではないという自負と自信もあった。

だからだろうそんな言葉が勝手に口から出たのは。

だからだろうそんな俺へと僅かに瞳を揺らしたのは。

「……」

「なんて、ね。そう剣呑な目をしないで下さい。私は別にあなたと抜刀齋の決着を邪魔する気は無いです。無いだけに知っているのなら伝えていきますよ」

実際あてはあるわけ。

居るとすればさつきも考えた通り逆刃刀真打を手に入れるために動いているか、比古清十郎の下に居るだろう。

それを伝えることに抵抗は無い。

つてのもここで剣心と蒼紫の戦いが実現して決着が付けば、志々雄のアジトで言ってしまう余計な傷を剣心が受けることもなくなるからって考えがある。

それでもはぐらかしたのは志々雄のアジトに四乃森蒼紫が居ない状態つてのがどうこれからに作用するのかわからないからだ。

もちろん、最強という華を手にしたというのならば、あまかけりゆうのひらめき天翔龍閃を会得した剣心と戦つてどうぞとも思つてる。

「そうか」

「……それでも私の口を割ろうとするなら相手をするのもやぶさかではありませんが

「？」

いや正直めっちゃやぶさかあるから勘弁して欲しい。

剣心、斎藤、蒼紫は紛れもなく原作最強クラスだもん、経過はどうあれ最終的に負けるだろうすなわち殺される。

……いや、そこに並び立とうと思ってるんだ。

逃げてても居られない、か。

「どうします?」

「……」

覚悟を決めて目を見返してみれば、もう興味を失ったかのように背を向けた蒼紫。

……残念だとも、良かったとも思う。

そして良かったと思う気持ちを否定できないということは、まだまだ並び立つには覚悟も実力も足りてないなと悔しく思った。

「ゴッ苦勞だった」

「ええ、我ながら苦勞だったと思いますほんと」

白ベコに行ってみれば、そこに薫さん達は居なかつた。

妙さんの姉、冴さんいわく探し人が見つかったとかなんとか。

つまり現状、剣心は既に逆刃刀を手に入れて比古清十郎の下へと行っているのだらう。

確認出来たことだしと警察署に向かえば丁度斎藤も着いたところだったらしく、同時に鉢合わせたことを少し驚いたんだらうその後には労ってくれた。

「報告は後でまとめて聞く。どうやら志々雄一派の剣客が捕らえられているらしくてな、まずはそつちからだ」

「ええ、了解です」

十本刀、張のことだろう。

剣心が逆刃刀真打を手にしたというのなら、張は敗北して警察に引き渡されているわけ。

一先ず大きく原作と食い違っていないことに安堵した。

「長旅ご苦労。そして藤田君、彼女が——」

「ええ、協力者です」

「始めまして、巫丞弥生と申します」

角刈り小太りの署長さんへと挨拶をしてみればやっぱり驚かれています。

まあそりやそうだよな、何処まで斎藤から説明されるかは定かじやないけど、こんな裏の血なまぐさい案件に絡むようには見えないだろうし。

「ご安心を。署長が想像しているよりも遥かに使える女です」
「そ、そうか……いや、キミがそういうのなら何も言うまい」

使える女ですつてよ奥さん。喜んで良いのか微妙ですわね！

まあ良いですよ構いません、そういう評価を得られる位置には辿り着いたと思つてお
きましよう。

そうして三人で地下へと足を進める。

……ちよつとドキドキしてきた。

ようやくというかまあ俺にとつちや張がどうのつてよりも、左之助との再会のが緊張
するイベントなもんで。

どんな風に話してたつけな。

正直俺をさらけ出したのは別れるあの時一回だけ。

剣心も言つていたように、素の俺つてやつはどうにも少し皆の弥生とは違うらしい
し。

「へへ、思惑通り……つて、弥生？」

「……」

さあ、やってきたよ俺つてば。

どうする？

俺は今、なんと言葉を紡げばいい？

「何だ、こいつを知っているのか？」

斎藤が水を向けてくる。

その顔は何処と無く悪戯っぽい。

知ってるも何も、道場でやりあつた時のこと忘れたわけじゃないでしょうに……つて、ああ。

「いえ全く」

「そうか、なら単なる人違いか頭がイかれているかのどちらかだな。どちらにしても邪魔だ、ここに閉じ込めておきましょう」

「うむ」

「ちよつと待てコラア!!」

いやー斎藤さんつてばお茶目さんだなあ！ そんな一面あるんすねえ！ 弥生の中で斎藤株ストツプ高ですよえへへのへ！

「逃げんのかためーら！ 開けねえなら自分で開けるぞ！ いいな！」

ま、そうだよな。

いい感じに緊張を解してくれてありがとさんつてことので一つ。

「な……！」

いい音するなあ……流石二重の極み。

そうですねよ署長さん、あれ、二重の極みっていうんすよ。

「以前の俺と同じとナメてかかると、てめえらもこうだぜ？」

「署長。こいつの始末は私達がつけます。上で待っていて下さい」

その言葉になんとも言えない目を返した署長だけど、結局言われた通り上へと戻っていった。

「正直、探してた……いや、会いたかった奴が二人同時つてえのは混乱するがよ。まずは——」

「なるほど、技の発想は空手の透しすかと同じようなものだな、尤も威力は——」

さて、齋藤が左之助の口上なんざ知らぬとばかりに二重の極みを検証して、防御のいろははどうしたなんだと左之助といちやついているわけだが。

一言、見違えた。

なんて言ってしまうえば上から目線で嫌な感じかもしれないが、左之助の姿を見た感想はそれだった。

確かに技を教えた悠久山安慈が言っていた若鶏のようだという言葉。

思わず頷いてしまいそうになる。

だからだろう、二重の極みで驚かされただけじゃなく齋藤が左之助の相手をしている

のは。

使えるかも知れない。そんな気持ちなのかも知れないが、ようやく左之助へと向ける視線の種類を変えた。

「あー!! 納得いかねえ!! 勝負! 勝負せい! そこで素知らぬふりしてる弥生もだっ! てめえそういうところだぞ!!」

「ぷっ」

うわ、久しぶりに聞いたなそのセリフ。

思わず笑っちゃったよ、ああ、馬鹿にしたわけじゃないですって落ち着いて下さい。

「まあまあ落ち着いて下さい」

「ああ!?!」

「私は斎藤さんと違って優しいですから。ちゃんと後で相手をしてあげます。今はそんなことしてる暇が無いだけですよ」

ねえ斎藤さん? なんて目を向けてみればやれやれと鼻を鳴らす斎藤。

暇なやつだ、付き合いのいいやつだ……わかってるじゃないか。

そんな色々な意味を含めた目で見返されてしまう。

「ちっ! 覚えたからな! ちゃんと後で喧嘩すつぞ!」

「ええ、約束です。斎藤さん」

「ああ」

そう言ってから嚴重に閉じられたドアを開ける。

「……なんや随分騒がしかつたなあ？ こちとらええ気分で寝てるんや、もちつと静かにしてえな」

さて、それじゃあ尋問開始ですなつと。

なんとというかな鳥対等の勝負が終わつて。

やっぱり左之助も大概かつけえなあなんて感想を覚えながら両手が自由になった張。約束通りなんでもしやべると言つたことは嘘ではなく、志々雄による京都破壊計画についてが語られた。

俺の護衛があつたおかげというべきかその劍客隊襲撃についての話は挙がらなかつた。

これについては後で俺から斎藤へと話さなければならぬだろう。
そう、後で。

「……弥生」

「はい、何でしよつと？」

今は、喧嘩再会のお時間だ。

「俺が京都に何しに来たか、わかるか？」

「足手まといになるためでしょうか？」

我ながら性格が悪い。

剣心の力になりに来たつてのなんて重々承知している。

「ただいま俺と左之助は絶賛喧嘩別れ後の喧嘩中、だったらこれくらいのこととは言っておかないといけないだろう。」

「ああそうだ。てめえ達の力へなりに来たんだ」

「……へえ？」

挑発したつもりだけど。

意外にも左之助は激昂するわけでもなく、ただ静かに俺の目を見てくる。

「悔しかつたぜ、あの喧嘩はよ。ずっと妹みたいに思ってたヤツが……守ってやらねえとなんてガラにもなく思ってたヤツがよ。俺にすら手に負えねえだろう何かと戦おうとしてたつて気づいてな」

「……っ」

果たして。

見くびっていたつて言葉は生ぬるすぎた。

俺は左之助を知った風に扱っていたけど真に理解していなかった。

「ちつせえ身体で、俺より弱えと思つていたヤツが精一杯必死によ。何にそうしてたのかはわかんねえ、けど気づいた俺は本気で自分をぶん殴りたくなつた」

左之助は言つてるんだ、俺にそう言わせてしまった自分が情けないと。

そんな自分で居てしまった、居続けてしまったことが悔しいと。

「お前は、強え」

弱いやつ扱いされたことなんて、欠片にも腹を立てていなかった。

こうすれば後腐れなく一旦別れることが出来るなんて俺の目論見は、全くの無駄で無為だった。

「だからよ……俺の喧嘩、買つてくれや。喧嘩屋斬左でもねえ、てめえのボディガードでもねえ。相楽左之助の喧嘩をよ」

誰にも迷惑をかけないところでとやってきた夜の河原は寒い。

だと言うのものすごく心が熱い。

ああ、やっぱり剣心組はどいつもこいつも揃つてカツコ良すぎる。

原作知識を小癩に利用して、降つて湧いた力を利用して。

小賢しく、はしっこく。

そうやってここまで来た俺でも。

「口では如何程でも……らしくないですよ、左之助。かかつて、来なさいっ!!」

「へっ!! ありがとうっ!!」

なれるだろうか、かつこよく。

この人達の隣に、真に並べるだろうか。

いや。

「ああああああ!!」

「うおおおおお!!」

なっってやるっ!!

その男、喧嘩の終わりにつき

「はっ！ あそこで見せちまったのを後悔するぜっ!!」

「ええー！ 大盤振る舞いするのも大概にしたほうがいいですよ！」

あの時の喧嘩。

俺は左之助の振るう拳に向かって木刀を振った。

相手の力を利用して、木刀の柄尻でその拳を破壊しかかった。

今俺の左頬を通り過ぎていった腕。

かつてのようにそれはもう出来ないだろう。

やろうと合わせた瞬間二重の極みで木刀ごと俺が壊される。

「ちいっ！ 相変わらずっ！ そういうところだぜっ！ 弥生いい！」

「めんどくさい技拵えてっ！ それはこっちのセリフですよ左之助っ!!」

甘えたことを言えば左之助は別に俺を殺そうとは思ってないだろう。

だけど、それを理由にして回避に手を抜いたり知ってしまったている二重の極みへの警戒を疎かにしてしまえば何より左之助を侮辱していることになる。

とは言えまだ羽踏は発動させていない。

かつてのように異能で避け続けて、相手の隙を木刀で穿つ。

やっぱりそれだけじゃ大したダメージを与え続けられない俺ではあるけど。

「ぐっ……！」

「どうしました!? 前より弱くなっただんじやないですか!？」

塵も積もれば山となる。

さつきから俺は左之助の隙をしつかり狙って攻撃を右肩に集めている。

これは本能だ。

反射という本能に限りなく近い何かを利用した攻撃。

確かに大したダメージではないのかも知れない、だけど露骨過ぎる攻撃の集中つての

はわかっているだけに意識の中へとこびりつく。

左之助みたいなタフな相手は本来気に留めるほどの攻撃じゃないってわかっている。

だからこそ無理やり意識の中へと割り込む攻撃を繰り返さないといけない。

実際左之助はそれが出来る人間だし、利用もしてきた。

だから気付かせる。斎藤が言っただろう防御のいろはを無視した代償を刻み込む。

現に痛みを実感してきたんだろう、僅かながらに肩を気にする、かばうような反応を

見せ始めている。

やっぱりこれも俺だから出来る左之助への対処方法。

羽踏を発動させてしまえば意識的に攻撃を集めるなんて出来ない、だから発動ギリギリのラインで踏みとどまる。

「強え。弥生、てめえはほんとに強くなった」

「ええ、ありがとうございます。お陰様ですと言っておきますね」

少し距離が空く。

お互いの間合いは交差していない位置で左之助は笑う。

「だがそうじゃねえだろう、てめえはまだ手を残してる。だからこうして俺に教えるみてえな戦い方が出来るんだ」

「……」

まあ、気づかれるか。

いや正直驚いてるよまじで。

そう、俺は今左之助にとつて超える壁になっている。

剣心を一発ぶん殴ってお前の力になりに来たってセリフ。

それを俺へと示そうとしているんだ。

「てめえにとつて俺あまだ東京にいた頃の俺だろうよ。それで構わねえ、拘置所あそこで見せただけで納得されちゃあ敵わねえ」

つまり。

「認めさせてやるぜ、弥生」

「……………」

左之助の表情が変わった。同時に異能が一斉に警鐘を鳴らしてきた。

今のままじゃ、死ぬ。

これは左之助なりの信頼のぶつけ方だろう。

自分が本気を出してもこいつは死なない、なんていう。

ありがたくも思う。正真正銘今、俺と左之助は遠慮がいらぬ関係に至ったのだから。

だから。

「――羽踏」

意識を委ねる。

委ねた先は自分の中にある弥生という異能。

力も、感覚も……全幅の信頼を弥生^俺へと寄せて。

俺だけの世界へと入り込む。

左之助が見せるといふなら俺も見せよう。

あんたが見る俺って存在がどうなのか、もう今はわからない。

わからないから教えてくれ。

俺は今、あんたにとってなんなのかを。

妹分と思われているなら今は何なんだ。

守つてやらないといけない存在だと思つていたなら今は？

かつて俺が憧れ追いつく目標とした、悪一文字の背中は今、何処にある？

「雄叫びを上げてるんだろう気当たりが凄い。

右腕を振りかぶりながらの突貫、露骨過ぎるこの手で殴るといふ意思。

そう、右手だ、二重の極みを発動出来る右手。

左之助だつてわかつてるだろう、その右手さえ避けることが出来ればつて俺の考え。

当然だ、二の矢として左手で殴ろうとしてくればその左手に合わせてかつてのよう
にカウンターを決めればそれで左手は終わり。

後はさつきと同じように、立てなくなるまでダメージを積み重ねてしまえばそれでい
い。

如何に左之助がタフで、倒れても倒れても立ち上がつてくる意思と力の強さを示して
も、あの時と同じく物理的に不可能になつてしまえばどうしようもないのだから。

それだつて、わかつてるだろう？ 左之助。

だつたら、あんたは、何を俺に見せる？

「っ!?!」

「おらあつ!!」

確かに、確かに身体は避けようとした。

しかしそれは右手に対して反応したわけじゃなく。

地面。

「くっ!?!」

二重の極みの威力が地面に伝わり弾ける。

大小様々な石礫が俺へと飛びかかってくるけど——無理だ多すぎる! 避けきれな

い!

「おおおおお!!」

だけど、だけどだ左之助!

その程度の痛み、俺だって我慢できるんだぜ!?! その程度で俺の異能を捉え超えられ

るなんて甘いっ!

残念だよ左之助!

ならここであんたの繰り出そうとしてる左手、責任持つて貰い受けるっ!!

「——なっ!?!」

「……どうだよ示せたか? 納得は出来たか? 俺は、てめえの力になれるか?」

左之助の左拳を潰すつもりで振った木刀が——砕け散った。

「右手だけ……そう思っていたのが、間違いでしたか」

「どうして右手だけだと思つたのかはわかんねえが……まあ、ご覧の通りでえ」

大誤算、なんて一言で言えば済む話だけど。

まじか、左之助、両手で二重の極みを使えるようになったのか。

「おらっ！」

「あいたっ!？」

呆然と砕けた木刀を見ていたら、不意に頭を叩かれた。

「お前には左手で勘弁してやる。もう一人ぶん殴らねえといけないやつが残ってるからな」

「……ふふ、その技を使うのは勘弁してあげてくださいいね?」

ああ、そっか。

わかつた、わかつたよ左之助。

あんたは右手で剣心を、左手で俺を殴るためにここまでやってきたんだな。

「んで? どうだ? まだ足りねえってんならもういつちよやってやってもいいが?」

どうだと言わんばかりの表情。

久しぶりに見たな、当然か。

だけどやっぱり、酷く心地が良い。

「完敗ですよ左之助。ええ、私には……私達には勿体ないくらいです」
「そうかい、だったら良かったよ」

あー……悔しいとすら思えねえや。

やっぱりこいつら強すぎる。

そうだ、そうだよな。

ここはもう、俺の知ってる舞台ってだけでキャストは同じだけど同じじゃない。
それでも、やっぱり性根は変わらずに輝いていて。

「左之助」

「なんでえ？」

大人しく白旗を振ろう、嬉しい気持ちのまま。

「これからも、よろしくおねがいします」

「おう」

かつて目指した悪一文字を靡かせた背中が、隣にあることを実感した。

「そうか……」

左之助との再会が終わり。

斎藤へと神戸から京都への道中で起こった事を報告した。

宇水と交戦したことがメインではあったが、張の話にも出てこなかったしあいつが十本刀であることが伝えられないのがもどかしかつたけど、これもまあ仕方ない。

代わりに死を覚悟するほど強いやつに襲撃されたって体で話す。

こちらはそれなりの剣客が揃っている中一人で襲撃してきたことも含めてかなりの腕前であるということ、盲目でありながらこちらの動きをすべて把握しているかのように戦うこと。

そういった事を話していた時、斎藤自身襲撃者が十本刀であるのでは無いかとあたりをつけたような感じだった。

京都に来るまでと来た後、志々雄一派の一般兵とでもいうかそういう奴らの実力はある程度掴んでいるだろう斎藤。

新月村での戦い含めて、俺としても一般兵相手に遅れを取る可能性はほぼ無い。

そんな俺が手こずったというだけでも警戒に値するなんて嬉しいことを言ってくれた。

こう、改めて剣心や斎藤っていう強キャラさんから向けられる俺への認識だけど、多分斎藤が一番俺のことを買っているような気がする。

気のせいかもしれないけど、相性いいんだろうな……複雑だけど。

「襲撃者については改めて張へと確認しておこう。仮に十本刀と同等の位置にいてと
て考えるのならば間違はなく俺の用意した剣客隊は相当な被害を受けていたはずだ。
改めて、ご苦勞だったな」

「はい、ありがとうございます」

「気のせいじゃないかも知れないね。はい。」

「何が斎藤の琴線に触れてるのかいまいわからないけど、良好な関係を築けてるわこ
れ。」

「ともあれ京都破壊計画だ。これについて貴様はどう思う？」

「そう、ですね……」

京都破壊計画は東京攻撃の隠れ蓑。

だなんて言うのは簡単だけど、まだその時じゃないだろう。

まだ斎藤が持っている情報が足りていないし、役者も揃っていない。

「気になることがあるとすれば、簡単に情報が掴めすぎているという部分でしょうか」

「……続ける」

「警察……こちらの諜報部が優秀であるとしても、です。張は簡単に情報を吐いていま
すし、また吐かれては困るからと処分される雰囲気もない。これは明らかにおかしいで
す」

後の展開先取りではあるけど。

少し考えればやっぱり分かる話でもあるのだ。

確かに張は嚴重な警備の下ここへ拘置されているが、宇水や宗次郎。そういったクラスの実力者ならば張を処分するのは不可能ではないだろう。

このタイミングなら宗次郎はまだ十本刀招集のため京都にいないかも知れないが、それでもそれを知っていない人間はそう考えておかしくない。

「貴様もそう思うか。まだ俺がここに到着して間がないが、そういった動きは確認できていない」

「何か裏がある……とまでは考えられませんが。ごめんなさい、それ以上のことは考えが及ばないです」

そこまで言ってみれば斎藤は瞑目して考え込む。

少しもどかしいけど、答えを出すのはやっぱり剣心が揃ってからだろう。

もしかしたらここまでの情報と俺の言葉で斎藤はあたりを付けてしまうのかも知れないけど。

「そう言えばあの阿呆と一戦交えたんだっただろう？ どうだった？」

「左之助のことですか？ やですよもう、気になるならご自分で戦ってみてはどうですか？」

「おっと、話題の転換ですね？ それに左之助を持ち出してくるなんてやっぱり気にしてるんですねーもう。」

「その顔はやめろ。俺が聞きたいのはヤツの実力ではない、戦った貴様の仕上がりになったただだ」

「もー誤魔化さなくても——あ、いいえ、なんでもないです。そう、ですねえ……」

最大の驚きといえばやっぱり両手で二重の極みを使えるようになったことだろう。

これがこのまま原作通りの流れを辿って安慈と左之助が戦うことになった時どう作用するのはわからないけど、単純なスペックとしてまだまだ安慈に届いていない左之助だろうからそこまで心配はしていない。

じゃあ斎藤が気にしているらしい俺の仕上がりについて。

「自分の弱点がしっかりわかりましたよ」

「ほう」

興味的光を俺に向けてきた。

「やっぱり私はどうやってても物理的に避けられない攻撃には弱いです。言ってしまうばまったくの同時、広範囲攻撃には手も足も出ない。もしもあれが石礫ではなく爆発などといった致命的な攻撃なら……考えたくはないですね」

実際二重の極みで弾けた地面は爆発と言っていい位のモンではあった。

あの時は気にならなかつたけど、戦い終わった後避けそこねた礫の当たった場所は青痣になっていたしそれなりに痛かった。

もつと大きな礫だつたりしていたら骨までいっていたかも知れない。

そう考えてみれば操ちゃんやんの飛苦無も状況や投げられる飛苦無の数と範囲によつては俺の弱点に届き得るものではあるんだろうな。

直接的な防御力が足りないってのは俺にも当てはまる。

回避力と防御力はやっぱりイコールでは結ばれないだろう。

加えて読み。

何時だつたか思った読みの技術も必要だろう。左之助の右手が地面狙いであるつてのは気付けるだろう範囲だし、読めていたならもう少し違った戦いになっていたはずだ。

放置していたツケとでも言うか、読み技術の向上は羽踏発動のタイミングを測るのに必須だろうし意識しねえとな。

「なるほどな。しかしそれが叶う攻撃がどれほどあるかと考えれば……そう多くはないと思うが」

「ええ、ですが弱点の把握は大切です。そうでなければ牙突に種類を設けてはいないでしょう?」

言ってみれば斎藤は少し目を丸くして。

「ふん……やはり貴様は察しが良すぎるな」

「お褒めの言葉ありがとうございます。まあだから、ですよ。私の必殺技も幾らかカバーする面を考えなければならぬでしょう」

俺にある武器といえは神谷活心流剣術とこの異能。

神谷活心流奥義が刃止めであることのように、基本的には防ぐことを目的とした剣技が多いように思える。

膝挫にしても相手の力を利用するってことは、相手が攻撃しようとしてくるって結果の後、要するに後の先を取る形だ。

それはこの異能と相性がいいってのはわかっている。避けながら攻撃するってのは非常に神谷活心流とマッチしている。

つまるところ俺の異能含めてさらなる高みへ至るためには神谷活心流の習熟が必要不可欠なんだろう。

「それはもちろんそうだがあまり欲張るな。先が見えたからと言って、それを為せるのはまだ先の話だ」

「……はい、わかっています」

これから先、少なくとも志々雄一派との戦いが終わるまで俺が神谷活心流の稽古をす

る時間は取れないだろう。

薫さんと別行動を取っている時点で神谷活心流の習熟は難しい。だからこそ異能を活かした戦い方を模索しているもの……これは一つの到達点に辿り着いたと言っている。

改めて俺は今の俺で京都編を乗り越えないといけないのだ。

警察側に居るといふか、斎藤の側にいる以上この後の動きは自分の意思よりも斎藤の采配にかかっている。

京都大火への備えとして警備に回っている警官、剣客隊の指揮を取るって可能性もあるし、もしかしたら煉獄出港阻止に回るかも知れない。

俺としては……いや、なんとも言えないな。

「まあいい。話を戻すが、現段階では判断を下す情報が足りていない。抜刀斎もまだ姿が見えんしな。僅かな時間しか無いのかも知れないが、貴様は京都巡回、警邏にあたっておけ」

「わかりました」

言うように、もう時間は多くないだろう。

左之助との再会も果たせた、薫さん達とはまだ会えていないけど……どういうルートを辿っても顔を合わせることにはなる。

だったら、その辺りも含めて覚悟を固めておこうじゃないか。

その男、交渉につき

「なるほど、な」

京都警邏という名前の地理把握。

指示されてから剣客隊の人達と京都大火が実行に移された際の打ち合わせを行いながら京都をぐるぐると歩き回る毎日。

中には地図上で確認するよりも遙かに家屋同士の幅が狭く、火をつけられたらあつという間に燃え広がってしまうだろうなと思える場所も幾つかあつたり。

……あつたりというか、多すぎたりと言うべきだろうか。

地理把握に努めてから僅か数日だ、それだけで既にここは急所だなと思える場所が既に剣客隊の五十名でまかなえるキャパを超えた。

いや、当日は京都御庭番衆との連携もありなんとか事なきを得るってことになるだろうから問題では無いんだけど。

もつと言えば京都警察の人員、動かせるだけ全員……確か付近の人も集めて五千人だったか、物量だけで言えば足りるのかも知れない。

けども単純な数を重ねたとしても、それを誰が指揮するんだって問題。

一緒に来ている劍客隊の一人一人、それぞれある程度の人数を束ねる能力も実力もある、正直劍客隊中でその能力が一番足りてないのは俺だ。

単純計算しても五十人で五千人だから一人頭百人の指揮を執らないといけない。

それは現実的な数、だろうか？

軍隊行動というかそつち方面はちんぷんかんぷんだが、もう殆ど時間は残されていない、そんな中当日初顔合わせでいきなり指揮下に置く。

無理だ。

仮に十全な連携を取れるとしても、さつき言ったように指揮官の数を急所と思われる場所は超えた。

「……やはり、協力者が必要ですね」

「協力者か。確かに戦力として見れるかつ信頼できる存在であればという言葉がつくが、喉から手が出るほど欲しいな。だが、そのあてはあるのか？」

それはもちろん。

ただ、警察側として正式に御庭番衆へと依頼って形式を取れたとして、それを受理してくれるかはわからないけど。

あれは剣心が頼んだからこそすぐに動いてくれたんだろうなって考えがある。

加えて御庭番衆と警察の関係。

これもいまいち見えない部分であつて想像が及ばないところ。

そうやって思えば原作である時のタイムミングでしか為し得ないことだったのかも知れないのよな。

「言つてみる」

む、表情読まないでくださいよ斎藤さん。

まあもつたいぶる余裕は色んな意味でないか。

「京都御庭番衆の力を借りれないでしょうか」

「御庭番衆、か」

少し難しそうな顔をする斎藤。

存在は認知していたんだろう、もしかしたら考えたことなのかも知れない。

「難しい、ですか?」

「まあな。御庭番衆お頭、四乃森蒼紫は東京警察が追つていゝ存在だ。その輩ともがらの力を借りると警察から正式に依頼するのは難しい」

むーそつか、そうだよなあ。

それ以外に理由があるのかも知れないけど、今言われた理由だけでも十分か。

四の五の言つてられる状況では無いんだけどな……。

いや、待てよ?」

「警察としてじゃなければ大丈夫ですか？」

「ああ、その言葉を待っていた。巫丞弥生、貴様ならそれが可能かもしれないから」
言わされたっ!!

あーあーその顔！ その顔だよ！ そういふところだぞ斎藤一！ そのにやけ面をやめるんだっ！

くっそーいやそうだよな、ワンチャンありますよ俺なら。

翁がもう今は倒れているだろう、蒼紫の手によつて。なら今は巻町操がお頭だ。

交渉するとなれば面識のある人間がいい、そうなると俺か斎藤だ。

でも斎藤は立場も時間も許してはくれない、なら俺しかないよなあ……。

「どうだ？ やれるか？」

「……」

そりや出来ると思う。

巻町操一人、いや、操ちゃん率いる御庭番衆なら難しかったかも知れないけど、今はあそこに薫さん達がいる。

だったら身元の保証は十分だし、薫さんを通じて俺も信頼されるだろう……つてのは打算が過ぎて嫌になるな。

ともあれ交渉がうまく行かなくても京都大火を知って動かない御庭番衆というか操

ちゃんじゃない。

だったらそれとなく情報を零すだけでもいいと思うけど……やっぱり組織的に動いた方が被害は少なくなるよな。

つてなると俺は今回煉獄出港阻止メンバーには入れない。

当然だろうけど、そうやって依頼した人間がその時いないなんてありえないだろうしな。

実際煉獄出港阻止メンバーになっても出来ることなさそうだし仕方ないか。

でも出来ることなら志々雄に会ってはみたかったな……いや嘘です、由美さんの半出しおっぱいが見たかったです。

「正直に言えば、だ」

「はっ？」

そこで表情を齋藤は変えた。

漫画だけで知る齋藤は所謂ヤなやつだけど凄いやつで剣心のライバルというか、そんな感じだったけど。

この世界で齋藤は俺に色々な表情を見せてくれた。

「たまに我へと返る時がある。年端も行かぬ女に使えるからと何を求めているのかと」

「……」

これもその一つだろう。

後悔しているような、本当に自分のやっていることに疑問を感じているような。

それでもその顔を浮かべさせた感情は心配というものから来しているとわかる。

それは、とても。

「……なんだその顔は」

「いえ〜？ ベつつにい〜？」

とても嬉しいもので。

「いやー！ やっぱり斎藤さんは優しいですねえ！ 良いんですよ？ ほらほらもつと

私に頼っちゃって下さいどうぞ！」

「……猫娘が」

思えば今の発言が出るまで、斎藤は俺を男でも女でもなく俺として……一人の剣客として扱ってくれていた。

使える手駒の一つっただけだったのかも知れないけど、それは今の俺を望んでくれていると感じてしまえて。

「……了解しました。誠の旗の下散っていった狼達、その鎮魂のためにも……お任せ下

さい」

「……そういうところで、貴様」

仕方ないなんて気持ちじゃなくて、快く受け入れることが出来た。

「弥生姉え!!」

京都御庭番衆拠点とは裏の顔。表の顔は料亭葵屋なんて場所。

その入口に何故か弥彦が立っていて、こちらから声をかけるまでもなく近寄ってきた。

やれやれ、そんなに俺が恋しかったかね？ 可愛い弟分ですよほんと。

「ふんっ!!」

「——やれやれ、久しぶりの挨拶がこれとは勘弁してほしいです」

とか思ってたら間合いに入るなり竹刀ぶっ放してきやがった可愛くねえ。

せつかく熱い抱擁で迎えてやろうと思ったのになあ、ほれほれぼよぼよだぞ？

「るっせえ！ いきなりいなくなる馬鹿姉にはこれで十分だっ！」

「……ええ、本当にそう思います。ごめんね、弥彦ちゃん」

まあ、おちやられるのもこの辺で。

本当に申し訳なく思ってる。

今回ばかりは、どうしようもなく、疑いようもなく俺が自己中に突っ走った結果だ。

斎藤と道場で戦ってからなし崩し的にはあった。

それでも俺はきつと神谷道場で、皆と一緒に剣心の行動へ落ち込み、一緒に京都へ来る道もあつたはずだ。

色々な要素が絡み合つた、仕方ない。

そう言いたい気持ちは微かにあるけれど、それを言つちやかつこ悪い。

「反省してんだな？」

「ええ、もちろん」

「なら、ヨシ！」

「ありがとうございます」

そう言つて弥彦は笑つてくれた。

ああ、やつぱり心地が良いな。

「それで？ いきなり顔だしてどうしたんだ？」

「あら？ もうちよつと会えて嬉しいなんて言つてくれても良いんですよ？」

「バツ!? バカヤロウツ！ いいからさつきと要件を言えっ！ つてか薫も心配してた

んだ！ 用がなくても会つていけっ！」

「ええ、もちろんそのつもりですし、頭を下げる準備もしています……ですが、今はそれ

より先に——」

——京都御庭番衆お頭に、繋いで頂けますか？

続けた俺の顔を見て、弥彦が生唾を飲み込む。

何か重大で重要な案件があると感じ取ったんだろう、いい勘してる。

「……わかった。ちよつと待つとけ」

「はい」

言いたいことはあつたんだろう、それをも呑み込んだ。

少し見ない間に、随分と男の表情をするようになった。

流石薫さんのケツを叩いただけあるなんても思うけど、本当にあの歳位の成長は一瞬だ。

背もこれからどんどん大きくなって、剣術の腕もメキメキ上達させて。

あつという間に世間に名を知られる剣豪になる。

走つていつた背中を見ながら、そんな事を確信した。

その時俺はどうなっているんだろう。

目指すこと、やりたいことは見つかった。

それを為しているんだろうか？ 皆が想像つかない未来で、俺は胸を張れているんだ

ろうか？

そうあつて欲しい。

そしてそうあるためにも。

「あんた……弥生？」

「ええ、久しぶりですね操ちゃん」

葵屋の玄関から顔を覗かせた操ちゃんに向かつて笑いかけた。

「京都、大火……!？」

「はい」

部屋に通されて、事情を説明して。

その途中薫さんがバタバタと部屋に入ってきて、一瞬すごく嬉しそうな、安心したような顔をしてくれたけど、雰囲気を感じて静かに座ってくれて。

後を追うように弥彦や御庭番衆の面々も入室して、薫さんに倣って腰を落とした。

「御庭番衆としての情報網でどの程度情報を掴んでいるかはわかりませんが。どうやら初耳のようですね」

「お増さん？」

操ちゃんがお増さん……確か御庭番衆としての名は増髪だったか。窺うような目に向けたけどその首は横に振られた。

俺としては現段階では知らないと把握していることではあるけど、確認しながらのほうが無難かつ確実だ。

思い込みで動くのが一番怖い、もう何がきつかけでどう変わってるのかは分からないんだから。

「私は今警察側の協力者として……というか志々雄一派討伐の協力者として動いています」

「ええ、新月村での事があつたしそれは何となく分かる。だけど……」

情報の信憑性を疑っているんだろう、少し難しそうな顔を浮かべてる。

なんだ、お頭なんて似合わないと思つてたけど中々どうしてそういう顔をするんだな操ちゃん。

「操ちゃん」

「ん？ 何？ 薫さん」

そこで今まで黙つてた薫さんが口を開いた。

「弥生ちゃんの言つてることだもん。きつと本当よ」

「……わかつた」

「……薫さん」

思わず薫さんの方へと目が泳いでしまう。

そこには凜とした顔で、変わらない信頼を俺に向けてくれている人がいた。

——大丈夫、信じてるから。

そんな風に目が言っている。

ちよつと泣きそうだが、俺はきつと何も薫さんの信頼を得られるようなことはしていない。

ただ自分勝手に好きな事を好きなようにしていただけのはずだ。

だと、言うのに。

「——そこで、です。今回の志々雄一派による京都大火計画。その阻止に御庭番衆の力をお借りしたいのです」

「なるほど、ね」

だめだぞ俺、目を潤ませている場合じゃない。

信頼してくれてるんだ、なら応えないと。

応えるためには今ここで泣いて頭を下げる場合じゃない、それを望まれてもいないだろう。

「御庭番衆の力と言つても何を貸せばいいの?」

「御庭番衆の情報網を使って、京都に住む人々へ警戒を促してほしいのです。決行は恐らく夜遅く寝静まった頃。火付け役は恐らく少数でしょう、犯行現場を見て大声を上げられるように計らつて欲しいのです」

「警官側の動きは?」

「当日、数千人規模の人員が動きます、志々雄一派と正面衝突するために。要するに表の戦いは警官隊で、そして裏の防備を御庭番衆、ひいては京都の人達にお願いしたい」

そこまで言うとお操ちゃんは静かに瞑目して考え込む。

駄目だろうか？ やっぱり剣心の口からじやないと信用されないだろうか？

自分の心臓の音が煩い、戦い以外でここまで緊張するのも初めてかも知れないけど、ここで狼狽える姿は見せていられない。

黙って操ちゃんの考えがまとまるのを待つ。

「——正直なところ」

「はい」

やがて考えがまとまったのか操ちゃんは俺の目を真っ直ぐに見て口を開く。

「あんたのことは信用出来ない。いや、していない」

「……」

それもそうだろう。

俺と操ちゃんはそのような関係で結ばれているわけじゃない。

ましてや御庭番衆としての力を求められたのならお頭としての決断は責任を負って然るべきものだ。

だから当たり前。

そう言われるのは当たり前。

「だけど……もしもそれが本当だったらって可能性の時点で見過ごせないし、何より薫さんが信用できるって言ってる。だから今回は領いてあげる」

「ありがとう、ごこぎいます。そして、よろしくおねがいます」

……ふうー。

ほつとした。なんとかこれで少なくとも原作の形を取ることは出来る。

しかし流石だな薫さんは。

ほんつと、一生頭が上がらない。

「良かったね、弥生ちゃん」

「ええ……ありがとうごこぎいます。薫さん」

じゃ、上がらない頭を下げに行きますか。

「そっか」

「はい」

今まで。

道場で斎藤と戦ってから今まで。

起こったこと、起こしたこと全部を話した。

そのどれもは紛れもなく自分の意思であり、薫さん達が心配するということをわかった上で選び進んだ道だと説明した。

話しながら、声が震えないように精一杯の努力をして。

逸してしまいそうになる視線をぐっと留めて最後まで薫さんの目を見て言いきった。

「後悔は、していません。だけど……」

「弥生ちゃん」

謝ろうと思った。

心配をかけたことも、きつと色々気を揉んでくれたことも。

だけど制された。

「後悔していかないのなら謝らないで。後悔して欲しいとも思っていない、それよりもただ

……無事で良かった。私はそう思ってるんだから」

「……薫さん」

きつと。

薫さんも、成長したんだろう。

無くしたくないものを無くさないように、心を決めて京都へ来た。

そうして揺るがず大切なものを大切に作る心を手に入れたんだ。

「弥生ちゃんは私の妹分。それはあなたがどうであれ変わらないこと。だけどあなたは

あなたなんだから、自由に考えて自由に動いていいの。それが弥生ちゃんのやりたいことなら尚更、ね。私は、そうする弥生ちゃんが一番好きだから」

「――」

そういつて笑う薫さんは……すごく、優しくて。

この人はずっと……ずっとずっとそうやって弥生を見守って来たんだろう。

弥生が俺になってからも、ずっと。

変わったけど変わらない目で、変化も成長も何もかも。

ああ、そっか。

「おかえり、弥生ちゃん」

剣心、悪い。

散々早く実感してとかなんとか心で思ってたけど。

「ただいまっ！ 薫さんっ!!」

そりやどうやら俺もだったわ。

全然わかっていなかったわ、帰る場所の大事さを。

ありがとう、薫さん。

その男、京都守護者につき

——頼んだぞ。

そんな言葉は俺の心を震わせた。

なんとなく利用しているだろうと感じていた側面がある斎藤だけに、こうして心底任されるって確信できるものには重みを感じた。

剣心と左之助、斎藤は原作通りに煉獄出港阻止へと向かい、俺は京都に残った。

前にも思っただけど、やっぱりあの戦いはどう考えても足手まといになってしまふ。

役に立てる術があるとすれば剣心よりも先に煉獄を偽装した船を見つけることかもしれないけど、誤差に過ぎないだろうし。

発見した後の事を考えれば剣心や斎藤はともかく、左之助のように海に浮かぶ板の破片を飛び石代わりに行くなんて芸当も無理だ。

泳いで近づいたにしてもそれこそ煉獄が持つ兵器のいい的でしかないだろう。

力になれることは是非もない、ただそれでも皆の弱点になってしまふのだけは嫌だった。

悔しい、とても悔しいけれど。

わきまえなければならぬ、退かなければならぬ一線つていうものはある。

我ながら何を今更なのかも知れないけど、煉獄戦に関してはこれに抵触する部分だと思ふ。

そう思えばこの後に続く比叡山、志々雄アジトでの決戦はどうするべきだろうか。

内心、当然というかついていきたい気持ちとはともある。

だけど、この煉獄戦が言うところの締め切りだろう、志々雄へ明確に倒すべき敵として認識されるその機会の。

なら、葵屋襲撃へと向かってくる十本刀への備えとして残る道。

翁さんは負傷で動けないから当然として。かつ、増髪さん達京都御庭番衆の実力が操ちやんとそう変わらないものだとするのなら。

「俺が一番の戦力、か」

恐らくそうだろう。

薫さんと話して、少し弥彦の稽古に付き合つて。

——神谷活心流の剣客としてなら私の方が強い、けどただの剣客としてなら弥生ちゃんに勝てると思えない。

思わず買いかぶりだと慌てて言おうとしたけど、そういつた薫さんの目はとてもおだてているようには見えなくて。

生唾を当然飲み込んで、ゾツとしたもんだ。思っていた以上に俺はどうやら死線を潜りすぎていたみたいだ。

救われたのは続いた言葉で、負けるつもりはないと言われたこと。

神谷活心流の師範代としてまだまだ教えるべきことは見えるし、勝てないながらも負けることもないと言ってくれたんだ。

正直薫さんの実力っていうのはいまち掴めないところ。

神谷活心流という括りの中で言う俺は恐らく弥彦と同等か辛うじて少し上の腕前で、その遥か上に薫さんがいる。

掴めないのはその括りから外れた、命を賭けあつた戦いの中での実力。その勝負の行方が不透明なんだ。

試してみたいという気持ちはある。

だけどそれ以上に恩人であり、姉である薫さんと刃を交えたいとは思わない。だからそれはそれでいい。

戦いの中で肩を並べたいと思つたのが剣心達なら、神谷活心流を担うものとして肩を並べたいと思つたのが薫さんだ。

それがきつと最高の恩返しで、俺のやりたいことの新しい一つとなった。

とは言え、だ。

「……京都大火阻止、か」

今晩起こるのは大軍と言えば大げさかもしれないが、複数対複数の戦い。

当然そんな戦いの経験はないからいまいまいちどう動けばいいのかはわからない部分がある。

剣客隊の人は任せろと言ってくれたものの、俺がいるという変化をどう繋げるかが大切だ。

原作では死者、重体者が僅かといえ出てしまった戦い。

この世界でもそれを同じ結果を辿ってしまえば斎藤はよくやったと言ってくれただろうが、俺が自分を許せない。

そう考えた時、一番に抑えるべき相手は飛翔の蝠也だろう、あの空をある程度自在に動ける存在は極めて厄介だ。

極端な言い方をすれば人数の壁を無視できないそれ以外の十本刀は当たらないでにらみ合いをしていけばいい。

お互いの兵と兵をぶつけ合って硬直状態を生み出せば、その間に火付け役が失敗し目的達成不可能になる。

そうなってしまうばこっちのもんだ、相手は最大目標を失ってまで留まる理由がない。

無論十本刀それぞれが一騎当千の強者である以上、刺激を強めてしまえば兵を下げて出張ってくる可能性が高まってしまう。

ゴリ押しで火付けを成功させてしまうのが怖いところだろうな。

変に十本刀……特に悠久山安慈、魚沼宇水の情報は操ちゃんに伝えないほうが無難だろうか。

知ってしまい変な警戒をさせてしまえば、原作通り宇水の行動を安慈が止めるといった展開を失ってしまいかねない。

ものすごく気が進まないけど、操ちゃんには危機一髪体験を経て盛大に悔しがってもらおう、ごめん。

ともあれどの道俺は警官側だ。

柵の上にぶん投じているかも知れないが、自分の事を考えよう。

「さて、どうするか……」

頭を抱えながら、葵屋へと足を運んだ。

「いいですか！ 常に十本刀の姿には警戒して下さい！ 深追いは決してしないように！ 専守防衛！ 相手を倒すことではなく京都へ入れない事を第一にっ!!」

「了解っ!!」

どうしてこうなった。

いやまてほんとにどうしてこうなった。

なんで俺が正面部隊の指揮を取ることになってんだ、おい署長どういことだ説明しろ。

「い、いいのかね!!」 相手はそこまで多く兵の数を減らしていない! このままではその十本刀とやらが来てしまったら——!」

「むしろその方が都合がいいんです! 姿が見えないことが一番怖い! それにこの戦い、相手を倒すことが勝利条件じゃありません! 京都を守りきることが勝利条件です!!」

あー! もう!

わたわたししてんじゃねえよ! てめえタマついてんのかこのやろう!

斎藤も余計なことを言ってくれたよこんちくしょう!

相手の実力をよく知る俺を全面に頼るじゃないっすよ!

頼るのと指揮預けるのは話が違いますよほんとに!!

「弥生ちゃん! 相手は怯え腰だ! このまま一気に行けば——!」

「駄目です! 宇水を忘れましたか!?! 深追いしたところをぐっさりなんて私は泣いて

しまいますよ!?!」

剣客隊さんあんたらもだ！

ええ、ええよく警官達をまとめましたよ！ ほんとにすごいです！

でもそんなあんたらがなあ！ 俺を頼つたらなあ！

「報告！ 敵敗走の気配!!」

「ありがとうございます！ ここが一番の警戒どころですよ！ 兵が下がろうとすれば相手はより大きな力を投入してくるはずですよ！ 前で戦っている人にそう伝えて下さい！」

「了解しましたっ!!」

こうなるだろ!! あいつなにもんだ、あの人達が指示に従うとかすげえ人だつてなるだろ!!

まあじ勘弁してくださいよほんとに。

俺はさ、こうさ、使われる立場だと信じてたのにさ。

信じて送り出された俺はなんだこれ話が違う状態だよ。

やりづれえ……めちやくちやり辛い。

でも、まあ。

「被害状況は!?!」

「はっ！ こちらの損害は軽微！ 負傷者はすぐに下がる事を徹底しています故重傷

者、死者は今の所ゼロです！」

「ありがとうございますっ！」

指揮と言えない指揮だろうけど、今のところは最良の結果だ。

時間はもうすぐ零時。

そろそろだろう十本刀が火の手の上がらないことを訝しんで姿を現すのは。

そう思った時。

「——！」

「ほう……?」

あつぶねえ!? 今のは本気でやばかった!

「い、今のは?!」

「……十本刀の一人でしょう。まっすぐ指揮官……私を狙うなんて、流石いい度胸しますね」

予想通り、想定通り飛翔の蝙蝠也。

警官隊を狙わず直接王狙いとは恐れ入った。

兵をターゲットにしなかったのはラッキー……いや、ちゃんと頭を下げろって指示があつたし、上手く警戒できたが故に俺しか狙えなかったのかもな。

「署長、ここの指揮はお返しします。……専守防衛、いいですね? 十本刀と思われる相

手が前に出たら劍客隊の人複数で相手をして貰って下さい」

「なっ!? 弥生君! キミはどうするんだ!？」

「私ですか? 私は——」

——あのうざったいハエを叩き落としてきます。

「わざわざご苦勞なことだ。俺はすぐにも別の場所に翔べるといふのに」

「そうですね。まあ、雑魚相手に粋がりたいならそうすればいいと思いますよ? 誉れ

高き? かどうかはわかりませんが、女相手に逃げる十本刀さん?」

俺より高い位置から見下してきた、なんとなく癒見臭がするこちら飛翔の蝙蝠さん。

挑発へ簡単に青筋を立ててるあたりも似ているなあなんて思いながら、屋根の感触を草履越しに確かめ木刀を向ける。

「貴様——」

「ああ失礼。確かにあなたの攻撃はこういった戦いでは有用性抜群……私の戯言を捨て置いてどうぞせせこましく警官と戦って下さい」

釘付けにするためとは言え肝が冷える。

正直なところ、蝙蝠也の飛空発破は俺にとって最悪に近い攻撃手段。

剣心のように翔べるわけでもなし、弥彦程身軽でもなし。

本気であいつがダイナマイトを使いながら飛翔し戦うといった戦法を取られてしまつては為す術もない。

それにダイナマイト。

これは俺の弱点でもある広範囲攻撃だ、相性だけで言うなら最悪に近い。

ましてや今は屋根の上。

それこそ使われた瞬間民家へ被害が当然出るし、最悪これが原因で火の手があがつてしまう。

「死に急ぐバカを相手にする暇はない。一瞬だけ時間をくれてやる」

「それはどうもありがとうございます。一瞬で天国へ連れて行つてあげますよ」
だから剣を交えるのはこの一瞬だけ。

この一瞬にすべてを賭ける。

「——死ね」

蝙蝠の取つた手段は——滑空。

狙うは一点。

その身を包む外套の留め帯。

すでに弥生の世界に入っている。

身体は相手の持つ刃を簡単に避けてくれる。
だから集中。

狙いを定めたその一閃は。

「——なっ!?!」

「ごめんなさい。行き先間違えました。そちらは地獄行きとなっております」

見事に留め帯を引き裂いた。

バランスを崩してゴロゴロと転がり落ちていったその先は……残念、志々雄側の陣営か、これじゃ確保は出来ないな。

まあ、あいつには弥彦が成長するための糧になってもらうって大事な役目があるしこれでもいいのかも知れない。

尤も。

「恥を忍べる器があれば、だけど」

プライドの高そうなヤツだ、引き返してどういう扱いを受けるのかはわからねえけど。

汚名返上に燃えてくれることを祈るばかりだ。

「……んっ」

屋根の上から見ればどうやら相手の多くは敗走を始めたようだ。

多分、鎌足の部隊はまだ抗戦してるのかもしれないが……助太刀しに行こうとしてダメ押しだ。

とりあえず。

「なんとか……なったか？」

怪我人の数を聞くまで安心は出来ないけど、どうやら少なくとも京都を守り切ることは出来たと確信できた。

その男、危うくにつき

「やれやれ、貴様には驚かされてばかりだな」

「ああ、拙者としても弥生殿に残ってもらって良かったと心底思うでござる」

「いえいえ、私としても新撰組の生き残りさんと剣心さんにそう言って頂けて一安心というものです」

死者ゼロ、重傷者八人、軽傷者多数。

家屋の損害は小火程度が数件。

まさしく出来過ぎと言ってはいくらしいの勝利だ。

重傷者も命に関わるような人はおらず、治癒後も日常生活に影響はないだろうという見立て。

言葉通り一安心つてもんだ。

重傷を負った人には申し訳ないと思うけど、やっぱり死者ゼロって言葉は大きい。

署長さんにしても、変に自分の手柄へとせず俺の功績だと斎藤に言っていたらしい。

「やはり剣客隊が全員無事だったということが大きいな、貴様が居なかった場所で随分と活躍してくれたようだ」

「そのようですね。あの人達の誇らしい顔、見てもらいたかったですよ」
皆が皆俺に向かって、どうだ俺たちもやるだろう？　なんてドヤ顔してきたのがほんとに嬉しかった。

実はちよつと泣きそうなくらいだったもんだ、あの人達含めて今回の結果は本当にこうなつて良かったと思う。

原作では死者が少ないながらも出たはずだ、それを俺だけの力じゃないにしてもゼロにできて、無事な笑顔を見せて。

直接的にも、間接的にも。多くの人をその運命から逃れさせたという実感が胸をついてくる。

「まあこつちのことは良いんです。そちらの首尾はどうでしたか？」

「ああ……比叡山に志々雄のアジトがあるらしい。そこで決戦だ。俺と、抜刀齋……それにあの阿呆の三人でな」

おっと、わかつてますよそこには巻き込まないって顔しなくても、わざわざ三人と強調しなくても……ね。

残念……と言えばそうだろうな。

志々雄との戦い、いや、志々雄アジトでの戦いは原作内屈指の盛り上がりどころだ。それを目の前で見たいなんて気持ちは物凄くある。

けど敢えて合っているかわからない言葉を使えばその戦いへ参加する権利がない。俺は明治政府に何かしら思うことがあるわけでも、人斬りとしての責任があるわけでも、悪即斬という信念があるわけでもない。

そんなミーハーな心で参加するなんてとてもじゃないけど言えたもんじゃないわ。加えて言うならついていって誰と戦うのかと言う問題。

行きたいと言う気持ちはあれど冷静に考えれば、あの戦いは全てが後に繋がっている。

安慈と戦うのは左之助以外考えられないし、斎藤は宇水と戦ったからこそ意識の中から外れられた。

蒼紫にしても、宗次郎にしても剣心が戦わなければ救えない。

あの場所に俺の戦う舞台がないんだ。見るだけしか出来ない、いや由美さんのおっぱいは見たいけど。

「弥生殿……」

「わかってます。志々雄一派の強襲が京都……いや、葵屋へ来ないとは言い切れない。私はその備えとして葵屋で待機することにしましょう」

複雑な顔をしているのは剣心。

巻き込みたくないという気持ちはもちろんあるだろう、だが葵屋で備えるという俺に

嬉しいとも思っている様子で。

二律背反、なんだろうな。

俺を頼れる仲間と思ってしまう気持ちと守護すべき存在と思いたい気持ちは。

実に俺の実力は中途半端だ。

斎藤、剣心、左之助に並ばないまでも影を踏んでいる。そんな位置。

だからこそ、葵屋を守るには十分と思ってしまう。

思えば上がりなのかも知れないけど、大枠で見た時の俺は紛れもなく強者の位置づけなんだろうから。

「すまぬでござるな」

「何に対して謝っているんですか剣心さん。まさかこの戦いへと……志々雄のアジトへと一緒に乗り込めないことを謝っているんですか？ そうだとするなららしくもないのでやめて下さい」

気を使うところが間違っているというかズレているだろう。ほんと、らしくない。

「私は……あなた達が勝利して、生きて帰ってくると心の底から信じています。なら、帰る場所を守ることはとても大事な役目です」

きつと薫さん達への心づもりが決まってく中で、俺への扱いはまだ定まっていなかったらうとも思う。

俺と、剣心。

この関係は最初から今まで、本当に微妙な間柄だから。

「ありがとう、でござるよ」

「……信用、信頼しろなんて言いません。言えるわけもない。ですけど、あなたを信じている人は沢山……身近にもいます。そして私は、その人達の幸せを心から願っています。その為には剣心さん……あなたがきつと必要です」

じつと剣心の目を見つめる。

逸らすわけでもなく、剣心は俺の目を見つめ返してくれて。

「……心に、刻んでおくでござる」

「ええ、生きるという意思は何よりも強い。そうでしょう?」

そう言ってみれば一瞬驚いた顔をした後。

「ああ。その通りでござる」

いつもの笑顔で笑ってくれたんだ。

そんなこんなで今回の戦闘、その処理を手伝う中考えるのは葵屋での攻防。

配置はやっぱり弥彦と……恥を忍べたなら蝙蝠也。

薫さんと操ちゃんが鎌足を相手して、夷腕坊を御庭番衆の四人が相手することになる

か。

破軍の不二に関しては何も投げるというかどうかやっても無理だ。比古師匠の到着を待たざるを得ない。

てか、そうだ不二だよ。

アイツは警察署襲撃してから葵屋へとやってくるはずだ。

変にそこで犠牲者を出すのは癪だしなんのための京都大火阻止だったんだって話になるから署長さんに言つて当日は警察署を空にしてもらおうか。

いや、そうしてしまえば葵屋へ破軍の二人というか不二の到着が早まって早期決着につながってしまうかも知れない。

そうすれば比古清十郎の到着が間に合わず俺たちが全滅つてことにもなる可能性がある、か。

比古清十郎を先に葵屋に案内するつてなれば……いや、全部あの人に任せれば良いんじゃない案件になるか。そうなつてしまえば誰も得るものが無くなる。

「……だからといってここを犠牲にするのも、なあ」

志々雄との戦いに決着がつくまで剣客隊は京都に居てくれているらしい。当然その役目は志々雄一派の動向に備えるため。

言つてしまえば不二の相手をするには本懐でもある。

避難しろって言うのは指くわえてみてろと言うに等しい。

情報提供して不二の詳細を伝えるのも変な話だ。あの戦いで姿を確認したわけでもなし、なんで知ってんだと疑惑が生まれかねない。剣客隊の人達は無条件で信じてくれそうだけど、京都警察の人達はそうでもないだろう。

先の戦いで生まれた信頼関係に賭けるのは分が悪いと思う。

「やっぱ……警戒を促すだけになる、か」

まあ変な話、不二を見て戦意を保てる人間はそうそういないだろう。

弥彦には申し訳ないが俺だってハナから諦めてるといっつか無理だ。知ってるだけにそう思う。

勝てるなんて思うには身体が小さすぎる。

ここに来てお祈りゲーとは歯がゆいけど、剣客隊の人には上手く強力な兵器を持ち込まれる可能性があるとしても話して立ち向かうよりも退く心づもりをしてみらおう。

俺が警察署に待機してその先導をしても良いのかも知れないけど……それは剣心への約束を反故にすることだし。

じゃあ改めて俺が相手にすべきは誰だろうか。

消去法で言うなら夷腕坊……か。

相手としてはどうだろうかと考えるまでもなく戦いの相手としてなら相性は最悪だ

ろう。

俺の得物は木刀、打撃は絶対に通らない夷腕坊への勝ち筋は薄い。

だが負ける相手でもない。

夷腕坊の種……中に操縦者がいるという情報を持っているのはもちろん。相手も俺に対して有効な攻撃を持っていない。

もちろん俺の体力が続く限りって限定はあるけど、それでもそれまでは引き分け続けられる。

操縦者……確か外印だったか？ そいつに対して交渉するつてのも手段の一つかもしれない。

「つて、そうじゃなくてだ」

最初から勝ちを諦めたら駄目だ。

何かその場所に勝つための手段は無かったか？ 弥彦だつて戸を羽代わりに跳んで蝙蝠也に勝利を収めたじゃないか。

姉弟子がこんなこと考えてどうするんだ、情けない。

勝つための方法……方法……。

「おーい、危険物は何処に集めてたつけ？」

「危険物？ ……つておい!? 何だそりゃ!? 藤田警部補呼んでくるわ!」

ん？ 何騒いでるんだ？

危険物って……!!

「それです!!」

「わっ?! や、弥生さん?! ど、どうしましたか?!」

はい、悩み解決ですね！ 素晴らしい！

これがあればバッチリですよ！

「私が直接さいと……ううん、藤田さんに持っていくですよ。丁度用事もあったことですし」

「え、ええ？ いや、そうですか。ならお願い……してもよろしいですか？」

「はいっ！ お任せ下さいっ！」

よっしやよっしや。

後はこれを一部ちよろまか……いや、ちゃんと説明した上で貰うか。

斎藤も許してくれるだろう、許して下さいお願いします。

これさえあれば……うん、なんとかなるだろう。

すんげー訝しまれましたが私は元気です、はい。

上手く説明できなかつた自分が情けないというかなんというか。

ともあれお目溢し頂けたのでなんとかなるでしょう、うん。

同時に先に葵屋へと向かった剣心達へと伝言を頼まれた。

言わずともがな、志々雄のアジトへと乗り込むのは明朝になるという件だ。

俺としても今日中には葵屋へと向かうつもりだったのでオツケーです。

斎藤にも葵屋であるかも知れない襲撃に備えるためにと説明して了承は得ている。

そうしてたどり着いてみれば残念なことに操ちゃん号泣イベントは既に終わつていたよ、悲しいね。

蒼紫を無事に連れて帰るといふ約束。

こうやって考えれば剣心は約束に生かされているなんて面も見えてくる。

過去にしても、生き様にしても……現在にしても。

きつと誰かとの約束や己との誓い。そういったものでいつだって崩れそうな心を支えているんだなんて改めて思ったたり。

一言それはすごいことだと思う。

現代つつか、もともと俺が居た時代で。言ってしまったばなんとなくでも生きていける時代、そういうものを心に旗して生きている人間なんてどれくらいいるだろう？

家族のため、愛する人のため。

そういうのはきつと沢山ある。けど、目に見えない何かで生きるっていうのはとても

むずかしいこと。

だつてそうだろう？

無欲に生きるつて言えば少し違うのかも知れないけど、剣心は間違いなく見返りを求めていない。

あなたにパンを焼いたから私にもパンを焼いてくれ。

無欲そうに、人が良すぎる風に。そういう欲を見せない人は大勢いるし、俺だつてそうだ。

あえていうのならば、救つた人、手を貸した人が幸せに生きてくれたらそれが見返りに足る。

そんな風に考えて生きるなんてどうやっても俺には出来ない。

今はまだ贖罪の意識からそうなのかも知れないけど、剣心の本質は間違いなくそこにある。

「……恐ろしいとも、思えます」

「そうじゃな。弥生君、お主は見た見た目の割に本質をよく見ているの。操にも見習つてもらいたいものじゃ」

今、目の前に座っている木乃伊、もとい翁さん。

皆へと斎藤の伝言を伝えた後、先の御庭番衆の活躍、助力に対するお礼を述べるため

面通しをしてみれば話題は剣心の事になっていた。

この人はほんとにメリハリがすごい。

最初俺を見た時にはうひょひょい！なんて怪我を感じさせないテンションのあげっぷりを披露してくれたが話し始めてみればこうだ。

人の呼吸をよく掴んでくるというか、上手く自分のペースに持ち込む。

「それは過分な評価です。私は人よりすごく臆病で、石橋を叩いて叩いて……日が暮れるまで叩いてから渡るような人間というだけです」

「その割には最初から確信していたように話すのじゃな？ ……いや、それを突くのは野暮というものか」

年の功とでも言うんだろな。

俺の居た限界集落爺さんもそうだったけど……多くの人と関わるって経験は、やっぱり宝で自分を成長させることに必要なものらしい。

「話を戻そう。弥生君はここが志々雄一派に襲撃される可能性はどれほどと見ている？」

「ほぼ確実でしょう。万が一剣心さん達が負けたとしても、それは個の力を打ち破ったに過ぎない。組織的な力を潰さないと志々雄側の完全勝利とは言えませんから」

とは言うもののこれは知ってるってだけで、それに尤もらしい理由をつけているだけ

だけど。

「相手にとつてみれば剣心さん達がここにいないというのは好機でもあります。その機をむぎむぎ逃すような真似は……考えにくいですね」

「そう、じゃな……。志々雄一派の兵が集団で来る程度であればそう怖いものではないが……そうとは思っていないのじやろう？」

「はい。恐らく十本刀かそれに近い実力を持ったものがやってくるでしょう。私もいることですよ」

俺という存在……というよりは十本刀に対抗し得る存在がいる程度には相手も思っているだろう。

ならば生半可な戦力を送ってくるわけもない。

「それじゃよ。弥生君、率直に言ってお主はどれほどの力を持っている？ 只者ではないことはわかる、しかし——」

——恐らく残った者の中では一番強いでござるよ。

——ああ、ちげえねえな。

後ろの戸が開き顔を覗かせたのは剣心と左之助。

「緋村君、左之助君……いや、しかしじゃの」

「こういった方がいいでござるか？ 弥生殿は左之助と同じく、拙者が最も頼りにして

いる人間の一人だと」

「安心しろって、そいつあただの女じゃねえからよ。俺らにしても弥生がここに居てくれりゃ、安心して戦えるってもんだ」

……。

ふう、駄目だぞ俺。ここで泣くなよ？

「私は……守りたい。大事な人達が大事にしているものを、守りたい。それが、私の大事を守ることですから」

心配してくれる気持ちは、嬉しい。

まさしく翁さんがしているのは心配だろう、操ちゃんと同じ年の瀬の若者……それも女を戦場に立たせるなんて抵抗があるはずだ。

戦いに生きたわけでもなく、戦いを定められたわけでもない。

そういう意味ではきつと薫さんだって、弥彦だって本音では戦って欲しいとは思っていないだろう。

だからこそ、これ以上って思ってる。

俺みたいなうら若き乙女が戦いへ身を投じることを嫌がっている。

……ん？

「はあ……いかな、老兵は死なず唯去るのみと思つたばかりじゃと言うに」

いやいやいや!?

今俺ちよつと危なかつたよね!?! 自分が女だつて心底認めそうになつてたよね!?!

「わかつた。これ以上は何も言わん。弥生君、どうかよろしく頼む」

「え? あ、はいっ! お任せ下さい!」

そう言つて俺に手を差し伸ばしてくる翁さん……つてまあそれはどうでもいいんすよ!

待つて待つて? 俺男、あいむあんだすたん? お、と、こ!!

ひゆう……危なかつたぜ、心だけは男でいたい。マジもマジ。

「へへっ! 頼むぜ弥生!」

「ああ、弥生殿。すまぬが力を貸してくれでござる」

「はいっ! お任せ下さい!」

まま、ええわ?

とりあえずいい流れっぽいし? うん。大丈夫。

だけど。

「いつまで握つてさすつてるのですかこの助平ジジイ?」

「ひよっ!?!」

ジジイになつてもホモとか救えねえぞ? ったく。

さ、それじゃ。

明日は頑張りましょうか、ね。
大事を守るために。

その男、決戦前夜につき

柄にもなくってほどでもないか。

緊張しているのは当然、落ち着けるわけもないこの夜。

葵屋の一室を借りて身体を休めてるつもりだけど、どうにも手足の震えが収まらない。
い。

わかってる、わかってるんだ。

何処かこの事態を傍観している、第三者的な俺は言っている。

何を今更びびってるのか、死線は幾つか潜ったし剣心達のお墨付きだつてあるんだぞつて。

それを受け入れられる位には冷静なつもりだし、理解もしている。

今、ここに至るまで俺は小賢しい知恵で生き抜いてきた。

自分自身の選択だ、悔いなんて無い。この世界で思う通りに生きると決めてからずっと、そういう覚悟は心に決めていたはずだ。

実際先の京都大火阻止だって、剣客隊護衛だって。

位置づけの中で俺は上手く立ち回ってきたつもりだし、その自負だつてある。

それでも初めてなんだ、そう思ってしまふ。仲間と呼べる人達、見知った人達。

漫画の中で勝手に知って、この世界で深く知った人達の中で一番という位置づけは。そういう目で見られているのだから、信頼されているのだから初めてなんだ。

プレッシャー。

これはそれだろう。

弥生になる前からずっと憧れてた架空の人物。弥生になってから見上げて、背中を追い続けた人達。

戦いに対する恐怖はもちろん今までだったある。

戦うことに恐怖を感じなくなりやそれは狂人の域だ、なれるともなりたいたいと思わない。

ただただ信頼に応えられるのかという重圧に息が詰まってしまふ。

「……怖い」

信頼に応えたいと思えば思うほどに。

勝利なんかじゃない、信頼されている弥生という俺の像を保ち続けられるかが怖い。

「つたく、顔ださねえと思つたら」

「つ?! 左之助……?」

こいつノックもなしに……俺が着替え中とかだつたらどうすんだよ? デリカ

シーって言葉を教えてやろうかこんちくしょう。

ああ、でも嫌だな。すごく嫌だ。

「んで？ 何そんな腑抜けたツラしてんでえ」

「……そんな顔してるつもりはないですよ。それより私が着替え中とかだつたらどうするんですか」

「そんなときや役得ってヤツだ」

あーどつこらせってなもんで左之助は目の前にあぐらをかいてきた。

ほんつと左之助は……。

「んなこたあ良いんだよ。そんなんで明日は大丈夫か？ わかってんだろ？ お前はこ

この最大戦力ってヤツなんだぜ？」

「……」

ああ嫌だ。

どういふ顔かわかんねえけど、左之助が言う腑抜けツラってやつをこの人に見せたくなかつた。

折角友人と一方的かもしんないけど思えるようになったのに。

これじゃあ失格も良いとこだ。

「うるさいですね、そんなことわかってるんです。ほつといってくださいよ」

「……つたく、こりやほんとにダメだな」

肩すくめられた。似合わねえなこの野郎。

あーでもダメだ、言う通りダメダメだ。

ほつといてくれなんて何処のガキだよ、精神年齢そんなの言うくらい幼かったっけか
ちくしょう。

「話せよ、弥生。今のツラはてめえがしていいツラじゃねえ」

「……」

見られたもんは仕方ない。

そうだよな、仕方ない。

最初っからそう思って相談すりゃ良いのに。

どうしてだろう、口が開かない。

「……思えば、ほんとにおめえは強くなったよな」

「……え？」

不意に懐かしむような表情になった左之助。

それこそ似合わない穏やかな顔。

「覚えてつか？ 俺に河原で負けてよ、それからよくわかんねえ喧嘩けいこをしてよ。観柳ん
とこで般若に勝って」

「ええ、もちろん。覚えていますよ」

それは俺の軌跡だ。

その中で俺は少しずつ、少しずつ自分の道を探して、見つけて。

今に至って生きている。

「誰が今のお前を想像できた？ 少なくとも俺あ欠片も今を想像できなかった。後ろをちよこちよこしてる、多少腕の立つ神谷活心流の使い手で終わると思つてたぜ？ 俺は」

「でしよう、ね。私だつて今を改めて思えば驚きますから」

だろ？ なんて得意げに笑う左之助。

実際そうなる道のほうが大きく広がっていたはずだ。

過去の弥生達がどういう道を歩んだかはわからない、だけど今こんな状態にたどり着いている弥生なんて……俺だけなのかも知れない。

訳の分からないままこの世界で過ごして。

もしかしたら認められないままに死んだ人だつて多いのかも知れない。

そんな中できつとか細い道を選び続けた結果が今だろう。

「てめえは強い。強くなつた。誰もが想像しなかつた弥生になつた。てめえの弱さが霞んで見えなくなつちまうくれえに」

「……」

俺の、弱さ。

「いつだつて余裕そうな顔して、愛嬌を振りまいて、期待に応えて、誰も信じられねえよ
うな結果を出して。お前の弱さの上にはドンドン荷物が増えていきやがった。そりや
あ俺にも背負えねえかもしんねえくらいなの」

そう、なのかも知れない。

強がつて、こうすることが自分の望みなんだからと心を奮わせて。

気づけばハリボテの強さでもカバー出来ないくらい荷物が伸び掛かっている……
それに今気づいただけなのかも知れない。

「だからよ。良いんだぜ？ また俺がぼでいがーどになつてやつても」

「……はい？」

そういう左之助の顔は至極真剣で。

ほんとに背負つてやると言っていて。

「お前はよくやった。京都大火を犠牲者無しに仕舞えるなんて俺にや無理だ。それだけ
じゃねえ、ここに来るまでにあつた出来事の中で俺じゃ手に負えねえことだつてあつた
かもしんねえ」

「それは……！」

よくやったんじゃない、自分で勝手に首を突っ込んで自分でケツ拭いただけのことで！

そう願わなければ穏やかな生活を送れていた！ 自業自得ってだけの話で！

「だから……良いんだぜ？ 俺が、守ってやる。いつかみてえに」

「……」

誘惑。

これは誘惑だろう。

ああ、そうか。

「バカがバカ言ってるんじゃないですよ」

「おっ？」

何度目だこれは。

バカは俺だ、バカって言ったやつがバカってのはこのことだ。

「これは私が選んだ道です。望んで背負った荷物です。左之助、あなたじゃ力不足にも程があります」

なあに勝手にビビって大げさにしてんだ俺は。

そうだよ、何処まで言っても自業自得。

思うように生きるってのには当たり前についてくる責任。

「らしくないですよ左之助。あなたの思う弥生はそれほどやわじやねーです」
「……けっ」

未開を切り開いてこそ、未知を突き進んでこそその先に生きる意味がある。

これは過程にある一つの結果だ。

そこで潰えてしまうような自分は何時までたってもこの人達の隣に並べない。

「背負ってみせますよ、左之助。あなたの悪一文字ほどじゃないのかも知れませんが、精一杯。私は私の望む未知を掴み取る」

「はっ！ そうだな弥生。そうだ、そういうところだぜ？ 俺たちが信頼してるのはよ」

ああ、感謝するよ左之助。

そうさ、何度だって足を止めてしまうようなよわっちい俺だけだ。

やってやるさ。

剣心じゃねえけど言ってる。

「後は私の心一つ。恐れるものは何もない」

「皆で一緒に、東京へ帰ろうね」

「ああ」

朝日に向かって……いや、決戦へと向かって歩みを進める三人。

その背中を見送って、大きく深呼吸を一つ。

「皆さん、私の見立てでは葵屋へと間違いない襲撃が来ます」

「……」

さつきまでの少し穏やかな空気が引き締まる。

薫さんも、弥彦も……操ちゃんや御庭番衆の人達でさえも、静かに覚悟を決めた表情で俺を見てくる。

「恐らく十本刀の三強以外の戦力が、ここに」

見立てもクソもない話だが、葵屋強襲というルートに対して大きく何かを作用させたつもりは無い。

風が吹けば桶屋が儲かるって話じゃないけど、少なくともそういうフラグ管理をしてきたつもりだ。

「全体の指揮は翁さんが執るべきでしょう。そしてその中に私は数えないで下さい。もしかしたら皆さんにとって突拍子もないことをするかも知れない、勝手な行動をするかも知れないですから」

少し驚きの表情を浮かべるのは弥彦と操ちゃん。

一丸となって事へあたろうとしている時に何言ってるんだなんて思ってるのかも知れない。

「ふふ……でも、安心して下さい。ここに誓いましょう。絶対に皆さんを守ってみせると」

神谷活心流にかけて。

託された想いにかけて。

そして、自分自身にかけて。

「弥生ちゃん」

「はい」

なんだろうか、薫さんはふつと穏やかな顔に戻して。

「じゃあ私が弥生ちゃんを守るわね」

「だったら俺が薫を守ってやらあ」

「あ!?! じゃ、じゃあ私は——!」

……ああ。

なんだろう、なんなんだろうなこれは。

皆がお前を守る、じゃあ私があるあなたを守ると言い合って。

今から決戦だって言うのに笑い合って。

俺が決めた覚悟なんて、すぐくすぐく小さいことなんだなって思えて。

「あはっ……あははははははは—」

思わず俺も笑ってしまう。

ほんとに、この人は、この人達は。

「ええ、ええっ！ そうですね！ 皆で守りましょう！ 皆の帰る場所を！ 命を！ 力を合わせて守りましょう！」

「つたりめえだぞ馬鹿姉え！ なあに一人でかっこつけようとしてやがんだ！」

ああ、ああ。その通りだよ弥彦。

でも勘弁してくれよ？ ちよつとはカッコつけとかねえとき、お前らのかっこよさに隠れてしまいそうだから。

「威勢が良いですね弥彦ちゃん？ そういうのはもつと強くなってから言っして下さい？」

「んだとこのやろう！ シメてやる！」

はっ！ 十分しまったさ。しめてもらえた。

もう、迷わない。

もう、立ち止まらない。

「……勝ちますよ」

「応っ!!」

そうさ俺だっってもう剣心組。

皆に負けないくらいにかっこよく生きてやるっ!!

その男、布石につき

重要度で言えば志々雄を倒すことよりも葵屋を守りきるほうが高い。

万が一剣心達が敗北したとして。

剣心が考えたように志々雄一派も再起するまでに時間は要するだろう、しかし十年、二十年後に力を取り戻した志々雄達への対抗戦力が育っているとは限らない。

そう、対抗戦力としてカウント出来る葵屋を守りきるっていうのは十年後の日本を守るということなんだ。

四乃森蒼紫へ剣心が勝利して、御庭番衆の幕引きをお頭である蒼紫が行わないのであれば、だけど。

対抗戦力としてだけじゃない、人材育成なんて面から見ても世間一般っていう枠組みから外れた位置にいる御庭番衆。

今回の戦いを経て将来への備えとして御庭番衆、その力の純度を保つあるいは向上させるって視点が生まれた。

実際翁さんはその必要もあると考えているようだ。

後継者として考えられている操ちゃんを鍛えるのはもちろん、将来生まれるだろう操

ちゃんの子供へも。

もう一度言おう。

葵屋を守ることは将来の日本を守ることだ。

全てがマイナスに転じてしまっても、先のために打つ手は必要なんだ。

それこそが俺という弥生がこの世界で生きるために取らなければならない責任。

「駄目です！ 囲まれてるっ！」

「やはり緋村君の予測はあたっていたか……」

目を開ける。

見れば葵屋玄関を百人余りの志々雄一般兵が取り囲んでいて、十本刀の蝠也、鎌足、夷腕坊が前に立っている。

大丈夫だ。やれる。

警察署には剣客隊の人達に集まってもらってる。

正直破軍、不二相手は無理だ。比古清十郎を待つ他ない。

出来るだけの備えがこの程度ってのは痛恨だけど、避難誘導や人的損害を軽微に収めることは出来るはずだ。

……まあ、俺の言うことへ素直に頷いてくれるのは嬉しいんだけどちよつと不気味です。

ともあれ。

より良い未来のためになんて死んでも言えない。

きつと今小さな事を変えたがために将来大きく変わってしまうことなんて想像できないほどあると思う。

だから、全力で責任を取る。

俺が生きて良いんだって自分で信じられる、信じ続けたいがために。

「翁さん、私は——」

「さあっ！ 観念して出てらっしゃいなっ！ ああ巫丞弥生？ とか言うヤツは私が直々に首をぶち切ってあげるからねっ！」

なんでご指名だよっ!? お前の相手は薫さんと操ちゃんだろお!?

慌てて窓から見てみれば、俺に気づいたのかニンマリ笑ってやがるぞあのホモ野郎。

「あんたがそうね？ 随分とやってくれたじゃない。方治のやつが随分と警戒しろってうるさくてさあ、志々雄様も領いちゃうし！ だったら私の出番にしたいのよね！」

「——っ」

翁さんへ目配せしてみれば難しい顔をしながら頷かれてしまう。

きつついな……夷腕坊相手だと決めていただけに切り札が効果なしだ。

っていうか正直この三人、誰を相手にしても厳しいんだよな。

蝙蝠の飛空発破ははつきり言つて為すすべないつてか見つけられなかつたし、鎌足にしても高速広範囲攻撃の乱弁天みだれべんてんだったか。それを繰り出されてしまえばかなり分が悪い。

だからこそ相性的に夷腕坊つて思つてたんだけど……いや。

「翁さん、皆が死なないよう……頼みましたよ？」

窓枠に手をついて乗り越える。

相性だなんだじゃねえつて。

小賢しく考える必要はねえんだ。

「私の指名料は高いですよ？ 鎌足、さん？」

「……へえ？ 随分と堂に入つてんじゃない。あんたにやられたつてのもわかる気がする」

鎌足がちらつと蝙蝠の方へと視線を向けたのに釣られれば、舌打ちの音が聞こえてきそうな苦々しい顔。

自尊心を抑え込めたようでも何よりです。

「お褒めの言葉ありがとうございます。あなたこそ、随分と鬼気迫つた表情だことで……それほど私が怖いのですか？」

「は……上等ね」

鎌足が台詞と一緒に大鎌を構えたことで一気に緊張感が高まった。後ろの着地音へ気を向ける余裕すらない。

どういう配置になったか気になるけど……無理、鎌足から目が逸らせねえ。

だけどどんな配置になったにせよ夷腕坊を倒せる……いや、退けられる面子がここにはいい。

夷腕坊を相手にしている人が倒れるまでに、鎌足を倒して救援に向かう必要がある、きつと夷腕坊を退けられるのは今この場に俺しか居ない。

ちったあ操ちゃん相手にした気軽な態度を見せてくれつてなもんだ。

それともこつちからカマかけないとだめか？ あーいや、俺が見てえのはおっぱいであつてかつて見慣れた象さんじゃねえ。

「行きますすよ」

「来なさい、その首……貫つてあげるわ」

一言、強い。

「うりゃあつ!!」

「——っ!」

甘く見ていたつもりはないし、分が悪いとすら思っていた。

それでも、足りなかった。

「どうしたのっ!? 避けるだけ!」

「うる、さいっ! ——つう!」

ああ、自分でも言ってたっけ?

大鎌の鎌足と言ってもその獲物は**大鎖鎌**。

その真髄は鎌と鎖の波状攻撃、か。

今、鎖分銅が頬を掠めた。

ご自慢の鎌を避けるのは容易い。

超重武器だけあって力強さは感じるが速さはそこまでではない。

だけど鎖分銅が不味い。

「流石に、よくわかっているようね」

ニタリと鎌足が嘲笑う。

ああ、男だと知ってなかったらゾクゾクしてたんだろうけどな……いや、そんな余裕はねえか。

波状攻撃、鎌が来て鎖分銅が来る。

鎌、分銅を順序よく避けても再び鎌が襲ってくる。

はつきり言おう。

攻撃に移る隙がない。呼吸が嘯み合いつぎている。

「ええ……正直、今のままじゃ突破口が見つけられません」

「くふふ。体力比べでもしてみよう？ 私が疲れるのを待つつても悪くないかも知れないわよっ。」

「冗談は止してください。男のあなたに腕力でも、体力でも勝てる気がしませんよ」

「おーおー驚いてら。もしかしたら持ちネタだったのかも知れないね。」

「だとしたらわざわざその証拠も見せるまでが鉄板？ ……とんだ露出狂じゃねえか。」

「あんた……いつから」

「驚くことでもないでしょう？ そもそも超重武器を女の手で扱えるなんて現実的じゃないですし……いくら可愛い服に身を包んでも、女の身体かそうじゃないくらいはわかります」

「言うまでもなく知っていたからってのは大きいけど。」

「自分を使って女体研究した成果でもある。やらしい意味ではない、断じて。」

「だから戦うのでしょうか？ 女を捧げられないあなたは勝利を捧げるしかない……可哀想、哀れですね」

「……」

「おわつとあぶねえ!? 無言で武器振ってくんなし!？」

ていうかこの煽り癖、まじでなんとかしないとやべえな……ほら。

「——乱弁天」

逆鱗に触れちまった。

まあこうなるのも仕方ない。

捧げられるのに、捧げるつもりがない俺と。

捧げたいのに、捧げられない男。

そりゃ、どうやっても分かり合えない。

「はあああああつ!!」

「くっ!!」

ものすごい風圧だ……っつかホント、触れるもの全てを破壊するってな感じ。

呼吸が噛み合いすぎているなんてもんじゃない、呼吸の中に入り込むことすら出来ない。
い。

「殺すっ! その首、ぶちぎってやるっ!!」

どうして俺はいつまでたってもスマートに事を運べないかね。

嫌になる、嫌になっちまうよまったく。

だけど。

「それがいい——羽踏」

いい加減、そういい加減これを完成させよう。

神谷活心流の習熟がなんでも思ってたけど、そんなの関係ない。

完成させたら進化できないわけでもなし、完成できなきや死ぬだけだ。

そして俺は死ぬつもりなんて欠片もない。

┌

退く一步を前に変えて。

音の無い世界へ踏み入る。

全力で。

全力で異能へと委ねる。

リボンが裂けた。

道着が破れた。

それでもこの身に傷はない。

見える？ 見えない。

ただただ手に持った木刀を振る瞬間を待つ。

鎌足の顔は驚き一色。

そりゃそうだ、多分誰もこの空間に入ったことも、入れたこともない。

ましてや鎌と鎖分銅が舞い飛ぶこの中で、何秒だろうか生きているなんてありえな

い。

そう、わかりやすく顔に書いてある。

それでも乱弁天を止めないのは流石と言わざるを得ない、けど、生を望んだ俺の心は、ただひたすらに繋ぎ続ける。

容易く破れるだろう薄皮を心で厚くし、挟んだ川を泳ぎきる。

「ぐっ!?!」

「——」

一つ。

台風の目へと楔を打ち込む。

「コム、スメエ……っ!!」

二つ。

入りきってしまった外周ほど激しい攻撃は見られない。

「(っ)っ……!?!」

三つ。

退くことも進むことも出来ないなら後は——。

「だりやあああああ!?!」

「——!!」

力任せに振り払うしかない。
それを。

「龍巻閃……もどきですいません」

「——あ」

穿つ。

鎌の後に続いていたはずの鎖分銅は、向かってくるも勢いを止めて途中で地に落ちた。

「オカマの気持ちなんてわかりません、わかりたくもない。ですが……嫌いじゃ、ないですよ」

「……」

気を失っているんだろう鎌足に向けて。

女になったけど女になれない俺から見れば、眩しいくらいに女だった。そう思う。

戦いの余韻を一旦振り払っていつの間にか少し離れていた墓屋へと走る。

「薫さんっ!!」

「弥生、ちゃん……？ 良かった、勝ったんだ……くっ」

そこにはおそらく蝙蝠也のダイナマイトだろう、爆風に巻き込まれて傷を負った薫さん

が地面に膝をついていて。

そこから離れるように弥彦が蝠也と戦いを続けている。

「流石、ね」

「操ちゃん!？」

ただそれより酷いのは御庭番衆の皆。

意識を保っているのは操ちゃんだけか、他の四人は地面に突っ伏している。

拳をまだ握りしめているように見えるし、傷だらけだけど致命傷はない……と思う。

「ぐふっ？」

「ちい……っ！」

だけど一刻も早く手当をする必要があるだろう。

操ちゃん自身もボロボロだ、それでもしっかりと地面に踏み立っているのは仮とはいえ

どお頭としての意地か。

窓口にいる翁さんへと目配せすれば頷いてくれるし、ここは。

「操ちゃん、あいつの相手は私が引き継ぎます。その間に御庭番衆の皆を墓屋へ」

「……悔しいけど、ごめん」

「弥生君っ！ そいつは分厚い肉で攻撃を弾き返すっ！ くれぐれも注意するんじやつ

!!」

わかってますと領きを返してから夷腕坊へと向き直る。

くっそ、人形だつてわかつててもこのツラはムカつくもんがあるな。

今すぐギタギタに……つて言いたいんだけど。

「……つつ」

羽踏発動による集中力の消費が激しい。

もう一回はちよつと無理だな。

「はあっ!!」

棒立ちに近い夷腕坊へと木刀を奔らせる。

防御力に絶対の自信があるんだろう、中にいる外印がほくそ笑んでそうでお腹が立

っ。

いいさ、凍りつかせてやるよ。

「——人形遊びには満足できましたか? 外印」

「——っ!?!」

夷腕坊の身体がビクリと震えるけど……震えたのは中の人だろう。大丈夫だ、ちゃん

といますよ。

「退きなさい、外印。あなたの目的はここで勝つことでも、志々雄に勝利を捧げることで

もないはずですよ」

「……」

ぼよんと少し力なく木刀が弾かれる勢いと一緒に少しだけ距離を開けるけどまだお互いの間合いの中。

しつかりと突きつけた剣先に夷腕坊の瞳の奥が光っている気がする。

「人形遊びという言葉は失礼でしたね？　ですが、その人形と心中する気はないでしょうあなたには。そう、あなたのことを私は知っている。知っているだけに、どうすればソレをあなたもろとも壊せるかも知っている」

「……何が、言いたい」

しやべったー！　じゃなく。

俺にしか聞こえないような声で、確かに嘎れた音が耳に届く。

「先程も言いましたよ？　退いてください。直にこの勝負にもケリが着く。機能美は確認できたでしょう？　ならそのタイミングで戦意喪失を装って逃げればいい。それまで、私と睨み合ってくれば不自然でもない」

「……」

普通に戦ってもいいのかも知れない。

けど正直俺も結構限界だ。こうして強者ぶってはいるものの気を抜いたらちよつと座り込みたい位。

弥彦と蝠也の戦いが終わるまで粘れば勝手に逃げていくだろうこともわかる。ただ、今のこの状況からどうなるかがわからない。

葵屋の攻防が知っている形から大きく外れてしまったことでもしかしたらコイツが大暴れする可能性だってある。

なら布石としつつハケさせる後押しの一手。

まだ京都編が終わった後についてあれこれ考えている訳じゃないけど、これで俺と外印の繋がりは出来た。

どうあがいても敵同士、ここで作った繋がりはやがて戦いへと結ばれるはずだ。

「貴様が私の存在を誰かにしやべる可能性を捨て置くことは出来ない」

「ならここで私の口を封じますか？ いえ、言い方を変えましょう。私に勝てると思えるのですか？」

そもそも外印にとってこの戦いはノーリスクだったはず。

ただ夷腕坊の機能美を確認する、戦いの中にこそ自身の求める美の形が追求できるからという理由だけでここにいる。

そこに俺というリスクが生まれた。本来誰も知らないはずの外印という存在を知っている俺って因子。

鎌足に勝った俺だ、ある程度の実力に疑いは持てないだろう。壊せる手段がある、

知っていると聞いたことも不気味に思えるはず。

「鎌足に勝ったことといい、貴様も外法のものか」

「……さて、一方的に知られているというのも嫌でしょう。だからその問いに対しては
そうですよと答えておきます」

まあ嘘ではないさ。

未来、その一つの形を知っているなんて外法も外法だしな。

「……いいだろう、覚えておくぞ巫丞弥生」

「もう少し若くなつてから出直して下さい」

そうして、俺と外印の睨み合いは。

弥彦が勝利するまで続き、原作通りぼよんぼよん撤退を見せてくれた。

その男、瀕死につき

大きく息を吐いて心を落ち着かせる。

上手くいった。

周りを見れば俺以外結構な傷を拵えているものの死者は無し。

この後破軍の二人、もとい不二が来るつてのはあるけど比古師匠に丸投げつてもんだ。

勝った。葵屋の攻防はここで終わり、あとは剣心達を信じて待つのみ――。

「弥生っ!!」

「――っ!?!」

操ちゃんの声と身体が勝手に動いたのは同時。

すぐその後目の前の空気が裂けた。

「発砲っ!?! 一体どこからっ!?!」

操ちゃんがぐるりと周囲を見渡す姿を見上げる。

情けねえ、気力が尽きそうになっていたせいかな地面にへたりこんじまった。

――じゃねえっ!

「っ！ 皆は葵屋の中へっ!!」

「何いってんの！ あんたも——!」

「心配いりませんっ！ いまので目が覚めましたからっ!」

くっそ迂闊だった!

夷腕坊が撤退したのにも関わらず、志々雄の一般兵は退いていないことに何かしら違和感を覚えるべきだった!

ぐつと立ち上がろうとすればやばい気配。

崩れた体勢のままゴロゴロと転がる。

「うおおおっ!!」

「つく！ 邪魔あつ!!」

トドメと言わんばかりに刀を振り下ろしてきた一般兵にカウンターを決めて。

なんとかかようやく立ち上がれたけど……くそ、射手が何処にいるかわからねえ。

「死ねええええっ!!」

「お断りですっ!! ——っ!」

更に襲いかかってきたヤツへと木刀を奔らせようとすれば、間を裂くかの様に銃声が響く。

動きづれえ……!」

位置どころじゃねえ、射線的にさっきとは別方向から飛んできてる。

細かく居場所を変えながら俺を撃つべく狙いをつけてやがる……!

「弥生っ! あたしもっ!!」

「いいからっ! 時間を稼ぎます! 手当を済ませてからもう一回っ!!」

「くっ! わかつたっ!!」

言い終わりにもう一発飛んできた……!

やべえ……やべえぞ。

体力はまだなんとか大丈夫、だけど気力が保たない。

集中できてないのがわかる、弥生の異能といえど扱う俺がこの調子じゃ不味い。

しかもこの後不二が来るはずだ。

比古清十郎が如何な達人とはいえ、不二を相手にしながらこの狙撃手をもどうにかす

るつてのは……出来そうなのが腹が立つな、なんか。

じゃなくて。

「おらあっ!!」

「ぐっ——甘いん、ですよっ!!」

兵一人一人なんか大したことはない。

だけど、いつ何処から撃たれるのかって恐怖が擦り切れてる精神にガリガリ来る。

「つとお!？」

本格的に反応が遅れてきたぞ、本気で不味い。

なんとか射手を見つけないと……!!

ここで俺が倒れちまったら兵だけでも葵屋を制圧出来ちまう。

今辛うじて戦えるのは俺と操ちゃんだけだろう、操ちゃんだけで射手と兵の相手は荷が重い。

比古清十郎含めた救援が来る、それまでに壊滅しちまうなんて笑えねえどころじゃ済まない。

不二の巨体だ、遠目から見ても目印に容易いはずだけど……ここに来る必要が無くなってしまえば、葵屋つて場所で比古清十郎と不二の戦いが起こらなくなってしまう。

「……踏ん張りどころ、ですね」

気力がなんて言ってる場合じゃねえぞ俺。

考えろ。考えるんだ。

これは狙撃だ。遠くから俺を狙っている。

狙われる理由は考えた通り、俺さえなんとかしてしまえばここでの勝負にケリがつくからだろう。

逆に言えば俺さえ戦える状態なら守りきれははずだこの場所を。

「ちええええいつ!!」

「あま——くうっ!」

今度は逆側から……?」

ありえるのか? この短期間で真逆の位置から射線を確保出来るのか?

仮に出来たとして全力で走って構えて狙って撃つ。

そんな芸当出来るやつがいるもんなのか?

「はあ……はあ……人間、技じゃねえ」

人間やめましたなんて人はこの世界にアホ程いるだけに納得してしまえそう。

だけどそれだけに人間を辞めても出来ないもんは出来ないってレベルも良くわかってる。

わかってるだけにこれが複数人による狙撃包囲網だつてことが理解できる。

ここから簡単に特定出来ないような位置。

この時代にズームスコープ、ドットサイトなんて代物があるかはわからねえ。あつたにしても近代程じゃないはずだ。

どれだけの達人、超人であつたとしても扱う道具に限界はある。

「弥生っ!!」

「っ! 危ないっ!!」

駆け寄ってきた操ちゃんを庇って地面を転がる。

手当は……まあ走れる位には出来た、か。

「操ちゃん、銃での狙撃って大体どれくらいの距離が現実的ですか？」

「……正直、あんまり銃には詳しくない。けど、どれだけ長くても——」
百、いや二百メートル、か。

だけどその距離から射抜く事が出来るやつなんて限られてるだろう。

順当に考えて、一番腕が良いやつが一番遠くにいるはず。

それくらいなら……なんとか、なるか？

だったら後は。

「操ちゃん、今から兵に突貫します」

「いつ!？」

「私が突貫して、敢えて狙撃を誘います。おそらく射手は複数いるはず、その中で一番遠くから狙っている人を探して教えて下さい」

「ちよ、ちよつと! そんな無茶な——」

「いいからつ! 私を信じなくてもいいつ! だったら使えつ! 使える手駒として私を使いなさいつ! 葵屋を守るお頭として!」

どんつと操ちゃんを突き飛ばす。

突き飛ばす前にいた場所へと銃弾が飛び、俺と操ちゃんの間を切り裂いた。

「頼みましたよ、お頭さん。私が射手を倒す。その間の葬屋は……任せた」

「……」

数瞬の間。

そして操ちゃんは頷いて再び葬屋へ。

「よし……！」

体力は？ ギリギリ。

気力は？ そろそろ目の前が暗くなってきた。

「聞こえますかっ！ ……ここそここそしているドブネズミ！ いいでしょう！ 私を見事撃ち

抜けたのなら、後世に誇ること許してあげますっ！」

残っているのは意思だけ。

生き抜いてやるという意思しかない。

「神谷活心流巫丞弥生っ!! 推して征きますっ!!」

十分だ。

それで十分俺は戦える。

「悔りがたし、巫丞弥生」

「はあ……はあ……あなた、でしたか」

流石の操ちゃんだったけど……下手こいたのは俺だな。

追い詰めるまでに随分とやらかした。

初めて……では無いけど、まともに傷をつけられたのは久しぶりだ。

左肩、右脇腹、それぞれ銃弾によって皮を裂かれている。

「誇りなさい、佐渡島方治。私に傷をつけた人間はそういない」

「そのようだ。報告は聞いている。耳を疑ったぞ？ 京都大火計画を防いだ真の中心人物、更に宇水の剣客隊襲撃阻止……こうして相對するまで信じられなかった程に」

驚きは、ある。

驚いている暇がないだけだ。

志々雄の忠臣……いや、狂信者と言ってもいいほどの人物がここにいる。

思い出してみればライフルを持っていたシーンがあったな。

飾りや脅しではないだろう、それを扱う実力だつてあつて然るべきで、その力が俺の負傷。

「ええ、こちらとしてはありがたい限りですよ。ありがとうございます、悔つてくれて」「戯言を……だがそれもここで終わりだ」

見れば銃の先に刃がついている。銃剣つてやつか。

実際に扱ったシーンを俺は見ることがないけど……伝わってくる雰囲気は強者のソレ。

対する俺はもうボロボロも良いところ。

「終わり？ そうですね、確かにそうだ。終わらせましょう、弱肉強食の世界はあなた達の手では訪れないのだから」

だけどやろう。

ある意味志々雄以上に佐渡島方治は厄介だ。

たかが個人で武器、兵器の密輸取引はもちろん、組織を纏め上げた実務能力。

志々雄居てこそこのこいつなんだろうけど……志々雄の無念を自分がと心に決めたのなら、間違いなく日本の脅威なのだから。

「——っ！」

「つうっ!？」

……ありえねえ、構えずライフルを抜きざまに——。

「はあああああつ!!」

「ちいっ！」

なんつー……鋭い突き。

イメージに無い力強さ。

なるほど確かに十本刀だ、頭脳の人だけじゃねえ。

「どうしたとは言わんっ！ 弱っている今ここで！ 貴様だけでも殺してやるっ！」
「ぐ……………」

体調が万全であつたなら、なんて思いたくもなる。

相性で言うなら悪くないはずだ、体捌きも優れているだけで常人離れしているわけじゃない。

純粹な実力で言うなら何枚も俺が上手だつてわかる。

だけど。

「そこだっ!!」

「いづつ……………!!」

痛いつてか熱い……………！ もろに太もも撃ち抜かれた……………！

これは、不味い。

「勝負あり、だ」

「……………」

立ち上がれない。

もとからそれなりに出血もしていた、本気で身体が動かないし、血が流れていくことに何かが抜け落ちていく感覚がある。

あーくそ……これで――。

「遺す言葉があれど聞き入れないぞ? ……死ね」

劍客としての勝利は無理か。

もしかしたら……俺も、死んじまうかもな?

「――なっ!?!」

「生きていて、下さいねっ! 南無っ!!」

対夷腕坊戦の切り札――京都大火阻止作戦で手に入れた、蝙蝠のダイナマイト。

それを、射線に――。

最後に見たのは赤い華。

最後に感じたのは熱い風。

最後に願ったのは互いの命。

届けばいいなと一切の意識を放り投げた。

「いやーこれじゃあ翁さんの事を木乃伊だなんだと言えませぬね!」

「つたく、目が覚めたと思えば馬鹿姉は元氣すぎるな」

不二の手によつて倒壊した葵屋を見て何故か笑いがこみ上げる。

つてのもなんだ。

俺はどうやらしつかり原作通りの結果にたどり着けたらしい。

「まあ流石の俺も驚いたがな。爆破心中なんぞ若い女がして良いもんじゃないぞ」

「あはは、ありがとございます。比古さん」

実に都合よく俺は比古さんに助けられたようです。

葵屋に向かう道中、俺を担いで来てくれたらしい。

「お礼は私の身体を見たつてことで良いですか？」

「将来性に期待してやる。出直してくるんだな小娘」

ふつと笑う比古さんやっぱりかっこいいですはい。

あーキヤーキヤー言ってる増髪さんは放置の方向で。なんか恨みがましい視線を送ってくるのも放置。

知らんがな、俺やれることやったしき、頑張ったしき。

そういうのよりちよつと労つてくれてもいいんじゃないやねえかなつて……はあ。

まあそんなわけで俺は包帯ぐるぐる巻きですよ木乃伊です。

体中痛いなのつて大変だけど元気です。

比古さんも言つてたけど、予想される爆発からその程度で済んだのが不思議なレベル。

恐らく生存本能が為した技なんだろうなつて言われたけど……多分、弥生のおかげな

んだらうな。

「でも弥生ちゃん？ もうこんな無茶はやめてね？」

「そーよっ！ あの時は勢いに負けちゃったけどね！ あたしが行っても良かったんだからね！」

「ま、前向きに善処致します……あと操ちゃんじゃ無理ですよ冗談はやめてくださいね」
なんて言ってみればムキーと怒り狂う操ちゃん。

やれやれって顔してるけど嬉しそうなのは薫さんで。

あー……終わったあ……。

結果論でもあるんだけど。

変えた責任、取れたんじゃないかなって。

多分自分の気持ちとかミーハー気分を殺さないで比叡山に行つてたら……うん、
葵屋は壊滅してただらうな。

ほんつとに由美さんのおっぱいが見れなかったのは残念だけど、まあこの光景でヨシ
としておくべきだらう。

まだ戦つてるだらう剣心達は大丈夫だ。

大丈夫だと信じてる。

なら後はここで待つてただけだ。

「これで……皆で東京へ帰れますね、薫さん」

「弥生ちゃん……」

驚きなさんな薫さん。

俺はあなたの気持ちを代弁しただけですぜ？

「そうだね。早く帰って道場も再開しないとね」

「はいっ！ ……あーでも、赤べこでのお仕事も再開かー……」

なんだか背筋に走るものがあつたけど、気のせいだきつと。

振り払うように見上げる空。

あれだけ血生臭い戦いの中であつても青く青く何処までも広がっている世界。

あー……俺、生きてるなあ。

そんな事を思いながら静かに息を吐いた。

その男、東京帰還につき

一ヶ月。

俺たちが繰り広げた葵屋での死闘、剣心たちが繰り広げた比叡山での死闘から経った時間。

あの日の夜、満身創痍とはいえしつかり帰ってきてくれた剣心たち。

ちやんと原作通りの結末を迎えることで一安心したのもつかの間だったのは俺。

所属している組織の違い。

なんだかんだ言ってもやっぱり警察組だった俺はそれなりに忙しかった。

……いや、太ももライフルでぶち抜かれたって相当な重傷なんだけどさ、まじで。

人使いが荒いにも程があるよ、なあ斎藤さん。

「……なんだ？ 言いたいことははつきり言え」

「べつつにいい？」

まあ流石にブラック企業も真つ青な使われっぷりをされたわけじゃない。

ただ東京から駆けつけてくれた恵さんのおかげというべきか、せいというべきか。あの程度動けるようになるまで然程時間はかからなかった。

幸か不幸か、銃弾は貫通しきっていたし大きな血管を傷つけていたわけでもなく、爆発による火傷なんかも含めて二週間程でだいぶ良くなった。

それでも病み上がり、怪我上りの人間がプチ復興作業の陣頭指揮なんかするもんじゃないだろう常考。

「仕方がないだろう、貴様が居る居ないでは作業効率が大きく変わる」

「はあ……喜ぶべきか他の感情を覚えるべきか。難しいところですよ」

京都警察署の人たちから向けられる尊敬の視線がやばい。

そう、京都大火阻止戦と葵屋防衛戦。

二つの戦いでどうやら巫丞弥生の名前はめちやくちや広まつたらしく。

「お疲れさまですー！ どうぞー！ お茶、冷やしておきましたー！」

「あつー！ これはどうですか？ さつきまで川で流してた西瓜ですー！」

「あ、ははー……ありがとうございます。暑いのは皆さんもそうですから、もうひと頑張りました後で一緒に夕涼みしましょう？」

「はいっ！」

なんて返してみればガッツポーズと一緒にその場を後にする警官さん。

「相変わらず人使いの荒いやつだな？」

「あなたに言われたくありませんよ……」

くつくつと笑う齋藤にがっくり肩を落としてしまえますねこれは。

とは言え、剣心や左之助もそうだけど、この人も大概な重傷拵えて帰ってきて今こうしているわけで。

そんな人の前で弱音を吐くつてのもかつこ悪いと思う。

「お互い無事に生きていたんだ。なら先を迎えるためにすべきことをするのは当たり前前だろう」

「はいはい。そうですね、そのとおりです」

それでも白い目を向けちゃうのは勘弁な！ 不死身さんまじ不死身。

「おいこら！ ワイを呼んだんはそこでいちやついてんを見せるためかい！」

「あ、ほうきさんごめんなさい、今行きますね」

「ええかげんその呼び方やめえ！ ワイにはちゃんとした——」

「さっさと行ってこい、煩くてかなわん」

しっしつと邪魔を払うようにされてしまった。

まあ気持ちはわかる、というか同感だ。

「ぐぬぬぬ……！ くつそだらあ！ ほんでなんやねん！」

「わかつてます、わかつてますからちよつと落ち着いてください」

元十本刀の張。

こいつは煩い。

「なんやその態度は！ さてはワイを舐めてるんやな？ ええでえ……いつちよわからしたるっ！」

「わからされる、の間違いでしょう？ これだから噛ませは」

「誰が噛ませ犬じゃ！」

はいはいと宥めながら。

改めてなんでこいつを密偵にスカウトしたんだろうかね。

正直向いてないにも程があると思うんだけど……實力は確かだし、荒事には向いてるのも違くないんだろうけど。

「ほんま気に食わん……ごつつ気に食わんわあ……上がいけすかんなら下もそうっちゆうわけや」

「上？ 斎藤さんのことですか？ うん？」

「なんやとぼけた顔しおって、あいつの部下なんやろがい」

「え、違いますよ？」

うん違う。

便宜上斎藤の直属として動いてはいたけど、別に部下って訳じゃない。

「はあ？ なら、あ……」

「弥生です」

「弥生はんは、なんでワイらと戦ったんや？ 警官ちやうならお国の僕っちゆうわけでもないやろ、抜刀齋の仲間やからか？」

「仲間……そうですね、そうだと嬉しいですけど。それでも私が戦った理由ではないです」

戦った理由、なあ。

別に、戦いたくて戦った訳じゃない。

ただ、思う通りに生きるって中に戦いがあっただけで、変えてしまった道のりの軌道修正に戦いが必要だっただけで。

「ならなんやねん」

「……明日も今を歩くため、ですかね」

知っている未来通りに生きるため。

知っている幸せの中に皆が居てほしいから。

ずつと言っているし思ってる。

俺って異物がこの世界に居ていいんだよって免罪符が欲しいって。

そしてそれを掴み取るために。

「ようわからんわ」

「ふふ、そうですね。私にもよくわからないんですよ」

生きる意思は何よりも強い。

俺にとってこの言葉は、きつとそういう意味なんだろう。

「あの阿呆は？」

「言われたとおり葵屋に行ってもらいましたよ」

冷房なんてないこの時代。下手すりや部屋の中の方が暑いんじゃないかって思ったりするけど、窓に吊るされた風鈴の音が風と一緒に涼を運んでくれるだけマシ。

事後処理ももうすぐ終わり。

警察署を含めた京都の町で損壊した建物の修繕も目処が立ち始めた。

だからだろう、こうして改めて斎藤に呼ばれたのは。

「……あいつがお前のように察しが良ければいいんだがな」

「あはは、それは斎藤さんの仕込み次第、教育次第じゃないですかね」

色々察している俺に向けてふつと笑う斎藤。

関わってから今までで、随分と柔らかい表情を見せてもらえるようになったなど、なんだか嬉しくなってしまう。

「恩赦が確定した。巫丞弥生、貴様は晴れて一般人だ」

「ありがとうございます。と言ったほうが良いですかね？」

「阿呆が。喜んでおけ、さもなければこっちの具合が悪い」

多分、齋藤としては俺を部下に置きたい気持ちがあるんだろうな。

こと今回の志々雄編で見せた活躍はあんまりにも有能すぎるんだろう。

かと言つて、いつか言つたとおり俺を危険な道に置き続けることへも抵抗がある。

故に、恩赦として一般人へ戻す。

それで齋藤自身も気持ちの整理をつけたんだろう。

「貴様への嫌疑、要するに志々雄一派の構成員であるという疑いは晴れた」

「それは何よりですね、もう疑われるのはこりごりですよ」

途中から少なくとも齋藤からそういう目では見られてなかつたと思うけど、それでも

公に認められたつてのは嬉しいね。

やっぱあれかな、娑婆の空気はうめえとか言つとくべきだろうか。

「加えて、だ。巫丞弥生、貴様何か欲しい物はあるか？」

「欲しい物、ですか？」

「ああ、貴様の功績は褒賞がついて然るべきものだ。しかし、コトが志々雄という日本の暗部だっただけにおおっぴらに渡せなくてな。俺を通じてではあるが……望みがあるなら聞こう」

おっとこれは予想外。

というか完全に考えてなかったな……正直嫌疑のことについても頭にあんまりなかつたし。

こういうのを棚ボタとでもいうのかね、しつかし褒美、なあ。

「今すぐに決める必要はない、東京へ戻ってからでも良い。だが、その場合俺を捕まえるのに苦労をするハメになるが——」

「いえ、その必要はありません。決まりました」

「——ほう。では聞こう。巫丞弥生、貴様は何が欲しい」

ぶつちやけ欲しいもんなんて無い。

敢えて言うならるろうに剣心の変わらない未来を、なんてもんで。

それは俺がこの先自力で掴み取るべきものだ。

だから。

「貸しを。藤田五郎で斎藤一、そんなあなたに貸し付けを一つ。それが私の望みです」

「ハ——」

そう言ってみれば、斎藤は目を丸めて一つ息を漏らした後。

「ハハハハハ!! 良いだろう巫丞弥生、貸し一つだ」

「ええ、ちゃんと返してもらいますからね?」

大爆笑した後しつかりと頷いてくれた。

そして。

「お帰りなさい」

薫さんが神谷活心流道場、その門の前で剣心へ手を差し伸べる。

そうだ、ここが剣心の帰る場所。

今まさにそうなった。

「ただいまでござる」

一瞬迷って、それでもしつかり応えた剣心。

旅の終着はここだけど、戦いの人生は未だ完遂せず。

それでもようやくここで日常を迎える、迎えることが出来るとは認めてくれたんだろ

う剣心。

皆と一緒に剣心の一步を噛みしめるように迎える。

こう出来ることを嬉しいと思う、心から。

だけどるろうに剣心の物語はここで終わらない。

それを知っている事が残念だ。

純粹に新しい日常の始まりを迎える気持ちになれない。

まだまだ仮初め、偽りとは言わなければ一瞬の安息であることを知っている。

「どうした弥生、難しい顔して」

「左之助」

一緒に笑顔で門をくぐったはずなのに、俺だけ少し陰を差していたことを気にかけてくれたんだろう目ざとい。

「なんかまだ気になることでもあるのか？」

「ふふつ、そういうのはありませんよ。ただ赤べこに出勤することを考えると気が重いなあと」

「プツ！ ガハハハ！ なんだ弥生！ 一人だけ先になんてこと考えてやがる！ 葵屋の連中じゃねえけどよ！ まずは宴会だ宴会！ 凱旋には飲めや歌えやの騒ぎが必要でえー！」

背中をバシバシ叩かれる、ってかいてえぞこのやろう、しかも右手使ってんじや……ああそつか、両手で二重の極み使えるようになってたから、そこまで負担はかかってねえのか。

「ちよつと！ バカのバカ力で弥生ちゃんを叩かないでよね！ しかも右手！ 痛めてるって自覚を持ってっ！」

「良いじゃねえかちよつとくれえ！ なあ弥生！」

「はー……恵さん、バカにつける薬を一つ下さい」

「あつたら私が真つ先に欲しいわよ……」

うんうん、深刻な怪我に至つてないよう何より。

あーでもこの状態だとあれか、両手を使った二重の極みを習得しない可能性があるな、要矯正だ。

……やれやれ。

そうだな、そうだよな。

「じゃつ、お酒は万病への薬つてことで。今日は騒ぎますか!」

「おっ! いいねえいいねえ! よおし! オイ弥彦! ひとつ走りいってこいや!」

「はあ!? なんで俺が——!」

やることは変わらねえ。

これからも、全力で剣心たちの未来を守る。

それだけだ。

その男、日常復帰につき

「弥生ちゃん、牛定三番さんー」

「はあい！」

一言言っついていい？

「せ、先輩、え、えと、えっと」

「あかんよお燕ちゃん。これはお仕置きやからねえ」

「うう……ごめんなさい、先輩」

「あ、あははー……うん、いいんですよ燕ちゃん。気持ちだけ——」

「はあい！ 次はこれやでー！」

くっそ忙しい！！

これがパワハラか、恐怖で震える。

いやいや震えてる暇なんて無いですまじで。

とりあえず人、店員は十分に居るはずなのに俺へと振られる給仕の山、山。

につこり笑顔を忘れずにとは妙さん絶対の申し付け。

そしてそんな笑顔で料理をテーブルへ運べば。

「うおおおお!! 弥生ちゃんだああああ!!」

「はい、弥生ちゃんですよどうもお久しぶりですそしてさようなら」

「うおおおん! 待って、待ってくれええええ!」

「おい、これも注文しようぜ、また弥生ちゃん来てくれるから」

やめようそんなに注文してどうするの。

はい。

只今絶賛妙さん曰くのお仕置きなう。

いやさ、ぷつつり音信不通になった俺だからさ、文句なんて言えないけどさ。

それでもこれはどうなのさ、どうなの?

後ろで燕ちゃん心配そうな視線を投げてるのは嬉しい、元気百倍、俺が居ない間頑張ってくれたんだな応えないと。

そしてその隣でいつもの細目を携えながら般若を従えた妙さん。

「はあい弥生ちゃん! 次は——」

「あははーもうどうにでもなれー」

いやまあさ、心配してくれたんだろうさ。

人のいい妙さんのことだ、もしかしたら心配で眠れない夜だって過ごしたのかも知れない。

実際俺がバツ悪そうにだっただろうけど、赤べこに戻った時なんて何も言わずに抱きしめてくれたりさ。

やつば年上って大正義。

じゃない。

こうやってお仕置きで水に流してくれってやつですよ。

というか、こうして慌ただしくも元気に働いている俺の姿をお客さんに見せて安心してもらうってのもあるだろう。

俺はどこにも足を向けて寝れねえなんて思ったりもするけど。

「やよいちやあああああああ！」

「やよ、やよよよよよよよよよ」

「落ち着いて下さい、そして食って下さい」

改めて弥生ファンがやばい。

これでもちよつと落ち着いたんだよほんとに。

ぶつちやけ復帰初日とか思い出したくないレベルでもみくちやにされた、どさくさに紛れて胸も揉まれた、後でシメといた。

度を越して騒いでいたファンの中に由太郎の姿があつたのは忘れてあげたほうが良いだろう。

愛されてるなあと思いつつ、愛されすぎてるなあとも思ったり。

実際、俺が東京の警察所に拘留されてる間、ファンたちの大捜索が行われていたらしい。

あの時、外の動きを全然知ることが出来なかつたからあれだけど、それこそ血眼で。思い出したくない初日、その理由の半分はそんな優しい皆を泣かせてしまったつてもんもある。

「やつぱり、先輩が居てこそ赤べこですね」

「はあ、はあ……ありがとうございますね燕ちゃん。でも疲弊した私を見て言われるのはちよつと複雑です」

ほんわか笑顔で言ってくれる燕ちゃんは天使だけど、ちよつとつらい。

まあお仕置きは一週間、今日で終わりだ。

目をお金に変えた妙さんが言うには、俺が復帰した初日からの三日間でなんと通常売上半月分の稼ぎを叩き出したらしい……控えめに言つて狂つてる。

ともあれこの一週間で覚えのあるお客さんやお店の店員さん、皆に改めて謝つたりなんなりで迎え入れ直されて。

うん、なんとも言えない幸福感があるつてもんですよ。

「うええええつへつへへ、やよいたあああん……ぐへへへ」

「はい、お帰りはあちらです」

あ、セクハラは結構です。

「お、帰ったか」

「はい、ただいまです左之助。弥彦は？」

「いつものだよ。あいつ、剣心が相手してくれるからって最近ずっとああだ」

苦笑いを浮かべる縁側で羊羹を食べてる左之助。

道場から竹刀が合わさる音が聞こえるし、今日もどうやらお楽しみのようだ。

「あ、弥生ちゃんお帰り」

「はい、ただいま戻りました薫さん。あ、すぐ着替えてくるので今日も稽古、よろしくおねがいします」

そう言ってみればちょっと困ったように、だけどすぐに頷いてくれる薫さん。

東京へ帰ってきてからというもの。弥彦が剣心に竹刀を振り回すのに夢中になるように、俺も薫さんに稽古をつけてもらうことへ夢中になっている。

っていうのもあれだ。

改めて剣のいろはを教えてもらってみると色々な発見があった。

それは足運びであったり間合いのとり方であったり……何なら竹刀の握りなんて基

本的な部分でもある。

弥生の異能ですつ飛ばしていた事を改めて見つめ直す。

これははつきりと自分にとってプラスに働いていると実感できた。

基本が出来ていないとは言わない。

ただ少なくとも俺が今に至る過程の中で、あるはずの初級から上級とステップ。その中級って部分があつそりと抜け落ちているんだなと理解した。

確かに。

薫さんから提案したことだが、稽古の最後に必ず他流試合の感覚で薫さんと試合をする時間がある。

その時間で、俺は薫さんに問題なく勝つことが出来た。

しかし、だ。

これが神谷活心流としてなら話は違ってくる。

相手を倒すのではなく制する。

この違いはものすごく大きい。

いつかの誰かが言っていたが、相手を慮ってどうして倒せるのかと。

俺も、同意見だ。

しかし、薫さんはそれをしていてなお一流の剣客だ。

今まで倒してきた相手に対して、生きていますようにだとか、急所は外してるから大丈夫だろ。なんて微妙な考えで相対していかない。

どこまでも神谷活心流は愚直に相手を生かして制する。

そしてそれは脈々と弥彦にも受け継がれている。

剣心との稽古……いや、敢えて言えばちゃんばらごつことしよう。

その中でさえ弥彦は神谷活心流の太刀筋を描く。

剣心が飛天御剣流を教えているつもりはないっていう言葉。

その中にはきつと、神谷活心流の剣客としてこのまま育つて欲しいという想いもあるんだらう。

そういう成長の中に飛天御剣流は要らない、いや、混じってはいけないうすら思っているのかも知れない。

だからこそ、はんちくに弥生の異能が混じっている俺って存在が恥ずかしくなった。

弥彦はあれほどまっすぐに剣客としての才覚を伸ばしている。

強さに違いは無いけれど、それでもかかって子供心に憧れた光景と姿があった。

元々神谷活心流を学ばないと、なんて思っていたところだ。

そしてその気持ちは間違いじゃなかったし、重要なことだった。

「おう、邪魔するぜ」

「……私がまだ着替え中だったらどうするんですか」
「終わってんじゃないかねえか」

まったく真面目なこと考えてるときに左之助は。

もう完全にあれだよ、気楽な友達みたいな感覚で接されてるよね、俺のこと女だと思ってるわねえわこいつ。

……ん？

いやいや、それでいいんすよ、俺男ですって。

「嬢ちゃんに気を使ってんのか？」

「はい？ 薫さんに？ 何に気を使ってんですか」

気を使うってなあ。むしろ使ってもらってるくらいなんですすがそれは。

「いやよ。最近弥彦が剣心にべったりじゃねえか。それでその分おめえがつてな」

「あはは。そんな繊細な私に見えますか？」

「割と見える」

「ぐ……と、とにかく！ そういうのじゃないですよ。……私に必要なものはまだまだ
沢山あって、その一つを薫さんが持っている。それだけのことです」

利用している。

それは間違いない。自分がもつともつと高みに至るために。

気が引けるなんてかつては思ったけど、自分の思うように生きると決めてから不思議とそんな甘い考えは無くなった。

薫さんを尊敬している気持ちに嘘はない。

一流の剣客としても、姉のような存在としても。

そしてだからこそそんな考え、甘えこそ薫さんは嫌がるだろうとも思う。

あの人は俺にも、弥彦にも持った翼を大きく広げて飛んで欲しいと願っているんだ。

「……でかくなつたな」

「は？ セクハラですか左之助。ぶつ飛ばしますよ？」

「せくはら？ なんだかわかんねえが喧嘩なら買ってやんぞコノヤロウ」

そうしてニツカリ笑った左之助にパンチを一つ。

ああそうだ覚えとけよ左之助。

俺に足りないものはきつとお前だつて持つてんだから、いつか全力で学びに行つてやる。

さて、薫さんとの稽古も終えて。

一日のシメとして、姉弟子の俺は弥彦と勝負する。

「よろしくおねがいます」

「お願いします！ ……今日こそ一本取ってやるからな、弥生姉」

目の前で竹刀を構える弥彦。

左之助じゃないけど、でかくなったななんて毎回思う。

以前こうしていた時よりも、遥かに重く、強い雰囲気を纏うようになった。

そしてそれは弥彦も同じだろう。

今からするのは神谷活心流としての試合じゃない。

一人の剣客として相對しているんだ。これは弥彦が望んだことだ。

背中にうつすら冷や汗が伝う。

同じかそれ以上に……弥彦は始まる前から呼吸を乱している。

そうだ、弥彦は。

「落ち着いて下さい」

「っ！」

強くなった。

強くなったからこそ、相手の強さを感じられる様になった。

「いや、間違えましたね。どうぞ、落ち着かないで下さい。熱くなって下さい。いつものように、負けねえと吠えながら立ち向かってきなさい」

それこそ弥彦の味。

負けん気に押されて、必死に足掻いて。

もつともつと強くなれ、弥彦。

「はじめっ!!」

薫さんの合図が降ろされる。

「うおおおおおっ!!」

「」

そうだが向かってこい弥彦。

そしてそれを俺は全力でねじ伏せてやる。

——羽踏。

世界を切り替える。

気持ちがいいくらいいまっすぐと振り下ろされる面の一撃。

もしもこんな異能がなければ呆気なく通してしまうだろうその太刀筋を——

「一本っ!!」

「つつう!」

—— 躲し様に小手へと竹刀を奔らせる。

世界を戻したと同時に薫さんの声が上がった。

「—— やっぱ、つええなあ……弥生姉は」

「弥彦ちゃんこそ。けど、まだまだちゃん付けは続きそうですね」
「はっ！　すぐ取っ払ってやるさ！　今に見てろよ！」

悔しいだろうけど、笑顔でそういった弥彦の強さ。

死線をくぐって、成長したこの姿。

神谷活心流としての俺が追いかけるこの小さな背中。

剣客として追わせる俺の背中。

どうか釣り合いが取れていますように。

そう願わずにはいられない。

「どうでえ？　剣心」

「……一言、強い、としか言えないでござるよ」

はいはい、高みの見物はすぐ出来なくて差し上げますよ。

「ね、弥彦ちゃん」

「うわっ！　頭を撫でんじゃねえ！　この馬鹿姉っ!!」

その男、剣心とのお話につき

「それにしてもさ」

「おろ？」

「はい？」

剣心へぶんぶん竹刀を振り回していた弥彦。

汗を拭いながら、不意に思い出したなんて風に口を開いた。

「なんで弥生姉えは剣心と戦わねえんだ？」

戦う、ねえ？

思わず剣心と顔を見合わせてしまう。

「随分と物騒な話でござるな」

「ええ全く。急にどうしたんですか？」

剣心は苦笑い混じりに、多分俺も似たような顔してると思う。

「急につてわけじゃねえよ。ずっと思ってたんだよな。俺は剣心とこうしてるけど、なんで弥生姉えはやらないんだ？ やりたくないのか？」

「うーん……」

思わず考え込む。

まあ確かに純粋な疑問なんだろう、強さを求める人間が、強い人間に稽古……なんて言えば大層かも知れねえけど、軽くでも手合わせしてもらえらなら飛びつくもんだ。

弥彦は傍目でみててもわかるくらい強くなりたいって思ってた、それを実行に移すことに躊躇はない。

由太郎にしてもそうだ。弥彦に負けたくない、俺に惚れてほしいなんて思ってた強さまっしぐらだ。

……惚れませんか？ 残念ながらノーチャンスです。

「そう言われてみれば。拙者としても気になるでござるな」

「あ、裏切りましたね？」

「おろっ…」

まったく剣心はおちやめだなあ？ 今日には薫さんメシな。

ともあれ。

「私ももちろん強くなりたいと思っっていますよ？ ですけど……」

何ていうんだろいな。

強くなりたいと思っっていて、そのための手段を厭わないって覚悟もある。もちろん

真つ当な方法の範疇で。

ただそれでも。

「今じゃない……そう、今じゃないんですよ」

「今じゃない？」

うまく言葉に出来ないけれど。

俺個人の思いとしてもつたいたいなんて気持ちがある。

遊びだとしても、真剣だとしても。

そういう立場や環境でこの人と刃を交えたくないんだ。

「……いずれ、拙者と刀を交えたい。そういうことでござるか？」

「気持ちの上では……そうですね。やっぱり剣心さんは、目標の一つであり壁ですから」

ふむ、と考える剣心。

こういうところで変わったな、なんて思う。

多分京都での一件が無ければ、困ったように笑って誤魔化されて終わりだっただろう。

前向きに、というよりは真面目に考えてくれている。

恐らく、俺と戦うことを拒否するのではなく、どうすれば双方納得出来る形で戦えるのかを。

そして多分気づいている。

仮に道場でやるような真剣試合では納得されないだろうとも。

「わかった。覚悟しておくでござるよ」

「ふふ、ありがとうございます。言質、頂いておきますね」

うん、ありがたい。

ただうまく言葉に出来ない部分。

俺の中に眠っている弥生。

弥生がそんな生半可を許してくれないような気もするんだ。

折角殺してもらえる機会だったのに。なんて。

……。

ああ、そうか。

俺の気持ち、弥生の気持ち。

きつと、俺は。

「なんだよ！ 二人してわかったような雰囲気出しやがって！」

「あはは、弥彦ちゃんにはちよつと早かったですかね？」

「んだと!? シメてやる!!」

弥彦の飛び蹴りを軽く躲して。

俺はきつと剣心と、命のやり取りをかけた勝負をしたんだなっことを理解した。

はつきり言つてドン引きなうだ。

何回もまじかよなんて頭で思つて自問自答、多分口からも出てたと思う。

追いつきたい、並びたいって思つてたのははつきりわかつてた。

それが目標だと思つてた。

でもそれは少しだけまだ先があつた。

「なるほど、な……」

木刀を振つてはいるけど、風切り音が耳にまるで届いてこない。

どうやらすつかり勝負とは命のやりとりあつてこそ真剣勝負、なんて思想が根付いて

しまつていたらしい。

いや、多分。

一般人だつたはずの俺は死線を潜り過ぎた。間違ひなく感覚がぶつ壊れている、多少

剣の腕がたつ一般人の域を逸している。

わかつてるさ。

腕試しなら試合をすればいいって。

審判をつけて、面前でやればいいって。

でも、それをして納得、あるいは満足出来る自分をまるつきり想像できない。

ああ、ほんとになるほどだ。

薫さんが俺を出稽古に連れて行かなかつた理由。

今の俺は、絶対、無意識にやりすぎる。

どうしてこうなった。

本気で唾然としてしまう。

今になって斎藤が言った民間人を戦いへ巻き込みたくない理由の一つだろうことを理解できた。

まだ人を殺したことは無いけれど。人を殺したいとも思わないけど。

誰かを殺す覚悟を決めたがっている。

それはつまり、殺される覚悟を決めたがっていることでもある。

「やらかした、なあ」

ああ、ああ。

まるつきり知らないはずの弥生の目論見通り。

このままじゃ俺はきつといつか剣心に勝負を挑む。

剣心は絶対に俺を、誰かを殺さないけれど、そう確信出来るけれど。

経た紆余曲折は、どうやら殺されるための準備でもあったらしい。

「やんなる、な」

弥彦のような真つ直ぐさがあつたのならば。

きつとこうもひん曲がらずに済んだらう。

この世界で、原作通りのハッピーエンドを迎えたい。

その気持ちは確かに、然と、強くある。

でもその先は？

描かれなかつたるろうに剣心、その未来に生きている俺は、一体何をしている？

その未来はきつと知らない、未知の道。

そこに俺は、何をどうして生きている？ 生きている、意味は？

……教えてくれ、意味のない事なんて無いって言うのなら、そんな未来で俺は何を生

きる意味にすればいい。

「やつてる、でござるな」

「あ、え……？ 剣心、さん？」

相変わらず風切り音は聞こえなかつたけれど、違和感なく耳に届いた剣心の声。

音を辿つて顔を向ければ、いつもの少し困つたような笑顔があつた。

「随分と集中していたようござるが……少し休憩をいれても良いと思うでござるよ」

「そう、ですな……」

よくよく見れば剣心はお盆にお茶を入れて持つてきてくれた。

湯気は立ってない。温くなるまで見られていたのか、それとも飲みやすいように配慮してくれてたのか。

縁側をなんとなしに促されて、向かう。

少し前なら、こんだけ剣を振るのに夢中だったなら、しばらく歩けないくらいだったのに、今は何の無理もなく足が動く。

「ありがとうございます。あのままやってたら倒れてたところですよきつと」「邪魔をしてみましたかと思っただが……そうなら良かったでござる」

受け取ったお茶はやっぱり冷めていて。

明治時代だ、キンキンに冷えているなんてことはないけど、火照った身体に馴染むように染み渡っていく。

続いて剣心も湯呑へ口をつけて。

俺と二人、なんとしはなしに空を見上げる。

「……何を小娘が、なんて思いましたか?」

「弥生殿?」

自分では、剣心や左之介。斎藤の影を踏んだなんて自惚れているけれど。

きつと本人たちからすれば、まだまだケツの青いガキで女。

いや、そんな風に思われていないなんてわかつてる、斎藤はいまいち自信ないけど。

だから口にするのは卑怯なんだろう。

それでも口に出そうとしてしまうのは、それこそ青二才の証明。

「京都で言った頼りにしている仲間……その言葉に嘘偽りはござらん。左之にしてもそうござる。そんな相手にそう思われることを誉れとして受け取りはしても、侮蔑する理由にはならないでござるよ」

「そう……ですか」

違う、違うそうじゃない。

その言葉は、ある意味まだまだ俺を下に見ているからこそ言える言葉だ。

俺が弥彦に抱いている感情と同種のもののはずだ。

「私は……きつと、あなたを殺したいんだと思うんです」

「……」

そして同じくらい殺されたいと思っている。

弥生も俺も。

もはや混ざり合って溶け合えすぎたこの心と身体。

私怨なんてない。ただどただだこの世界をあるべき形に収めたい。

その一点において、疑いようもなく、どうしようもなく俺は弥生と一致している。

「驚きましたか？」

「……いや」

「だけど剣心はやつぱり笑つて。」

「知つていた、と言えは言い切りすぎでござるが……うすうすは、感じていたでござるよ」

「……」

「ああ、そうか。」

「京都で雪代巴の墓前へ花を手向けた剣心は。」

「弥生殿がどうしてそう思っているのかはわからないでござる。だが、少なくとも拙者は——」

「——過去と向き合う覚悟は出来ているでござる。」

「もしも弥生殿が、拙者の過去が原因で、拙者にそう思っているのなら——」

「そこまで剣心に言わせて、言ってもらつて我に返つた。」

「止めましょう……すみません。こんな事を言つてしまいました。私は、今の幸せを壊したくないとも思っているんです。忘れて下さい」

「だから慌てて遮つた。」

「今の剣心に贖罪を問うのはダメだ。」

「恐らくもうすぐ始まる人誅の時間、雪代縁との戦いで答えを見つけた剣心に向けるべ

き言葉だ。

何より。

「贖罪の意識を覚えるべきはあなたでは無いのですから」

「弥生殿……」

この剣心ではない剣心との、罪とすら呼んで良いのかわからないモノを押し付けてはいけない。

お門違いにも程がある。同じ人物であって、違う人なのだから。

「さあ、もうすぐ薫さんたちも帰ってくるでしょう、左之助も来るでしょうし……夕飯、手伝って頂いてよろしいですか？」

「……ああ。わかったでござるよ」

ごめん剣心。青二才で。

きっとこれは剣心の問題じゃない。

どこまでも、どこまでも俺の問題なんだ。

もうすぐ始まるだろう、縁との戦い。

ああ、そうだ。

剣心が答えを出すように、俺もいい加減答えを出そう。

願わくば、誰もが納得できる未来に至れるように。

その男、心境整理につき

気持ちにはわかった。

一度理解できたらそれをそのまま飲み込めて領けるし、否もない。

だけどもあ、わかりきっていることではあるけど今の俺では力不足もいいところだ。

仮に前言を速攻で翻して戦いを挑んだところで瞬殺されるだろう。

いや、瞬殺されることに問題はない。

単純に納得できないんだ。

そう、力不足とわかってる。

ならばやれることをやりきった上で、だ。

「おいおい、弥生ちゃんの憂鬱な顔とか……どうしたんだ？」

「そうですね……でも、ふふふ、その、言いくいんですが……」

「ああ、控えめに言ってもぐつとくるな」

今改めて神谷活心流を学んでいる。

これはまず間違いない俺を成長させる一つの因子となってくれるだろう。

剣術のいろはってやつは、やつぱり必要なんだって、東京に帰ってきてからの数日で

痛いほど実感できた。

それに加えて、剣心。

こんなこと言える程の実力者に至って無いけど……。

今の剣心に戦いを挑んでも意味がない。

先を知っているだけに。そう、先を知っているからこそ全てを乗り越えた緋村剣心と戦いたい。

「……なあ、弥生ちゃんって。あんなに美人だったっけか？」

「有罪」

「よおしちよつと表出る再教育だ」

「ちがっ!? 可愛いし天使万歳だけでもよっ!? あんなに艶っぽかったっけって話!？」

仮に、色々諸々を柵に上げて今戦いを挑めば。

さつき思った力量差はあれど、剣心は黙って罰を自身に刻む。

贖罪の意識から戦おうとする剣心は、きつとそれが正当な理由であれば黙って打擲されることへ抵抗しない。

瞬殺されるってのは、下手すれば間違いで、瞬殺してしまうことになりかねないんだ。

「——い」

そうだ。

だから剣心には答えを出してもらおう原作通り。

剣と命を賭して、戦いの人生を完遂する。

その答えを導き出した剣心と……うん。

「よおしー！」

「せんば——わひゃあ!？」

ん？ 燕ちゃんなんで後ろでこけてんの？ 仕事中に遊びかな？ ……ふふふ、成長

したじゃない。

「大丈夫ですか？ 余所見でもしてました？ ああ、弥彦ちゃんなら今裏で炭用意して

くれてますよ?！」

「ちがつ?! ……うー、先輩ひどいです」

んんん？

俺、また何かしちやいました？

あれ？ つてかなあにファンクラブの方々さん、こつちみんな。

「はいはい、食べ終わったのならお会計して下さいね」

「やったぜいつもの弥生ちゃん！ お会計にはまだ早い!！」

あん？ まだ何か食べんのかい？

よく食べるねほんと。

「だ、だめつす。自分もうさっきなのでお腹いっぱいです……」

「ああ……やよつば……これは良い文化……」

何だこいつら齋藤さんカモン、そして悪即斬プリーズ。

お仕事終わりは左之助のお迎えから。

「別にもうボディガードは要らないんですよ?」

「かかつ! 硬いこと言うんじやねえよ、いいじやねえか」

そう言つて魚の骨をプラプラさせる左之助。

こつちに帰つてきてから何気に初めてのお迎えである。

……まあなんだ、別にそこまで長い付き合いってわけでもねえけどなんとなくわかる。

「やれやれ、まだまだ小娘扱いしたいってわけでも無いでしょうに。それで?」

「あん?」

「何か話したい事があるんでしょう?」

言つてみれば一瞬表情を固めて。

「……つたく、ほんとによ、そういうところだぜ?」

「だからどういうところですか」

もう耳タコですよほんとに。

友達に遠慮しないでさっさとゲロって下さいなつと。

「あー……なんだ。今日あの女狐のところにコイツを診てもらいに行つてただけだよ」

「あれ？ まだ治療終わつてませんか？ もしかして結構重傷です？」

原作での左之介は右手だけで二重の極みを乱発して負担を重ね、止めと言わんばかりだった三重の極みでやらかしたはずだ。おまけに志々雄への一発。

この左之助は両手で使えるようになってるからそこまで負担がかかった訳じゃない、なんて思つてたけど原作通りへの謎パワー働いちやつた？

「うんにゃ、もうでえじようぶだ。今日で終わりつつつてたしな。まあそんな時によ、ちと話してたんだが——」

話を聞いて思い出した。

恵さんが言うところの失恋へ心の整理をしている最中なこと。

何かしらの強い念が込められた刀傷は、その思いが晴れない限り消えることは無いなんて話。

「剣心の十字傷はよ、ありや剣心が片付ける問題だ。だから別に気にしてねえ」

「ええ、私達が何かしてはいけない問題でしょう」

うんうんと頷く左之助の目にはわかつてるじゃねえかなんて色。

「弥生はあの女狐と何か帰って来てから話をしたか？　もし話してねえなら……なんだ、まあちいとよ」

「そうですね、今度羊羹でも持って伺います。京都はもちろん、いつもお世話になつてますし……左之助の右手を無料で診てもらつてるお礼も兼ねて」

「そこまで言えば少しだけバツの悪そうな顔をしてから、お礼を言われた。」

「なあに気にすんなつてプータロー、いつか身体で返してもらうさ。」

「ていうか弥生、おめえも何か浮つた話の一つでもねえのかよ」

「やめてくださいいきもちわるい」

「いやほんとやめてほもはやめて。」

「……思わずこみ上げるものをなんとか抑える。」

「おいおい、そんなに嫌がる話だったか？　わりいな」

「……いえ、こればかりは仕方ないです、はい」

「というか左之助に言われるのもなんだか癪あせというかなんというか。……なんでだろ。」

「んじやあこの先何かやりてえこととかあんのか？　正直、俺にやあおめえが道場あそこで一生を終えるつて光景が想像出来ねえが」

「そうですね……いづれ、出るときは来るんだと思います。剣心さんと薫さんの邪魔になるでしょうし——」

ちゃんと物語がうまく進めば、だけど。

この前考えた生きる意味。

新月村での一件で、なんとなく、弱い人を守りたいじゃなくて、弱い人を強くしたいなんて思ったりもした。

新月村は……今どうなってるのかわからない。もしかしたら斎藤の言うように、人間の汚いところが露呈して人間関係が拗れに拗れているのかも知れない。

そう、俺自身もそうだけど。

誰かに助けられるってのは、あくまでもきっかけだ。

助けられた後、助かった自分がどうなるのか、どうなっていくのかは自分が決めること。

もしかしたら同じ失敗を繰り返すのかも知れない、似たような窮地に立たされるのかも知れない。

そんな分岐点に立った時、自分が望む未来へ踏み出せるための力を付けてもらいたい。

そんな一助に、なりたい。

「ほおん……意外とって訳でもねえが。考えてやがんだな」

「考えるだけならタダですから。でもその前に、私は一つやらなければならないことが

あるもので」

そうだ。

こんな夢物語は、見失ってしまった未来にある。

剣心という高い高い壁の向こう側、そこにある。

「左之助はどうなんですか？」

「俺か？ ……さあて、な。少なくとも、嬢ちゃんと剣心が上手くいって、そのガキは見えておもうてるがよ」

聞き返してみれば夕焼け空を見ながらそんなこと。

まあそうだろうな。

剣心たちと関わりを持ち始めてから今日に至るまで。

今の日々は左之助にとって、こんな世の中に生きるのも悪くねえ。なんて思えるための期間に過ぎない。

原作然り、悪くねえと思って左之助が生きるには狭すぎる日本だ。

やつぱり、俺は、漫画で見た、ちっぽけな小舟に乗って海原を行く左之助の背中が忘れられない。

なんだかもやもやする気持ちはあるけれど。

それについていくのも悪くはないかもなんて思ったりもするけど。

「ま、ゆつくり考えましようよ。自分らしい明日を迎えるために」
「……そうだな」

二人揃って夕日を見上げて、なんだか少し切ない気持ちになった。

「薫さん」

「うん？ どうしたの弥生ちゃん」

いつもの稽古、薫さんとの一本勝負の後。

女の人が汗をかいてる姿って色っぽい……なんて昔は思っていたけど、不思議と今はそんなに。

あれほどおっぱいおっぱいと思ってたのに、今は薫さんの胸元が見えても気にならな
い。

……いや、健全なシーンだからそう思ってるだけだ。そうに決まってる。
まあそれはおいておいて。

「私は、神谷活心流の師範代になれますか？」

「……弥生ちゃん」

すなわち神谷活心流の看板を背負うことが出来る人間になれるのか。

回りくどいのは俺も薫さんも嫌だろう……いや、俺だけがそうなのかも。

とにかく真つ直ぐに、正座して目を真つ直ぐに見て。

「正直に、教えて下さい」

予想は、している。恐らく、確信もある。

俺自身も悟っていると、薫さんだつてわかってるんだろう。瞑目して少し、同じく正座をして目を見返された。

「無理ね」

「……」

ああ……覚悟はしていたけど。やっぱりクるものがある。

そして。

「薫さんは、やっぱり優しいですね」

「そんなことない。今、自分がどれだけ酷いことを言ってるのか、わかっているもの」

それでもその目は真剣で。

「弥生ちゃん……強くなった。門下生としてではなく見るのなら、私は一人の剣客としてあなたを尊敬するほどに」

わかる。

ここ最近ずっと竹刀を交わしていたんだ、それくらい感じられる。

そしてそれは薫さんだつて一緒だ。

薫さんが一流の剣客であるが故に、余裕を持って相手を活かそうなんて考えられないが故に。

俺が勝負時、何を考えて、何処を狙ってるのか。きつと伝わってる。

「こうして改めて指導して。力不足を嘆いちゃうほど、私にはそれを矯正することは出来ない。初めてあなたの剣を見た時、わかっていたことだっというのに、出来ない」

「……はい」

手を、すでに離れてしまっていたから。

今の感情がわからない。

悔しいとも思う、辛いとも思う。

膝の上で結んだ手に、涙が落ちた。

「弥生ちゃん」

「はい」

いつの間にか俯いていたらしい顔を上げる。

「それでも、ここに剣を握っている間はうちの門下生だからね」

その先にあつたのは笑顔。

ああ、やっぱり優しいな。

薫さんが言った言葉の意味。

——思うがままに生きてね。

そう言っている、言われたんだ。

俺が得た力を間違った方向に使うわけがないという信頼。

手が届かなくて、目が見えない場所においても、きつと光の射す場所を歩いてくれるという確信。

「ありがとうございます、ごさいます！」

「ううん、こつちこそ。だからこれからは——」

——家族になろうね。

そう、俺と同じように。

目端へ涙を溜めて、言ってくれた。

その男、大失敗につき

「おせえ！ 剣心のヤロウ！ もう四時半だぞー！」

おーおー吠えてますねえ。

全く、先を知らないってのはちよつと羨ましいもんだ。

ああ、そうだ。

きつと今日の夜、赤べこは人誅の犠牲になる。

色々な思いから、宴会の準備をやらせて下さいと厨房に立っている俺。

なし崩し的ではあつたけど、やっぱり愛着というか……そういう思いがある。

やっぱりだからだろうな、こうして丁寧に料理を作ってしまうのは。

こういうところなんだろうな、俺が神谷活心流でいられないっていうのは。

だつてそうだろう？ 俺は知っているのにも関わらず、赤べこが犠牲になるのを止めようとしていないのだから。

京都で色々していた頃ならば、きつと赤べこ壊滅も阻止してその上で物語を上手く進めようとしていたはずだ。

……自分が嫌になる。

剣心が人誅と向き合うことが大事だつてわかつてる。なんてのを理由にして、犠牲を容認してしまうなんて。

人誅。

考えてみれば、もしかしたら弥生も雪代縁たちの仲間に入つて、無理矢理にでも剣心と戦う道があつたのかも知れない。

弥生の想い。

剣心を殺し、殺されたいと願う心。

それは間違いない人誅と言える範疇に存在しているのだから。

弥生に従つて、人間関係を振り切つて。

何も感じることはないよう心を凍てつかせられたのなら。そんな風にも思う。

かと言つて時既に遅し。

人誅グループに信頼関係があるわけじゃないだろうけど、参加するのには無理がある。

何より薫さんを実際には殺さないとは言え、危険に晒すなんてとんでもない。

上手くグループに入れたとしても、絶対にボロが出て終わりだろう。

終わり、と言つても雪代縁は俺を殺せないだろうが。薫さんを手に掛けることが出来なかつたように。

何にせよ、だ。

そもそもこの戦いに介入するべきなのかどうかって問題だつてある。

これは剣心の戦いだ。

大事な大事な、心と過去との戦いだ。

剣心と命のやり取りをしたいなんて願っている俺が参加しても良いもんなのか。

そう思つて躊躇してしまう気持ちがある。

「だけど、やらかしてゐるなあ……俺」

外印。

葵屋での戦いで、俺は夷腕坊ではなく外印とやり取りしてしまっている。

仕方がなかった……なんて思いたいけど、それでもいざ目前に迫つてくるとどうい

影響が生まれるか心配にもなつてしまう。

「ほんとに、俺は……都合が良いやつだ、なあ」

ああそうだな。

丁寧料理を作つてしまうのは……きつと愛着なんかじゃない。

罪悪感からだ。

「弥生ちゃん？ お客さん来はつたから、ごめんやけど鮭飯一つお願いしてもええ？」

「あ、はい。わかりました」

鮭飯……そうか、来たか。

武身合体、鯨波兵庫。

……。

「ダメだ、考えんな。これは、必要なことなんだから……！」

歯を食いしばって、耐える。

お笑いだ、何が耐えるだ。

かつての自分が今の自分を見たらぶん殴ってる。

そうだってわかってるのに……！

「ちくしょう……！」

心とは裏腹、すごく美味しそうに出来上がった鮭飯へ。

無性に、腹がたった。

「で、どうした？ 二人して何があつてえ？」

宴会の帰り道。

左之助が俺と剣心に対して口を開く。

「……はあ、左之助に心配されるのに慣れた自分が嫌ですね。お気遣いなく、私は男の人には言えない乙女の秘密です。それより剣心さんのほうですよ」

「ち……まあそう言えるならでえじようぶか。だが後でしつかりシメてやらあ。で？
剣心は」

ふう……。

割と大丈夫じゃないけど、自分が物語の邪魔をしちや洒落になんねえしな……しくつたなあ、顔に出てたか？

まあいいや、気をつけよう。

というか弥彦、酒クセエ。

「嬢ちゃんたちに隠すのは構わねえが……俺に隠すのなら、まだこの俺を弱点扱いするつもりなら。全力でためえを叩き伏せてでも口を割らせてやるぜ」

「生憎とそこまで野蛮な私ではありませんが。今の幸せが脅かされるのを、忍べる女ではないつもりですよ」

「……そうだな、すまん。左之と弥生殿には……話しておくべきでござったな」
どの口が言うんだまじで俺は。

心が痛すぎて笑えないぞ。

「いい加減、お前も平和に慣れろよ」

左之助がそう言つて促した、蛭と戯れる三人。

そんな光景が、より胸を突き刺して、ご都合主義すぎる俺の心を痛めつける。

この光景は――

「!？」

アームストロング砲で切り裂かれるって、知ってるんだから……!!

「先輩？」

「ん……どうしましたか？ 燕ちゃん」

無垢な瞳がっらい。

心配しないでくれ、しないで欲しい。

もう痛すぎる。

「半鐘の音……やっぱりさっきの轟音……」

「アームストロング砲？ いくらなんでもそれは」

あるんだよ。

ありえないことなんだろう、だけどあり得たんだ。

我慢しろ、俺。

状況を待て。

すぐだ、すぐに警官達とすれ違う。

そうすれば……！

「おお！ これは緋村さん!!」

「署長殿？ これは？」

「聞こえませんでしたか?! さっきの轟音！ 砲撃ですよ！ 何者かが上野山から市街地に向けて一撃！ 赤べこという牛鍋屋が直撃を被りました！」

来たっ!!

「弥生ちゃん!」

誰かが呼んだ気がする。でも止まらない、止められない。

ようやくだ、ようやく状況が動いた。

これで俺も上野山へ向かって、剣心や左之介と確認すればいい、人誅の始まりだつて。

それで……それで……！

「なん、で……」

知ってただろう、分かってただろう？

赤べこがどんな状態になったかなんて。

上野山へと向かって、調べて、来る人誅にどうやって対応するのかだつて、考えただろろう？

だっというのに。

「う、あ……うあああ……」

なんで俺は。

「うあああああああああ!!」

赤べこの前に居るんだ。

赤べこだった前で、なんで俺は膝をついている？　なんで泣いている？

なんで涙が止まらないんだ、止められないんだ。

漫画で知ってたじゃないか、こうなるって。

さっきだっと思ってたじゃないか。

この光景を見たくないから上野山へと向かうんだって。

……。

ああ、そうか。

そうだよな。

状況を言い訳にして、物語を言い訳にして。

逃げようとしていたのか、俺は。

逃げたかったのか、俺は。

力をつけて、もしかしたら何か出来るかも知れないって分かってたのに。

そんなことを言い訳に、建前に。

ここは漫画の世界なんかじゃなく、すでにリアルだって、十分に分かっていたから。ここに生きる人達が、意思をもって、意味を持って俺と関わっていたから。シヨックを受けるって、分かってたから。

「弥生ちゃん……」

「ああ、あああ……おれ、おれは……あああああ」

何が剣心の物語、だ。

そこに生きる俺の物語でだってあるんだぞ。

京都に居た頃、十分に分かってたじゃねえか。

無様。

無様すぎる。

剣客隊をどうすれば生かせるか、新月村をどうすれば救えるか。

あれだけあの時考えたのに、今考えなかったのは。

身近での悲劇を認めたくなかったから。

「大丈夫、大丈夫だから、ね……」

「ひぐつ、かお、かおる、さん……うううう!!」

後悔は先に立たない。

回避する方法が、あつたはずだ。その上で知る未来へと繋げられる方法だつてあつたはずだ。

剣心との戦いに夢を馳せるなんて、とんでもない。

まだまだ、俺は、弱かった。

一夜明けて。

初めて眠つた薫さんの胸の中、驚くほどに男らしい欲求は生まれなくて。

思いっきり反省して。

「剣心さん、左之助」

「もう、落ち着いたでござるか、弥生殿」

「おう、でえじようぶか弥生」

きつとさつき薫さんが入った時、慌てて隠したんだろう地図。

それを俺の前では隠そうとしないことに覚悟を決めて。

「話はおおよそ掴んでいます。そして今お話していたことは甘いと断じます」

「甘い、でござるか?」

すつと剣心の目が細められる。同じく左之助も。

その目を見返して、頷きを一つ。

覚悟は、決めている。

「剣心さんが懇意にしている場所は確かにこのこと、小国診療所……そして破壊された赤べこ。同感です、そこがいずれ狙われるのは明確です」

「だったら俺たちで分かれて守りやあいじや——」

「待った。弥生殿、いずれ、とは？」

流石剣心、冴えてる。

「つまり相手も分かっているんですよ、そこを守るであろうことは。人誅……いや、復讐を名目に掲げているのならもつと……もつと剣心さんに苦しんでもらいたいはず。そんな相手が、早々と直接対決に挑むでしょうか？」

「弥生殿は、他に狙われるところがある。そう考えているのでござるな？」
再び頷く。

漫画では確かにこの後標的にされるのは前川道場と東京警察署長の家だ。

標的が変わるような変化はもたらしてはいないはず、だったらそれは動かない。

「私の考えでは、前川道場、そして警察署長宅」

「いや弥生。確かに剣心と関わりがあるのにちげえねえが、流石にそこまでやるか？」

「言ったでしょう左之助。剣心さんを苦しめたいのなら、関わりの濃い薄いじやない。そこを襲撃することで剣心さんが自分が関わったせいだと思わせられればいいだけな

んです」

少し難しい顔をして黙る左之助、一理あると思っただろう。

そしてそれは剣心もそうだ、一瞬はつとしたような表情の後静かに考え込む。

そうさ、反省したんだ、後悔もした。

ならもうしない。

そのためにこれ以上絶対被害を出さないと覚悟した。

「……我慢、出来ないんですよ。これは卑怯だ、姑息すぎる。剣心さんの過去を責め立てたいがために多くの犠牲を出すなんて、認められるわけがない」

だからもう遠慮しない。

かつて決めた、自重しないを改めて心に決めた。

これが剣心の答えを出すための物語であろうと関係ない、やりたいことをやる。そのためなら何だって利用してやる。

「その間、ここに小国診療所はどうするでござる？ 弥生殿の言には一理ある、だが――」

「私では力不足ですか？」

じつと剣心の目を見つめる。

原作通り、前川道場に左之助を、署長さんの家に剣心を。

そしてここを俺が守る。誰もまだ来ないはずだけど、何かあれば命を賭して。

「わかったでござる。……弥生殿、頼むでござる」

「よして下さい、私としても、守りたいモノです」

俺のやらかしのせいで、剣心からは多分いまいち信頼を向けられていないはずだ。

その上で無理矢理にでも信頼しなければならぬのはキツイことだって分かつてる。

だからこそ示す。

俺はあなたと戦いたいけれど、幸せの場所を守りたいと言ったことだって偽りはないんだって。

「……うっし、話は纏まったな。弥生、他に何か考えられることはあるか？」

「そうですね……アームストロング砲が示したように、相手は場所ごと破壊することも目的の一つとしてあるのでしょうか。個人での襲撃、そして兵器などによる破壊。両方へと気を配る必要があります」

前川道場には戌亥番神が襲撃に、そして外印が爆弾を。

署長宅には乙和瓢湖が襲撃に、そして鯨波兵庫の砲撃が。

……家屋に関しては、正直どうにかするのは難しい。

左之助のおかげで前川道場の家屋被害はそれほど大きいものにはならなかつたはず。

だが署長宅は厳しい。

俺が砲撃地点を調べて鯨波兵庫を止めてもいいけど、そう動くことになればこの守りがなくなる。

それを剣心は許さないだろう。

後一手、足りない。

斎藤へ協力を仰ぐには時間的に厳しい。

恐らくすでに調査へと乗り出しているはずだし、捕まえられる確証はない。

会えさえすれば、貸し一つの返済を理由に動いてもらえるんだけど……。

いや、待てよ。

「恐らくどちらかにアームストロング砲は飛んできます。ですが、安心して下さい、アテがあります」

「アテ、でござるか?」

「……こんなこと今言うのもアレだが。おめえ、ちよつと顔広くなりすぎじゃねえか?」
呆れたように言われるけど、いいじゃんか。その御蔭で被害ナシに収められるかも知れないんだから。

「ただアームストロング砲以外の破壊兵器に関してはわかりません……どちらが出くわすかわかりませんが、十分に警戒して下さい」

「ああ、分かったでござるよ」

「おうっ！ 任せときなっ！」

よし！

なら動こうか……覚悟しろよ雪代縁。

お前の気持ちはわからねえけど知っている。

それだけに上手く行かせないことへ心苦しきもあるけど……。

構わねえ。

その男、強者につき

陸軍省。

正直、お目当ての人物に出会うまで入り口で張り込んでやろう位の気持ちだったけど。

運が良かったと言うべきか、ダメ元で取り次いで欲しいと見かけた人に声をかけてみれば繋いでくれた。

……いや、普通にビビってる。

そう、俺は今志々雄一派討伐のために斎藤が結成した剣客隊の一人に会うためここに居る。

そしてその活躍は一部の人へ伝わっているみたいで。

見た目からは想像出来ない程、やたらめっぽう剣の腕がたつ女。

そんな風に巫丞弥生の名前は少しだけ話題になっていたらしい。

声をかけた相手が俺以上にビビってたことにビビったって話。何か知らんけど握手まで求められた、あれ？　ここ赤べこかな？

ともあれ巫丞弥生の話題に触れた人へと運良く声をかけられたって訳だ、ついてる。

頷いてくれるだろうか？ はつきり言つて私事も私事。

陸軍省の軍人へと頼むようなことでもない、むしろ彼らにとつてみれば些事とすら捉えられかねない。

ただ俺にとつては大事なんだ。決して些事じゃない。

利用できる可能性が少しでもあるならそれに全力を尽くす。

だから。

「力を貸して下さい!!」

コツコツと足音が近づいて、ドアが開いたと同時に頭を下げた。

力を貸してもらつても、何も返せない。

だから下世話な話、俺自身を望まれたつて差し出す覚悟すらある。

「わかつた。僕たちは何をすればいい?」

「——へ?」

そんな覚悟とは裏腹に、えらく即答を貰えたことにびっくりして顔を上げてみれば。

「あ、あれ? み、皆さんお揃いで……?」

「いやあ、驚いたよね。弥生ちゃんが訪ねてくるつて言つたら陸軍所属の奴ら一斉に集

まっちゃつて」

「いや、そりや来るだろ当たり前だ」

「まったくもってその通り。とうかなんでコイツの名前を出したんだ？ 俺の名前を出せば一発だったのに」

なんて言ってる皆は笑顔で。

口を開いたままの俺に向かって何やらごちやごちや言っていて。

「そんなことより頼み事だろ？ 詳細を教えてください」

「い、いや、あの？ 手を、貸してくれるんですか？」

そう言ってみれば、皆は一瞬啞然とした後……爆笑した。

「あはははは！ 何言ってるんだ！ 当たり前だろ？」

「いやいやいや、弥生ちゃんの珍しい顔見れたってことで！」

「見くびられたもんだなあ……ま、その認識を改めさせてやるさ」

何いってんのこの人達。

え？ なんて笑ってるの？

「弥生ちゃん」

「え、あ、はい？」

不意に真面目な顔へと戻った一人。

他の人もそれに続いて、顔を引き締めて。

「僕たちはね、ずっとキミの力になりたいと思っただよ？」

実感は無いかも知れ

ないけど……僕たちは返しきれない程の恩を、キミに感じているんだからね」

「お、恩？」

「ああそうだ。弥生、俺たちやお前が居なかつたら……今ここに居ねえ。あの宇水つてやつに殺されてた。それくらい分かつてる」

口にした人へと頷きが続く。

未だに、俺は驚きから抜けられない。

「それに……こんな可愛い女に頼られて、二つ返事出来ねえやつは男じゃねえよな？」

「おうともー」

真面目な顔は、安心させてくれるような笑顔に変わって。

そんな笑顔を見られて、ようやく。

「はあ……これだから助平どもは」

「ああ!? その言い草は無いよ!？」

「否定は出来ない」

「あ、じゃあ頼み事が終わったら一献付き合ってもらうってことで」

「おい抜け駆けやめろや、皆の弥生ちゃんだろうが」

わいわいがやがやと。

揃いも揃って馬鹿ばっかりだ。

お前ら絶対暇じゃねえだろ？ 斎藤が声をかける位の人物で、ここ陸軍省だぞ？

俺如きに構ってる場合じゃないはずだ。

だつて言うのに……！

「ああもうっ！ わかりました！ 終わったらいくらでもお付き合いしてあげますからっ！ お願い、聞いてもらいますよっ！！」

「おうっ！！」

ああ、こんなにも。

こんなにも世界は俺に優しい。

頼んだぜ、皆。

「そうでござるか……なんとも心強い」

「いやおめえ陸軍省つて……なんて言ったら良いかわかんねえよ」

剣客隊……陸軍省から引つ張った人だけではあるけど、協力してもらえらることになったと報告。

あの人達には、アームストロング砲が警察署長宅へと放たれるつて想定の下で場所を割り出し、警邏してもらえらることになった。

一応念の為、前川道場へ砲撃可能な位置も検討して。そこに対しては陸軍夜間演習と

言う名目で演習を行ってもらえると。

……改めて思うけどやばすぎるバックアップだ。あの人ら本気過ぎる。

帰ってくる寸前に我へと返って、とんでもないこととしてしまったなんて冷や汗が出たよ。

「とは言えこれでようやく万全でしょう。後は——」

「ああ。拙者たち次第、でござるな」

領きを一つ。

時刻は夕方、そろそろ出発だ。

「剣心さん、左之助……よろしく、お願いしますよ?」

「ああ、任せるでござる」

「心配すんねえ! いっちょやってやらあ!」

そういった二人を見送って。

気にしないようにしていた道場の物音へ耳を傾ける。

「!!」

「!!」

ああ、確か弥彦の奥義教えてくれて直談判だったか。

正直俺としてはなんとも言えない部分ではある。

弥彦の気持ちは十分にわかる。そしてある程度の強さを持ったからこそ、薫さんの気持ちもわかる。

物語として、弥彦は結局教えてもらえることになるけれど、今抱えている焦燥感は苦しいだろう。

そしてその焦燥感から奥義っていう強さを求めてしまうのもわかる。

——俺だけ弱いのは嫌だ。

弥彦は薫さんが言うように、十歳の男の子としては……日本ですでに一番かも知れない。

そう、薫さんが弥彦の強さを求めた理由を安直だと思ってしまうのも仕方ない。

日本で一番の十歳男児。

だからこそ大事に育ててあげたい、俺はもう無理だから、今度こそ。

責任感。

薫さんはきつと、原作以上に弥彦のことを大事にしたいと思っただけだ。

「先輩……」

「ああ、燕ちゃん。挨拶が遅くなつてごめんね？ 今日からよろしくおねがいします」

「はい……」

礼儀正しい燕ちゃんにしては珍しく、気もそぞろというか……まあ、気になるよね。

「男の子って、不思議でしょう?」

「え?」

「男子三日会わざれば刮目して見よ。その三日は……こんな感じなんですよ」
燕ちゃんは頷いた。

そしてじつと道場へ目を向ける。

「強さを求める……その、剣客さんって、そういうものなんでしょうけど……でも」
「でも?」

「強くなれば、それだけ自分も……相手だって怪我じゃ済まなくなるのに」

ああ、やっぱり燕ちゃんは天使だな。

血生臭い場所にずっと居たから、なおさら。

「ふふふ、燕ちゃんは優しいね。でもね、少なくとも弥彦ちゃんはね?」

——自分も相手も、そうさせないために強くなるうとしてるんだよ。

「」

道場へ向かう。

後ろで燕ちゃんが何かを言った気がする。

そうだな、俺はもう神谷活心流でいられない。

だって言うのなら、そんな俺だからこそ出来るコトがここにも一つある。

「!?」

「——弥生、ちゃん？」

驚く二人。

すっかり息は上がっていて、道場は荒れ放題。

大きく深呼吸を一つ。

そして。

「弥彦。三十分あげます。それで息を整えなさい」

「——っ」

立て掛けてある木刀を手に取り、弥彦の目を真っ直ぐ見て告げる。

弥彦の喉が動いた。文字通り息をのんだ。

薫さんが何かを理解した。瞑目して、頷きを一つした。

「一本勝負。いいですね」

「——おうっ!!」

無茶難題だ。

でも冗談じゃない。本気も本気。

弥彦と俺の間にある壁、それは決して大きくない。

だけどそれを乗り越えるのは容易いことじゃない。

乗り越えさせるつもりは無い。させてあげようとも思っていない。

何故ならこれは弥彦が自分でよじ登らないとダメだから。

間に立っている薫さんも理解してる。

この勝負は、弥彦にとっては始まりで、俺にとっては終わり。

神谷活心流、巫丞弥生への決別。

だから全力で一人の剣客として相手をする。

俺の先にある存在は、もっともつと遙かな高みで待っているんだと。

そしてそれに至る道は険しく、まさに修羅の道なんだと。

実感してなお、挑むのか、臨むのか。

それを、示すんだ、弥彦。

「はじめっ!!」

「うおおおおおっ!!」

薫さんの手が振り下ろされる。

同時に弥彦が突っ込んでくる。

羽踏は……まだ使わない、使わせてみせる。

「」

「ちいっー」

一太刀目は面。身体に近い位置すれすれで避けた。

近い位置で避けるってことは、無駄な動きが無いってこと。

それを弥彦は十分に分かっている、だから勢いのまま大きく間合いを引き離れた。

「はあ……はあ……」

すでに大きく呼吸が乱れているのは弥彦。

さつきとはうって変わって、じりじりと間合いを測りあう硬直時間。

今の一撃で理解しただろう、次に下手をすれば間違いない返す刀でお終いだ。

実際羽踏を起動していたらその結末を描いていた。

「……」

もう相手を煽る言葉なんて必要ない。

一瞬口から出そうになったけど、俺には必要なくなった文句だ。

盤石。

そう盤石、万全の形で迎え撃つ。

どうあがいても後の先で仕留めるしか出来ない俺だから。

相手の必殺、その先に俺の必殺はある。

だから、待つ。

「——ふっ！」

次手は口から息を漏らしただけ。

やっぱり素早い、躊躇ない踏み込みと身のこなし。

描く剣閃は——逆風!!
切り上げ

「我慢できなくなりましたかっ!?!」

「るっ……せえ!!」

その勢いがつきすぎた逆風。

足元が宙に浮いてしまうほど。

……残念、だ。

そりや自暴自棄つてもん——

「う、おおおおお!!」

——や、ば、い。

準備していた返す刀を放棄して、全力で避ける。

だつてそうだろう?

「龍翔閃……」

「……もどき、つてな」

大きく間合いを離したのは俺。

つけすぎだと思つた勢いには、その後があつた。

ああ、そうだ。

そのなりふり構わなさが欲しかった。

「ふふ、あは……あはははは!!」

「——っ!!」

思わず笑つてしまう。

薫さんが、燕ちゃんが見ているけど……ごめんな、嬉しいんだよ本当に。

「——羽踏」

弥生の世界へ持ち込んだのは嬉しさだけ。

俺の大笑いに隙を感じ取つた弥彦は再び突つ込んで来ているけど。

残念、そりや隙なんかじゃねえよ。

「つつう!?!」

「——来なさい、弥彦」

流石に俺とずっと稽古してないね。

初見じゃ絶対それ、防げなかつたよ？ 俺を姉弟子に持てたこと、大いに喜んで？

「つだらああああ!!」

「そうっ！ そうですっ！ 弥彦っ!! 私を……乗り越えてみせろっ!!」

嬉しい、嬉しいな。

弥彦はやっぱり弥彦だ。かっけえよお前。

今はまだ、無理だろう。俺に勝つなんて。

そんなコト、理解してるんだろ？ それでも立ち向かわなきゃ、なんとか勝つ方法
をつて必死なんだろ？

最高だよ、弥彦。

絶対お前はでかくなる。

漫画で知ってるから、原作だとそうだからなんて思いで馬鹿にしてるんじゃない。

実感できた。

弥彦は、こんなにも強い。

この世界の弥彦は、もつともつと、俺が知らない、想像できないくらいにでかく、強
くなる。

だから。

「——そこおっ!!」

「つぐ……つづあ」

どうあがいても防げないし避けられない。

そんな一撃を、強く……全力で胴へと抜き放った。

「そこまでっ!!」

「はあっ!! つつあ! は、あぐ……あり……あり……ありがとう、ごさいましたっ!!」

「……ありがとうございました。見事でしたよ、弥彦」

最後はもう気力だけだっただろう。

頭を下げ合うと同時に、弥彦は前へと崩れ落ちた。

「弥彦君っ!!」

その様子を見て燕ちゃんが駆け寄る。

うん、そんな感じで弥彦を支えてあげてくれな。

「……薫さん、弥彦に奥義、教えてあげて貰えませんか」

「はあっ、こんなの見せられたら……断れないわよ、弥彦」

弥彦。

ちゃん付けじゃなくなった理由を嘔み締めて。

「きつと、ただ安易に強くなりたいって願ったわけじゃないんですよ弥彦は」

「……うん」

憧れが目標になって。

目標の遠さを実感して。

「強さに年齢は関係ありません。性別だってそうです。きつと、誰もが強さを目指す権

利を持っている」

その権利に少しだけ早かったり、気づけただけなんだ。

俺も、弥彦も。

「そうだね……うん、そうなんだね。ねえ、弥生？」

「はい？」

——これからもずっと。弥彦の強さの先に居てあげてね。

……ああ、この人は。

尊敬してやまない師匠であり姉は。

まったく。

それがどれだけ難しいことなのか、十分わかってるくせに。

「ええ、頼まりました」

その男、夜間待機につき

火照った身体に夜風が気持ちいい。

女の身体になつてろくでもないことに気づいたけど、熱が籠もりやすい。

「よく漫画なんかで巨乳の女の子がならではの苦悩があるなんて言つてたけど……わし、こんなのしりとおなかつた。

「こら、女の子がはしたないわよ」

「あ、あはは……すいません、つい」

おにぎりをお皿に載せて差し入れてくれた恵さんから顔をそらしながら、開けていた胸元を整える。

呆れているのかな？ まったく、なんて目で見られながらも手渡されたおにぎりを一

口。

……美味しい。

「やっぱり恵さんは料理上手ですよね」

「それはありがとう。まああなたの家主に比べたら……でも、弥生ちゃん程じゃ無いと思うけど？」

いやはや何を言いますやら。

恵さん手ずからの握り飯故に最の高なんですよ。

「それにしても……良かったの?」

「何がです?」

「ここにきて」

そういつた恵さんの表情は、なんとも言えない。

言外に言っているんだ、ここを守るよりも神谷道場を守るべきだろうと。

確かに神谷道場は最重要防衛所。ここが直接破壊されてしまえば同時に剣心の心だつて壊れる。

壊れるだけじゃない、剣心が剣心だけに万が一俺が居ないせいで道場が破壊されても、決して俺を責めないだろう。

元はと言えば自分のせいで。

そうやって自分を責め立てるに違いない。

恵さんは分かっているんだ。

自分の重要性よりも、遥かにあの場所が重要で、何より剣心が守りたい場所であることを。

それだけじゃない。

「左之助に言われませんでしたか？」

「何を、かしら？」

そのために自分が犠牲になっても構わないときえ思っている。

並んで崖の淵に手をかけているのなら、迷いなく自分から手を離す覚悟をしている。

「剣心さんの幸せに、恵さんだつて存在しているんですよ」

「――」

俺は恵さんが好きだ。

そうやって自己犠牲と言うには悲壮過ぎるかも知れないけれど、誰かの幸せを強く願う恵さんが大好きだ。

だからこそそんな目をしないで欲しい。

引き立て役なんかじゃないし、ましてや当馬でもない。

医者として多くの人を救い、多くの幸せを願う恵さんは素敵な人なんだ。

「恵さんと薫さん……姉さんの間で、決着がついたのはわかります。ですけど、それはあなたが不幸になっていいという理由ではありません」

選ばれなかったから、身を引いたから。

陳腐な言い方だけど、幸せの形は一つじゃないと思う。

剣心と結ばれることこそが最大の幸せってわけでもないはずだ。

「だから私はここを守るんです。剣心の幸せを守るってお題目だけじゃない、私が私の幸せを守るためにもここを守るんです」

「……弥生ちゃん」

台無しな話ではあるけど、今晩は道場を襲撃されないと知っているからつてのはもちろんある。

それでも陸軍省の人に道場で何か異変があればと備えの準備はしているし、いざとなれば向かえる手はずは整っている。

ただ、どうしても今恵さんと話したかった。

今晩が終われば、神谷道場へ襲撃が来るのは目と鼻の先。

そうなれば神谷薫、偽りの死。人誅が完成されてしまう。

こうして落ち着いて話すのは、これが最後になってしまうかも知れない。

恵さんは大人の女性だ。

放っておいてもきつと上手く心の整理をつける。

でもこれだけは言っておきたかったんだ、言わなくちゃいけないって思ったんだ。

「私は、あなたの幸せを守りたい。私が幸せでいるために、諦めたくない、切り捨てたくない。全てを守るって決めたんです」

恵さんだけじゃない。

弥生っていう俺を取り巻く全ての大事を、守る。

「……………くすっ」

「うえっ!? な、何か変なこと言いました!? ちょ、調子に乗っちゃいました!」

「なんですかその生暖かい目は!? や、やめてくれ! その目は俺にこうかはばつぐんだっ!」

「ううん、あなたが女だっっていうのがすごく残念だなんて思っただけよ。本当に……………今からでもちよつと男になってみない?」

「あ、あははー……………非常に光栄なんですけど、とつても複雑です」

男なんですよ、ホントは。いや、マジマジ。

「ってかさっつきのセリフ、どう考えてもプロポーズですね本当に、ありがとうございますいました。」

「ふふふ。それじゃ、しっかり守ってね? ……ありがとう」

「はいっ! お任せ下さいっ!」

「そう言っつて恵さんは背を向ける。」

「目端に光った何かは……………見なかったことにしよう。」

「さて。」

夜も更けて、随分と眠気が強くなってきた。

「ふあ……」

流石に寝ないけどさ。

万が一の話が起こつても困るし、気合い入れて起きます起きます。

まあ良いタイミングだしこれからのことを考えよう。

さつきも思つたけど、今日が終われば一気に慌ただしくなる。

剣心が帰つてくれば、過去についての話が始まるだろう。

正直知っていることだしわざわざ聞かなくてもいい。剣心だつて、話さなくてはならないと思つてはいるだろうけど、聞かなくてはならないというわけでもない。

空気読めないヤツだつて話かもしれないけれど、こういう時間を上手く使うべきだとも思う。

陸軍省へのお礼はこの件が一段落つてから改めてと言っているし、気にしないでおくとして。

実は生きてたんだぜドヤアしたいだろうし、斎藤さんへのアプローチもおいておくして。

一番の問題は——

「誰を敵にするか、か」

戌亥番神、乙和瓢湖はそれぞれ左之助と弥彦の相手で確定だろう。

左之助に関しては今の状況をほぼ両手が使える状態で迎えているし、心配は欠片もない。

弥彦に関しても……多分、原作よりも一段上の実力に至っているはずだし、弥彦が弥彦でいる限り負ける絵が想像できない。

残るは鯨波兵庫、外印、八ツ目無名異。

雪代縁は論外だ、あいつに対して相当ムカついてはいるけど流石に剣心が戦うべき相手。

鯨波兵庫はまあ……出オチと言えば言葉は悪いけど戦うタイミングが無い。

ならば外印か無名異。

順当に考えれば、先の葵屋で相対したことを考えても外印なんだろうけど……。

参號夷腕坊、猛襲型。

はつきり言つて相性が悪すぎる。

左之助や剣心クラスの破壊力を有していない俺じゃあどうやってもあいつを剣では倒せない。

ダイナマイトじゃないけど、爆発物なんかあれば話は別だろうけど、劍客としてのプライドからだって認めたくないし、調達だって厳しいだろう。

戦う時だけ日本刀を用意する？ いやいや、木刀と刀じゃ取り扱いに違いがありすぎるし、突き一点張りして勝てる相手でも無い。

何より勝敗は別としても、外印を相手にしてしまうと剣心が万全な状態で縁と戦うことになる。

縁が強いのは言うまでも無いけど、本人が言ったとおり天翔龍閃が初見であるか否かの違いは大きい。

剣心の精神面で違いはあるだろうけど、それを抜きにしても天翔龍閃は強力な剣技だ。否応なしに縁がぶっ飛ばされてしまう可能性はある。

それだとまずい。

縁がここで倒されて、剣心が自分の人生に答えを見つけないまま、上つ面の幸せ生活を送るってルートも良いかも知れないけど、それこそいつか何処かで綻びが生じるだろう。

薫さんは一度、殺されたと思わなければならない。

「……いてえ、なあ」

改めて考えればものすごく心が濁る。

皆の幸せを守るために、一度不幸のドン底に落とさなくちゃならないなんて。

早速の矛盾に嫌気が差す。

「だけど……それでも……」

幸せは先に待っているんだから、踏ん張りどころだ。

なら、俺の相手は無名異か。

道場での守りを固める立ち位置、斎藤の出番を奪うことになるけど、まあ良いでしよう。

ただ無名異相手なら盤石、勝てるのかという問題。

そしてその答えは分が悪いの一言。

リーチの問題じゃあない、あいつの攻撃による土砂の防壁が問題なんだ。

本命の鉄爪による攻撃はまだいい、だけど土や石が飛んでくるのはどうにも出来ない。

確実に消耗戦へと立たされる。

土砂によって体力を加速度的に削られて、小さな傷を重ねて、最後は爪攻撃の餌食。

そんな攻撃を乗り越えて追い込んだとしても、結果。

地中の爆弾を一齐に起動されては……厳しいじゃ済まないだろう。

いつそのこと、今回は何もしない？

……それもあり、か？

薫さんを拉致しようとする縁と一対一で戦う。

それで負けてしまえば……。

「ああダメだ、自分を許せなくなつて死ぬ」

うん却下だ。

やっぱり無名異対策だ。

ずっとそうしてきたじゃないか。

知っていることを武器に変えろ、俺だからこそ出来る戦い方を模索しろ。

まずどうやって戦う？

鉄爪やアイツの化け物じみたリーチ、間合いは問題ない。

土砂。そう、土砂が問題だ。

羽踏を発動してしまうと、土砂すらも避けようとしてしまうから使えない。意識的な

無意識下で戦うのはムリつてことだ。

つまり俺本来の力で戦うことになる。

「……うわお、それってまぢやばくね？」

意外なところで気づいてなかった。

今まで本当に弥生の異能ありきで戦つてたんだなあ……死ぬかも。

いや、生死の極致を避ける弥生だ、そうそう簡単には死なないけど……。

つまるところ土砂を気合で無視して鉄爪避けて木刀ぶち込めつてわけか。泥臭い戦

いになりそう。

やっぱ原作リスペクトというか斎藤リスペクトで、土砂より前に出てる手を狙うべきか。

ただそれをして上手くいったとしても、だ。

やっぱり問題の結界。

俺に剣心や斎藤みたいな跳躍力はない。

追い込まれた後一斉爆破されて、上の更に上を得るなんて芸当は無理だ。

「いや……上……？」

上空に飛ぶつてことは、地の加護を放棄するつてことだ。

上から振り下ろされる爪に土砂は無い。

そうだ、それこそが唯一の勝機。

地对空で仕留める。

「出来るのか……？」

一斉爆破だ、当然隙間なんて無い。

両足なくなつたよ！ やつたね弥生ちゃん！

それが見えてる。

そう、死が見えている。

「ならんとかなる」

ぶつつけ本番、未体験ゾーン突入もいいところだけど。

俺の勘が、弥生の異能が言っている。

「——ヨシッ！」

やってやろうじゃねえか！

その男、夢につき

予想通りというか、漫画通りというか。

朝になれば左之助と剣心は無事に帰ってきた。

小國診療所で待機している間、あの小川で聞いた砲撃音を聞くことも無かったし爆発音も響かなかった。

恐らく前川道場も、署長さんの家も無事だろう。

左之助の両手は無事。

おかげで恵さんの薬箱アタックを食らうハメにはならなかったけど、それでも手にダメージはあるみたいで、簡単な治療を施されながらそんな予想を確信に変えられる話を左之助はしてくれた。

両手が無事な分というか、戌亥番神は漫画以上にプライドを傷つけられていたらしい。

左之助はあんな勘違い野郎に負ける自分じゃないと笑っていたけど……恵さんの消毒液アタックには負けていて、戌亥は消毒液以下な可能性が……？

ともあれ笑って良かったねと言えるくらいの結果にはなった。

ただ、それは良いとしても。

——あんなに辛そうな剣心、初めて見た。

帰ってきた剣心に一休みを提案した薫さんの言葉。

正直に言えば、帰ってきたのが剣心だと一瞬わからない位だった。

道場へ帰ってくる道中、会ったんだろう雪代縁に。そして重なって見えた雪代巴に。

辛そうなんて一言で済ませられるほど気楽じゃない。

どうやつても解けない過去の鎖。

向き合う覚悟を決めたことで、それは実感となつて剣心の身体を締め付けあげる。

だからこそ。

そう、だからこそ、だ。

この人誅から始まる戦いは、剣心が自らしつかり乗り越えないといけないことなんだろう。

そしてそれは俺を含めた、剣心組皆の戦いでもある。

無力を嘆きたくもなる。

過去を知ることが出来ても、触れることが出来るのは……きつと薫さんだけなんだろうから。触れることが出来たとしても、その鎖を引きちぎるのは他ならぬ自分自身だけだ。

「落ち込んでる場合じゃない、よな」

一つ大きく深呼吸。

きつと今日の夜、剣心の口から語られるだろう人斬り抜刀齋としての過去。

知ってるから聞かないで良い、なんて思っていたけど。

剣心は言うところの皆へ話すことで心の整理をつけようとしている。

なら、皆つてやつに入っている俺だけが聞かないわけにはいかない。

それもきつと、一つの手助け、協力の形なんだろう。

「弥彦」

「おうっ!!」

息を整え直していた弥彦へ声をかけて。

「うおおおおっ!!」

再び始まる柄のかち上げ。

神谷活心流奥義、刃止め。そして刃渡り。

薫さんが言うように、柄の間合いを習熟することが大切なんだろう。

すでに腕振りは始めていて、今はこうして俺相手にかち上げをしている弥彦。

その表情は鬼気迫ると言っても良いかも知れない。

俺がこうして竹刀を持っているって言うこともあるんだろう、あれだけ言っつてしまえ

ば大きな口を叩いたんだ。

どれだけハードであつても膝をついてなんかいられない。

ハードっていうのは。

「遅れてますよっ!!」

「——っぐ!?!」

甘くなり始めればすぐに一撃かます俺のせい。

流石に燕ちちゃんにはこんなことさせられないし、出来ない。

そう、今やっている弥彦の特訓はただの柄かち上げじゃあない。

軽い実戦要素が含まれている。

「どうしました? 今のは私だつて見逃しませんよ?」

「わか……てるっ!」

再びかち上げ始める弥彦。

流れ、飛び散る汗を見て、やっぱり強いなど改めて思う。

多分、もう単純な剣客としての身のこなしは俺を軽く超えていると思うし、剣閃一つ、

太刀筋一つとってもそうだ。

まさに今、弥彦は羽化しているその最中。

「はあっ! はあっ!」

荒い呼吸と、竹刀が合わさる乾いた音。

一つ受けるたびに一つ何かの階段へ手をかけて、二つ音が鳴る度に足をかける。恐ろしいとさえ思う。

本当に才能がある人間ってのは、スポンジだ。

あらゆるものを吸収して蓄える。

「そこまでっ!!」

「ありがとうございます!」

「ありがとうございます!」

薫さんの声にかち上げが止まって。

ちらりと窺えば、一つ頷いた後。

「まだまだ刀身に頼ってるわよ弥彦。折角弥生が手伝ってくれているのを無駄にするつもり?」

「んなことねえっ! まだまだ……やってやらあ!」

俺が神谷活心流で無くなったことを弥彦も分かっている。

薫さんも門下生としての弥生とて存在はもう居ないと分かっている。

だから今の俺は多少の腕が立つ剣客として弥彦の稽古を手伝っているっていう図式。

「弥生、ありがとうございます。ここからはもう一回私がやるわ」

「はい、わかりました」

持っていた竹刀を薫さんに渡して、道場を後にする。

後ろで未だ響く竹刀の音。

それを背に俺もやれることをしようと思ひ強く決めた。

——拙者の手で斬殺した妻、緋村巴の弟でござる。

全員がその言葉に息を呑み、剣心が放つ雰囲気飲み込まれた。

漫画では、絵とセリフでどんな事があつたのかがわかる。

剣心の知り得なかつたことでさえ、読者であつた俺は知つている。

だけど語る剣心を知らなかつた。

こうして目の前で、深く、深く悔いるような、赦されることを求めているかのような。

自分のことを罪人だと、誰に言われるよりも強く自分で思つているって。

簡単に。

いともたやすく、察する事ができてしまう。

話の頃は剣心が祝言をあげて、片田舎へ雪代巴と越したところ。

一息つこうと剣心が言つたことで、一旦場が終わつて。

「元服って言つてな、剣客目指すんなら覚えときな。それに一八つたら当時は適齢期

の後半——」

茶の間に剣心と薫さん以外が集まって休憩。

恵さん弄りはやめるんだ、なんて頭の片隅に置きながら思うことは知ったかぶりを恥じる気持ち。

ああ、本当に。

俺は事実しか知らなかったんだなって。

事実を知って、なんとなくこういう気持ちなんだろうなんて。

お察し万歳、それで決めつけ、手のひらの上で転がしたつもりでいた。

「——い、弥生？」

「あえ……？ あ、左之助。どうしました？」

つと、ちよつと自分の世界に没頭しすぎてた。

はいはいなんですかー？

「んな思いつめたような顔してどうしたんでえ？」

「んー……そんな顔、してました？」

やつべ無自覚だった。うわ、皆して領かないで下さいよ。

ちよつと恥ずかしいじゃないですかってばいやん。

「弥生ちゃんが思い詰めるようなことは……もしかして剣さんに妻が居たって話？」

「かかかった！ 弥生がんなこと気にするタマか——へぶっ!？」

うむ、恵さんナイスです。左之助流石に「デリカシーないね、ボツシユートです。

……いやまあ、元気付けようとしてくれたんだろうけどさ、わかってるよ。

「まあもちろんそれは驚きましたけど。なんででしょうね、どうにも……キナ臭い」

「……ええ、そうね。本当に剣さんを愛していたのかさえ、わからない」

「でもそれは流石に。そんな人と祝言をなんて……」

うん、話が逸れたね良かったね。

まあ情けないのさ、自分が。

今までだって、知ったかぶりをして上手くここまで歩んできた俺だけどさ。

それでもこうして生の声で、生の想いを語られて動揺にも似た感情を覚える。

多分ここにいる人達は……薫さんはもちろん、燕ちゃんだって。

受け止める覚悟がしつかり出来ていた。

俺だけが、ふわふわとした覚悟だった。

赤べこが砲撃された時も。

そうだからあれだけ取り乱した。

……こうして、剣心の話を聞けて良かった。

まだ続く過去の話だけど、これで俺も。

——劍心、聞かせて。

覚悟の重さを知ることが出来たんだから。

話し終わった後は沈黙が待っていた。

覚悟だなんだとは別の部分、誰も何も言えなかった。

いや、言う必要も無い。

誰もが皆、分かっているんだ。

劍心が整理できないことを整理しようとしているって。

余計なノイズを入れないように。

しっかりと受け止めて、胸に刻んだんだ。劍心の過去を。

「弥生？」

「少し、風にあたつてきます」

「女四人が一つの部屋に……なんて状況にドキドキしている場面でもなし。むしろ出来ない。」

一言断りをいれて、恐らく左之助と弥彦がいるだろう表に出る。

「男と自負するなら手え出すな。例え劍心が死ぬことになっても——」

「——」

ああ、こつちはこつちでまあ熱い話をしてたっけな。

「やれやれ、涼みに来たと言うのに暑苦しい」

「あん？　なんだ、寝られねえのか？」

「弥生姉え」

声をかけてみればにやりと笑う左之助と、少し照れたような弥彦が顔を向けてきて。

「とは言え、そのためにも……分かつてますね？　左之助、弥彦」

「ああ、剣心が私闘に全力を出せるよう……それ以外は全部こつちが受け持つ覚悟で行くぜ」

「ああ！　よおし！　そうとなれば早速奥義の稽古だ——！」

「……新しい遊びか？」

弥彦の腕振りを見て左之助が一言。

遊びみたいだけど必要な稽古なんすよ、なんすよ……。

しかしまあ。

やつぱ俺つてば性根はまだまだ男だね、安心した。

こういうなんていうのかな、男臭い空気がやつぱり心地良い。

夢を語って、夢へ努力して。

自分が生きる目的に向かって勇往邁進。

かつて限界集落で生きた時は、こうして誰かに夢を語ることも、一緒に夢を抱く相手も居なかった。

だからこうでできる今を感謝すべきなんだろう俺は。

「俺は本当の意味で、強くなりたい」

剣心の跡を継ぐ。

弥彦が星を見上げながら語るそれはまさしく夢だ。

左之助が言うように、胸を張って高笑いをして語るべき夢。

それが叶うと俺は知っている。

けど、どうしてそうとまで思ったのか、覚悟が出来たのか。

ようやくそれに触れられた。

「弥彦なら、大丈夫」

「や、弥生姉え？」

左之助にからかわれてる弥彦だけど。

「あなたがでつかい男になるなんて……わかりきってますから」

「……つち、弥生よお。そういうとこだぞ？ おめえは変な所で甘えよな」

そうかな？ 変な所って言われてもな。

この誓いは高笑いして胸を張ってするもんだ。

だって言うならしつかり認めてやらなきやダメだろう、なんて。

……ん？

「あれあれ？　もしかして嫉妬ですか左之助？」

「んなつ!!」

「もう既にでかい男だと思つてましたのにー？　そんな男には甘やかしながらいりませんよねー？」

「あーなるほど……こうするのか流石だな弥生姉え」

「はいはい、俺こと弥生ちゃんに勝とうなんて百年早いですよつと。」

「仕方ないですねー。ほら、高笑いして胸張つて下さい？　よしよししてあげますよー？」

「……てめえ！」

「はんつ、やれるもんならやつてみさらせえ！」

「ぎやーぎやー煩く。だけどそれがいい。」

十日後。

来る戦いは、それぞれの道を見つけるため。

俺もそれまでに、胸を張つて高笑い出来る夢を持つとう。

その男、帰り道につき

一先ずのんびり出来るのはこの十日間。

それは皆の共通認識だろう、そして自分の先について考え始める十日間でもある。

弥彦が腕振り一万回を突破して、左之助がタダ飯たかりに来るのを受け入れて。

なんてことはない。いつも通りの日常だ。

「弥生ちゃんがサービスしてくれるって!？」

「うっひょうほんとかよ赤べこ始まったな」

そう、いつもどおりの日常、日常……。

そんな中赤べこ再建に向けてビラ配りをしてるなうな俺ですよ如何お過ごしですか。

「なあにとんちんかんなこと言ってるんです。赤べこは料理を楽しむ場所であつて私を楽しむ場所じゃないのですよ?」

「弥生ちゃんを……」

「楽しむ!？」

うおい言葉尻だけに反応するんじゃない。

その助平精神を引っ込めろ、今すぐにだ。

「そうか、なら俺も一つ……」

「この間の貸しを……赤べこで!？」

んで陸軍省の皆さん無事で何よりです！ とつても嬉しいんで回れ右して仕事に力エレッツ！

あーつたく無茶苦茶だよ。

どいつもこいつも弥生ちゃん弥生ちゃんと男のケツ追い回して何が楽しいんだ、いいケツなのは認めるが。

いやそうじゃない。

「あーもう！ 再開した暁には！ 私によるお酌サービス、つけちやいますうー!」

「やつほおおおおおい!!」

「流石弥生ちゃんそこに痺れる憧れるから結婚して」

やんややんやの大騒ぎ。

天下の往來だつて忘れてんじやねえのこいつら恥ずかしい。
でもまあ。

「ええの？ 弥生ちゃん」

「……嫌だつて気持ちにはまあありますけど。でも……」

そうだ、今いる日常を守るんだ。

より幸せな日常へ向かうんだ。

「やっぱり賑やかな赤べこが、大好きですから」

「先輩……」

嘘じゃない。上つ面じゃない。心底そう思う。

そうなんだよ燕ちゃん。

俺たちが戦う理由は、いつだって何かを守るためなんだ。

もう俺は神谷活心流じゃあないけれど、それでも活心流の理を無くしたわけじゃない。

「ぐすつ……なあ、弥生ちゃん？」

「あーあー妙さん、もう泣かないで下さい。それで？ 何でしょう？」

思わぬ感動をぶちこんでしまったらしい。

あんまり思ったことを簡単に言ってしまうのも考えものだよな。

いやでも最近こうなんだよな、ちゃんというか、言ってしまう。

「もし、もしな？ 良かったらでええんやけど……ウチに、こうへんか？」

「ウチって……赤べこに、いや。妙さんの所についてことですか？」

おっと、予想外のお誘い。

まあ確かに、この後がしつかり上手く行けばだけど、道場に居てもただのお邪魔虫だ

しなあ。

「そうや。ウチに来て、一緒に赤べこを切り盛りしていかへんか？　うちは……本気で思ってるよ」

つまりなんだ。

これは正社員雇用的なお誘いか。

隣にいる燕ちゃんも、これで先輩とずっと一緒になんて目でキラキラとまあ……。率直に言って嬉しいし、渡りに船……って言えばちよつと腹黒いか。

でもこうやって俺を認めてくれるっていうのは悪い気しないどころかむちやくちや嬉しい。

けども。

「ありがとうございます、妙さん。ですけど、まずは身内のごたごたを何とかしたいので」

「うんうん、それも大事やもんな。ええんよ、返事は急いでへんし、ゆつくり考えて」
ありがたい。

人情あふれる人達だから、大事にしたいしそれに応えたいって想いはすごく強い。けど、そう、だけでも。

「……先、かあ」

ふんわりとしか思い描く事が出来ていない未来。乗り越えなければ前に進めないと感じている壁。

やっぱり俺にはどうしても剣心と戦わなければ、それに腰を落ち着けて考えることは出来ないらしい。

終わりではなく始まり。

別れではなく旅立ち。

そう剣心が薫さんへと語ったように、俺達は知らぬ間に、無自覚に未来へと歩く。

薫さんは、剣心へと告白したのだろうか。

そして剣心はそれを受け入れたのだろうか。

なんて、赤べこからの帰り道で、ぼうつと考える。

「おう、弥生。赤べこのけえりか？」

「左之助……。ええ、今日も沢山ビラを撒いてきましたよ」

相楽左之助。

多分、異性として一番弥生へ親しい人物だろう。

もしも、俺が俺なんて言わず、れつきとした女だったら……。薫さんが剣心へ告白するように、左之助へと告白していたのだろうか。

……うわ、考えただけで鳥肌立った。良かった。

「へっ、そりゃご苦労さんだったことで」

「ええ、ご苦労さまでしたよ。プー太郎」

顔を見合わせて笑う。

どちらにしても、だ。

俺は左之助が好きなんだろう、最低限人間として。

その上にきつと男同士の友情とか、異性なら恋心とかそういうのがあるんだろう。

ああ、認めよう。

男でも女でもない俺は、今の感情に答えは出せない。

「左之助は」

「おん？」

「どんな未来を描いていますか？」

知っているさ。今まさに先つてやつへ悩んでいることくらい。

どれだけ強くなっても、先を見据えて歩もうとしている奴らは最強だ。

道を切り拓こうとする力は、生きようとする意思是、何よりも強いからだから。

「おめえ……」

「その未来に誰が居ますか？ あなたの隣で誰が笑っていますか？ 私はまだ見えませ

ん、思い描くことすら出来ない。やりたいことや、ぼうつとしたものはあります。けれども」

中途半端な俺は、まだそれを描く資格がない。

男としても、女としても。この明治を生きる人間としてではなく、もつと単純な、生物としての未来。

「私は、思うがままに生きたい。そしてそのためには必要なことが沢山あって、それを一つずつ片付けている最中です。左之助は……左之助はそれを手伝ってくれますか？」

「……」

告白じゃあない。

ずるいと思う、一緒に居て欲しいとは言わないのだから。

左之助の未来は、俺以上に誰にも憚らず、何にも縛られず自由に生きていて欲しい。

そういう男だって、そういう未来を生きるって知っているから。

「おらあよ……難しいことはやつぱわかんねえ。おめえが何を期待してるのかもわかんねえ。だけど一つわかってることがある」

「それは……なんですか？」

左之助が分かっていること。

それは一体なんだろうか。

「おめえが……弥生が、生涯をかけて付き合えるダチってことだ」

「正直に言やあよ。てめえとガキ拵えて大黒柱つてヤツに収まるのも悪くねえなんて思つたこともある」

それは……うん、自分で言つておいてやつぱり生物的な嫌悪感があるな。いや、ごめんまじで。

「んだけど、やつぱちげえんだ。おめえは……弥生はなんつーかよ、帰る場所なんだ」

「ああ。ふらつとどっか行つてよ、まあたふらつと帰つてきたときによ、呆れた目で今度は何処でバカやつてきたんだって言つてくれる……そんなヤツで、けえつてくる場所なんだ」

帰る場所、か。

ああ、そうだな、悪くない。すこぶる最高に悪くない。

「先のことは……やつぱわかんねえ。もしかしたら、いつか考えたように、おめえとくつついてる未来つてやつになつてんのかも知んねえ。けど、どういう形であつても、そんな光景だけは変わんねえんだろうなつて思う」

「……ふふ、とんだ放蕩クソヤロウですな」

ああ、そうだな左之助。

俺たちの関係つてのは男女じゃねえよな。

俺もそう思うよ、あんたと子供作ろうが、一人で生きていようが。

多分、いやきつと。それだけは変わんねえな。

「ちつ。ちげえと言えねえ俺が憎いぜ」

「だまあらつしやいバカヤロウ。悪一文字を背負った人に良いやつはいませんね。はつきりわかりました」

やっぱりお互い笑顔で。

こんなクソ話をして、どっか俺たちは外れてる。

「だからよ。おめえの言う思うがままに生きようや、お互いによ」

「ええ、全くですね。ありがとうございます」

肩に遠慮なくパンチして。

返ってきた拳を軽く躲して。

お互いの未来を祝福し合った、帰り道。

そして決戦の日はやってくる。

この日を迎えるために準備はした。

多くのことをしたわけじゃない、赤べこは痛恨だったけど……被害を最小限に収めてここまでやってきた。

これから始まるのは剣心の私闘。

多くの絶望がやってくると俺は知っているけれど、それでも。

「未来へ生きるために」

皆が皆らしく幸せに。

それだけを願い、心へ定めて再び戦いの場に立つ。

「最前には拙者が立つでござる。左之は前庭、弥生殿には道場周辺を。攻守の判断は任せる」

「おうっ！」

「はいっ！ お任せをつっ！」

事前に相談したわけじゃないけれどもいい場所につけた。

標的と定めているのは八つ目。あいつは最初薫さんを狙いやがるからな、しっかり咎めてやるし煽ってやる。

「弥彦、お主は最悪の場面に限り攻撃へ転じることを許すでござる」

「お……おうっ!!」

——おおしやるぜえええ!!

うんうん、燃えてて大変結構なことだ。空回りしないことを祈るのみ。
全員で生きて、朝を迎える。

やってくるのは絶望に彩られた朝だと知っているけれど。

未来に、変わりはない。

希望へ続く道に、変わりはない。

「——来たっ!?!」

「……いや、なんだよ花火かよ、驚かしやがって」

いいや違う、これは間違いなく開戦の合図。

「いえ、驚いたほうが良いようですよ……!」

「え……?」

「っ——! あれは!!」

さあ、始めよう。

お大臣よろしく空で見下ろすクソガキを……まずは引きずり下ろしてやるっ!!

その男、人誅戦につき

開戦の合図は鯨波兵庫から。

どう考えても先走りだろう、外印が呟いたように一発逆転の可能性を高めるアームストロング砲。

それが使用不可に陥る状況は避けなければならないはずだ。

「次弾装填！」

「そうはさせぬ」

無論、というか。

チームとして、団体戦としての勝利を目指すならって話だけど。

そんな意識あいつらには無いだろう。

人体急所の一つである脇下、打ち抜かれた鯨波兵庫はその身体を沈める。

代償は左之助の斬馬刀のみ。

改めてここまででは出来すぎと言っていていくらいの状況だろう。

「さあ、薫さん、恵さん道場へ」

「う、うん」

「弥生ちゃん、動じないのね」

感心したように……つてのも違うか。

少し驚きを含ませながら俺へ言うのは恵さん。

一番強いのは知っているからつてのが理由だけど、同じくらい鉄火場に慣れてしまつたんだろう。

慣れてはダメなものでもあるつていうのはわかるけど、まだまだこんなことで取り乱してられない。

そうだ、そう言えばこの後……！

「左之助っ！」

「おう？」

「私にもっ!!」

上空を見上げれば気球から飛び降りようとしてくる二人。

そのうちの一人、戌亥へ向かつて左之助の拳を要求する。

「んなっ!？」

なんだ、やれば出来るもんだな？ それとも左之助が上手いのか。

しつかりと攻撃態勢を整えながら飛べた俺に対して戌亥は上手く動けない。

そうそう、ここでダメージを与えられずともちよつかいを出しておかないとね。

「雷神車キャンセル、ってね」

「こん、のっ——！」

無意味に門を破壊させてたまるもんかって話。

俺つえーしたいならどっか別の世界に転生してどうぞ。

体勢を完全に崩した戌亥が落ちていく。まあちゃんと着地程度は出来るだろう。

「——」

飛び上がった先で外印と目が合った。

そして互いを認識し合った。

……嫌な交差ではある。

ここで戦うつもりはないけれど、いつか戦うことになるって確信を得てしまった。

まあ……それも。

「この戦いが終われば」

届かせるつもりは無かった声だけど、小さく外印が頷いた気がする。

下を見れば門は無事。

うん、良かった良かった……ってあれ？ 下？

「……どうしようめっちゃ高い」

これ絶対ダメなやつだよな？ 戌亥は着地出来たかもしれないけど、俺、潰れるよ？

べちやつて。

「……やつべ」

助けて弥生えもん!! こんな間抜けにわし、死にとおないで!!

「わつきやあああああ!!」

「——つとお。んで弥生? おめえは一体何しにいったんでえ?」

よおしナイスキャッチ左之助流石だべいべー! ケツに手が触れてるのは勘弁してやんよっ!

「あ、ありがとうございませう助かりました」

「まあいいけどよ。しつかり頼むぜ?」

コクコクと頷いてその場から離れる。

「て、てめっ——」

「あなたが私の相手? 馬鹿言わないで下さい、物足りなすぎます」

まあ隙だらけだわな、後ろ姿を戌亥に狙われるけどすいすいってなもんだ。

「じゃ、左之助。よろしく」

「ああ」

もちろん余裕の退散ですよ、プロですから。

「ねえ弥生ちゃん?」

「なんででしょう？ 恵さん」

そうして戻った道場の入り口、なにやらジト目が痛いけどなんでございましょうか？

「……感染うつった？」

「……忘れて下さい」

バカは死ななきや治らないけど、感染するようなもんじゃないと信じたい。

さて、戦況に変わりはない。

ちよつかいは結局ちよつかいレベルで終わった素晴らしい。

左之助と戌亥の喧嘩第一幕が始まったけど、漫画通り左之助がまずボコられているけど特に心配はしていない。

乙和と剣心の睨み合いは続いている。

相手からもこちらからも膠着状態と言えらるだろう。

つまりは外印……夷腕坊が降りてくる。

――。

ちらり、と弥彦ではなく俺へと剣心の視線が配られた。

そしてその視線にノーを突き返す。

気球の数とこちらの戦力数。

事前に打ち合わせていた通りだ、ここで俺は動かない。

その役目は弥彦に譲ってほしいという訴え。

だから今の視線は最終確認。

いざとなれば俺が責任を持つという意味。

もちろん弥彦に万が一は起こさせないし、敢えて言うなら万が一を起こさせないための布石でもある。

剣心には天秤を渡したんだ。

弥彦が乙和と相対して戦う危険性と、俺がこの場を離れてあるかもしれない奇襲で薫さんたちが傷つく危険性。

その天秤は結局俺が薫さんたちを守る方へと傾いた。

夷腕坊が、降りてくる。

土煙をあげて、晴れた先には禍々しいと言つていいその姿。

「弥生……！」

「ダメです、私は動けません。気球はあと一つ……あいつの動向へ気を配りながら誰かと戦うなんて私にはムリです。それにアレと戦えるのは……剣心さんしか、いないでしょう」

薫さんが言いたいのは俺が乙和と戦つて剣心が夷腕坊と戦うって布陣。

だけどそりやムリだ。

戦いの構図が変化して、俺が乙和と戦えば、八つ目の相手をするのは弥彦だ。

最悪じゃないけど、斎藤がやってきて戦ってくれる可能性もあるけれど、ここで弥彦の戦いを奪うわけにはいかない。

乙和と俺なら、十中八九俺が勝つ。

相性はもちろん、単純な力量差だつてあるだろう。

だからこそ、俺が戦つてはいけない。

「そんな……!」

「大丈夫。ほら——」

「うおおおおおつ!!」

行け、弥彦。

「弥彦っ!?!」

「さっきの一閃が最初から腕の武器を狙ったもんだとも気づかねえヤツに、剣心の相手が務まるんでも思つてんのかよっ!!」

そうだ、よく言った。そしてよく戦いの場へ立った。

「剣心が……戦いの場を弥彦に任せた……」

「ええ、そうですよ薫さん。弥彦は……もう、剣心さんにだって認められる剣客なんで

す」

わかるよ弥彦、今の気持ち。

葵屋の時みたい、状況的に戦わなければならぬから戦うんじゃない。

誰かに、託される。頼られて戦う時の高揚感にも似た感情。

心配すんな、絶対に死なせないってのはもちろんだけど。

骨はちやあんと拾ってやるさ。

「……」

「大丈夫です、弥彦は……勝ちますから」

これで、三局の戦い。

俺としては何とか、だろうこの構図に持ち込めた。

剣心と外印の戦いが始まった以上、これで俺の相手は八つ目で確定。

もしかしたら齋藤が登場する機を窺ってんじやねえかと勘ぐったりもするけど、あの人の性格的に待機なんかしないだろうし、縁を捕まえるためのチャンスを逃す人でもない。

つまり今まだ齋藤はいない。

八つ目の動きを警戒しながらではあるけど。

「やっぱ……強え」

思わず口から溢れた。

確かに痛撃を受けた剣心ではあるけど、ありや初見殺しに近い。

以降の読みで、剣心が違えることはなく、やっぱり戦いからは安心感が伝わってくる。いや、早くも安心しているのは俺だけか。

隣にいる薫さんも恵さんも固唾を吞んで見守っているし、俺だけ緩めていても仕方ない。

ぶっちゃけこの二人だけじゃない。

俺以外この場にいる全員が剣心の戦いへ目が釘付けた。

この間に何か出来ないかなんても考えたりするけれど、なんてことはない。

「……」

俺は俺で剣心の戦い方を分析するのに夢中なんだから。

実際の話。

俺が今まで勝ち続けて来られたのは、弥生の異能はもちろんだけど、同じくらい知っているという部分大きい。

だから事前に入念な想定を頭の中で繰り広げて、足りなければ何かのピースで埋めると不安材料を潰していったからこそその勝利でもあった。

所々相性じゃねえだろうとか無策も承知で戦ったことはあるけれど、それでもベースは分析によって導かれる勝利の方程式。

そんな分析で見ても、やっぱり剣心一番の武器は速さだ。

読む速さ、決断の速さ、身体の速さ、剣の速さ。

あらゆる速さを極めた先にこそ剣心の力がある。

それに追いつくためには、どうすればいいか。

不可能だろう、後から追いかけてたどり着ける境地でもない。

後から恵さんから告げられるように、その境地は常人には負担が多すぎる場所なんだから。

ならばどうすればいいのか。

どうすれば剣心と戦いになるのか。

今もそうだけど、剣心は予想できないことに対して脆い。あるいは想像以上と言うべきか。

いつか誰かが言っていた気がするけど、読みに頼りすぎている面がある。

力でねじ伏せているように見える戦いだけど、その実剣心の戦いとは究極に型へとはめこんだ戦いなんだ。

こうすればこうする。こうなればこうなる。

その読み、決断をとてつもないスピードで思考し、決めその道筋を描く。

だからこそ、そんなパズルピースが狂っていればフォローが効かなく、痛手を負ってしまう。

対する、俺。

俺自身も何気に剣心と似ている。

勝利の方程式を築いてそのルールを走ろうとするって意味においては。

だけどそれでも、俺にとって相性が良い。

「うん、そうだよな」

俺と剣心の決定的な違い。

それは道筋にある。

答えに至るまでの道筋を俺は見えていない。

剣心は道筋から答えに至るまで全てを見ている。

こう思えば俺つてば随分と適当ね、なんても思うけど。

自分自身の力がはつきりとしていないからこそ究極的な結果オーライを求めてしまつてる。

そしてそれは剣心にとって、全てが初見であるということ、予想がつけられないという事。

「……いける、かもしれない」

恐らく剣心の戦いを見るのは、ここが終われば後は縁との直接対決だけ。考えよう、熟考しよう。

かつてもそうしたように、今も。

「あれが……!!」

「飛天御剣流奥義、天翔龍閃……」

あーでも、あれだけはどうしようもないっすねはい。

——楽勝っ！

——あ、じゃあぶっ潰れた道場の壁、修繕お願いしますね？

——ああん!?

勝利することを欠片も疑っていなかった左之助はちやあんと勝利を収めてくれて。

ちよつと手を痛めたは痛めたんだろうけど、恵さんに呆れられることなくてよかったね。

そして今。

「どこ見てやがる。お前の相手はこの俺だぞ」

「チツ……口数の減らない」

こつちを見て撤退を考え始めた乙和を睨み返して。

「死ねるかああああああつ!!」

弥彦はしつかりと刃渡りを決めた。

さあ、次は俺の番だ。

こんなところで躓いてはいられない。

さつき定めたばかりなんだ、未来も、強さの果ても。

すつかり腰の抜けた薫さんを可愛いと思っている場合じゃない。

後ろで斎藤の声が聞こえた気がするけど気にしている場合でもない。

「薫殿っ！ 早くこつち——」

「いえ、その必要はありません」

天井から音を立てて現れた化け物紛いの腕。

その腕をしっかりと木刀で払う。

「チイツ！」

「……さて」

うん、我ながら元気いっぱい、力負けするかなと思ったりもしたけどこの分なら大丈夫そうだ。

じゃ、やりますか。

「ねえ？ 化け物さん」

「……五分預かるぞ、抜刀齋」

「待てっ！ 八つ目!!」

「五分もいりませんよ、三分で十分です」

おっと、だーいぶ巻き進行にしちやいましたね？ 口上言えなくて残念無念。

「この姿を化け物と呼んだヤツから！ 真っ先に俺は殺してきたっ!!」

っ！ つとお！

わあいお家に堀が出来たよー？ 鯉でも買いましょるか薰ざーん。

……あー冗談だろ？

やあっぱ読むのと見るのは段違いね、知ってた。

はいはい、そんな自慢げにニヤつかないでくださいよまったく。

「なんだ、こっちは問題ないか」

「ええ、欠片ほども。ですので、斎藤さんはお空の大將をよろしくおねがいます」

そう返してみればなんてことない、やっぱ戦いたかっただけなんすねえ。

でもごめんなさいですよ、見て楽しんでもらえる程度には頑張るつもりなんでギヤラ

リーよろしくです。

「どうだこの威力。俺は化け物じゃなく、人間を超えたものなのだ」

ドヤ顔鬱陶しいな。というか舌が主に気持ち悪い。

「その牙はまあ良いとして。舌も人体精製でしたっけ？」

「これは自前だ」

あーあーそうだったそうだった。

別にこの辺を原作意識したつもりは無かったけど丁度いい。

「なるほど？ 十分化け物ですね」

「っ!? 殺すっ!!」

はいはい、もうその手のセリフって聞き飽きてるんですよ。

八つ目、あんたを弱いなんて思わないよ。ぶつちやけそんな余裕をぶっこくほど余裕があるわけでもない。

それでもあえて言うよ。

「殺す？ あなたが？ ……ふふっ」

——身の程知らずですね。

「っ!?」

「……貴様」

一番に驚いてくれたのは剣心かな？ それとも左之助？

んでちよっと怒ってる風味なのは斎藤かな？

「まあ、見ていて下さいよ斎藤さん。私も……別に遊んでいただけってわけじゃないんです」

そうして構えた身体に力を込める。

長い長い八つ目の腕に対して構えるは。

「ふん。つまらないものは見せるんじゃないぞ?」

「ええ、見せてあげますよ。……私流の牙突ってやつを」

その男、虚ろな勝利につき

こうして八ツ目無名異と相對して。

單純に感情の浮沈が激しすぎるだけなんだなと実感する。

「コロスー」

今も物騒な言葉を使って騒いでいるけれど、その実冷静な部分を残している。

牙突の構えを取った俺に對して、同じく構えている八ツ目だけどいきなり感情のまま襲いかかって来ないのがその証左。

奇しくもな左對左は描かれず、右對左。

少し感じるやりにくさ。野球経験者なんかはわかるのかもしれない感覚。

それでもお互いに恐らく間合いの一步……いや、半歩外での待機。

この硬直はまだ続きそうだ、歓迎したくない間ではあるけれど、どの道俺の牙突は待ちの一手。

牙突^{牙突}彌生^流の牙突。

牙突の本質は突進だ、自分の体重、身体のパネ、そして脚力から生まれる勢い。

それらを片手平突きにのせて攻撃力へと変える技。

実際に斎藤が使い分けているように、間髪入れず横薙ぎへ切り替えられる物だったり
と派生というか型みたいなのはあるんだろう。

そして本質が突進であるならば俺の牙突は牙突ではないのかもしれない。

斎藤曰くの真正正銘な牙突。

あれは全体重を前方へ向けて、全てをその一刀に懸けると言っていていくらい、実に新
選組の生き様を示すかの様な技。

対して俺は全力で後方へ体重を乗せる。全身全霊で身体のためを作る。

弥生の世界へは入れない。

だからこれは恐らく初めてだろう、弥生ではない俺という剣客の勝負。

散々アクションを卑怯にも知って、利用して。

それでも生きてやると、無様で醜く足掻いてやるといふ決意表明。

「ちよ、ちよつと、ほんとに大丈夫なの!？」

「ああ、心配すんねえ。弥生は——」

——負けねえよ。

「殺す殺すコロスツ!!」

「……さつさと来なさい、化け物」

嬉しい台詞が台無しだったの。

「殺すっ!!」

——来た。

予想通り想定通り、間合いが交差する前にアイツの左腕は地面を抉る。

その破壊力にたじろぎたくなる気持ちは堪えてぐっと力を込めて。

突進が重なるから土砂の防壁は驚異たり得るんだ。増した勢いに土砂は猛威を振るうんだ。

本命はあの左手左腕。必ず土砂より先に腕が来る。

だから。

「大した着眼だ——っ!？」

「知ってますよ、防げるんでしょっ?」

その左手が精密機械もびっくりな動きを描けることは知っている。

この後にくつ牙突零式なんて奥の手を持ってない俺にはそんな場所は狙えない。

突き出した俺の左手は何のため?

そりゃ狙いを正確につけるためでありあんたの土砂から視界を守るため。

——ここだ。

相手の左手を潜り、土砂に向かって大きく踏み込んで。

「うああああああああ!!」

身体にビシバシと土が跳ね当たる。負けるな俺、男の子だろう？

何のために突進を選ばなかったんだ、何のために力を溜めていたんだ。

それはもちろん。

「——!!」

「このためですつ!!」

相手のほうがリーチがある。

ならば入り込んでしまえばこちらのものです。

ぶちりと髪を止めていたリボンが切れた感触。

もう何度も味わった感触で。いい加減短くしてやろうかな？　なんて場違いにも程

があることを考えながら。

「ぐぎやつ!？」

相手の左肩付け根へ木刀を全力で突いた。

木刀から伝わる嫌な感触、肩峰か鎖骨を砕いて筋を断った。

「二応言いますが、動かさないほうが良いですよ？　無茶したらもう二度と使い物にな

らなくなります」

「がつ、がつ、グギ……!!」

心配……なんて言わないけど、まだ戦闘を続けるなら続けている内に骨が皮膚を突き

破る可能性大。

我ながらえぐすぎるとも思うけれど、それだけに想像では測れない痛みだろう。

弥生を外れた俺は、どうにもやり過ぎる……いや、拙すぎる故にこうなってしまう。

そう、だけどこれで終いになるはずだ……普通なら。

「ぐおおおおおっ!!」

「……ええ、まあ。期待してはいましたけど、続行だと確信しました。それでも敢えて言いますよ、まだやる気ですか？」

牙突零式とどっちのがエグいのかな？ まあどっちもどっちか。

俺の手元にはまだ木刀がある。流石に貫くなんて出来ないからね。

「当然だっ！俺は抜刀齋を殺すためだけに一五年生きてきたっ！ここで闘わずにして退くならば死んだほうがマシだっ!!」

「……そう、ですか」

なんとなく、俺じゃなくて弥生は理解できるのかもしれないその想いは。

剣心……抜刀齋に殺されたいと願い続けて弥生のループを続けて、続けさせられて。

悲しくて虚しい闘いの人生。

執念とも言えるだろう、呪いとも言えるだろうその生き様は。

「なら私とその闘いへと引導を渡してあげましょう」

「ほざけっ!!」

素直な思いだ。

そしてそれはいずれ弥生にも。

なんとなく、物悲しい気持ちで屋根裏へだろう逃げ込んだ八つ目を見送る。

「いくぞっ! おおおおお!!」

上空から襲ってきた八つ目を躲して。モグラごっこを眺める。

本当に、その肩、腕でよくやる。

「弥生殿っ! それは——!」

結界でしょう? 大丈夫です。

確かに弥生の異能、その致命的な弱点は広範囲同時攻撃。

八つ目無名異が縁から渡された……万弾地雷砲、だつたつけ? それはまさにあては

まる。

だけど、だけどだ。

「流石拔刀齋、察しがいいな」

そんな言葉と一緒に大きな爆発音。

爆発音に混じって聞こえなかったけど、多分誰かが弥生の名前を呼んだ。

「よく見ておけ拔刀齋、お前に関わった人間がまた一人死ぬ様」

そうだ、だけど。

いい加減戦っている相手は俺だってことを思い出して欲しい。

さつきからずっと、俺はあんたと戦っている気がしない。

まあそれは俺もものかもしれないけど。

八ツ目と戦っているようで、八ツ目を通して別の何かと戦っている。

酷く、酷く虚しい闘い。

だから八ツ目、その気持ちは俺が預かるよ。

いずれ来る未来への戦い、その時俺が全てぶつけてやる。

「——行くぞ。これで貴様の最後、全地雷を一斉爆破する」

「後でちゃんと埋め立ててから帰って下さいね」

言い終わって。

弥生の世界へ入り込む。

全自動回避同時攻撃。

ああ、改めて考えてもチートに過ぎる。

この身体は、この世界は。いつだって自分の命を繋ぐ場所へ入り込む。

一斉爆破？ ええ、ええとつても痛いですね。

さつきからとつても熱いし爆風はあんたの土砂の防壁よりも激しく身体を襲う。

それでも俺は生きています。

爆弾の威力に差があったのか？ 密集が薄い場所があったのか？ それともたまたま自動的に向かった先の破壊力が少なかったのか？

そんなことはわからない。

ただ弥生は自分の死が見えている場所を避け、死が見えない先へと進んだに過ぎない。

「!？」

「そして空に飛んだあなたに土の加護はない」

残念だったな八ツ目無名異。

背負ってるもんは、若干俺のほうが重かったらしい。

命ある場所へ動けたのも自動なら、奔らせた剣閃もまた自動。

振り下ろされた鉄爪を躲し、カウンターを胴へと抜き放つ。

「」

ちらりと剣心へ目を向けて。

「さて八ツ目無名異、あなたは運が良い。私はつい最近神谷活心流を辞した所、つまり不殺の理から外れています」

「ぐ……………あ……………」

「あなたにとって剣心を殺すこと、死が救済となるのなら、私があなたに救いをあげましょう」

八ツ目の目が俺とぶつかる。

窺える色は少し怯えが混じっていて。

ああ、戦いは終わったんだなと理解した。

「弥生殿」

「……ええ、信じてましたよ」

どうやら意図は伝わったらしい。静かに語りかける剣心へ背を向けて。

「ご満足のほどは？」

「まあまあ、というこことしておいてやる」

にやりと笑う斎藤へ笑顔を返した。

その男、絶望への入り口につき

「張さんは裏取り……今頃は雪代縁のアジト探索ですか？」

「……だから貴様は……やれやれ、逃した魚は大きいと思うことにしよう」

そんな風に話しかけてみれば目を丸くされた後に笑われる。

「ていうかまあ俺やつちやいましたね？　こんなん言ったらまた尋問されますよ怖いです。」

「これだから戦闘後の高揚感つてのはダメだ、落ち着きなさい。」

「わふっ？」

「後、少しは女らしくなれ」

投げつけられたのは制服の上着。

「はて？　女らしくも何も俺は男ですが？」

「なんて思いながら自分の姿を確認してみれば。」

「いやーん？」

「……阿呆が」

色々際どい格好になってますねはい。斎藤さんまじ紳士。

と言うか今更ながらに身体いてえわ、アドレナリン不足ですね間違いない。

それでもまあ動ける程度、爆発の熱波による火傷がメインだろうか、ひりひりする程度。後は土砂のせいだろう細かい傷が幾つか。

ほんと弥生の異能様々ですね。

「しかし考えたな」

「はい？」

「牙突の話だ」

ああ、弥生式。

まあぶつちやけ見て覚えられる技でもなし、主に突きの正確性を高めるためと、よりの確かつ攻撃力の高いカウンターを考えた結果で型を模倣させてもらった。

「私には体重はもろろん力がありませんから。相手の勢いを利用する形で、牙突と言うには少し拙いが過ぎると思いますけど」

「ああ。だが、後の先をああも的確に取る……いや、取れるのは貴様だからこそだろう。少し癪ではあるが、認めてやる」

面白くなさそうにを気取ってはいるけれど、顔は少しにやけてる。

なんですか斎藤さん？ ちょっと慕われるのが嬉しいように見えますよ斎藤さん？

「その顔はやめろ。そういうところだ。そしていい加減後ろの心配そうにしている医者に気づけ」

「はえ？」

「……まったく、やっぱり弥生ちゃんなんかのバカ感染つたでしょ？ 正直肝が冷えたところじゃなかったのよ？」

いやあ申し訳ない。これも戦闘後の高揚感が悪い、全部それが悪いから俺なんも悪くない。

「良いから行ってこい。俺は別に逃げん」

「はあい……齋藤さん」

「なんだ？」

——また、後ほど。

そう口だけで言ってみれば、顎を引くように小さく頷いてくれた。

「それにしても」

「どうしましたか？ 恵さん」

「弥生ちゃん……ほんとに強かったのね」

わあおすんげー今更感！

つても仕方ないか、実際に俺が戦った所を見たことないもんね。

でもなんだろうな。

「それほどでも……ですができれば、あんまり見てほしくなかった気がします。今更、ですが」

「あら？ それはどうして？」

くるくると手際よく巻かれる包帯。

消毒液がやっぱり沁み中、なんでそんな風に思うのか。

「言いましたよ？ 私は恵さんが好きですから。血生臭い娘だと思つてほしくはないんですよ」

なんて言つてみるけど。いや、恵さん大好きはマジだけど。

多分戦いの人つて思われるのが嫌なんだろうな。

俺にとっては近所のキレイなお姉さん、恵さんにとっては近所の可愛らしい女の子。

そんな関係でずつといたかつたんだろうと思う。

女の子……？

だめです男の子です。

「……そ。じゃ、おバカな女の子だと思つておくわ」

「あ?! あー！ 違います！ 私別に左之助してませんから！」

「——おいこら弥生。その左之助してらつてなんでえ」

あーもう無茶苦茶だよ！ 俺しーらねっと！

そんな俺達の様子に剣心は一つ心を固める。

とは言っても、迷いは晴れないまま、この戦いの先にあるだろう答えを求めて戦いの場へ赴いた。

俺もいい加減クールダウン。ここからは茶化しはナシだ、そうやってる心の余裕もない。

「資質もある、鍛錬も積んでいる。だがそれだけだ」

「これでしつかり剣術を学んでいけば……」

心の余裕がないって小さい理由の一つ。

それが、倭刀術。

これは少し前から思ってたんだ、実に俺向きの剣術だと。

「ならばまず一つっ!!」

——蹴撃刀勢。

いや、流石にあんな太刀なんか持ってないし持つつもりもないから、そのままトレースするなんて不可能だけど。

もつと言えば狂経脈なんてのもない上、空中疾走も当たり前だがムリ。故に学ぶべき

は発想。

つまるところ、しなやかな動き。

かつて本格的に剣を握る前、剣心にも言われたように。

俺はまだまだ力で剣を操っている。

さつきお披露目した弥生流牙突もそうだ。

齋藤のようにそれ一本で戦うなんて程昇華できてるわけでもなし、使えてワンポイント、ピンポイント的な使い方になる。

羽踏にしてもそうだ。

回避と攻撃を同時にする……これは物理的やらなんやらを含めて、絶対に回避できない攻撃へ対しては無力。

ベースとなる剣術が必要だ、神谷活心流では生きていけない俺だから。

「良いのか？ 抜刀齋を見なくて」

「……ええ」

見方が違うのも流石に齋藤さんにはバレるか。

正直、この……今の緋村剣心に学ぶべきところは無い。

さつきの夷腕坊戦や、言ってしまうならばこの後、雪代縁との再戦になれば学ぶべきところはあがるが。

「あぁっ!？」

「……なるほど、な」

目の前で龍巻閃が返された。

それで斎藤は俺の言う所を理解したらしい。

「巫丞弥生、貴様には今何が見えている」

「……ご自分が口に出したくないからって私に言わそうとしないで下さい」

信頼とも言えるだろう。斎藤を含めて、恐らくどこるか確実に今の時点では誰も。

「緋村剣心が負けるはずない」

そう思っているはずだ。

俺がそう思っていないのは、知っているのはもちろん……唯一まだ剣心と戦いたいと思っっているからだろう。

斎藤はこの剣心と戦いたいとは思っていないだろう、何処までも決着をつける相手は抜刀斎だ、だから気づいた。

「ちっ……」

「……」

舌打ちを一つ。それから斎藤は薫さんの所へ。

最大の弱点はお前だから何処かへ退けと言いに行ったんだらう、それはやっぱり抜刀

齋であれ緋村剣心であれ負けるところを見たくないがため、だろうか。

そしてここが運命の分かれ道。

どうしても薫さんの擬死が見たくないのであれば、問答無用で退いてもらうべきだつていうのは分かっている。

だけどそれでもその先にこそ幸せがあると知っている。

齒がゆい。

全ての犠牲なく幸せに。

そう決めたからこそ、ここで動けない事が辛い。

あらゆるケースを考えた。

ここで自ら悪役を買って薫さんを攫ってしまうことさえ考えた。

それでも、どうしても先に綻びを描いてしまう。

ここで薫さんの擬死が無ければ、きつと剣心は答えにたどり着かない。

正直な所、雪代縁は対緋村剣心のみ最強のジョーカーたり得る存在で、ともすれば齋藤や左之助なら呆気なく勝ってしまう可能性だつてある。

何だつたら私が戦つても良い。

若い女を傷つけることが出来ない縁だから、多分誰よりも勝利の目があるかもしれない。

「ただどそれじゃあ一生剣心は前を向かない。

そしてその先にあるのはなんとも気味の悪い幸せのみ。

もしかしたらそれで納得するべきなのかもしれない、自分のエゴを通した、だったらそれで満足すべしと言われているのかもしれない。

「……嫌だ」

でも嫌だ。

俺のせいで幸せに陰りを作ることだけはダメだ。

巫丞弥生は異物なのかもしれないけれど。

るろうに剣心の世界に居てはならない存在なのかもしれないけれど。

俺も、幸せになりたいから。

やはりと言うべきか。

「所詮、所詮死など一瞬の痛み」

天駆ける龍の爪も牙も、地に伏せる虎へは届かなかつた。

——貴様を生き地獄へ叩き落とす。

「姉さんはこつちへ!!」

「や、弥生!」

ああでもそれでも。

精一杯の抵抗はしてやる！

「弥生！ 嬢ちゃんを頼んだぞ!!」

「わかつてます!!」

くそっ！ 煙幕でいまいち方向が掴めねえ……！ これじや別の道に逃げても追いつかれちまうっ！

やっぱり道場か……？ 道場しか、ねえのか!?

「くそっ！」

「弥生！ 剣心が!!」

「くっ！ バカいってんじやないです！ 姉さんが死んだら悲しむのは誰ですか！ 悲しむ人の中に誰がいますか!?!」

あーもう！ これは恵さんの役目！ 光栄だけこのタイミングは嬉しくないっ!!
「っ!?!」

「風向きが……っ!?!」

煙に巻かれないよう強く薫さんの手を掴み引く。

今の戦況はどうなってる？ もう鯨波は目を覚ましただろうか。
だって言うのなら……そろそろ。

「私怨はないが、やつに人誅を下すため——」

「ちいっ！」

来やがった！ 雪代縁！

「ふん、余計なヤツまでいたか」

「姉さんに……手出しはさせない！」

大丈夫だ、雪代縁は俺にも薫さんにも手を出せない。

時間を稼ぐ程度なら問題ない、なんならここで倒してしまっても——。

「——巫丞弥生」

「なっ!？」

「弥生!!」

現れた影は——。

「そう何度も邪魔をされては、な」

「外印……っ!!」

足元を見ればご丁寧に鉄線で編まれた陣のようなもの。

命に関わる攻撃を避ける事ができる……が、命に関わらない攻撃には反応出来ない。

こんな形で……新しい弱点に気づくなんて……最悪もいところっ!!

「外印……おまええ……っ！」

「おお、怖い怖い。……だが、いずれを今にしている暇はない。少しの間、じっとしてもらうぞ」

「やよ——っ!?!」

——諦めろ。

ああ、嫌だ。

その台詞は、それだけは。

分かっているのに、ちゃんと薫さんは生きているって知ってるのに。

「姉さんっ!!」

「とは言えこのままじゃ仕事も出来ん……眠れ」

「かひゅっ!?!」

変な声が出た。

ああ、そうか、俺はいま、鉄線に……。

「は、な……せ……」

「……縁じゃないが言わせてもらおう」

——諦めろ。

いやだ、いやだ、薫さんを守れなかったなんて認めたくない。

皆の絶望する表情なんて見たくない。

いやだ、
いやだ、
いや、
だ、
い——

その男、前進につき

恐らく。

ユメノオワリとは今を指すんだろう。剣心は行方をくらし、神谷薫は死に。

道場に流れる空気は重たいを通り越している。

人の価値つてものが本当にその人が死んだ時に流れた涙で決まるというのなら。

あんまりにも少なすぎる。

もつと、もつと多くの涙が溢れて良いはずだ、それこそ海が出来るほどに。

いや、分かつてる。

薫さんが生きてることなんてわかっている。

分かっているだけに、本気で死んだと思っている人達の中に入ることが辛すぎた。

こうなるって知っていたのに、覚悟していたのに。

後悔する権利なんてあるはずもないって、言われるまでもないのに。

自罰的といえばそうなんだろう、誰に左右されるわけでもない自分の中で定まってい
る未来。

そのために親しい人たちを悲しみに沈めているという事実は、自分で裁くまでもなく

俺を責め立てた。

だから逃げた。

信じられないの一点張りで。まるで狂人かのように。

今の皆からすれば、生きているはずのない薫さんを探そうとする、現実が見えていない人を演じて。

「……切り替えろ、俺」

一人呟く。

引きずられている場合じゃあない。自分で選んだ道なんだ、都合が良すぎる。

狙い通りじゃないか、むしろ漫画の道を辿ったんだ喜べ。

ただ、どうしても。

もし縁がトラウマを克服していたら？

なんて想像が、発想が邪魔をする。

目が覚めた時、剣心が泣き崩れていて、その先に薫さんの死体があつて。

もしも……もしも本物だったらって。

そのまま棺桶に入れられた薫さんから、何の人工物も出てこなかったらって。

「落ち着け、冷静になれ……！」

縁は俺に対して酷く動揺していたように思う。

故に自らの手ではなく外印を使って俺を行動不能にしたんだ。そのはずだ。

若い女性を傷つけることが出来ないだけでなく、姉と呼んでいる存在を知って。

まず間違いなく俺って存在を自分と重ねたはずだ、それが出来ないのならそもそも人誅なんて考えても実行に移さない。

縁が巴さんを姉ちゃんと慕ったように。

俺もまた薫さんを姉と慕っているなんて、すぐ理解に及んだはずだ。

今頃は、原作以上に心へダメージを負っているだろう。

もしかしたら、眼鏡の奥に映す巴の顔は曇っているどころじゃないかもしれない。

「違うって……そうじゃないって……」

なんて、それこそ自分を柵に上げて恨みつけて心で誤魔化しているに過ぎないんだろうな。

「皆、ごめん……」

弱くて。より良い幸せを模索できなくて。

だからこれは一生背負わないといけない業。

剣心が抜刀齋として多くの命を奪ったことをそう捉えているように。

俺もまた、薫さんの擬死を死として扱ったことを、簡単に解決させてはいけなさと心に刻んだ。

皆で行った落人村。

そこではしつかり漫画で見た光景が流れていった。

左之助の言う仇討ち。

心情的には近いものがあるけれど、やっぱりブレーキがかかった。

もちろん、このままで終われないという気持ちはある。

だけど、それでも。

「この状態を容認したのは……誰だ、って話で」

何も言うことが出来なんだ。

もう疲れたと言った剣心にも、そんな姿に怒りが収まらない左之助にも。

だから。

「ねえ、四乃森蒼紫さん」

「……」

いつか会ったのは京都の市内。

お互いに面識はそれだけ。

「私には薫さんが死んでしまったなんて信じられないんです」

「……そうか」

それでもこうして言葉を返してくれるのはきつと優しさなんだろう。

何を考えてるのかわからない代表ではあるけれど、カリスマだけはピンピンと伝わってくる。

「ええ、なんで一番心へ傷を負わせることが出来るだろう殺害の場面を剣心の前でやらなかったのか……そんなことを考えると、ね」

「――！」

そこでようやく俺に目を向けてもらえた。

流石に表情へ出さない蒼紫さん、ご立派です。

「過程を省く必要は何処にもない。むしろ本当に絶望の底へ叩き落としたいのなら、それはあるべきものはず」

「ああ、その通りだ巫丞弥生。俺にも違和感があつてな、その時の一部始終を出来る限り詳しく話せ」

本来ならこれは恵さんの役割だけど。

俺自身少し逸っている気持ちがある。一刻も早くこの辛い現状から抜け出したいと思っているんだろう。

今から墓を暴く……なんてのは無理だろうけど。

それでも、少しだけでも早く今から脱却したい。そんな気持ち。

だから遠慮なく話した。

途中、随分と冷静なんだななんて突っ込まれたのはかつての斎藤さんを思い出してしまったけど。同じく、そう見えたなら光栄だと言えなかった。

だってそうだろう？ あの時はない崩し、場当たりにカードを切っていった結果だったけど、今回はある程度思考を巡らせている。

随分と、虚勢を張るのが上手くなってしまった。

「わかった」

そう一つ頷いた後、その場を後にしていく蒼紫。

なんというか、本当に掴めない人だ。

恐らく徹底的な現実主義という隠密のルールに則って行動し、明日の夜にでも薫さんの墓は暴かれる。

それでこの空気も終わりだ。

「ああ、そうか」

ふと、気づいた。

「蒼紫達の到着を早める手助けをするだけで……もしかしたらこの戦いは——」

——終わっていたのか。

ああ、そうだ。そのはずだ。雪代巴の手記、それがただの一日でも早く手に入ってい

たのなら。

なんてこった、正解はこんな簡単などころにあつた。

バカだ。

「はは……ははは」

バカだなあ……俺。

何がバカつて……。

「なんでこんなに嬉しいんだ」

なんでだ、なんでだろう？

なんでこんなに涙が出るんだろう。

なんで今さら、心が痛いんだろう。

「そっか……そうなんだ」

ようやく俺は俺をちやんと責められる。

仕方のないことだから、乗り越えないといけないからなんてお題目で隠していた心。

ミスを見つけたから、自分の迂闊を見つけれられたから。

「ごめん……ごめんなさい……！」

やっつと、後悔できる。

「剣心さんのお別れは済みましたか？」

「……弥生。んだ？ おめえも俺と来るか？」

いやいや、目が笑ってねえですって。

弥彦の台詞が引つかかっているのはわかるけど、俺にあたることでもねえでしょうに。

「まあ、それもいいっちゃ良いのかもかもしれませんけどね」

「……は」

ああ、分かっているんだろ？

絶対についてこないってわかっているからの台詞だったんだろ？ それくらいわかるぞ。

「弥彦に言われたでしょうし、私が似たようなことを言っても仕方ありません」

「んだよ……だったらいっちょ喧嘩でもすつか？ そうすりゃ、多少でも気が晴れるぜ

？」

おーおー狂犬もびっくりね。触るもの皆傷つけるってか？

「いいえ？ 私の気はもう晴れていますから」

「ああ？」

訝しげだねえ。

けどまあ、生憎と。

「もう動くしかありませんから。いつまでも終わってなんて居られないんです」

「意味、わかんねえ……！ こちとらむかつ腹が立つてたまんねえんだ……！ たとえてめえでも——」

「はっ！ バカ言つてんじやねえですよ左之助。アイツがダメになったから自分もダメになることを容認しちゃうようなヤツを殴る拳も剣もねえんです」

今の自分がどんだけ情けない背中してるか分かつてるか？

「私の好きな左之助なら一人でも薫さんの仇討ちに走っていましたね！」

「——！」

あんたはそういうヤツだよ。

剣心に引きずられて落ち込んだりするタマでもねえだろう？

「まあもつとも？ そうして欲しいなんて思つてませんか？ 今の左之助にソレをされるくらいなら今ここで貴方を潰してから私が仇討ちに走ります」

「てめえ……！」

あーあー、これだから左之助は。

道を開けるがてら拳を躲して、その背中を木刀で小突く。

「行けよ左之助。一旦終わってこい」

「あぁっ!？」

存分に苛立って、存分に憂き晴らししてこい。

「返す拳は結構です。もうちよつとマシな面してから殴り返して来なさい」

「——ちっ」

それでもまあ言っておかないといけない言葉はあるか。

「良いですか左之助。待ちはしません、けど必ず……見届けに帰って来なさい。これも、今でも……私は貴方の帰ってくる場所にいるつもりですから」

言葉が届いたのかは、わからない。

もう漫画で、原作でこうだからこうなるとも思わない。

俺は、俺として、弥生として、どこまでもこの絆を信じてやる。

「それで俺に裏を取りに来たってわけか」

「ええ、嬉しいですか？」

なんて言ってみれば斎藤はニヤリと笑って。

「コイツより遥かに使える人材が来るのは喜ぶべきことだ」

「おうコラちよつと待ちや!?! こんだけコキ使つといてそらないんちやうか!?!」

はいはい張さんは煩いんで黙っててくださいねー。

ま、邪険にされず良かったよ。なんとなくウエルカムな雰囲気です。

「それで？ 今度は何処まで搦んでいる？」

「荒川河口……まあ、斎藤さんと同じ睨みをつけてるって感じですか」

言ってみればやっぱり眉を一つ動かして。

「やれやれ、貴様がそう言うならこれは本筋と考えて良さそうだ。そして欲しい裏は神谷薫が生きているだろうことか？」

「まさにその通り。そしてありがとうございます」

うん、どうやらしつかりと薫さんは生きているようだ。

これで一安心、しつかり動けるっでもんです。

今頃蒼紫達による神谷薫の墓暴き計画が立てられているところだろう。

それに付き合うのも良いけど、やっぱり俺だからこそ動けることを優先すべきだ。

「よし。ならばここからはすり合わせだ。改めて何処まで搦んでいる？」

つとー流石にここで逃しちやくれないか。

ここで中華マフィア……縁達との関係を疑われないあたり結構信頼されてるよな。

いや、もしかしたらその筋も疑ってるのかもしれないけど……。

「推論を元に、と前置きしますが。雪代縁に組織の旗頭となる力はあっても纏め上げる能力はないでしょう。実務、折衝担当がいると睨んでいます」

「続ける」

「そして雪代縁最大の目的は現段階で達成している……剣心さんへ人誅を仕掛けるためだけにと決めつけるのは早計ですが、達成した以上組織のトップとして据え置くには危うい人種です」

今現在に至るため。

ここまで生き延びるって部分があつたにせよ、その理由はやっぱり剣心へ復讐するためのはず。

「そういつた組織のトップとして日本に來た、という点も絡めて考えて。日本へ市場を広げるには絶好の好機であるはず。実務折衝担当がこの機を逃すとは思えない」

「……流石だな。今からでもコイツの代わりにならないか？」

「ちよおい!？」

いや流石に人誅編以降はお役に立てないでしょう遠慮いたします。

ともあれ一つ齋藤は領いた後。

「貴様の言う実務折衝担当……組織のナンバーツーが東京へ入つたと連絡があつた。雪代縁個人の人誅なら可愛いものと見過ごせようが、ここから先は絶対にまかり通らん」

流石の迫力。

齋藤の悪即斬、それに抵触するとなると本当に。

「一つ、網を張っていきましょう」

「網？」

まあ張ったのは俺じゃないけど、蒼紫だけど。

あん時の借りはしっかり返しておかないといけない。

「時間をかければ警察の捜査でも新アジトは割れるでしょう、ですがこちらも確実性が高いはず」

「わかった。ならば互いに情報が得られ次第連絡を取り合えるよう図っておく」

今度は二人で頷く。

そうさ外印。

甚だ八つ当たりで申し訳ないが、いい加減葵屋から続いている妙な縁……終わらせようぜ。

その男、外法の戦いにつき

——良いだろう、だが始末は俺がつける。

それが条件。

簡単すぎて涙が出るね、蒼紫には心から感謝しよう。

じつと息を潜めて待つのは外印。

そう、アイツの言う造形美その集大成である神谷薫の死体人形。

取りに来るのをひたすらに待つ。

手に持つのはいつもの木刀。

少し肌寒くなってきたせいか、やけに冷たく感じるそれに対して心は熱い。

今の所、一勝一敗の引き分け。

なんて単純な話ではないけれど、葵屋での攻防では俺が勝って、先の人誅戦では手痛い敗北を刻まれて。

いい加減だましましで紡いでしまった縁を断ち切ろう。

だましましでやってしまったからこそ、見て見ない振りをしてきたからこそ。

自業自得の大後悔。そんな無様を晒してしまったんだ。

自分にある何かへの決別、そして腐れ縁ではなく腐った縁を振り切る。

「……………」

落ち着こう。

因縁と言うには言いがかりにも程があるけれど。

荒くなりそうな呼吸を抑えつけて。

外印。

いつでも考えている相性。

弥生対外印を相性だけで考えるならガン不利と言つていい。

鉄線の直線的な攻撃、あるいは曲線の攻撃。

それらに対して脅威はほとんど感じないが、間合いの広さと、鉄線を用いた環境利用攻撃。

何度だつて確認するけれど、俺は広範囲同時攻撃に弱い。

最近判明した命を目的としない攻撃もそうだし、トラップばりの攻撃にだつて弱い。

八ツ目の地雷爆破を生き抜けたのは……予め命を繋ぐ場所へ目星をつけられた事が大きい。

異能で爆弾の位置を察知出来たんだつて理解だけど、外印の攻撃とは似ているようで少し違う。

最大の噛み合わない点つてのが、間合いに入ることを徹底して許されないだろうということ。

もう散々外印に手の内は明かしてしまっている。

なら相当侮られるでもない限り剣の間合いには入ってくれないだろう。

木刀の間合い先、中遠距離を維持されたまま何処かでハメられるってビジョンが見えている。

防御する、つまり避けることはしつかり警戒していれば何とか。

だけど攻撃する手段が無い。

夷腕坊に搭乗していない外印だけ。

それでも夷腕坊と同じく打開策がいまいち見えない。

ノープランで勝てる相手なんてこの世界にはいないってのは重々実感させられているし、承知もしている。

だからこそこの事前に対策を打たないで勝負へ向かうことに意味がある。

「俺が、何処まで強くなつたか」

試金石に出来る相手じゃないってのも、分かってる。

何を偉そうな事考えているんだって、俺の中にある何かが叫んでいる。

それでも……それでも、だ。

この世界に生きる人達は、いつだって初見相手だ。

知っているなんて武器を持ち合わせていない。

それでも勝利しているんだ。

知っているってことを避けられないし、今更忘れることも出来ないけれど、せめて。

「——来た」

蒼紫に教えてもらっていた仕掛けを起動する。

「うおっ!？」

大漁大漁……なんておちやらけたい口にチャックをして。

「やっぱり来ましたね、外印」

「巫丞弥生……! 貴様の仕業か……!」

いいえ、蒼紫の仕業です。

まあ、こいつには外法のものって自己紹介っぽいことしてたっけ? ならここでそ

れっぽく笑つとくのが吉かね。

「貴様っ! 私の、造形美の傑作を! 何処に隠した!!」

叫びと共に飛んできた鉄線……確か、斬鋼線、だったか? 身体が勝手に反応して頬

の少し横を通り過ぎる。

そのことに一つ安心、どうやらしつかりと今のは避けられるらしい。

「ふん、どうやら知っていらしい。流石外法同類のもの、博識だな」

「……甚だ反論したい気持ちですが、まあそれほどでも……と、お答えしておきますね」

「ならば貴様もわかるだろう、それに対する想いが。遺憾ではあるが、それがなければ縁の所から無事にここまでたどり着けなかつたとすら思うほどの」

別にもう辻褄を合わせる必要もないんだけどな。

それを自覚してなおやってしまうのは……嫌な癖になつたなんて思う。

んで？ 無事にたどり着けなかつた？

確かに帰りの船で襲われたんだらうけど……余裕そうだったし、余裕の返り討ちだらう？

それ以外に何かあつた？

いや、まあいいか。

ダイヤモンドの粉末をうんたらかんたら。

さも俺に勝ち目は無いってお話を校長先生の如く長つたらしく。

「ごちゃごちゃ煩いですね」

「何……？」

不意を……つけてはいねえか。

構わねえ。反射的に振るわれた鉄線を避けながら――。

「羽踏――！」

「くっ!？」

手応えは……残念ありません。

だけ。

「別に貴方から聞きたいことは唯一つ、そして貴方に教えることは何一つ無い……いい加減鬱陶しいんですよ外印」

「……貴様」

ああ、やっぱり無理だわ。

冷静になろうと努めてたけど、早速羽踏起動させてるし、全然ダメだった。

「たっぷり八つ当たり、させて頂きますよ……再起不能は覚悟しろ、外印っ!!」

「小癩……なア!!」

擬似的に、今の俺は蒼紫お得意の流水の動きに近いことをしている。

なんだっけ？ 確か――

「水を裂くこと、括弧ことは叶わず……全くもって無駄な労力ご苦労さまです」

「小癩もそこまでくると言葉が思い浮かばんよ……巫丞弥生っ!!」

来たっ！

どごとと大きな音がして、周りへ這わされた鉄線が墓石を砕き、降り掛かってくる。

——信じてるぜ、弥生。

「つうつ!!」

「裂くこと括ることが出来ぬのならっ！ 叩いて飛沫にするのみよっ!!」

ここでやることは力を込めることじゃない、その反対、力を抜くこと。

弱点だつて分かつてる、勝手に身体へ力が入るのだつて分かつてる。

だからこそ、抜け。

全身全霊で弥生へ身体を預け、捧げる。

「縁も黒星も……貴様も。総じて外法の人形使いをナメすぎだな——」

俺の生きる場所、生きていられる場所はその先にある。

「さて、そろそろ——」

「——そろそろ、なんですか?」

あーあー、黒ドクロ頭巾さえなかりやなあ? きつとその驚いた間抜け面を拝めたん

だろうけどなあ!

「化け物、か?」

「生憎残念とまだそれ呼ばわりは早いですね」

うん、身体に痛いところは無い。

一旦羽踏も解除だ、ここが山場だったんだ、この後下り坂になるかは未だわからないけど。

「……貴様の目指す先とはなんだ？ それだけ秀でた力がありながら……この世だ、女が剣客として成功するわけでもなし。そもそも剣で収められる成功すらなくなりつつある」

おっと、勧誘かな……？ いや、勧誘もしたいんだらうけど、こりや半分はマジの疑問だな。

「ええ、そうでしょうね。私は剣客として何らかの成功を収めることは無いでしょう。この剣は今だけ、幸せを切り拓けさえすればそれ以降私にとって無価値もいところ」
ああそうだ。

鍛えたこの腕も、力も、剣術も、異能も。

全てはイマの為だけに。

「目指す先に成功は無く、ただただ壁へと挑む心だけがある……外印、バカなことは言わないで下さいね？ 貴方の言う成功は……私にとって地雷もいところなんですよ」

剣心や左之介、斎藤や蒼紫。

彼らに並び立ち、雌雄を決する。

ああ、憧れだ。そんな場面を迎えられたら、きつと嬉しくてどうにかなつちまうだろうよ。

だが残念、そこに勝利という成功を求めてはいない。

「私はいつだって最強で最高の彼らを見ていたんです。そのためには何でもする。それがもし、私の死であるとするならば潔く死にましょう」

「意味が、わからんな。貴様、さては狂人か？」

狂人なあ。

まあそうなのかもしれないな、きつとこんな力を得たのなら、今まで数多の弥生は知らないけれど、俺みたいな中二病を拗らせたヤツなら俺つえーに走っていてもおかしくない。

なんだったたら、俺みたいなムーブかまして、陸軍省だなんだに入省して……なんてエリートコースを走っていたのかも知んねえ。

もつと言えば、俺が歩んだ軌跡より遥かに上手く立ち回って……自分にも、それこそ剣心たちにすら苦境を与えないようにしているのかも。

だけど、それに俺は何の価値も感じない。

ただただ見たいのは輝いているヤツらが輝いている姿。

求めるのは彼らが幸せの中にいる光景。

「狂人で結構。狂人故に、貴方を排除する理由にもなる」

「——！」

言つてはないけどさ。

ほんとにこれはただの八つ当たりなんだよ外印。

自分の失敗をあんたのせいだつて押し付けようとしているだけなんだ。

そうか、ああ、なるほど、だからやつぱり俺は狂人らしい。

「何を、笑つて……！」

「ふふ、ふふふ……笑わずにはいられませんよ！ ええ、ええ！ わからなくて結構です

！ わかつて欲しいとも思わない！」

自分へ盛大に笑いながら。

「……牙突」

「いいえ、違いますよ？ これは——」

——羽突。^{ハトツ}

思いつき後ろ足で地面を蹴つて。

同時に弥生の世界へと身を委ねて。

牙突弥生流の完成形。

「血迷ったか!? 左様な勢いでこれは避けられまい!!」

「おいおい忘れたか？」

鉄線も、墓石アタックも。

俺の命はその先にある。

「っ!?!」

「あああああああああ!!」

された攻撃が何だったのかはわからない。

もうそれすら気にならない。

ただただ目指すのは外印の水月。みそおち

その一点。

視界が反転した、ずれた。

構わない、中心に置いたそれが揺るがなければそれでいい。

「つつぐえ!?!」

「」

突きが、完全に入った。

自らの意思で、急所を狙った一撃。

完璧に、入った。

「が……ぎ……」

「……苦しんでる暇は無いですよ？ 外印」

「ぎ……!!」

手の甲を突く。

右手、左手と順に、強く、強く。

これでもう、こいつは鉄線を使えない。

「あなたには薫さんの居場所を教えてもらわなければなりません……さあ、吐いて？
どうぞ」

「ぎっ！……ぎ、ぐ……！」

ああ、興奮が収まらない。

捕まえた昆虫をピン刺しにしている気分だ。

標本を作らなきゃならないのに、どうせ命を最終的に奪うっていうのに。
命を弄んでいるこの実感。

「あれ？ 言えませんか？ すいません、尋問って言うんですっけ？ 私、初めてなもので……至らなくて申し訳ありません」

「ぎっおっ!」

尋問？ ああ、拷問だっけ？ まあどつちでもいいか。

しかし喋ってくんないなあ……もう一箇所位急所打つとく？ 一本いつとく？

「巫丞弥生」

「煩いですね、今良いところなんですよ、邪魔しないで下さい」

ああ、そうだ。

まだ大丈夫そうなんだ、だったら――。

「ふぐつ!？」

「……落ち着け、今のお前を誰にも見せられん」

いったあ!？」

……あえ？ 蒼紫？

「蒼紫、さん？」

「やれやれ正気に戻ったか。俺としては安心できたが……それは俺だけだろう」

うん？ 一体何のこと……って。

「うわ、それ私がやったんです？」

「……ああ、後は任せろ」

……いやーちよつと直視できませんね。

完全に血に……いや、狂気に酔ってましたね間違いない。胃のあたりからこみ上げる

もんが……うぷつ。

「おろろろ——」

「……まあ良い。その姿を見て、誰もお前を外法の者だとは思うまい」
「げ、げほーのものじゃないです……ずずつ。え？　と言うかあれ？」

なんでそんなこと言ってるんすか？　え？　いやもしかして。

「察しが良いな。その通り、こいつと共に貴様も外法のものであれば葬り去るつもりだった」

……うそん。

あーでもあれだ、この人それが目的で生きてるんだっけか……。

いやいや、そんな事実聞きとくなかった。

斎藤といい、蒼紫といい。ちよつと狡猾が過ぎませんか？

まあいいや、結果オーライ。

なんだかすぐく眠いんだパトラツシュ。

「連れて帰ってはやる」

「ありがとうございまーす……あと、おねがいしま、す……」

すんげー気持ち悪いけど。

気分はなんだか整理できた。

複雑な気分のままで。

「……せめてソレからは避けておけ」

「……」

漂う臭気に涙を流した。

その男、葛藤につき

目を覚まして酸っぱい匂いに包まれていなかったことに嬉しくなつて。

そういうところだぞ蒼紫なんて思いながら感謝して。

気づけば馬車の中。

斎藤と蒼紫に加えて俺、雪代縁が作った荒川河口のアジトを潰して、町中で暴れてい
るだろう鯨波兵庫を止めるために向かつている。

実を言うと、アジト潰しに連れて行かれるのには結構反発もした。

弥彦が鯨波兵庫に対してちゃんと勝てるかって不安があつたからだ。

信じているかそうでないかという話ではなく、単純に自分の居ない所で物語が進むこ
とへ抵抗があつたからって面が大きい。

それでもやっぱり斎藤との繋がりがそれなりに深いし、まして今回個人的な情報ライ
ン共有を図っている。

だからこつちを蹴るって行動が結局取れなかつた。

つい最近大反省したこともそうだけど、こうして物語の中になると、時間の経過に対
して錯覚を感じてしまひそうだ。

確かに薫さんの死が擬死であると判明してから、話は加速度を増して進んでいく。自分の身体が二つあれば、なんて思うのはこんな時なんだろうか？ 少し使い方がおかしい気もするけど、欲しい物は欲しい。

まあそれでも、鯨波兵庫と弥彦の戦い。

これは弥彦が剣気に目覚めるというか、一人前、一流の剣客へ至るための戦いだし、何より緋村剣心復活イベントの締めでもある。

……なんとなく。

俺としてはとても嬉しいことではあるんだけど、弥生としては微妙なんだろうなとも思う。

弥生はあくまでも緋村抜刀齋に殺されたいと願っている存在だ。

永遠に続くかとも思えてしまう弥生という存在ループ。

それに終止符を打てるのが抜刀齋。

だったらここで緋村抜刀齋は絶え、緋村剣心のみが残るっていうのは歓迎したくないことでもあるだろう。

「……………どうした？」

「ああ、いえ……………」

そんなことを考えていたら無意識に斎藤を見つめてしまっていたらしい。

この人も、やつぱり緋村抜刀齋との直接対決を望んでいる一人だ。

漫画では……いや、この世界でもきつと、戦つて決着をつけることつていうのは出来なくなるんだろう。

出来なくなるつてのは違うか、決着をつけたいと希う相手が居なくなるといった方が近い気もする。

そう考えれば、蒼紫と齋藤つてその部分に大きな違いがあるよな。

齋藤も蒼紫も。

二人共過去から続く自分の生き様に従つて生きているけれど、蒼紫は剣心と戦つて色々な気持ちへ整理をつけて、新たな道を歩き始めた。

だけど齋藤はそうじゃない、ずっとずっとこれからも、決着はつけられず、自身で言つたとおり生き残る。

すなわちよりこの明治を自分の生き様を貫いて生きていられるかというモノしか残らない。

「おい、何かわからないが哀れみの目を向けるのはやめろ」

「え？ そんな目してました？」

わりと真面目に嫌そうな顔された、いやマジでごめんなさい。

「やれやれ、貴様にそういう目をされると気分が悪い。どうした？ アジトで怪我でも

したか？」

「いえいえ、全く掠りもしてません。……いや、斎藤さんはやっぱり忙しい人なんだなって思ってる」

頭を下げながらそんなことを言ってみる。

心配してる相手に心配されるって程滑稽なことはないけれど。

「そうか。しかし何だな、羽突……だったか。中々に仕上がってるじゃないか」

「あ、ありがとうございます」

おっと慰められてるのかな？ それとも話題転換？

とりあえずお礼を言っておけば肩を竦めた斎藤は蒼紫を視線を投げて。

「目を疑った……というのが当てはまるか。突進中は極端に視界が狭くなるはずだが、そうであつても全てを見通すかの如く回避しながらの突進突き……様々な技法は知っているが、先の技は記憶にない」

「あ、蒼紫さんまで……」

わー慰めじやなかった。普通に感心されてるう。

……いやマジで嬉しいわ。

雲の上にいる人達に認められる的発言はこの上なくすぐつたい。

まああれだ。

気づいたのは八ツ目と戦った時、地雷爆破から生き残った時。

弥生の異能は死を避ける。それは少し発展して言えば、生きる場所へとたどり着く能力。

平たく言ってしまうえば、そこが自身の生を繋ぐ場所であれば擬似的な神速を持つて辿り着ける。

ぶつちやけ発動したあとむつちや身体痛くなるから乱用は出来ない。

当然だ、自分の筋力とか全てを無視して動くのだから。

たとえるなら磁石みたいなもんだ、自分を生きる場所へと無理やり引き寄せる。

そしてその最終形が羽突。

羽踏が異能を最大限防衛的に使う技なら、羽突は最大限攻撃的に使った技。

相手の懐に生きる場所を見出し、そこへ異能による全回避を発動したまま引き寄せられるように突っ込む。

「二度貴様の身体がどうなっているのか蓋を開けたい気持ちがある」

「や、やめてください!!? セクハラですよ!?!」

「……なんだせくはらとは。まったく」

ともあれこれで二つの武器が出来た。

その確認は……なんだっけ、四神スーシンだっけ? 斎藤さんも乗り気じゃ無かったはずだ

し、出番頂いてやりますか。

そして恐らくそれが最終確認だろう。

その戦いが、終われば……きつと。

感じていた不安は杞憂に終わって。

無事と言つてしまえば随分と感覚が狂つたな、なんてことを実感しつつ、ベッドの上で眠っている弥彦と剣心の部屋を後にして。

実感といえば、やっぱり自分自身のこと。

一つの確信、俺はどうやら弥生に引きずられている。

外印と戦つた後の高揚感。

あれは感じてはいけないモノだったと思う。

正確に言うならば、元来の俺ってヤツならきつと感じなかつたモノだ。

弥生の異能が、俺の剣術が。

一つ上のステージに登る度に、狂気とでも言うのかそんなレベルも一つ上がる。

いや、弥生のせいになっている分まだマシなのだろうか。

今感じている気持ち、俺自身が強さに酔っていると認めたくないからなんて思うくらいにはまだまだともなんだろう。

強くなった。

正直馬車の中で二人から褒められたというか認められたと言うか、そんな言葉を向けられるほどには。

精神に不調はなく、身体は戦えば戦うほどに好調へと至って。

こうして不意に一人の時間を迎えると、よくわからない不安が心を過る。

何を今更、なんて思ったりもするけど、それでもようやくなんだ。

人を……簡単に殺せる程に強くなってしまったと自分のことを認めたのは。

慢心でも、自信過剰でもなんでもなく。

最終確認と定めた四神、その誰が相手になったって苦戦するイメージがわからない。

本当に、強くなってしまったんだと思う。

そう、しまった、だ。

確実に毒されている、といえば言葉が悪いか。

持て余しているんだ、自分の強さを。受け入れてないんだ、強さってやつを。

身体は、剣は、強くなった。何度も反省したし、辛い気持ちを自業自得の名の下に味

わった。

それでも一向に心は強くなっていない。

そういう部分を見れば、やっぱり剣心も弥彦も左之助も。

偽物じゃなくて本物なんだなって思う。

「強さ、か」

手のひらを見る。

もうすっかり自分の身体だと認識できるようになった、女の身体。

昔みたいにならにさらしを巻く度、謎の照れを覚えることも無くなった。

すっかり、もう、自分の身体だ。

窓に移った自分の顔を見て。

かつての自分、男だった自分を思い出すのが難しい。

果たして俺はどんな男だったか。

この世界に来てから、それほどの時間は経って居ないはずなのに、随分と過去の思い出に思えてしまう。

それが、不意に怖くなった。

電子レンジも、洗濯機もないこの世界。

慣れ親しんだはずの文化でさえまるつきり違うというのに、すっかりるろうに剣心、その明治に生きる一人の女だ。

それでも、まだ。

「……俺は」

割り切れない思いがある。

今呟いた俺って一人称にすら違和感を覚えるようになってきたけど、まだ。

この世界を生きる一人の人間として覚悟は決めた。

しかし、この世界に生きる一人の女としての覚悟は未だ。

かつて欲望を向けたこの胸は、いつの間にか向けられる対象になっていた。

想像できないんだ、左之助が言ったように、ガキを拵えるなんて。

そうだろう？ その拵えたガキってのは自分の腹の中に居るんだ、わけわかんねえ。

今の俺に母性なんてもんがあるのかすらわからねえんだ、自分の子供を愛せるかなんか、きつとマジモンの女以上にわからない。

怖い。

女であることが、怖い。

こんな時、女の人はどうするんだろう。

母親に相談するのだろうか、それとも女友達に？

この世界にいた、弥生の母親は既におらず、燕ちゃんや恵さんに相談する勇氣もない。

孤独だ。

心は男で身体は女、なんて話をかつての世界で話題として知っていたけど。

そんな人達もこんな悩みを覚えたんだろうか。

「…………ふう」

大きく息を吐く。

「どうやら生きる覚悟つてのは、そういう意味への覚悟も決めなくちやいけないらしい。」

「幸い、というべきだろう。」

「俺にはつけないければならない決着が一つある。」

「剣心と、戦う。」

「緋村抜刀齋を超えた、緋村剣心になら。」

「もしかしたら、弥生は納得するのかもしれないし、俺も、心の整理をつけられるだろう。」

「そうだ、あらゆる壁と定めた剣心。」

「なら決着をつけよう、そして着いた決着を持って……覚悟を決めよう。」

「未来を手にするために。」

その男、最終確認開始につき

「とうっ！」

「いいっ!? いきなりすぎんだろ!？」

はいはい、そんなわけで左之助のお帰りですね、おかえりなさいませー。

挨拶がてらちよつとした奇襲、羽突かつこ弱つてなもんで。

「で? 今度は何処でバカやってきたんです?」

「あー、まあ。一言でいやあ喧嘩を、だな」

「はい、亜細亜一のバカ決定戦優勝おめでどうございます」

「ああっ!？」

恵さんの台詞だけでも、まあどうやら俺のそこへ一番に顔だしてくれたみたいだし多少はね?

ていうか汗だくやべえな左之助。

「とりあえず汗拭いてください」

「おお、ありがとうよ」

燕ちゃんに渡すつもりだった手ぬぐいを渡して。

左之助が帰ってきたことはほちほち弥彦と剣心も目が覚めるだろう。

右手の負傷が無い左之助だ、ほんと遠慮なくというかやりたい放題やってきたんだらうなど、汗を拭う左之助を眺めながら。

曰く所の喧嘩。

単純と言うかなんと言うか、清々しいなんて言葉が似合う左之助の表情だけど、それは喧嘩だけで晴らした曇天つてわけでもないだろう。

過去にケツを叩かれた。

これだよやく、左之助も前を向けたんだ、定かじやない未来を心そのままに行くど。

「んだよ、悪かったつて。だからんな目で見んねえ」

「はい？ ああ、いえ。別に咎めてるわけじやありませんよ。まあ腑抜けて帰ってきたわけじやなさそうですね」

いかんいかん。ちよつと最近色々妬ましいなんて思うんだよな、自分を柵に上げまくつてるけど。

やつぱ先を見ることが出来たやつは羨ましい。

自分で自分の首を締めてるつてだけに過ぎないんだけど、やつぱり俺は剣心と戦うまでは見れなくて。

左之助が喧嘩をして鬱憤を晴らしたように、俺もまたそうしなくちゃいけない。

強迫観念に近いのかもしれないけれど、やっぱり。

「そうかよ。まあなんだ……わりいな」

「……」

あー……うん、ちよつと謝ってる方向変わったね？

なんだろ、一人で先に行つて悪いな、つて感じだろうか。まあちよつと妬ましいじゃないけど寂しい気持ちはあるな。

だけど。

「バカ言つてんじやねえですよ左之助。あなたには……いえ、あなたも私の先に行く人間であつて欲しいのですから」

「はっ！ だつたらさつきと追いついてこいや？」

つたく、付き合いが長くなるつても嬉しいやらなんやら気恥ずかしいもんだ。

明治での年の瀬と俺が生きていた現代で重みがどう違うのかわからないけれど、同年代つて存在はどうやら素敵なものらしい。

「ええ、そうさせてもらいますよ左之助。まあとりあえず——」

——おかえりなさい。

——おう。

手を上げてみれば随分といい音が響いたハイタッチ。

今日がいい日であることを教えてくれる音色だった。

さて、左之助と弥彦がメシタイムの間。

剣心が再び立ち上がった時の顔を見たいのは山々だったけれど、俺にもまだやることがあるわけで。

「準備は……つて、聞くまでもないですね」

「……ふん、当たり前だ」

やってきたのは警察署、斎藤のお部屋。

まあ随分と荒れている……つてわかるのがなんだか嬉しいけれど。

乱雑に書類が散らかされているわけでもないけれど、やっぱり抜刀齋との決別を意識しているんだろうな。

「何か手伝いをお願いしますけど、やること無さそうですね」

「まあな。後は明日を待つのみだ」

実のところ予想通りでもあったりする。

自分の気持ちを実務に悪影響として及ぼす様な人でもないし。

だからここに来たのは提案するため。

「じゃ、ちよつと汗でも流しませんか？ 左之助じゃありませんが、気晴らしにはなり

ますよ」

「貴様……やれやれ、俺をあゝの阿呆と一緒にするな」

なんて言いながらもちよつと笑つてるじやないですかやだなーもう。

「わかる……つてわけじゃないです、それほど安っぽいモノでもないでしょうし」

「……仕方ない。少しだけだ」

一瞬驚いた顔が見れたのはヨシとしておこう。立ち上がつてくれたしね。

幕末に生きた勇士、そんな人にしか抱えられなくて背負えない想い。

理解が及ぶなんて思えないし、間違つても言えない。

そして同調して慰めに来たわけでもなければ、齋藤自身それを求めているわけでもない。
い。

故にここへ来たのは示すため。

俺を本当の意味で闘いへ誘つてくれた人への恩返し、それに足る人間へなつたと。

稽古場へ向かう俺たちの間に会話は無い。

齋藤は何を思っているのだろうか。

頭のキレル人だ、言葉にできない何かを感じ取ってもらえたなんて思うのは甘えなのかもしれない。

本当に、ただの気晴らし、そのために相手をしてくれるつてだけなのかもしれない。

それでもいい。

これは俺が打てる最後の布石であり、最後の修行。超えられるなんて思っていない。

斎藤とガチで戦って勝てるなんて微塵も思わない。だけどそれでも認めて欲しい。

あなたの代わりに戦う……緋村剣心との何かへケリをつける人間に足る者だと。

「いつか貴様は言ったな。殺さなくても殺す道を選ぶと」

「はい、たしかに言いました」

向かい合う。

それだけでわかる斎藤という壁の高さ。

「かつてそれを甘いと断じた。しかし、貴様は見事にそれを貫いた」

「……」

感じる重圧、剣気。

そのどれもが俺の心を折ろうと押し掛かってくる。

「だが、外印。貴様は酔った、殺意に、狂気に。あの時四乃森蒼紫が居なければ確実に前はヤツを殺していただろう」

「……はい」

否定できない、むしろ肯定する。

あの時の高揚感にもにた何か、それは今でも覚えていて、心の何処かでもう一度と願っていることを。

「貴様は、まだまだ弱い。強くなつた、初めてやりあつてから今に至るまで、目を疑う程に強くなつた」

分かつてる。

小手先の力ばかりが身につについて、戦いを何処か舐めていて。

肝心の心がクソザコナメクジであることなんて。

「故に……来い、貴様の甘さを殺してやる」

「……お願ひしますっ!!」

断ち切ろう、甘さを。

精算の時はまだもう少し先だけど、ここで、彼と同じく幕末を生きた人の胸を借りよう。

そして。

「はああああああつ!!」

歩きだそう。

「おいおい弥生姉、そんなんで大丈夫か？」

「なあに言ってるんですか弥彦。心配は嬉しいですけど、こんなのヘーキヘーキですって」
身体の痛みより、むしろ舟の揺れの方がキツイっす。

あー大地が揺れるんじゃないやあ……おろ……つぷ。ゲロインじゃないです。

「いやまあ、弥生姉がそう言うなら大丈夫なんだろうけどさ。頼むぜ？」

「ええ、ありがとうございます。そして弥彦こそ」

大丈夫ですよありがとうございますと笑おうとした時。

「っ!？」

「何事だっ!？」

あかんこれ機雷あかんで。めっちゃ揺れるだめだめもう……。

「おろろろろ……」

「うわあっ!?! やっぱダメじゃねえか!?!」

返上失敗ですなはい。

あーもう、後はお願いますほんとまじで。

「……つたく、おい、小舟を出すぞ」

「ひゃ、ひゃあい……ご迷惑おかけしますう……」

言いながら肩を貸してくれたのは斎藤さんまじありがとう。

後ろに左之助が所在なさげに手を伸ばしているけどごめんフォロー出来ません、うっぷ。

「……あんたねえ」

「うう、操ちゃんにこんな姿、見られとうなかつたです」

呆れてジト目を送ってくれちやうけれど、勘弁してください。むしろ気にせず川蟬の嘴よろしく。

「——距離、六十一、五米^{メートル}。右に二十九、七分だ。水中を見ようとせず、波の変化を集中して見極めればいい、射て」

「——はい！ 貫殺飛苦無、川蟬の嘴!!」

え、まってちよつとまって。

それ、成功したら爆発するよね？ かつこいいシーンだけど爆発するよね？

「おうっぷ」

「おいやめろ、ここで吐いたら海に沈めるぞ」

無理無理無理無理。死ぬ、マジで死ぬ。

どうせなら殺せ、戦って死にたいだけの人生だった。

あー景色が揺れるんじゃあ……目も回るんじゃあ……。

「やはり捨てるか」

「が、がんばりまひゆかりや……おねがいしましゅ」

うおおお……頑張れ俺、超がんばれ。波に負けるなゲロに負けるな。

弥生は強い子可愛い子。

私、吐き気なんかには負けない！

「くっ、殺せ」

「何いつてんでえ……」

やっぱり船酔いには勝てなかったよ。

ああ、弥彦のジト目が痛いし、斎藤さんの視線が心臓狙ってるってはっきりわかります。

やっぱり大地って良いよね、揺れないもん。抱きしめたいな！

決して地面に突っ伏したい気持ちで溢れかえってるわけではない、断じて。

「縁!! 聞こえているだろう! 拙者だ!!」

あー剣心、わかるんですけどね、かっこいいんですけどね？

すっごく頭に響くから勘弁してくださいお願いします。ほんとごめんなさい。

まああれだ、縁はともかく、黒星は十分かそこいらでここまで来るはずだ。

それまでに何とか体調を整えよう。

「め、恵さん……」

「……はい、これ胃薬」

流石だぜ恵さん、愛してる。

水筒と一緒に受け取って、しばらく目を瞑る。

ふう……。

いい加減ネジ締めなおそう。

ようやくだ、ようやく原作中で知っている戦い、その最後。

俺が定めた最終確認。

相手は誰になるだろうか。

斎藤には事前に言っている。悪即斬に抵触する相手でもなし、殺したがりというわけでもなし、普通に任せてもらえた。

そのまま斎藤の代わりに戦うことになるならば青龍だろうか、確か見切りを極意とした相手で大刀を獲物にしていたっけか。

とは言え、あの四神は自身達で一番相性のいい相手を判別して戦うのだから、そうだと限られるわけでもないだろう。

ならば予想されるのは誰か、あえて言うのなら玄武だろうか。

拳相手はやっぱり拳だろうし、蒼紫相手にはやっぱり朱雀だろう。

弥彦のことを考えるとやっぱり俺に青龍をアテて欲しい部分があるが……ふむん。

ぶつちやけ俺から考えると玄武が相手になった場合、正直楽勝が過ぎる。

異能は考えて対応出来るようなもんじゃない。

弥生の異能はいわば反射だ。

本能の動きに近い、本能を思考し対処しろなんて無茶も過ぎるわけで。

そういつた意味から考えれば、青龍の見切りなんていうやっぱりこれも反射に近い特技じゃなければ対処出来ないだろう。

もつとも、それが初見、ぱつと見で把握できるのかつてところだけれど。

ただまあ青龍の相手が弥彦になった場合は少し困るな。

弥彦の勝ち揺るがないだろうけど、負うダメージは絶対にあるはずだ、その量は青龍を相手にした場合のほうが多くなるはず。

間合いでの勝負って弥彦はまだいまいち経験が無いはずだし、ちよつと俺もあの槍チツクな武器を弥彦がどうするのかつて部分がイメージできない。

「さて、どうなるか」

思わず呟く。

一緒に息を吐いてみれば胸のムカツキは随分とマシになった。

立ち上がってみればふらつきもしない。

砂を踏みしめてみれば、少し勝手は違うけれど戦闘行動に支障はない。

「——やはりな」

不意に斎藤がタバコをポイ捨てした。だめだぞ。

言葉で前を向いてみれば五つの影。

「——暴悪に荒れ狂えっ!!」

うわ、きんもー。

左之助も言ったけどニタリじゃねえよったく。

「四対四……おい、弥生、でえじようぶか?」

「誰に言ってるんですか、もちろんです」

「……さっきの姿からそうとは思えねえんだけどな」

はいはい忘れて下さいね。

さて。

なんだか戦いの前口上が述べられているけれど、やっぱり黒星って小物だな。

同じ組織のナンバーツーといえば、方治のことを思い出すけれど、こうも簡単に感じる器の違い。

「おこ」

「はいはい? どうしましたか斎藤さん」

「今回の仕事は思った以上につまらなさそうだ。後は任せる」

そう言って少し離れてタバコへ再び火をつけた斎藤さん。

「……ありがとうございます」

「ふん」

その姿に御礼を。

「——ならばチンピラとガキとメスガキと陰気な男だつ!!」

あつ、ふーん？

なんだっけ？ 抜刀齋と戦わせてくれなきやだやだやだーだっけ？

と言うか語彙すくねえなナンバツーかつこ笑いさんよ。

「年頃の娘に向かってメスガキとは……やれやれ、クソガキに言われると腹も立ちませ
んね」

「わかったもういいっ!! どうやら全員ここで死にたいようだナ！ 四神!!」

おーたっかい。

んで？ そのジャンプする意味は何？

高いたかい？

うっせ他界させつぞこんにやろう。

「——っ!!」

「……」

よっし、青龍キター!!
んじゃ、さっそく……。
「最終確認、開始、つと」

その男、最終試験につき

さて、青龍。

見切りを得意とした相手ではあるけれど……。

「ふっー！」

とりあえず一刀。

力を抜いて、相手よりもまずは足場の確認。

やはりと言うべきか、砂浜は多少勝手が違う。踏み込めば幾分沈みが深いし、力を伝えるのにラグがある。

なるほど、それでもこれなら十分だ。

「……その程度か？」

「……」

おつとー、それは挑発ですわかります。

まあそうですね、最大の武器をまずは見たいよね、そしてそれを見切りたいよね。気持ちはわかるよ。

知るって言うことは武器だ、俺自身もそれを武器としてきたし、している。

相手、最大の詰めろ……寄せ手、切り札。

そういったものを回避できるという札が出来てしまえば、大きな安全マージンだから。

だけどそれは決して勝敗を決めるモノではない。

「やれやれ、きかん坊ですね。せつかちな男は嫌われますよ?」

「ハッ!」

まあ良いさ。

左之助じやねえけど、お前ほどで足踏みしてやるほど退屈はしてないんだ。

存分に試させてもらうさ。

「——羽突」

若干不安ではあったけど、なるほど雑魚って言い切れてしまうほどではないらしい。

すっかり青龍の懐に生きる場所が見えたってことは、ちゃんと危険な場所があるってことだ。

そして当然。

「——見切った」

「へえ?」

いやいやいや、ダメでしょ早漏でしょ。

羽突の真髄はただの突進突きじゃねえんすよ？ それをただのそれとして見切るの
は早計に過ぎませんかね？

……まあ良いか。

「ヌシが只者ではないということとはわかる。身に纏う雰囲気が、そして気迫が、そうだと
告げている」

「そりやどうもありがとうございます」

なんだよ口がうまいなーもう。

とは言えまあ木刀ですものね、結構いい感じに左腕へ入ったけど……ダメージは如何
ほどか。

見る分には使用不可能ってほどじゃないか、急所に打ち込んだわけでもなし、しばらく
痛みが邪魔をする、まあそんなもんだらう。

大刀を振るうにあたって片手では厳しいだらうけど、簡単に犠牲にするんだ。それほ
ど左腕が使えなくとも影響はないんだらう。

何より見切るってのは相手の武器を封殺することでもある。見切った確信を得たん
だ、なら対処で勝負を決められるということ。

「故に勝利の代償としてこの負傷……十分に安い」

「なるほど？ まあ良いです、じゃあどう見切ったのか教えていただきましようか」

……羽突はあんまり乱用したくないんだけどな。まあ良いさ。

羽突の弱点、教えていただきましようね。

同じく、突っ込む。

そして。

「容易いこと!! その技の弱点! それは——」

「——それは?」

相手にとって右側、俺にとって狙いをつけるための左手側。

原作よろしく死角を利用した攻撃は……呆気なく空を切つて。

「うぐっ!?!」

「……阿呆。一見で見切れなかった試し、今作っちゃいましたね」

カウンターとなり俺の突きが再び青龍の右腕へ吸い込まれた。

まあ仕方ないよね、何処までも弥生の真髄は回避することなんだから。

でもまあ、羽突は一旦お休みだ。

恐らく。

「ぬううっ!」

「……あら。自尊心、傷つけちゃいました?」

ただの愉悦ヤロウは煽り耐性ゼロなんだろうから。

わけわからん逆上でこうなるってのも分かった。

そしてその攻撃も、羽踏へ切り替えた俺へは届かない。

「……つまらない人ですね。斎藤さんがやる気なくなるのもわかります」

「き、キサマツ！」

いやいや、更に自分を見失ってどうするよ。

こちらら最終確認の予定なんだ、それにすら至らないでどうするんだ。

遮二無二、とでも言うべきか。

ぶんぶんと獲物を振り回す青龍は滑稽と言つていい。

沸々と湧き上がる、あの時感じた高揚感。

それは俺の甘さだ。

手の中で藻掻く羽蟲をどう潰そうかと浮上する昏い感情。

それに決してもう酔わない。

「シツ!!」

「おっつ……」

カウンターを見切るなんてそりゃ無理だ。

いや、あくまでもこの状態の青龍なら、だけど。

「いい加減冷静になって下さい。良いですか？ 私の真髄は反撃と回避。それをちやあ

んで見切つて下さい」

「い、このっ！」

それが出来ない青龍じゃあないだろう。

わかつていれば、冷静であるならば見切られるはずだ。

それすら出来ないと言つてしまふほど低く見てるつもりは無いし、敬意を払つていないわけでもない。

「ほらほら、さつきまでの笑みはどうしたんですか？ たかがメスガキの一人ですよ？

ちやあんと対処して下さいよ」

だつて言うのにこの口は……もう煽らずにはいられませんことよ、おほほ。

仕方ない。

「よつと」

「っ！」

一旦間合いを大きく取る。

このままじゃ何も得るもの無く羽踏で終わつちまう。

「ふう、落ち着いて下さい。そして私の手札はご理解頂けたでしょう？ そしてあなたなら出来るはずだ、見つけられるはずです私の対処法を」

「――」

よしよし、目に理性が帰ってきたね、お帰りなさい。

じりじりと間合い外で思考戦。

まあ俺は別に何も考えていないのだけれど。

この最終確認、その意図はやっぱり俺の粗探し。

ぶつちやけ先の斎藤とやった一戦であらかた掴めてはいるんだ。

心を正しく燃やすことはもちろん、技量的なものだつて。

だからこれは答え合わせ。

青龍を使った答え合わせに過ぎない。

「——来い」

「ええ、良いでしょう」

青龍も答え、見つけたようで何より。

んじゃ、リクエストにお応えしまして最後の羽突、行きますか。

「」

……意識が切り替わる。

今までのなんちやつて遊びに近いもんじゃなく、正真正銘、異能へ身体を委ねる。

弥生じゃない俺がすべきことは唯一つ、唯一点。

突っ込む。

「見切ったっ!!」

そうだ、それで良い。

防げないカウンターなら、カウンターに合わせろ。

クリスクロス。

ボクシングじゃそんなふうに言われてるんだっけ？ カウンターに対するカウンター。

突きを浴びながらも、青龍の大刀が下段から俺へと迫る。

だから。

「――な」

ああそうだ。

その選択は正しい、それこそ俺の弱点だ。

さっきまでのな。

「くら、え……!!」

女性特有の身体の柔らかさ、靱やかな動き。

迫り来る刃に向かって、脱力する。

満点とまではいかないけれど、及第点ではある。

狙いのずれた刃が頬を少し引き裂いて、振り上げられた。

ここから。

地面へ四つ這いになったこの態勢、ここからだ。

「弥生流……柄の下段——」

——膝挫。

構えた柄は青龍の膝へとしっかりと吸い込まれ。

「ぐ、おおおおお!?!」

嫌な感触と共に青龍が砂へと沈んだ。

——ここにいるのは皆。拙者が心から信をおいている、仲間でござる。

ですつてよ奥さん！ 聞きました奥さん！

いやー勝てるとは踏んでましたけど結構際どかったね。

ぶつちやけ羽踏で完封だったんだだろうけど、やっぱり確認大事。

まあなんだ。

要するに俺はカウンターに合わせられると弱いんだ。

先の斎藤との稽古。

そりやもうそればかり狙われたよマジで容赦ねえ。

実際随分前に言われてたよな、平たくいえば非力だつて。

痛いとかわかっていれば我慢できる、なら相打ち以上を狙った攻撃に対してダメージ
レードで負ける公算が高いって。

しつかり急所を狙って行けばそれは解消されるけれど、羽踏じや無意識下にいるから
それも無理だし。

羽突じや突く場所を選ぶって事が出来ない。

つまるところ羽突と羽踏の連携。

そして最終的に俺へと戻り攻撃する。

この一連の流れを確認したかった。

そういう意味で青龍へと期待していたんだよ。

カウンターに対するカウンター、それに気づけるのはこいつ以外でも出来るだろう
が、実践できるのは四神の中でこいつしか居ない。

その目論見に見事応えてくれたんだ、感謝しないとな。

「ふう」

心のなかで感謝して、ちらつと斎藤へと目を向けてみれば一つ頷いてくれた。

まあ少しだけ怪我しちゃったのは誤算ではあるな、女の命は髪と顔。お嫁に行けな
くなっちゃう。

……いや、もう突つ込むまい。

ともあれ勝利だ。

他の人へと目を向けてみればしっかりと優勢、もう勝負もつくだろう段階。

蒼紫は朱雀を拳でボコボコにしてるし、左之助も同じくボコボコ。

弥彦はしっかりと玄武の棍の先を抑えて刃止めしてるし。

うん、勝利だね。

そして。

「——っ！」

雪代縁が現れる。

……別に感覚が鋭いわけでもない、だと言うのに伝わりすぎる程に伝わってくる憎悪を身に纏って。

そんな縁と一瞬目が合う。

なんだろう、僅かな表情の変化、だけどそれも一瞬で。

「立て、抜刀齋」

静かに、剣心へ向けてその憎悪を解き放つ。

前に立ちふさがる弥彦と左之助。

だけど一切の視線を向けられず、ただただ剣心へと。

「あ——もう！」

そんな重すぎる空気に、待ち望んでいた声が響いた。

「薫さんっ!!」

やったぜ!! 安心した!

あー……良かった、本当に良かった。

分かってたけれど、分かっていたはずだけど。

こうして無事な姿が見られて、ようやく安心できた。

「そこまでだ」

思わず駆け寄ろうとするけれど、もちろんそれを遮るのは縁。

「オイ黒メガネ——」

「待つて下さい左之助」

左之助に一言。

そして剣心へと一つ視線を向けて。

「……弥生殿?」

「剣心さん、薫さんのついでで良いので……迎えに来て下さいね」

静かに縁へ向けて歩く。

「お、オイ! 弥生!!」

「……」

向けられなかった縁の視線。

それが今この時はつきりと俺へと注がれた。

「あの時はどうも、縁さん」

「……なんだ、キサマから殺されたいのか」

何処か声の上擦っているのがわかる。

ああ、そうだろうな。

俺とお前の立ち位置は、非常に似ているんだろうから。

「ハイサヨウナラはしませんし、剣心との戦いを邪魔するつもりもありません。だから私だけ、私だけでも姉さんの隣にいさせて貰えませんか？」

「……」

じつと縁を見つめる。

瞳が黒メガネの後ろで揺れているのがわかった。

だから。

「良いだろう」

「ありがとうございます」

許された。

「弥生っ!!」

「はあ……無事で良かったです、姉さん」
はぐつと抱きしめ合う。

さつきの安心はこれで心に落ち着いた。

「もうっ！ 弥生はいつつもむちやばっかりするんだからっ！」

「あははー、姉さんにだけは言われたくないです」

まあどつちもどつちか、そうだねうん。

これで皆も少しは安心を深めてくれたというか……剣心と縁の戦いへと集中できる
だろう。

「じゃ、後は剣心さんを信じるだけですネ」

「……うん！」

そうして二人で戦いを見守る態勢に。

「弥生殿、ありがとう。そして薫殿」

——すぐに迎えに行く。そこで待っていてくれ。

……あー剣心やっぱかけえなあ！ くっそう！

じゃ、これも最後の戦い。

知っている戦いの最後。

しつかりと、最後の見物人を、満喫することにしよう。

その男、決意につき

戦いの……いや、俺の人生はいつから始まっていたんだろう。

男として生きていた頃からか、それとも弥生として第二の生を得てから？ それともオリジナルの弥生が生まれた時？

今となつては全てが俺そのもので、まるで命が二つあるかのよう。

いつから。

いつから今日の前で刃を交えている人を殺したいと思つていたのか、殺されたいと願つていたのか。

弥生が俺で、俺が弥生。

そうなつてしまつてからは、もう、意味のない疑問なんだろう。

これが知り得るるろうに剣心、その漫画の最終戦。

後で彼が言うように、戦いの人生は未だ完遂されていないけれど、それでも最後。

この戦いが終われば……ようやくと言えるのだろう、剣心が剣心として生きるように。

俺も、弥生でもかつての俺でもなく。

生まれ変わった俺として歩き始めるために。
不意に笑ってしまいそうになる。

今の状況、この世界へ産み落とされたこと。

事実は小説より奇なり、なんて言葉があるけれどそれはまさしくその通りだ。

誰が想像できる？ 女の身体になって、中身は男のまま。

今までの弥生はどう考えていたんだろうか、そんなことすら笑えてしまう。ああ、だから俺はやっぱり狂人なんだろう、外印が言った通り。

あんまりにも欲望へ忠実過ぎるんだ。かつて欲望の向け先だった、この胸、この身体。男らしくと言うべきか色々やることだつて出来たつていうのに。

チキンハートだと己を情けないなんて思うべきか、それともそれ以上に強くなるつて欲望が強かったと思うべきか。

それは後者だと信じたい。

だつてそうだろう？ 皆と同じように、目の前で繰り広げられる剣心と縁の戦いから目を離せない。

誰もが剣心の勝利を願っている、もちろん俺だつて。

ただ、その内訳は俺だけが異なるだろう。

「……なんて、ね」

集中しよう。

知識と照らし合わせて見る……いや、観察できる剣心の戦いはこれが最後だ。

強さそのものが剣心の域へ手をかけたなんて今も思えない。

だからこそ、対緋村剣心の対策を練る必要がある。

場面は高さの勝負。

縁の疾空刀勢しゅうくうとうせい、ありやどうやつても真似できない。

高さ、力、速さの中で、剣心が唯一縁に勝るのは速さのみ。

これもそうだ、剣心の読み、予測から外れた技術。

故に剣心は痛撃を受けることになった。

つまり俺の考え、緋村剣心は予想外に脆いっていうことが正鵠を射ている証左だろう。

自分へと置き換えてみれば情けないことに、どれも剣心には及ばない。

そんな今持ち得る俺の武器の中で、剣心の予測や読みを超えられるものと言えばやっぱり異能しかない。

故に緋村剣心が絶対に避けられないと確信した攻撃を避ける、それにカウンターを放つことこそが勝利への道。

「——っ!!」

そして今二度目の九頭龍閃が発動前に潰された。

ああ、実に素晴らしい着眼点。

発動されてしまえば、絶対に避けられないだろうその技の潰し方。

あれは、恐らく羽突で似たようなことが再現可能だろう。

「立て！ 人斬り抜刀齋!!」

縁が吠える。罪を祓うにはまだまだ足りないかと吠え立てる。

あらゆる負の感情から生まれる強さを以て、緋村剣心をねじ伏せようとしている。

きつと、縁が最高のパフォーマンスを発揮出来るのは、剣心相手だからこそなんだろう。

う。

もちろん素の力に疑問は浮かばない、だけどここまで強くはならない。

俺は……負の感情とは言わずとも、そこまで熱望しているのだろうか。

仇でもない、それどころか尊敬の念を捧げる人。

そうだと言うのに、ただただ未来を歩くために必要だからと思いきんで刃を向けよう

としている。

そんなことが、許されて良いのか？

「——死人に罰を下す術はない!! だから愛するものが代わりに罰を執行する!!」

ああ、そうか。そうなんだ。

弥生はもう、罰を下されることは無いんだ。

こうして無限とも思えるループの傍観者となることこそが罰なのかもしれないけれど。

それをもう十分だと赦すことができる存在がない。

緋村剣心に殺されたいと希う心。

それは果たして罪なのか？ 誰かを好きになることが罪なのか？

そりゃ随分とひん曲がった願いだと思っし、危うすぎる恋心だと思っし。

でも、だからこそこの罪の中に未だ生きている。

つまり、弥生は。

「分かったよ、弥生。だったら俺が精一杯あんたを愛してやる」

久しぶりに感じる、自分以外の鼓動。

分かっている、何いってんだって話だ。

今もなお願う気持ちは確かに存在していて、あんたの心を燃やし続けている。

だったら簡単だ。

あんたは失恋をするべきだ。

「……………」

あつたまいてえ、なあ……………。

分かつただろう？ もう十分だろう？

緋村剣心は、どうあがいても神谷薫と結ばれる。

だつたら薫さんを殺すか？ 今までの弥生にそういうヤツがいたとして、それである
たは満足できたか？

出来ねえだろう？ あんたがどれだけあの場所を、薫さんを好きかなんて十分知つて
いる。

諦めなければならぬんだよ、弥生。

そして次の恋を見つけないとならない。

限界集落育ちの俺だ、まったく恋がどんなもんかなんて説明出来るわけもない。

近所の一回り年上の元おねえちゃんに憧れた話なんて聞きたくもねえだろう？

だけどもあんたは俺だ。

俺と同じように、未来へ向かう一步を踏み出せないでいる者だ。

だから俺が示してやる。

あんたの恋を終わらせてやる。

「……………」

どくどくと流れる血潮が妙にハッキリわかる。

自分の心臓だつてのに、煩いとすら思える音を奏でているのにまるで他人事。

もう一度、前をしつかり見る。

そうすれば。

一人でも、多くの笑顔と出逢いたかった――

「剣と心を賭してこの闘いの人生を完遂する！ それが拙者が見出した答えでござる
!!」

ほら弥生、あの人は答えを見出したぜ？

だつたらその通りに生きてもらおうぜ、助けてもらおう。

全力で、あの人を頼つちまおうぜ。それであんたが笑えるならさ。

そのため、俺だつて全力でやる。

ああそうだ、十分過ぎるほどの理由だよ弥生。

いい加減に一步、踏み出そうぜ。

狂経脈下の縁へ、龍鳴閃が叩き込まれる。

やつぱり、剣心はすげえな、なんて陳腐なことを思いながら。

それ以上か同等か、縁の執念に感服する。

正直な所、まったくもって縁は嫌いではない。

そりやなんだ、赤べこの件はもちろん、罪人とした相手を裁くことに必要なら何でも

していいなんて思想へ同調しているわけではないけれど。

大事な人をずつと大事に想えるってのはすげえことだと思う。

その部分を考えれば、ちよつとベクトルは違うけれど、弥生もそんな感じなんだろうなとも。

「俺が唯一守りたかつたものは既に貴様に……貴様に奪い取られているっ!!」

——だから……殺すっ!!

……哀れ、とも思わないよ縁。

そしてどちらが正しいから勝ったとか、間違っていたから負けたとかそんな次元でも考えられない。

そもそも私闘だ、それで決着がつくわけでもない。

「弥生」

「……はい?」

そんな時、決着がもうすぐ着くだろう瀬戸際で。

「私、どんなになつても剣心を支えるよ」

「……ええ、お願いします」

色々な意味が含まれたその言葉。

多分、俺が剣心との真剣勝負を決めているって部分も分かっているんだろうな、俺がそ

うだと理解するよりずっと前から。

ありがとう、薫さんはやっぱり最高のお姉ちゃんだよ。

天翔龍閃と虎伏絶刀勢が交差する。

そしてやっぱり。

「剣心の、勝ちだっ!!」

知っている、そして望んだ光景が映っていた。

さて、安堵している場合でもない。

黒星の銃ぶっ放し案件は……いや、動けねえな。

むしろその後、飛び出す薫さんを何とか守らねえと。

「ダメッ!!」

って早いよ薫さん!! ええいままよっ!! 縁! 信じてるからな!

「姉さんっ!!」

「きやつ!」

薫さんを庇って地面へ倒れた音と、縁が黒星を殴った音は同時。

そしてトドメをささそうとした縁へ剣心が割り込んだことを確認して。

「……姉さん?」

「……その目はやめて欲しいかなー、なんて」

……やれやれ、まあだからこそ、か。

「ちくしょう……ちくしょう……!!」

さ、後は薫さん、剣心とよろしく。

んで、だ。

「縁……さん」

砂へ手を突く縁。

なんだろうな、この感情は。言葉にできない。

「あなたは、私に、似ている」

「」

そう思っているのに、口から勝手に言葉が出る。

「悔しい気持ちも理解できません。既に失ってしまった幻影へしがみつかなければ生きて

いられなかったことも」

縁は答えない。

ただただ視線は砂浜に。

「私はもう、自分で答えを出すことは出来ませんが。それでも一つの光明を得ました

……願わくば、あなたにも光差すことを……祈っています」

……。

そっか、ああ、わかったよ弥生。
じゃあ、後は。

「……やる、か」

終わらせよう、この物語を。
そして紡ごう、俺の世界を。

その男、決戦につき

いつもの日常ってやつが終わって、少しだけ変化した日常の中。

皆の負傷が順調に回復して、剣心と姉さんは京都へ雪代巴の墓参りに行って。

留守を預かった俺は思う存分、思うがままに道場を使って稽古に励む。

そんな姿は弥彦にとつて良い刺激になったらしく、まだまだこれからだと兜の緒を締め、める事が出来たらしい。

なんだかんだ一番軽傷だった俺だから。

誰よりも早く稽古する時間を持てた、そしてだからこそ周りの視線も集められたのだろう。

操ちゃんや左之介、驚くことに蒼紫でさえも稽古に付き合ってくれた。

その誰もが何かを察してくれたように。いや、再び流れ出した時間の中で、俺だけが停滞していると気づいたんだろう。

だけど悲しいかな、稽古をいくら積み重ねた所で今以上の技量が身につくことってのは無いんだと実感してしまう。

もちろん経験にはなるんだろう、蒼紫が付き合ってくれたことなんてあり得ないと

言っていていくらいのものだし、何よりの稽古だ。

それでも、薄々わかっていたのかもかもしれないけれど、俺の力つていうのは流動的で、相手によつて左右される部分が大きすぎる。

だからやっぱりこうした稽古は自分の中にある緊張感を一定に保つというか、モチベーションを維持する意味合いが大きかったんだろう。

そんな日々の中左之助に言われた言葉がある。

——がんばんな。

一言そう言われた。

見透かされていると思うべきか、字面通り応援をもらったと思うべきか。

俺が剣心と闘うと決心したつてのを感じたんだらうあいつは。

なんともこそばゆいやり取りのはずだったのに、そんな気持ちは欠片も浮かばず静かに頷くしか出来なかった。

そう言われて気づいたつて言えば鈍感過ぎるんだらうけど、弥彦もなんだかんだで気を使つてくれていたらしい、俺が稽古している間、弥彦は一度も俺に声をかけていなかった。

——弥生姉えは男じゃねえけど、それでも男と男の真剣勝負を邪魔するほど野暮じゃねえ。

なんて言つてたっけか。

あれだけ俺は男なんだと心で言い直していたのにも関わらず、初めて――

——こんな可愛い女の子に向かつて男とは何いつてんですか。

とか言つてみたりして、そしてそれに違和感を覚えなくて。

ああ、しつかりと心の準備が出来ているんだなと妙な所で変な実感もした。

弥生が失恋するための準備なら、俺は女としてこの世界を生きていくための準備なのだろう。

もうどこを探したつて、弥生つて人間も、俺つて人間もないのだから。

そうしてゆつくりと。

時間が然程あつたわけじゃないけど着実に。

闘いへの意思を固めて。

剣心と姉さんが帰ってきて。

恵さんの会津帰郷予定の話聞いて今、斎藤一がいる部屋の前で大きく深呼吸をした。

「失礼します」

「……貴様か」

一つ視線を向けてきた斎藤の顔色は変わらない。

まあそりやそうだろう、ついさつき剣心からの果たし状が届いた所なのだろうから。

一緒にいるはずの張は何処へやら、幸いだろう今はいない。

「読んでみる」

「……」

机に置かれていた手紙を指してそう言われる。

けれど首を横に振って。

「心は決まりましたか？」

「……つち。ヤツが漏らしたのか、それともお前の察しが良すぎるのか……後者だろう、そういうところだぞ貴様」

言いながら立ち上がった斎藤は窓から外を眺める。

もう許されるだろうと、静かに隣へ歩を進めてみれば。

「弥生。お前は俺がどうすると思う？」

「……さて、私は斎藤さんではありませんので」

顔を見ないでも、少しだけ笑った雰囲気を感じる。

正直に言ってしまう。

俺はこれを利用するつもりでした。

決闘を受けなかった斎藤。

今回もそうするだろうと、そういう気持ちに流れるだろう。だから京都での貸しつて理由を与えて、その権利を譲ってもらおう腹積もりがあった。

だけど実際こうして斎藤の顔を見ると、そんなことは言えなくなった。

「……」

何を見ているのだろうか、その目に映るのは果たして俺と同じ光景だろうか。

違うように思える。

きつと今斎藤は胸の内を整理して精算しているんだろう、かつてより現在まで望んでいたはずの決着。

相手だったはずの剣心は、もう決して抜刀斎とは言えない存在で。

「思えば、俺は認めたくなかっただけなのかもしれないな」

「緋村剣心が……あなたにとって決着をつける相手ではないということですか」

「こくりと頷かれる。」

「抜刀斎と新選組は共有していた。もつと大きな括りで言えば、あの幕末で戦いに生きた人間すべて。立場から交わることは無くとも、己にとつての悪を斬るために生きていた」

それはどんな時代だったのだろうか。

漫画や教育で断片的に知っている……いや、この人を含めた幕末を生きた人の前では

知っているなんて言葉も烏滸がましい。

「掲げる正義は違った。新選組の示す誠でさえ、僅かな人間としか共有出来なかった。しかし、共通の敵を敵と定めた」

新選組も、色々な苦難を隊内で乗り越えたはずだ。

鵜堂刃衛のことだってそうだろうし、芹沢鴨という人だっていたはずだ。

新選組という名がつくまでに、想像もできない程の何かを経験しているんだ。

「故に……俺は抜刀齋と決着をつけたのだから」

新撰組三番隊長、斎藤一としての生き様を遂げるために。明治に生きる藤田五郎として生きる覚悟を決めるために。

……いや、そう考えることこそが侮辱となってしまうのかもしれない。

だけど俺には……俺の目の前にいるこの人は、そう思っていると思える。

「好きにしろ、弥生」

「っ」

前触れ無く、視線を捉えられた。

そしてその目は静かで、穏やかで。とてもとても深かった。

「明治に生きる緋村剣心と戦う事ができるのは斎藤一ではなく、同じ明治に生きるものがするべきだ……そしてそれがお前なら、何も言うことは無い」

ああ、ああ。

言葉がない、思い浮かばない。

今まさに、俺の目の前で、緋村抜刀齋と齋藤一の決着が着いた。

「齋藤さん」

「なんだ」

もしかしたら少しだけ狂った結末、決着なのかもしれない。

それでも。

「……行つてきます！　そして、ご健勝をずっと祈っています!!」

齋藤に背を向けて。

ドアで入れ違った張を通り抜けて。

——阿呆が。

最高の応援を背に受けた。

「弥生、殿？」

「こんばんは、剣心さん」

冷えてきた風が剣心との間に流れる。

心から生まれた熱を視線に乗せて剣心を見てみれば、驚き、戸惑いを顔に貼り付けて

いる。

だが、それも一瞬で。

「そうか、拙者はどうやら愛想を尽かされたらしい」

そういつて少しだけ寂しそうに笑う剣心。

だけど、斎藤の代わりに闘うなんてわけじゃないけれど。

「そうではありませんよ」

「……」

言っておかなければならない。決してそんな意味じゃないと言うことは。

「決着をつける相手はあなたじゃない。そして、もうその決着はすでに着いている。そ

れだけのことです」

「……そう、でござるか」

ぐっと力を込めて、何かを想うように目を瞑る剣心。

そのまま一間、二間。

心を冷まささないままに、剣心を待つ。

「……それで。そのことを拙者へと伝えに来てくれただけではない……のでござるか」

「はい」

そしてようやく剣心が俺を捉えた。

「その前に教えてもらいたい。弥生殿が拙者と闘う理由はなんでござる？」
当然の疑問ではない。

むしろここで何故闘わなければならないのかとか、戦いたくないなんて言われていたら、それこそ自分勝手に失望していた所。

緋村剣心は、自然と、俺が戦いを望んでいると、そしてそれに応えると覚悟した上でその疑問を問うたんだ。

「巫丞弥生を終わらせるため」

「巫丞弥生を、終わらせる……？」

頷く。

「剣心さん。あなたの目の前にいる私は、弥生ではなく、また俺でもない。そんな中途半端なこの世界の不純物なんです。確たる一になるためには巫丞弥生を終わらせるしかない、新たな一歩を踏み出すためにはどうしてもあなたが必要なんです」

剣心の瞳に理解の色は含まれない。

だけどそれでいい、理解されることを望んでいないのだから。

「私怨はこの私に存在しない。されども巫丞弥生はあまりにも貴方を殺したがって
る」

「……」

「人誅……ですよ、剣心さん。先の件もそうだ、陳腐なものから、真つ当なものまですべてを人誅と呼ぶのなら、これもまた人誅」

そうさ、これは人誅と書いて八つ当たりと読む児戯にも等しい動機。

もつともらしいことを、言葉を並べたつてその事実からはどうやっても逃れられない。

「拙者との闘いが……弥生殿にとって、真に必要なのでござるな？」

「はい」

断言する。

今のままじゃ前にも後ろにも進めない。

そしてこの返事で剣心が。

「……弥生殿」

こうして構えてくれたことこそが、彼に対して積み重ねられた信頼の証左なのだろう。

「……ありがとうございます」

その信頼を裏切らない。

ただ望む事があるならば。

「どうか、全力で」

「元よりそのつもりでござる。弥生殿相手に、手など抜けぬ」

さあ、やろう。

恋い焦がれた一戦を、希った熱戦を。

始めよう。

その男、生きる意味につき

目の前に立つ人。

それは紛れもなく最強の剣士。

かつて幕末で人斬り抜刀齋と志士名がついたほどに人を斬り殺し、京都の町へ血の雨を降らせた人。

こうして闘うと互いの心が決まって、相對して初めて分かる。

——強い。

何をわかりきったことをと何処か冷静な自分が言うけれど。

このプレッシャー、この剣気。

立っているだけで精一杯になっていたかもしれない。

今までの、俺ならば。

「！」

「！」

合図なんて無かった。それでも同時に踏み込んだ。

逆刃刀は鞘に納めたまま——抜刀術が、来る——!!

「はああああああ!!」

「おおおおおお!!」

疾い、疾すぎる。

神速だなんだと評された身のこなし、そして抜刀の速度。

その一閃を。

「っ!」

躲す。

まだ羽踏の領域へは入っていない、それでも躲すことが出来る。

そしてもちろんここで終わりじゃねえよな!

「双龍閃——!!」

「読んでましたっ!!」

隙を生じぬ二段構えだなんてわかってる!　ここで吞まれてなるもんかつ!!

「龍巻閃——もどきっ!!」

鞘の一撃に対してカウンターで合わせる。

まだまだ、この程度じゃ剣心の筋書きを超えられないってわかってるさ!

「上っ!!」

手応えのない龍巻閃へ意識を飛ばしている場合じゃない、上へと飛ばれた……つてこ

とは。

「龍槌——っ!？」

「くっ!!」

速さでも高さでも……力だつて負ける。

それでも闘える、闘ってみせる。

行くぜ、弥生……!

羽踏——!

「くっ——まだでござるっ!」

「龍翔閃へは繋げさせませんともっ!!」

身体のパネ。

龍槌閃から龍翔閃への繋げ様。

その切り替わる一瞬を狙って、軸足へと木刀を奔らせる。

驚いたようにその場から飛び退く剣心。

これでお互い間合いの外。

「……流石、という他ないでござるな」

「それは……ええ、素直に受け取ることになりました。そして全力を出して頂けているように見えます」

序幕から随分と飛ばしてくれたもんだ、ありがてえ……っっていうのも変か。

正直まともな技のやり合いからはじまるとは思ってたなかつた。

小手調べとでも言わんばかりにまずはチャンバラだろうって思ってたんだけどな。

「お互い手札の探り合いをする間柄でもないでござろう。拙者が弥生殿の手札のある程度知っているように、弥生殿も拙者を知っている」

「その通り、ですね」

お互いの技を評しあつたことはない。それでも互いの力へ理解はある程度及んでい
るはずで。

剣心は超一流の剣客、その知識や経験から。

俺は原作知識と実際に見た光景から。

なるほど、言っておいてなんだがその通りだ。

「故に……互いの弱点と思われるモノへも」

「……ああ」

少し間があつてから頷かれる。

そーいやそーうか。

知識が武器にならない闘いは……これが初めてか。

やだねえ……最初で最後と決めている剣心の闘いが、やっぱり一番困難じゃあない

か。

ということとは。

「来ますか、九頭龍閃」

逆刃刀の剣先が向けられる。

俺の弱点に相当する、広範囲同時攻撃。

こればかりは羽踏では躲せないだろう、剣の速さに追いつけない波状攻撃ってモンでもない。

九つの斬撃を相殺しようにも力で競り負ける。

これは一番容易く想像できる、詰めるの技。

だけど。

「……そうか」

「ご自分で仰ったでしょう？ 手札を知っている、と」

剣心戦、一つ目のターニングポイント。

ある条件……というか、前置きがなければ……、アレさえ来なければ……。

「見せてもらおうでござるっ!!」

剣心の足元から音が鳴った。

来る。

突進からくる、九つの斬撃。

賭けには勝ったみたいだ。

「——羽突!!」

「九頭龍——つぐ!!?」

……足の筋肉が悲鳴あげてる、びきって言った。

流石すぎるよ剣心、疾すぎる。

でもまあ。

「縁さんは実に素晴らしい解法を見せてくれました。絶対に避けられない攻撃なら、攻撃となる前に潰すと」

羽突は剣心の右肩へ。

技の発生前にしつかり入れ込めたはずだけど……咄嗟に身体をずらされて甘いとまでは言わないけれど、これで自由に剣を振るえなくなる程のダメージは与えられなかったみたいだ。

これじゃあむしろ収支はマイナスか？

九頭龍閃に一度追いついただけで、足が若干笑ってる。

今のはまぐれだと決めつけられて、二発目を持ってこられたら……ちよつと危うい

な。

無駄なあがきかも知れないけれど、余裕があるように、それは通用しないんだと示せるように。

必死で涼しい顔をして、右肩を押さええている剣心へと視線を投げる。

「強い、でござるな」

「いいえ、剣心さん。それは過分な評価です。むしろ今のはあなたの読み抜け、私の手札への理解が甘かっただけのこと」

ターニングポイントを潜り抜けて。

最悪のパターンは土龍閃からの九頭龍閃。

土龍閃が先に入っていれば、こうも目論見通り九頭龍閃は潰せていなかっただろう。

八ツ目戦然り、待ちから放つ羽突へ切り替えて、分の悪い賭けへと身を投じなければならなかった。

剣心の読みが甘かったと言ってはみたけれど、そういう発想を持ちえなかったのか、それとも九頭龍閃だけで十分だと思われたのか。

それは定かじやないけれど、とりあえず有利って言葉は少しだけ俺に寄りかかってくれたらしい。

ここからだ。

「はああああつ!!」

「つつう!!」

攻勢へ出る。

自分から仕掛けるとなると、随分と拙い俺だけどそれでいい。

右肩を庇うようにしながらも木刀をしっかりと躲す剣心、その右手は俺が振り終わる時や、放つ寸前に反応している。

そうだ、俺の異能抜きでの攻勢つてのは拙い。

つまり剣心ほどの実力者から見れば隙だらけということ。

「くっー!」

「……」

剣心が大きく退いて再び距離が開く。

「見抜いている、つてことですか」

「ああ、厄介にも程がある」

二つ目のターニングポイントは分け、つてところだろう。

ここで剣心が俺の隙を咎めて来るようであれば、羽踏の餌食つて話だったけど……流石にそこまで簡単にはいかないらしい。

つまり、俺に仕掛けられてそれを返すつて構図は全てアウト。

剣心はどうやっても自分から仕掛けないと俺を倒すことは出来ない。

とはいえこの状態を拒否されるってことは、それを理解しているということ。

……読み取れ、見抜け。

だったら剣心は何を考える？ 次のターニングポイントは何になる？

九頭龍閃を発動前に止めた。

って言うことは別の見方をすれば、それは発動させてはならないと警戒しているってことだ。

それは剣心も考えただろう、もう一度九頭龍閃を放つという選択肢もあるはず。

逆刃刀を構え直した剣心の瞳から読み取れるものはない。

変わらぬ剣気を俺に向けて、静かに放っている。

さあ、何で来る……！

「っ!!」

「(こつちでい)ぎる!!」

速——！ 後ろ——!?

「おおおおおお!! 龍巢閃っ!!」

龍巢閃かつ!! 流石のチョイスッ!!

行くぜ、弥生!! 三つ目のターニングポイントだ!!

「羽踏っ!!」

龍巢閃、その二撃目で何とか羽踏を起動できた。

代償は一房の髪、自慢のキューティクルポニーがハラリと落ちる。

そして訪れる弥生の世界。

ここまで龍巢閃の剣閃が疾いと、もう目で追うのは無理。

余計な情報をシャットアウトするため、目を瞑る。

感じるのは身体の近くを振り抜ける逆刃刀。

九頭龍閃とは違い、一刀一刀を感じる事が出来た。

しかし合間に木刀を滑り込ませられるほどの間は無い。

避ける、避ける、避ける……。

避ける度に強く生を実感した。

今、俺は、闘っている、すなわち生きている。

避けることが出来る、一歩ずつ前に進むことが出来ている。

ああ、確かに俺は勝利を求めているわけじゃない。

それは俺の地雷も良いところ、剣心だつて輝いているヤツその一人だから。

いつだってその輝きは眩しいほどのものであつて欲しい。

俺って輝きを消し去つてしまえるほどに大きく、強く。

だからこそ。

「そこおっ!!」

「なっ!?! くっ!」

一つを選んだ。

放ったカウンターを簡単に回避されて。

「後ろがお好きなようでっ!」

「っ!?!」

再び回り込まれた背面へと今度は先んじて斬撃を置くように放つ。

それを本当に無理やりだろう避けた剣心はバランスを崩——。

「かく——っ!?!」

崩したところを狙おうとすれば、そこはダメだと弥生の警鐘。

ここに来て初めて自分から距離を取った。

龍巻閃。

今踏み込んでいたら絶対に——

「おおおおおっ!!」

「しまっ——」

「ここであるか九頭龍閃!!」

くつそやべえっ！ 羽突で潰せないっ！！

「——やってやらあああ！！」

わかつた！ 腹くくってやるよ！ 全部……避けてやる！！

極まった集中の中、全てがスローモーションに感じる世界で。

壺、唐竹——避ける。

貳、袈裟斬り——頬を少し裂かれる。

参、右薙——木刀で逸らす。

肆、右切り上げ——着物を裂かれる。

伍、逆風——後ろに飛び退く。

陸、左切り上げ——太ももに結構深く入る。

漆、左薙——何とか木刀での防御が間に合う。

捌、逆袈裟——敢えて受ける。

そして。

「あああああああっ！！」

「おおおおおおっ！！」

玖、突き——羽突を合わせる。

訪れる交叉。

身体に奔る痛みで膝をついてしまいそうだが、

でも、まだだ。

三つ目のターニングポイントは不利を運んできた。

それでも何とか痛み分け、最後の突きにだけではあるけど、完璧にカウンターを入れた。

「ぐっ……」

「はあっ……はあっ……」

振り向いてさらなる攻撃を。

しようとした所でお互い同時に膝をついた。

俺は右の太ももに、剣心は右肩に。

九頭龍閃の突きが柄で良かった、最後うまく合わせられたのは羽突が間に合ったの

は、それのおかげだ。

互いに大きな痛手。

それでも剣心の目から闘志は一向に衰えず……いや俺もか。

闘いにのめり込みきつた表情をお互いに浮かべているんだろう。

そんな実感をした瞬間。

「やはり、お主にも……弥生殿にもまた、これしかござらんか」

そんな言葉が聞こえた。

間もなく終着駅。

立ち上がったのは同時、顔を見合わせて表情を緩めたのも同時。

「天翔龍閃ですか」

「ああ、もはやそれしかいじやらん」

そして笑ったのも同時。

何故笑みが浮かんだのか、それはわからない。

ただ、俺はやっぱりこの時を待っていたんだろう。

剣心に飛天御剣流の奥義を使ってもらう。

これしかないと思ってもらえた、そう思われるほどに強くなった。

あの時見た背中にもう見えなくて、隣で目の前にいる人と肩を並べられたなんて錯覚が強く感じられる。

「剣心さん」

「なんでいじやらん？」

多分、彼をこう呼ぶのはこれで最後。

だってそうだろう？

「どうか、姉さんを幸せにしてあげて下さい」

「ああ」

「どうか、泣かせるようなことはしないで下さい」

「ああ」

「そしてどうか、どうか幸せになって下さい」

「……ああ」

これからは、剣心のことを義理の兄と呼ぶことになるのだから。

弥生。

もう良いだろう？

勝つても負けても、これで最後にしようぜ。

あなたの恋心は、命尽きるまで背負ってやる。

俺があなたの分までこの明治を幸せに生きてやる。

だから。

「！」

「！」

踏み込みもまた、同時。

何の合図もやっぱり無かったのに、示し合わせたかのように。

——左足。

天翔龍閃。

身体を大きく沈ませて避ける。

ああ、任せてくれ弥生。

ちやあんとこの先だつて考えてるんだ。

右足、すんげー痛いけどさ、大丈夫だ。

後頭部を逆刃刀が通り過ぎていった。

訪れる空間の修復。

剣心へと吸い込まれそうになる身体。

その力へ逆らわない。

「弥生流——奥義っ!!」

そうさ、この一歩さ。

大きく前を踏みしめて、未来へ進むことを決意した。

見せてやるよ。

これが、これこそが。

「俺の——TSだっ!!」
生きる意味

目の前を通り過ぎていった枯れ葉が、ぱつんと弾けた。

TSしたけど抜刀齋には勝てなかったよ……

「やよいせんせい！ さよーならー！」

「はい、さようなら。また明日お待ちしていますね、気をつけて」

どの時代、どの世界であつても子供の愛らしさというものは変わりがないらしい。元氣に手をふる子どもたちを見送つて、見えなくなつた頃に大きく伸びをする。

こうして平和を満喫できるのも、何処かの誰かが日夜一生懸命頑張つてくれているから。

そんな頑張っている人の中に、私って存在があれば良いのだけれど。

「なんて、ね」

振り返ればそこには弥生流活心塾。

流石に姉さんに被れ過ぎただろうかと不安にもなるけれど、この前来てくれた時に喜んでくれたし万事オツケーだと信じたい。

人に物を教えるなんて柄じゃないのは重々承知で、何よりそんな頭が良いわけでもない。

しかしそこは活心塾。

高等な学問なんかじゃなくて、知っていれば生活が少しだけ豊かになるかもしれないって範囲のお勉強。

なんちやつてに成り下がっただろう剣術遊びも加えて、今を生きる子どもたちが少しでもより良い未来を掴めるようにと願いをかけて。

この話を姉さんにしてみれば物凄く良いじゃないと太鼓判を押ししてくれたし、義兄にいさんもそうだ。

流石に元手があるわけでもなかったの、二人の子供が産まれるまでにたくさん働いて思っていたんだけれど。

——弥生さんの手助けなんていくらでもっ！

なあんで新しく塚山家の当主となった由太郎が出資してくれたおかげでトントン拍子。

まあ下心が透けて見えたのはご愛嬌で、自分より弱い男の人と結婚する気は無いと言ってみれば落ち込むこと無く、むしろ燃えてくれたのでヨシとしよう。

そんな由太郎も今では立派な神谷活心流師範代、私へと熱を上げ続けてくれるおかげで変に他の女の子へちよっかいをかける事なく、日夜剣の腕を弥彦と喧嘩しながらも高めあっているらしい。

もつとも、そんな弥彦や由太郎にもう勝てる気は一切無いのだけれど。

「……ふん」

思い出すのは剣心との闘い。

あの後から、今となっては僅かだと思える時間を共にした異能。

それはすっかり消え去ってしまっていた。

もう自動的に身体が危険を避けることはないし、羽踏や羽突なんでもつてのほか。

今の私はまさに、女の割に強い。程度の力しか持ち合わせていない。

その辺のゴロツキ程度に遅れを取るつもりは欠片もないけれど、まあ剣を生業にして
いる人には白旗を揚げるしかないだろう。

だけどこれでいい、これが良い。

剣心たちとそれなりに関わりのある一般人。

今のポジジョンこそがきつと、自分にとつて ベストの立ち位置であることを実感し
たのだから。

「やよいちゃーん！ 終わったろ？ 昼の牛定頼むわっ！」

「はいはい、毎度ご贔負に。ですけどごめんなさい、今日は臨時休業となっております
塾の看板を裏返せばそこには桃べこの文字。

そして入り口の戸には臨時休業の張り紙。

「……ダメだ、ちよつと死んでくる」

「はいはい。来世でも(鼻)鼻にー」

「そこは止めてよっ!？」

常連さんとのやり取りももう随分と慣れたもんだ。

牛鍋屋、桃べこ。

東京と京都の間、赤と白の間だから桃なんて安直な考えで付けた店名。

これもまたえらく妙さんには気に入ってもらえたもので。

昼までは塾、昼からは牛鍋屋。

従業員僅か私だけの、塾にしては少し広くて、食事処にしては少し狭い。

そんな私の小さな城。

「うー……ちよつとだけ! さきつぽだけ!」

「……はあ、やれやれ。仕方ないですね、お弁当にして包んであげますから少し待つて

下さい」

「やったぜ!」

「……ちゃんと皆で分けて下さいね? 沢山作つてあげますから」

ちらりと後ろに見えた人集りへ視線を一つ投げて見ればむさ苦しい照れ笑い。

まったく、過去のこととはわからないけれどすんげー手のひら返しもあったもんだと暖

簾を潜る。

道は東海道、場所は沼津の宿場町。

新月村から遠くなく、未だそれなりに人通りがある、賑やかとも閑散とも言えない町。常連さんの多くは新月村の住人達。

だけどたまに軍閥係の人やら警察関係の人やらが訪れるというなんかよくわからないスポットとして色々な噂があるらしい。

まあ私としては日々生きていくに困らない程度儲かればいいと思っっているからなんでも構わないのだ。

だから軍だ警察だを鼻にかけるバカはしつかり懲らしめる。

そして今もなお繋がりのある人達にそんなバカはより絞られる、ざまあ見晒せ。

……ただね？ その謝罪をつて名目のもと大勢で押しかけられたら一緒だからね？

少しの頭痛に顔をしかめながら、慣れた手付きで弁当を用意して。

「お待たせしました」

「ひやつほ……これがないと生きていけねえぜえ!!」

はいはい往来でバカ騒ぎしないで下さいねーぶつ飛ばしますよー。

まったく、ほんとに活気を取り戻してくれちゃって。

志々雄一派に占領されていた時から考えられないね。

……ま、最初を思えばやっぱりこの光景は良いものなのでやらないけれど。

わだかまりは……ここに店を構えてから何年だろう、それでもまだある。けれど、多くの人と店を通して、塾を通して打ち解けたとは思う。

——今度こそ、誰一人犠牲にすることなく幸せに生きて欲しい。

あまり掴めなかつた弥生の人生だけれど、それでも想像を交えながらそう訴えて。ゆつくりと、少しずつ。

そしてそれがこの結果だよ。最初のシリアスは何処に行つたのやら。

「つて、そう言えば弥生ちゃん。今日の臨時休業はどうしてだい？」

「ああ、身内が来るんですよ。集まるのは久しぶりなので……私事で申し訳ありません」
軽く頭を下げてみれば、そういう時があつてもいいよねと好意的な返事をもらつて。

中には自分だつて身内じゃないかとか調子に乗つた人もいたので一つ睨みを入れておいて。

ありがとうねと後に行つた皆を見送つた。

「さて……それじゃ、準備しますか」

何年ぶりだろうか、全員が集まるのは。

あの時、皆それぞれ自分の道を歩み始めてから、今まで。
楽しみ、だな。

「いらつしやいませ」

「ああ」

「やつ！ 来たよ弥生！ ちゃあんと美味しいもの準備してくれた？」

最初に来てくれたのは蒼紫と操ちゃん。

まさかマジで来てくれるとは思ってなかったから、驚きを挨拶でごまかして頭を下げる。

「もーそんな堅苦しくしないでさー！ 今日は楽しもうね！」

「俺は下戸だぞ」

「ええ、もちろん知ってます。むしろ料理をお楽しみくださいませ。……私はここで皆を出迎えますのでどうぞお先に」

そう言つて戸を開けてみれば我先にと素早く入り込む操ちゃん。

「貴様には今の姿が一番良く似合っているな」

「……ふふ、小料理屋の主に言われちゃ説得力がありますね、ありがとうございませ」

すれ違いざまにそんな言葉を交わして。

「弥生姉え！」

「おー久しぶりですねえ弥彦！」

続いて来たのは弥彦。

近くに剣心達は居ないから、別で来たのかな？

「燕と妙さん、差し入れつつうか料理の材料持ってきたみたいでさ、どつか置いとける場所ねーかな？」

「わ、気にしないでいいのに……じゃあ弥彦、裏口開けといて貰っていいですか？

い、鍵」

「おうっ！」

鍵を受け取って走り出した弥彦の背中にあるのは小さな悪一文字。

大きくなった背中だけれど、やっぱりいつ見ても可愛い弟にしか見えないのは私が姉バカだからだろうか。

「弥生さんっ！」

「はい、いらっしやい由太郎君。いつもお世話になってます」

深めに頭を下げてみれば、すぐさま慌てる気配が伝わってきて。

「いいい、良いんですよ気にしないで下さい！ お、俺が好きでやってることですからっ！」

「ふふっ。じゃあこれも私が好きでやってることですから、気にしないで、ね？」

そう言つて由太郎の頬を撫でてみれば湯気を吹き出した。

……よしよし、まだまだ絞れるな。

じゃなく、いい加減新しい恋見つけてどうぞ。

「弥生」

「恵さんっ！」

その場でプシューしてる由太郎を放っておいて。

姿を見せてくれた恵さんへ駆け寄る。

「忙しいのに、ありがとうございます！」

「良いのよ。こういうのは多少無茶でもして時間を作らないと……気づいたら次に会う時おばあちゃんとかになっちゃいそうだから」

いやあ、歳を重ねてさらなる色気が……うう、もう身も心も女になったつもりだったのに……恵さんばねえっす。

「ま、積もる話はまた後で、先に入ってて良いのかしら？」

「ええどうぞ！」

店に入っていく恵さんの背中をうっとり眺めて。

途中で由太郎の手を取って一緒に入ったことを確認して。

「おー！ 弥生！ 久しぶりでえ！」

「……うわくっさ」

髪伸び放題、髭伸び放題。

それでも一目で左之助だとわかるヤツ。

「んだと!? 随分な言い草じゃねえか!」

「はいはい。とりあえず臭いんで皆に会う前に風呂入ってきて下さい臭い」

「ぐぎぎぎ……このやろつ!」

何も言えなくなったのか、乱暴に手を振るってくるけれど。

「……お帰りなさい」

「おうつ!」

それはハイタツチ。

乾いた音が、夕焼け空に吸い込まれる。

「ふう……」

一先ず来店ラッシュは終わりだろうか。

まだ遠目にも剣心達の姿は見えない。

懐中時計を見てみれば、時間にはまだ少し余裕がある。

「やっぱり……斎藤さんは……」

「来るわけがないだろう」

……うわああ。

「ふん。そうだな、貴様のそんな顔を見ただけで満足だ」

「……手紙、送ってみるものですねえ」

目を瞬く。

いやはやまさか、齋藤が、ねえ？

「勘違いするな、すぐに出る。こちらへ向かう予定があつたからな、一目見に来ただけだ」

仏頂面ではあるのだけれど、何処か少し気恥ずかしさを感じるのは気のせいだろうか。

いやま、それでも十分嬉しいんだけど。

「それは残念です。まあ、なんだかんだで結構会いますし、次回に期待しておきますよ」
「……阿呆が」

ほんとにそれだけ言ってさっさと背を見せた齋藤。

実は知り合いの中で一番会うのは齋藤だったりする。

やっぱり警察関係者ではあるし、警察御用達といっちゃなんだがそういう場所になりつつある桃べこだからやっぱり会うもんだ。

流石に今日は緋村剣心がいるんだしと、まあ仕方ない。

出来ることなら参加しておけば良かったなんて思わせられる位の話の話を準備出来るよ

うに今日を楽しもう。

斎藤の背が見えなくなつて。

視線はそのまま日が落ち始めた空へ向けて。

「……幸せだぜ？ 弥生」

かつての口調で言つてみるけれど、もう何の鼓動も感じない。

確信はない。

けれど、もう次の弥生は生まれないんじゃないか、そんな風に思う。

折れた木刀。

今も、不似合いが過ぎるけれど、店の中に飾つてあるかつての自分が生きた証。

今までの歩みは、そう、今この時を生きるため。

女になつて、女としてこの世界を生きる。

まだまだ。

まだまだ先はわからない。

もうこの先は何も知らない真っ白な世界。

「あ、弥生ー!!」

遠くで手を振る姉さんの姿。

隣で剣路に髪を引っ張られている剣心の姿。

「ねえさー……ん!! にいさー……ん!!」

その二人へ向けて、未来へ向けて。

一歩、踏み出した。

TSしたけど抜刀齋には勝てなかったよ……

完